

---

# ヤンキーな魔女

伊川侑子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヤンキーな魔女

### 【Nコード】

N3085I

### 【作者名】

伊川侑子

### 【あらすじ】

紀藤<sup>キトウエリ</sup>恵理ことエルヴィーラは異世界で魔女に拾われ育てられた18歳。ある日のこと、師匠の命令で国王のもとへ嫁ぐことになる。しかし、本人は納得できないまま結婚生活がスタートして？  
コメディ少なめ&シリアス多め、女性向けの異世界恋愛ファンタジ  
I（一応R15）

## プロローグ

ぼかぼか陽気のある日のこと。  
鍋を一心不乱にかき混ぜていたあたしに、師匠が重々しく口を開いた。

「ヴィラ、お主の結婚が決まったぞえ」

思わず手が止まる。そりゃ驚くつて、あたしまだ18だぞ？結婚？

ありえねえ。

「ムリムリムリ」

「決定事項じゃからの、お主に拒否権などないわっ」

今年で7千歳ちよつとになるはずの美人な女がほーっほっほと高笑い。キモイって言ったら殺されそうだから言わねえ。

「拒否権はなくても人権ならあるはずだろ？」

「魔女に人権などなからう」

黒いマントを着た“魔女”な格好をした師匠。彼女は見た目の通り魔女なのだ。しかもかなりの頑固者だ。言い出したら聞かない性格だから、今回の結婚話もきつとなかったことにはしてくれないだろう……残念なことに。

あたしはエルヴィーラこと紀藤<sup>きとうり</sup>恵理。日本生まれの日本育ちの日本人だ。

3年前、両親との不仲を理由に実家を飛び出した時、突然なんの前触れもなくこの世界にやって来た。家族も友達も知り合いすらいないこの世界で、盗賊と戦い、野生の獣と戦い、まあなんとかタフに生きていたんだけど、ある日精根尽き果てて倒れたところを運よく魔女に拾ってもらった。それ以来その魔女に弟子入りして魔術を学んでいる。

師匠には助けてもらった恩があるから恩返しできればあたしも嬉し  
いさ。しかし、今回の結婚はちょっとムリだ。だって相手の顔も名  
前も知らねえし。

「ヤダヨーアタシシヤイダモノ」

「棒読みで訴えられても説得力ないわい」

あたしは再び鍋をかき混ぜながら師匠を睨んだ。彼女の赤い瞳がキラリと光る。

「相手はこの国で一番のお金持ちだえ？」

「えっ貴族？」

「うんにゃ、国王」

「嘘だ」

「嘘ではないよ」

やめてくれ、なんの冗談だ。

信じられなくて頭をぶるぶると横に振ってみるが、師匠はマジらし

く表情は至って真剣だった。

「あたしこの世界のこと魔術以外さっぱりわかんないし、そのこと  
師匠だつて知ってるだろ？そんな無知なあたしを政治の中枢に放り  
込んだら・・・狼の群れの中の羊じゃないか。」

必死に声を上げて説得してみるが、何度見ても7千歳だなんて信じ  
られないくらい美しい師匠に手ごたえはなし。

「決まったことは変えられぬよ」

「あたしには相手を選ぶ自由もないのか！」

「ないのう」

えええええええ。なんか後には引けません的なオーラを発してんぞ  
師匠。決まりか？決まりなのか！？

「なんで!?!」

精一杯に返答を探してもこんな言葉しか思いつかない。

「ふむ、まあこの国では国王に魔女が嫁ぐのが慣行であるから・・・」

「じゃああたし以外の女捜せ！他に居るだろ!?!だろ!?!」

「落ち着け、液体が鍋から零れておるぞえ。今この世界に国王と同  
じ年頃の魔女などヴィラ以外におらぬ」

「そんなに魔女って少ねえの!？」

あたしも魔女になれたから誰でもなれるもんだと思ってたのに。

「魔女はこの国にしかおらぬ。神の采配が知らぬがの。国中の魔女をかき集めてもせいぜい10人程度じゃろう」

少なっ!

「じゃ、じゃあ師匠が結婚すればいいじゃねえか!ほら、国王だろ?師匠の大好きなお金!宝石!フィーバー!」

「何をわけのわからぬことを言っておる。もうわらわは前国王と結婚しとるわっ。・・・鍋が噴き出しておる、火を止めんか」

ええええええええええ、ずっと師匠は独身だと思ってたのに。なにそれ初耳。

「わらわに弟子入りした以上仕方なかるうのう。せいぜい幸せになり」

無理!!!

## 第一話 脱走と遭遇

必死の抵抗も虚しく、結局城まで連れて来られてしまった。ロープでグルグル巻きにされた姿はまるで芋虫、口も布で塞がれているから声も出せねえ……ちくしょうつ。

師匠は笑顔であたしを赤毛の騎士に差し出す。

「おてんば娘じゃがよろしくのう」

「暴れたりするんすか？」

「するのう。危ないからしばらくはこのままロープで縛っておいたほうがよかるつ」

「了解しやしたー」

そしてなんと赤毛の騎士ヤローはあたしを米俵担ぎした。ちよつと！あたしは荷物じゃねえー！！仮にもあんたのご主人の嫁だろつが！丁重に扱わんかいっ！

「んんん ー！ー！つ」

「何言ってるかさっぱりです魔女さん」

「んん ー！ー！」

このまま大人しく結婚してたまるか。魔術を使いたいけれど師匠の特殊なロープの所為で使えねえ。もぞもぞと頑張つて動いてるうちに赤毛はどんどん城の奥の方へ進んでいく。あーやべえ、もう道わ

かないぞ。

「あ、俺は陛下の騎士でアルフレットっつーもんです」

のんきに自己紹介してくる赤毛はあたしよりもちょっと年上に見える。だいぶ鍛えてるんだろう、あたしを抱える腕がずいぶん逞しかった。

「魔女さん名前は？」

そしてコイツはアホだ。どうやって言え、と？口が布で塞がれてるのが見えてないのか？

当然ながら返答できないままで、しかしまったく気にする様子のないアルフレットは次の話題を口にする。

「あー、今ちよつと城が騒がしいけど気にしないでくださいねー」。

8千年ぶりに王様が代替わりしたもんだから、何かとがやがやしててねー」

8千年ってことは、あっちの人の寿命に換算すると80年くらいか。ずいぶん長いな。(こっちの人の寿命は1万年らしい。ちなみにあたしは魔女だから寿命なんてどうとでもなる)

「まー、陛下も性格にちよつと問題あるけど根はいいヤツだから、魔女さんあんまり心配しなくていいですよ」

性格に問題あるとかますます嫌だ。ああ、だんだん目の前の景色が涙でばやけてきた。

果たしてこのまま結婚していいのだろうか。他の側室と寵を争ったり嫌がらせに耐えたり、相手が国王なら苦勞は絶えないはず。自由



に外を出歩くことも許されないうし、子供を産めなかつたら風当たりがキツくなるだろう。うわ、なんて酷い人生。

「お、着いた」

周りを見渡せば、そこは無駄に広くて豪華な部屋だった。師匠の家は物がごちゃごちゃしてて混沌としていたけれど、この城は中世ヨーロッパを思い起こさせる。家具なんて見たこともないほど繊細な彫り物が施されていて、鏡台などは鏡の周りに宝石が埋められてた。とっさに税金の無駄遣いという言葉が浮かんだあたしは貧乏性だろうか。いや、普通だし。

「じゃーここで大人しくしてくださいね魔女さん」

ボスンツと乱暴にベットへあたしを降ろすと、アルフレットは鼻歌を歌いながら部屋を出て行った。もちろんロープを解いてくれるわけなくて、あたしは芋虫状態のまま。

「ふぬぬぬぬっ」

女性らしからぬ声を上げてしまったのは御勘弁願いたい。力いっぱいロープを引きちぎろうとしたけれど、思った以上に頑丈なロープは切れそうな気配がなかった。もちろんそれだけで諦めるようなあたしではない。ごろごろとベットの端まで転がると、まずは口に宛がわれた布を家具の角を使って下へずり下ろした。そしてロープを角に当て擦りながら摩擦を利用して繊維一つづつを確実に切っていた。

ブチッ

と小気味いい音を立てて、ロープから完全に逃げだすことに成功。

「よっしゃ！これで逃げられる！あたしの時代……！！！」  
これで向かうところ敵なし。あたしはすぐに猫に化けると廊下に飛び出した。

レオナードとアルフレットが廊下を歩いていると、奥のほうからもすごい勢いで黒猫が駆けてきた。すれ違いざまにむんず、とレオナードが猫の首を掴んで持ち上げる。

「なんだこの猫は。どこから入った」

「まー、猫っすからどこからでも入るっしょ」

特に興味の無さそうなアルフレット。しかしレオナードは猫をジロリと怪しんだ目で睨んだ。猫をひっくり返して正面を向かせるとパチリと目が合う。その黒猫は瞳も真っ黒で毛並みも美しく野良猫には見えない。

「げっ」

猫がしゃべった。

思わずアルフレットとレオナードは顔を見合わせる。

もうすぐ塔から抜け出せるーと思った瞬間誰かに捕まった。あちやーっと思いつながらも大人しく猫のフリしてたら、捕まえたヤツと目があった。茶髪に青い瞳の美人な男。ちよつと雰囲気怖いけど目の保養とばかりに観察していたら、後ろにいる赤毛が視界に入った。アルフレットじゃん！

「げっ」

やべっ！声出しちゃった！

アルフレットは目をパチクリさせた後、しゃべる猫だーとか興奮していたからセーフ。問題は怖い茶髪の方。ますます視線が厳しくなつて、首の根っこを掴む手にはさらに力が入っていた。そして男は口を開く。

「先日、魔女ベルデラに聞いたことがある」

うん？師匠に？

「化けた魔女と動物を見分けるには瞳を見るのが一番よい、と。魔女は姿形を変えることができて瞳の色まで変えられないそうだ。アルフレット、魔女エルヴィーラの瞳の色は？」

「黒髪に黒い瞳でしたねえ」

じとーっとあたしを見つめる2人。完全にピンチ！どうすりゃいい！??どうするべき!??

「さつさと元の姿に戻れ。それともこのまま猫扱いしてほしいのか？」

「んなわけあるかー！ー！！」

つい叫んじまったあたしはもう後戻り不可能。茶髪の男の空気が冷たくなり、アルフレットは笑い出した。

「あははっ、とんだ夫婦のご対面だな」

「はい!?!夫婦!?!」

「魔女さん、相手のレオナード……結婚相手の国王ってコイツのことっすよ」

アルフレットは笑顔だったけどあたしは泣きたかったさ。顔はいいけどめっちゃくちゃ怖い、しかも逃げようとしたところを本人に捕まるなんて……。

さようなら、平穩なあたしの人生。

その後レオナードという男は、猫のあたしを部屋にペイツと放り投げてどこかへ消えて行った。もちろん嚴重に鍵をかけ、再び逃げ出せないようにして。

当然だけどあの後警備が厳しくなった。部屋の前には必ず2人の兵士が見張っている。面倒なことに、部屋を出る時は必ず侍女の誰かがついて来た。

もともとあたしの部屋がある塔には限られた人しか出入りできないらしく、見る顔はほとんど同じだったし廊下を歩いても誰かと会うのは珍しい。あたしに許された自由はこの塔の最上階（5階）のみだから窓から飛び降りるわけにもいかず、結局あれから脱走の機会はないに等しかった。

部屋に籠っただけでも師匠が会いに来てくれるわけがなく、訪れるのは機嫌のよいアルフレットか、いるかどうかを確認しに来たレオナードだけ。しかもあたしを一睨みすると一言も話さず去っていく。忙しいなら来るなといつか言ってやりたい。

そんな絵に描いたようになつまらない日々が続いて早一週間。侍女が洗濯物を取りに来たとき、新しい来訪者がやってきた。

「はじめましてエルヴィーラ様。わたくし教育係りを陛下より仰せつかりました、ルードリーフと申します」

「あ、ども」

水色の髪青年。整った顔立ちの真面目そうな人だ。でも教育係りって……これまた面倒くさいことを……。

「エルヴィーラ様は社交界のマナーと教養を学んでいただきます。王妃として恥ずかしくないよう、なにより陛下に恥をかかせぬよう御努力くださいませ」

「うへー、めんどくせー」

「なんですかその言葉遣いは」

「なんですかって言われても・・・ねえ」

一気に嫌そうな顔をしたルードリーフさん。言葉遣いとか、別にどうでもいいじゃんよ。

「品のカケラもない。それではまるで盗賊ではありませんか」

「うん、まあ盗賊と似たようなもんだったしね」

こつちの世界に来てから一時は荒んだ生活してたから今更気にならないし、そんな生活してたからこそ盗賊をバカにすることなんてできない。だって彼らも生きることに必死だったし、いつも家族を守るために手を汚していた。誰もが恵まれた生活を送っているわけではないのだと改めて思い知ったのはあの頃。

「・・・なんと浅ましい」

「そう思うんだったらあたしとの結婚を止めるように言ってくれ」

「止めるだなんてとんでもございません。法律上はもう既に結婚されているのですから」

どうして人の了解を得ずに勝手に話を進めるんだ。結婚を破棄する  
ってことは離婚ってことになるのか。バツイチも嫌だな……。  
あたしが不満そうに顔を歪めたのが気に食わなかったのか、ルード  
リーフさんは額に青筋を浮かべてどこから取り出した大量の分厚  
い本をテーブルの上に置いた。当たり前だけど中身は日本の文字で  
書かれているはずがなく、アルファベットを崩したようなこの国の  
文字だろう。一応こちらの字は師匠に教えてもらって読み書きでき  
るようになった。だけど日本語のようにスラスラと操れるわけでは  
ない。この本をすべて読み終わるのにどれだけ時間がかかるだろう  
と考えれば、読む前からとっても疲れてしまった。

「教科書です。エルヴィーラ様には政治学・経済学・法学、そして  
テーブルマナーなど礼儀作法を学んでいただきます」

「ふーん……」

「陛下の配慮で現在エルヴィーラ様は表に出ることはございません  
が……。それは恥ずべきこととお思ってくださいませ。今の状態では  
表に出ることはおろか陛下と共に生活なさることもできないでしょ  
う。王妃という地位は何より国民に愛され、国を治める陛下を自覚  
と知恵を持って支えるものでございます」

「あたしはなりたくて王妃になつたわけじゃねえよ」

「何を仰います、魔女なれば王家に嫁ぐのは当たり前でございますし  
よう？しかも前王妃のベルテラ様の弟子ならば、エルヴィーラ様が  
次代の国王のもとへ嫁がれるのも自然の流れです」

「そんな話聞いてねえ……」

師匠、せめてあたしを弟子入りさせたときに一言言っただけで欲しかったよ。そしたら事前に逃げたのに・・・！

「世界には中心がある。その中心には神がいると言われ、そこに位置しているのがドローシャ王国であり、他国では見られない様々な恩恵を受けている。例えば魔女が生まれるのも国内のみで他国には存在しない。また、神の宣託により王が決められるのもこの国の特徴である。人々の寿命も中心に近づけば近づくほど長く、国内では約1万年だが隣国では約9千年、遠く離れた国では6千年と大きな違いがみられる。神の住まう世界の中心、それが我がドローシャ王国である。」

それはこの世界に来て何度も聞かされた記述だった。神様とか世界の中心とか、神話かと思えば嘘ではないらしい。

“魔女が生まれるのは国内のみ”

師匠がここに来る前に言っていた言葉。つまりこの国が世界の中心なのだろう。単純にすごいと思うし、自分が貴重な魔女だったってことに誇りも感じた。

ただし。

だからって結婚するなんてあたし納得しねえよ。実家に帰らせていただきますから！



ルードリーフさんというお固い教育係がいなくなった後、あたしはシートを繋げて脱出用ロープをせつせと作っていた。ここは5階だから結構な長さが必要で、足りない分は魔術で伸ばしつつ繋げていく。できあがったらベットの足に縛り付けて窓の外に垂らした。うん、十分に余裕がある。

窓から覗いた限り人はどこにも見当たらない。今がチャンスとばかりに身を乗り出して降りていった。シートが手にすると滑りやすいことは計算外だったけど、なんとか無事に地面まで到達。猫に化けると一目散に門へ向かった。

本日は快晴、脱走日和。日本みたいに湿気が多くじめじめしてないからとても快適。久しぶりの屋外にテンションが上がって気分よく猫の足で突っ走ると、角を曲がったところで何故か足が地面から離れて宙に浮かんだ。

「・・・またか」

「げっ！」

あたしを捕まえた主は茶髪に青い瞳の持ち主で・・・。なんでここにいるんだレオナード！アルフレットまで！

当然だけどレオナードはとっっても怒っていらっしやる。美人が凄むと怖えよ。でもあたし負けねえ。

「タイミング良すぎるだろ！お前魔女かつ！」

アルフレットは苦笑を洩らしたけど、レオナードは呆れたようにため息を吐いた。首の根っこを掴まれているのが気に食わなくて、人の姿に戻ると身を擦って彼から離れる。

よく見ればレオナードは映画で見る王子様のような格好をしていた。一口に言うとおっぽく聞こえるけど彼が着れば様になる。

「いい加減に大人しくしてくれないか。これほどの贅沢ができて何が不満なんだ？」

彼は見た目も言葉も棘があると思う。会うだけで刺すような痛みを感じるんだ。要らないから、お金も地位も家族も。

だから、あたしを自由にしてくれ。

「魔女さんストップ！」

2人を無視して逆の方向へ走りだした。途中ぎよっとしてあたしを見る侍女や兵士に遭遇したがそれも無視。目指すのはもちろん、城の外。

## 第二話 ハーレム

適当に進んでいたら、ここがどこかわからなくなってしまった。足を止めて辺りを見渡せば、あたしが居た塔からはずいぶん遠く、鬱蒼と茂る木々に囲まれている。ここから城の外に出るまでどれくらいかかるんだろう。

人が通る気配は全くなく、こうなったら勘に頼るしかない、ため息を吐いて再び歩き出したとき。異様な気配を感じて立ち止まると、ぞろぞろと見たこともない人々に囲まれた。ざっと10人程度だろうか。

物騒なことに、彼らは片手に剣を携えている。

「なんだよ、あんたら」

レオナードの配下にしては殺気が強い。服もアルフレットがいつも着てるようなゴツイ騎士服じゃなくて、黒地に金の刺繍が施された布をたつぷり纏っている。顔の下半分は白い包帯で隠されていて怪しい雰囲気、拍車をかけていた。

「エルヴィーラ王妃とお見受けいたしました」

「ああ」

交わした言葉はそれだけ。あたしが返事をすると同時に彼らの剣が光る。振りかざされるそれに容赦も遠慮も見られない。あたしはただ自己防衛のために拳を突き出す。

ゴスッ

といい音を立てて顔面にのめり込み、男の一人が吹っ飛んだ。まさか素手で反撃されるとは思わなかったのだろう、彼らは一瞬怯んで動きを止めた。

「かかって来いよ。売られたケンカは買うぜ？」

久しぶりの高揚感に心が躍る。血がふつつつと煮えたぎるようにざわめき出す。

今度はお互いに動きを止めることはなかった。夢中で剣をかわして急所を狙う。鳩尾、関節、頭。

興奮しすぎてどれくらい時間が経ったのかもわからない。気がつけばものすごい数のギャラリーがあたし達の周りを取り囲んでいた。レオナードとアルフレットの姿もある。

「なんだよ、いるんなら加勢しろよ」

「必要なさそうだが？」

確かに彼の言うとおり、あたしが今殴ったのは最後の一人だった。でも普通女が襲われたら助けるもんじゃねえの？黙って観戦なんてタイマン（一対一）じゃないんだからさ。

レオナードはものすごく微妙なものを見る目つきであたしを見ている。アルフレットは何故か喜んでいて。お前騎士だろ、働けよ。

「すげー魔女さん！かっこいい！」

「・・・あつそ」

可愛らしいふわふわの服を着た侍女たちは少し離れた所からあたし

の様子を窺っているらしい。彼女たちの表情はアルフレットと同様万面の笑みだった。仮にも王妃が襲われて喜ぶこの国って大丈夫なんだろうか。ちょっとだけ心配になった。

不穏な動きがあることはレオナードも知っていた。知っていたからこそ、魔女を部屋に閉じ込めたのだ。もちろん脱走癖を案じてのことでもある。

彼女は強かった。魔術を使わずとも強かった。そこに作戦や流派などという高尚なものは見受けられない・・・はつきり言ってチンピラレベルの体術。しかし確実に敵を倒すということを知りつくした動きで、プロの殺し屋であるだろう彼らを完膚なきまでに叩きのめす。後で何故魔術を使わなかったと尋ねれば、城が壊れてもいいのかと即答された。怖いもの知らずの態度はその彼女の實力故か。先日の一件はあつという間に噂となつて広まり、今や城の中でその噂を知らぬ者はいないだろう。黒髪と黒い瞳は吸い込まれそうなほど艶やかで、白く磨かれた肌は黒をよく引き立てる。妖艶な肢体は女性の憧れる体系そのもので、なにより容姿が美しかった。その強さと美しさで城の者の心を捕えたらしい魔女。一番の被害を受けているのは、たつた今レオナードの執務室に駆け込んだ教育係のルードリーフである。

「もう限界です！陛下・・・教育係りを辞めさせていただきます・・・

・！」

レオナードは頭を抱えた。やはり、というのが一番最初に出てきた感想だった。

「あの方は“やる気”というものが欠片もございません！話は聞かない、返事はしない、拳句の果てには侍女たちと目の前でお茶会など始められて・・・わたしは・・・わたくしは・・・」

最後はほぼ涙声だった。

魔女の側近の侍女たちは彼女にとことん甘い。侍女たちによると野蛮な口調が逆に格好良いらしく、中にはレオナードよりも彼女の味方に付く者まで現れたから厄介だ。彼女の脱走を手伝おうとしている者がいる、という物騒な噂まであるほど。

「しかしお前以外に適任者がいない。諦めるんだな」

たったのその一言で、ルードリーフは今まで見たこともないほど情けない顔をした。

「勉強を教えることができる者なら他にもおります・・・！」

「何故教育係りにお前を付けたのか、自分でわかるだろう？」

「それは・・・」

ルードリーフは言葉を濁す。

王座に就いたばかりのレオナードに信頼できる臣下はごくわずか。

その数少ない人員を割いて魔女の教育係りに任命したことには理由がある。

魔女は大変貴重な存在であり、過去に数多くの功績を残してきた。しかしその異質さ故に魔女の存在を受け付けられない者もいる。後宮内で莫大な権力を持つ魔女は、娘を嫁がせようとする貴族たちにとっても邪魔な存在だ。そんな奴らの息がかかっている教師を送りこめば、魔女に何を吹き込まれるかわからない。魔女がこの国の敵に回れば 歴史上そのような魔女はいないが どれだけの痛手を負うか想像できない。

「残念だが教育係りは辞めさせられない。

それにあの魔女は全く異なる世界から来たのだと聞く。最低限の知識を教えて、本人にやる気がないなら後は放っておいてもいい」

「は、はあ……しかし……王妃ともなると各国の要人とお会いすることもあるでしょうし、政治も……」

「あれに王妃としての役目など期待していない。王妃ベルデラに頼まれて引き受けたまで」

ぞんざいなもの言いにルードリーフは閉口した。結婚を嫌がる魔女も魔女だが、淡泊すぎる王もかなりの変わり者だ。文武共に秀で容姿の美しい完璧な王ではあるが、人として愛想や情が足りないといつねづね思う。

ルードリーフは困った顔をしたまま、拳に力を入れると身を乗り出した。

「せめて陛下のほうからも注意してください」

「注意したところで聞く耳を持つ様な女ではないと思うが？」

「それでも、です」

それに陛下とエルヴィーラ様は夫婦としての交流が少なすぎます、と文句を言われ、レオナードはしぶしぶペンを置いた。

異世界でハーレムを築くとは思わなかった。

身の回りの世話をしてくれる女の子たちは良家の子女らしい。どの子も可愛くて性格がよかった。きゃっきゃつと嬉しそうに頬を染め、鈴が鳴るような可愛らしい声で“ヴィーラ様”と呼んでくれる。一瞬自分がノーマルじゃなければよかったと思ったのは、彼女たちが可愛すぎるからだと自分に言い訳してみた。

「ヴィーラ様、わたくしが愛用しているブランドの新作のカップですの。ぜひ使ってくださいな」

「あら、ヴィーラ様ならこちらのシンプルな方がお似合いではなくて？」

「かなりお若いんですもの、こちらの柄物のほうがいいと思いませんか？」

ああ、なんて可愛い生き物なんだろう。

平和な会話に頬を少しだけ緩めて彼女たちの会話に耳を傾けていると、ドアが開く音がして男が2人入って来た。侍女たちの笑顔が固



まる。

「レオナード、ノックくらいしな」

「なんだ、これは」

「なんだ、って・・・お茶会だけど？」

レオナードは不機嫌そうに眉を寄せた。このことを言い付けたのである。ルードリーフは、レオナードの蔭に隠れて控え目にこちらの様子を窺っている。

「この者たちに塔へ入る許可を出した覚えはないが」

「あたしが許可した」

あたしの家でもあるんだから当然だろ？って言えばレオナードの表情がますます厳しくなった。

「勝手なことをするな」

「そのセリフそのままそっくり帰してやるよ」

勝手に結婚を決めたヤツには言われたくないね！

「で、何しに来たわけ？お茶会邪魔にするほど暇なのか？」

「勉強を真面目にしていないそうだな」

「だから何？」

「せめて話くらい聞いてやれ。何もお前の空っぽの脳に記憶しろと言ってるわけじゃないんだ。それくらいできるだろ」

「んだとコノヤロー。あたしは真面目にしてないんじゃない  
する気がないんだ！」

凍りつくその場の空気がやけに嫌だった。

### 第三話 小さな感謝

許せないと思う。ただでさえ自由のない生活をしているというのに、女の子たちと一緒にお茶をするのも邪魔されるなんて。

結局あの後解散させられてしまい、あたしは部屋で苛立ちと戦っていた。何も手につかなくて無駄に広い部屋をウロウロしてみたが、特に興味を持てるものが見つからずなんとなく窓から景色を眺めてみた。

こう改めてこの世界を見るとやはり日本と違うのだと実感する。一番の違いは暑い時期でも空気が乾いていて、湿気に悩まされることがほとんどないことだろう。そして澄み渡った青空は、排気ガスで汚染された東京では見られない不思議な青色。困ったことに、こちらの木は松のような針葉樹ではなくほとんどが落葉樹らしい。おかげでこの国に厳しい冬は来ないが、寒くなると緑が減って景色が寒々しくなる。

ああ、この世界を飛んでどこまでも行けたならいいのに。

自分らしくない感傷に浸ってそんなことを思う。詩の一節のようにくさい台詞を吐けるあたしはそれほどまでに追い詰められているんだろうか。・・・飛べたら。うん、飛んだら？

「あああああ　——！飛べばいいんじゃない！鳥になればいいんじゃない！——なんで今まで気付かなかったんだろ！？よっしゃこれで抜け出せる——！！！！！！」

空から抜け出したのなら止められる者などこの城にはいない。鳥になればここから逃げられる、確実に。

興奮度マックスのあたしはさっそく窓枠に乗ると小ぶりの目立たない雀すずめに化け、勢いよく窓枠を蹴った。身体が宙に浮いて幸福感に包まれたのも束の間、肝心なことを忘れていたあたしは地面に向かって急降下。

「飛び方わかんねー！！！！！！」

ベチャッ

と音がして、それからの記憶は……ない。

魔女がいなくなった。

その事実はあまりにも大きく深刻で、レオナードは美麗な顔を歪めた。城の中を探しても見当たらないため近くに隠れているわけではなさそうだ。第一、彼女はじつと一所で大人しくできるような性格ではない。すぐに捜索隊を派遣し国中を探させているが相手は魔女、そう簡単には見つからないだろう。魔女がいなくなったことをアルフレットに告げると、彼は血相を変えて城中を探し始めた。ちなみにルードリーフは少しだけ喜んでいた。……気持ちはわからないが。

そして今、彼女を慕う侍女たちがレオナードのもとへ抗議に来てい

る。彼女たちはさめざめと泣きながら、声高にレオナードを責めた。

「陛下がお優しくなさらないから・・・ヴィラ様は行ってしまわれたんですわっ」

「あんなに素敵な方でしたのに・・・！」

「陛下はヴィラ様のことを何もご存知ないのですね、わたくし幻滅致しました」

「陛下は夫婦が何たるか心得ていらっしやらないようです。これではヴィラ様がお可哀そうですわっ」

女は面倒だ。レオナードは心の中で独りごちて、さきほど拾った雀に目をやった。どこにでもいるような普通の雀。しかし毛並みが美しく、息があつたので気まぐれに拾って来た。今は果物籠の中でぐっすりと眠っている。

雀を見ていたことが癪に障ったのか、彼女たちの視線と口調が一層強くなった。

「ほう、陛下は女性よりも雀の方が好きなのですわ」

「まあこれは意外。皆様にお知らせしないと」

「世界中が驚きますわね。ドロシヤの国王が女よりも雀を・・・だなんて」

「通りであればほど魅力的なヴィラ様に入れ込まないはずですわ」

恨めしそうな視線を寄こしながら、彼女たちは言いたいことだけ言

うと部屋を出ていく。うるさいものがいなくなって、レオナードはため息をひとつ落とした。

イタイっ

という声は言葉にならなくて、代わりにうめき声となって口から出た。あまりの痛みに涙すら出なくて、僅かな力を振り絞って目を開ける。薄暗いそこは見たこともない部屋だった。家具の大きさと身体の違和感に、自分が雀の姿のままだと思いだす。

死ななくてよかった。今にも死にそうなほどボロボロだけど、でもなんとか生きてる。

迂闊だったと思う、飛び方もわからないのに飛び出すなんて。身体が変われば筋肉も変わる。それにあたしは鳥のように飛び方を本能で知ってるわけじゃない。行きなり飛べるわけなかったんだ。

ここがどこかわからないけど危険な感じはしない。落ちたところではないから、誰か雀好きなヤツが拾ってくれたんだろうか。硬質な下の感覚に、自分が寝ているのは何かの入れ物だと気づいた。

正直に言って、人の姿に戻れる体力はない。魔力はぐちゃぐちゃになった内臓や骨を修復するためにフル稼働しているから、戻るために魔力を割く余裕もない。まともに動くこともやっぱりできなくて、体力を取り戻すために寝ることにした。

しかし。

痛みが激しすぎて眠れない。あーとかいてーとか叫びたいけど叫んだら誰に聞かれるかわかんないから無理。結局何もできないまま痛みと格闘していると、部屋がだんだん暗くなってきた。窓から飛び出してからもう4時間以上経ってる。あたしが消えたことがバシバシ騒ぎになってたらどうしよう・・・などと考えていると、ドアの開く音と静かな足音が聞こえた。

人が来た！部屋の明かりが点いて心臓がバクバクと鳴る。拾ってくれた人が料理人で焼き鳥にするために拾った　とかだったらシヤレになんねえ。あははははは。

足音がだんだん近づいてくる。その足音はすぐ傍までやって来て止まると、ぬつと天井に顔が現れてあたしは思わずこっ声に出した。

「げっ」

つてね！だつて拾ってくれたヤツがレオナードって、レオナードって！！

で、当の本人のレオナードはあたしを見て目を細め、眉間にしわを寄せた。いつもの難しい表情プラス怒っていらっしやるようで。

「・・・やつぱりお前か」

ええ、お前ですとも。いつもより少し低いトーンの声が上から降ってきた。えへへと苦笑して見せたが、雀の姿だから相手にどう映っているかはわからない。

「部屋の前に落ちていたから変だと思っっていたんだ。まさかとは思っていたが・・・」

「・・・どう、も」

「人の姿に戻らないのか？」

「いま・・・そんなよゆう、ありま、せ・・・ん」

一気にレオナードの表情が険しくなった。怒られる、とつい身体を小さくする。

しかし思ったような怒気を含んだ言葉は降ってこなくて、あたしは彼をまじまじと見上げた。

「医者は」

「い、らねえ・・・自分で、できるから・・・」

ありつただけの魔力を使っても、弱っている自分にできることは高が知れている。それでも着実に、少しずつ患部を治していた。時間がかかるだろうけど問題はない。

「お願いだから、ほっといて」

「何故あんなところで倒れてたんだ」

「うつ・・・鳥になって・・・飛んだら、逃げられる、かなーって・・・」

もしかしなくてもこのエピソードってものすごく恥ずかしくねえ！  
?とても言いたくなかったけど、無言で先を促すレオナードに負けて話を続けた。



「思つて、・・・飛び出し、た・・・けど、飛び方わからなく・・・  
つて・・・落ちた」

レオナードは形容しがたい表情した後、片手で頭を抱えた。眉が八の字を描いていて、無愛想なレオナードの困ったレアな顔はちよつとだけ可愛い。

「・・・バカ」

返す言葉も見つからず、青い瞳に見守られてあたしはゆっくりと目を閉じた。

重い瞼を開けたと同時に飛び込んできたのは闇。暖かさと柔らかい感触に身をよじれば布が擦れる音がして、自分がベットの中にいることに気づいた。ボロボロだった身体もほぼ完治していて、人の姿に戻ると人間っていいなあと思いつつもぞとシーツの中に潜る。

目が慣れてくるとさつき部屋だとわかった。落ち着いたホワイトの壁、シンプルな家具、柔らかい匂い。レオナードの部屋だろうかと首を捻ると、ベットの端に人の姿を捉えた。あの茶髪は間違いない、レオナードだ。

好奇心で近寄り寝顔を拝見する。いつもの刺さるような厳しい空気

がそこにはなく、あどけなさが普段よりも幾分が幼く見せていた。もともと甘めな顔立ちをしてるんだ、無愛想で俺が一番偉いんだぜみたいな態度さえなければ誰にでも好かれるタイプなのに。もったいない。

鼻摘まんでみてもいいかな。無防備な寝顔がいたずら心をくすぐる。落書きは・・・後が怖いから止めよう。

そっと手を伸ばしたその一瞬で世界がひっくり返った。いや、あたしがひっくり返った。目の前には目を覚ました可愛くない顔がひとつ。

「無事なようだな」

「オカゲサマデゲンキデス」

ちょっと距離が近いけど離れてくださいとは言えなかった。彼の発する空気が震えていると感じるほど怖い。こういうのを俗に王様オーラと言っただろうか？いや、訂正。王様オーラなんて言葉ねえし。

「これだけ城中をひっ掻き回しておいて、何か言うことはないのか？」

「す、すみませんでした」

ひっ掻き回すものにも、そもそもあたしは結婚なんてしたくなかったんだ。あたしの所為じゃないぞ、決して。

静かな部屋にギシツと鳴るベットの音がやけに響いた。気まずいから、この空気気まずいから止める！

「あたし部屋に帰るから・・・！」

上に居るレオナードから逃れようとしたけど、ここがどこだか知らないことを思い出した。すぐ傍にある青い瞳を見つめ返す。

「帰るから・・・部屋まで・・・送って・・・？」

レオナードの視線が厳しくて語尾が弱くなったのは仕方ない。うるさい心臓を落ち着かせると、大きく息を吐いてレオナードの肩をガツチリと掴む。さつきひっくり返された（押し倒された？）仕返しに、今度はあたしがレオナードをひっくり返した。驚いたらしいレオナードは目を大きく見開いてしばたく。

「迷惑かけたのは・・・謝るけど、逃げようとしたことは謝んねえから！」

それからお礼・・・！お礼を言えあたい！

なんだか自分が負けてる気がしてありがとつの一言が言えず、悶えていると不審そうにレオナードがあたしを見上げていた。

「どうした？」

腹を括るとゆっくり口を開く。

蚊の鳴くような声で、小さく囁いた言葉。そして額へ落とした、小さな口づけ。

あたしはがんばった。うん。

そして逃げた。



## 第四話 ソロア教

昨夜、部屋を飛び出したあたしは闇雲に走りまわり、自力で自室までたどり着くことができた。

あたしどうしちゃったんだろう。

もともとあたしは淡泊な性格だった。ケンカもよくしていたけどそれは日課みたいなもので、個人的に恨んだり挑発したりはしなかった。声を張って怒鳴ることもあんまりなかったんだ。結婚だって、恋愛事に関心がなかったあたしは親に言われたら適当に受けてたかもしれない。

なのに。  
結婚してからあたしは何度声を張り上げた？何度嫌だってゴネて、何度逃げようとした？自分で自分がわからない。

ソファに寝転がって唸っていると、廊下の方がやけに騒がしくなった。ドタドタドタと走るこの足音は聞き覚えがある。アルフレットだ。

「魔女さんっ」

ほらやっぱり。アルフレットはいつもの騎士服姿で彼の赤い髪の毛を少々乱していた。息絶え絶えといった様子で、勢いよく部屋に入ってくるあたしの両肩を掴む。

「よかった無事で！」

「心配してくれたんだ？」

「当たり前ですよ！また奴らに襲われたのかと思ってっ！俺達めち

やくちや焦ってたんすよっ」

「奴ら、って?」

この間襲われたときと同じ奴らってこと?

アルフレットはなんと答えればいいかわからないという顔をしていた。うん、お前説明下手そうだもんな。

「異教徒のことですよ」

助け船を出したのはいつの間にか部屋に居たルードリーフ。彼は心底嫌そうな表情で話を続ける。

「以前、エルヴィーラ様を襲った連中の着てた黒地に金の模様のマント、あれは異教徒である証です」

「異教徒って?」

「ゾロア教と言いまして、禁忌の教えですから我々はゾロア教徒のことを異教徒と呼ぶのです。

貴女はご存じないと思いますが、“世界の理”<sup>「いとおひり」</sup>というものがあり、これは世界の中心に神が住まい、中心に近づけば近づくほど恩恵が受けられるというものでございます。例えば、中心に近ければ病にかかりにくく寿命が長く天候が穏やかで、逆に遠ければ疫病が流行りやすく寿命が短く天候が荒れやすいのです。世界の中心は我がドロージャ王国にあり、この国では魔女が生まれ、神が王を決めます。よって世界の人々はこの国を“中心の国”または“魔女の国”と呼ぶそうです。

一般の民たちはこの“世界の理”をもとに世界の中心にいる神を崇拜します。しかし、それをしない輩が集まった集団、それがゾロア

教徒です。詳しいことはあまりわかっていませんが、彼らは“世界の理”に疑問を持ち、神がいなくなれば世界は等しく平和になると信じています。また、神官たちが白に銀の模様の服を着ていることから、ゾロア教徒は黒に金の模様の服を着るようになりました」

長つたらしい説明ありがとう。アルフレットはルードリーフの話にまったく興味なかったらしく、話し中に部屋の置物や本を勝手に物色していた。

「えーつとつまり、魔女はある宗教団体に嫌われてるワケね」

「要約しすぎですが、そういうことです」

「この話で行くとレオナードも狙われてるんじゃないの？」

「ゾロア教徒が嫌うのは神です。国王は神ではない、選ばれただけですから」

「じゃあ魔女は？」

「魔女は神の子とされていますから……」

アウトってわけね。

魔女がこんなに面倒な職業だとは思わなかった。最初はちょっと不思議な世界に来てちよつと不思議な体験をする、くらいにしか思っ  
ていなかったのに。結婚させられる上、命を狙われるなんて。

「御身が危険に晒される可能性があります。少しでもご理解いただけ  
けたなら今後外出を控え」

「ません。それくらい自分でなんとかできるし」

「ですが・・・」

ルードリーフは納得のいつていない様子で渋っていると、アルフレツトが会話に入り込んできた。

「んじゃあさ、騎士を持つといいっすよ魔女さん」

「騎士？って兵士とどう違うんだよ、制服も違うみたいだけど」

門番や部屋の前で見張っている奴らは銀の鎧みたいなものを纏っている。一方アルフレツトはがっしりした布でできた繊細な刺繍のある服。

「簡潔に説明すると兵士は警備、騎士は護衛。」

騎士ってのは特定の人物と契約を交わすんです。ちなみに俺は陛下の騎士だけど、まあ主人が主人だからしよっちゅういろんなところに使いつ走りさせられて、ずっと一緒にいるわけじゃないっすけどね。普通の騎士はずっと主人についてて危険がないか見張ってるもんです」

「騎士って兵士から選ばばいいわけ？っていうか自分で決めていいの？」

「もちろん自分で決めるもんです。兵士でも一般人でも好きな人を選びますよ。まあ魔女さんなら気に入った兵士が、陛下の推薦を受けたヤツを騎士にすればいいっすよ」

レオナードに決めさせるとルードリーフみたいなお固いのが来そう



で嫌だ。自分で決めたいけど・・・剣が使える知り合いいないなあ。

「城の中自由に動けたらいいんだけど」

そしたらいろんな人と出会う機会もあるだろうに。あたしの願いを聞いてくれたのは意外にもルードリーフだった。

「騎士を選ぶということでしたら、わたくしのほうから陛下に許可をいただいできてもよろしいですよ」

「その必要はない」

またまた来客、今度はレオナード。後から侍女や兵士がゾロゾロとついてきて、部屋の物を勝手に運び始める。

「ちょっと何勝手につ・・・」

「部屋を移動させる」

「だから勝手に決めんじゃねえよ」

「その変わり、今後城内の移動は自由にする」

「えっ！」

信じられない言葉を聞いて、あたしは自分の耳を疑った。あのレオナードが城内を自由に過ごしていいなんて言うとは。しかも、あたしは昨日脱走に失敗したばかりなのに。

「ただし、条件として指定した部屋へ移動すること。必ず日が暮れる前に部屋に戻ることに。脱走しないこと」

最後の一言はただけでないけど、条件としては悪くない。こんな面白味の全くない部屋で閉じこもっているより全然いい。

レオナードは相変わらず厳しい視線であたしを射抜くように見つめ、念を押すように続けた。

「城内は人の出入りが激しく、決して安全な場所ではない。この部屋から出れば当然危険な目に遭う回数も頻度も上がるだろう。その覚悟があり、なおかつ危険を回避できる自信があるならば」

「よーよー。でもなんで急に許可出したんだ？頭固くて頑固で融通の利かないレオナードが」

「お前はいくら言っても聞かない考えなしの鳥頭のような人間だということがよくわかったからだ」

レオナードは涼しい顔で言ったのけた。

……ムカツク！

「陛下も魔女さんも、もうちょっと仲良くしてくださいよー。見てるこっちの胃が痛くなりますって」

知るかあっ！

あたしは大いに怒っている。とーっても怒っている。

イラつくままにフォークで肉をぶっ刺していると、目の前のレオナードが怒ったような呆れたような微妙な顔をしていた。

「食べ物に当たるな。食事中くらい静かにしろ」

「誰の所為だよ誰の」

城内で自由になるための条件、部屋を移動すること。移動は別に構わなかったんだけど、その部屋に大問題があった。

「なーんで、あたしの部屋があんたの部屋の隣なんだよ」

そう、隣。いやー。もうほんとうにすぐ隣。しかも直接部屋同士が繋がっているという扉までついている。それを聞いてあたしはすぐに魔術でその扉を開かないようにした。

「しかも、悪趣味な扉までついてるし」

「もともと王妃用の部屋だからな」

「引っ越したい・・・」

別に前の部屋でも不都合はなかったはずだ。そりゃレオナードの部屋からちょっと遠かったけどさ。

レオナードは無視して食事を進めるのをやめ、静かにフォークを置

いた。

「魔女が一番危険なのは寝ている時だ」

「うっ、確かにそうだけど」

起きていればいくらでも応戦できる。けど、寝ていたら当たり前だけど魔術も使えない。気絶すれば最後、抵抗する手段はないんだ。でもこの部屋と就寝中の安全は関係ないはず。

「この塔は城内で一番警備が厳しい場所だ。お前が女たちを連れ込まなければ」

「あたしから楽しみを奪う気か」

「侵入者があれば俺が気づく、そうできてる」

「剣使える？」

「当たり前だ」

綺麗な顔してたからぼんぼん育ちで戦うのとか苦手そうだから意外まあ人じゃない怖いオーラを発してるところは普通じゃないと思っ  
てたけど。

食事を再開したレオナードに身を乗り出して尋ねる。

「ところで歳いくつ？」

「・・・27」

「アルフレットは？」

「106」

「ルードリーフは？」

「7600程度」

こっちの人は寿命が長いから時間の間隔が狂いそうになる。これほどまで長生きなのは、種族そのものが違うのか、それとも神の影響かどちらかだとあたしは踏んでいる。しかも大人になるスピードは同じなのに、寿命が尽きる何十年か前までは老化しない。そして最後の何十年かで一気に老け、老衰を迎える。つまり見た目が子ども。老人はほとんどいないということだ。街に出たことがないから分らないけど、さぞかし不思議な光景が見られるんだろう。

「お？一緒に食事なんて珍しいっすね」

「アルフレット、珍しいっすっていうか、初めてなんだけど」

赤毛の彼はにこにこしながらやってきた。ときどき結婚相手がアルフレットだったらよかったのと思う。赤銅に似た髪色はなかなか綺麗だし、男らしくて人懐っこくて人畜無害そう。レオナードより劣るけど彼も美形だし。・・・ちよつと王としては問題が多そうだけど、相手としてなら申し分ないはずだ。

「あ、そうそう、俺陛下に報告あって来たんすよ」

「どうした」

こっちはいつも不機嫌で無愛想だし。ああ、人生ってうまくいかないものなんだね。

「この間捕えた異教徒の1人が脱走したようです」

アルフレットの表情に笑みはない。

その瞬間部屋の気温が2度は下がったと思う。レオナードの青い瞳はいつにも増して冷たくなったし、控えている侍女は顔を真っ青にした。

「追跡は」

「全く。逃げた痕跡も手引きした人物も今のところ見つかっていません」

「いいじゃん1人くらい逃げても」

「いいわけあるか。異教徒は捕えて調べ終わり次第、公開処刑になるのが普通だ。魔女は国の貴重な財産、魔女に手をかけるといふことは国庫に手を出すのと同じ罪になる」

「魔女さん、情けをかけちゃいけません。あいつらは魔女さんの命を狙ってるんすから」

「うん」

2人の言いたいことはなんとなくわかった。世界の理、中心に住まう神、ゾロア教。どうやらここは生易しい世界ではないらしい。

難しい顔で話しこむレオナードとアルフレットに耳を傾けるのを止め、食事を始めようとフォークを手を取った。



## 第五話 刺客と仕立て屋

小雨がしとしとと降る昼下がりに。

レオナードがヴィラの部屋に入ると、彼女は机にうつ伏せになっており、ルードリーフは疲れた表情で本を整理していた。確かまだ講義中の時間のはず。

「あ、陛下……」

レオナードに気づいたルードリーフが顔を上げた。

「ずっとこの状態なのか……」

「はい……寝ている相手に講義をしたのは生まれてこのかた約8千年、初めての経験でございました」

ルードリーフに情けない顔をさせている当の本人は、長い黒髪を散らし白く細い腕を投げ出したままびくりとも動かない。レオナードは彼女の細い肩を持って軽く揺すったが、それでも起きる気配はなかった。

「エルヴィーラ様は起きませんよ。叩いても大声を出しても無駄でした。講義が終わる時間になると目を覚ますんです」

器用な奴だとレオナードはため息を吐く。時計を見ると講義が終わる時刻まで後わずか。レオナードは起きるまで待つことに決め、傍



のイスに腰を下ろした。

初めて見る寝顔からは普段の活発な性格や荒い口調を思わせない、可憐よりも妖艶や清廉といった言葉の似合う研ぎ澄まされた美しさを持っていた。大人しくしていればいい方ですがのに、がルードリーフの口癖になっっているほどだ。

「苦勞をかけるな」

「いえ、貴方様の為ですから」

珍しい労わりの言葉に、ルードリーフはクスリと笑いを洩らした。

「ん・・・んー？レオナードがなんているの・・・」

むくりと起き上がったヴィラは目を擦りながら首を傾げる。

「話がある」

「離婚してくれるの？」

「逆だ。一週間後に結婚式を挙げる」

「えー、来週は東の庭園でお茶会開く予定だったのにつ」

レオナードの予想通り文句の言葉が返ってきた。小さく息を吐くと嫌そうにぐちぐちと小言を漏らすヴィラを睨む。

「中止しろ」

「言っとくけどあたし何もしねえよ？」

「面倒事を起こすくらいならむしろ何もするな。座ってるだけいい」

「ドレスは？」

「明日仕立て屋を連れてくる」

ふーん、と適当に返事を返し、彼女は目の前で無造作に開かれていた本を閉じた。嫌そうではあるが特に反抗がなくてホツとしたのはレオナードもルードリーフも同じ。

「エルヴィーラ様は着飾り、大人しく座っていらっしやれば十分でございます。決して口を開くことのないようお気を付けくださいませ」

「しゃべるなっということ？」

「はい。礼儀作法もなにもご存じない・・・学ばれる気がないエルヴィーラ様は口を開けばボロが出ます。それでは王妃の威厳も損なわれましよう」

さりげなく酷い言われように、ヴィーラの眉間の皺が増えた。反対にレオナードの眉間からは皺が減った。

「でもなんでわざわざ式とか挙げるわけ？」

「書類上結婚したことにはなっているが、社会が認知しなければ夫婦だとは認められない。国王である以上、婚姻を民に知らせるのは義務でもある」

「なんか・・・面倒くせえ」

「・・・逃げるなよ」

レオナードの冷たい声にヴィラの細い肩がビクリと震えた。どうやらまた脱走しようかと考えていたらしい。

レオナードは威嚇するような恐ろしい一睨みをすると静かに部屋を出て行く。ヴィラもルードリーフの小言を聞き流しながら、城内を探検するため足早に部屋を出て行った。

ザシュツと何かを割くような音に目を覚ますと、足元には月明かりに照らされたレオナードが立っていた。ベットの周りが血の海になっていて、レオナードの手にある剣が鈍く光る。  
寝ている間に襲われたんだと気づいた。

「怪我は・・・ない？」

「ああ」

返り血は浴びていないようだったけど、ただそれだけの返事にどつと安心した。倒れているヤツらは黒に金の刺繍がある服を着ており、

完全に死んでいるのかピクリとも動かない。

前にレオナードが言っていた通りだ。寝ている間が一番危険。現にあたしはこいつらが部屋に入って来たことさえ気づかなかった。その点レオナードは隣室の異変に気づいて、剣でこいつらを始末した。あたし・・・ちよつとカツコ悪い。

「血に酔ったか？」

視界に広がる赤黒い血、鉄の錆びたような匂いと、死人の放つ禍々しい気。

「・・・かも」

人が死んでいるのを見たのは初めてじゃない。ただ初めて自分の手で人を殺した時のことを思い出してしまった。

初めて人を殺したのは、こちらの世界に来て盗賊の集団に襲われたときだ。たくさん殺した。けど自分の身を守るためだから後悔はまったくしなかった。

そう、自分の身を守るため。

「兵に片付けさせる。休んでろ」

言い方は乱暴だけど、気を使ってくれているのか声が今までにないほど優しい。レオナードが部屋を出て行くのを見守りベットに身体を沈めたけれど、こんなところで眠れるはずがなく、あたしは再び身体を起こして血を踏まないように避けながらベットを離れた。

部屋に戻るとそこにヴィラの姿はなかった。レオナードは焦って隣の部屋に駆け込むと、自分のベットですやすやと眠っている彼女の姿にため息を吐く。

目の前で人が死んでいれば普通の女性なら悲鳴を上げて取り乱すところだが、ヴィラは半身を起したまま無表情で死体を見つめていた。彼女はタフ、悪く言えば凶太い。

「少しは女らしく警戒したらどうだ？」

レオナードはひとりごちてヴィラと同じベットに入った。広いため2人の間には人ひとり分の隙間が空いている。

「んっ……ん……？」

ヴィラは目を覚めたのかごそそと身を振り、薄目を開けて隣にいるレオナードの姿を確認すると眠たそうで弱い声を出した。

「……あいつらは？」

「今兵士たちが始末している」

「あいつらにも……家族……いたんだよねえ……」

レオナードは答えなかった。死が一番辛いのは本人ではなく残され

た人たちだろう。どんな悪党にも家族はある。死ねば泣く人がいる。

「・・・あたしが前に居た世界は、温過ぎて、ただ人を殺すことが悪だって信じてた。」

「・・・けど、正義の反対って・・・悪じゃなくて正義だ・・・」

さきほど襲ってきた異教徒も、彼らにとって魔女を殺すことは正義で魔女が悪なのだ。この世に絶対の正義などない。

「何も考えなくていい」

レオナードは静かに言う。

「お前は何も気にしなくていいから」

「・・・うん」

ヴィラは小さく頷いて、再び眠りについた。

銀色の髪にちよび髭を生やした男性がパンパンツと手を叩いた。この人は結婚式のドレスを作ってくれる仕立て屋のレクスアさん。テンション高え。

「さあー、サイズを測らせていただきますぞー。脱いでくだされっ」  
「はいはい」

黒のワンピースを脱ぎ下着姿になるとレクサスさんの目が輝く。・・・  
変態？

「なあんて素晴らしいお身体でしょう！さあさあ測りますよ、じっとしててくださいね」

レクサスさんはメジャーのようなものを身体に巻きつけてメロを取っていった。作業が早く、あっという間に寸法が終わる。

「デザインはいかがいたしましたでしょうか？結婚式ですからとにかくボリュームがあつて遠目で見てわかりやすいようにしたほうがいいでしょうねっ。色はどういたしましたしょう」

「好きに決めていいの？」

「もちろんでございます。王妃様の好きにさせるようにと陛下からお言葉を承っておりますので」

「じゃあ・・・濃い色で・・・」

結婚式のウエディングドレスは白が定番だけど、あたしはあんまり薄い色が似合わない。好きにさせてくれるんだったら濃い緑か濃い赤、それか黒や紫の方がいい。

「でしたらいつそのこと真っ黒にいたしましょう！王妃様の黒髪と黒い瞳と相なつてきつとお似合いです！白い肌が目立って素敵です

よっ！黒は魔女の色でもありますしっ」

「できれば顔を隠したいんだけど」

「ベールを作りましょうっ！黒のレースをふんだんに使って……  
そしたら本体のデザインは……」

レクサスさんはスラスラとペンを走らせ、真っ白な紙にドレスの形を描いた。胸と腹の部分は絞って身体の線が出る形状に、腰から下はポリリウムがあるデザインだ。

「首周りはいらぬ。下はレースを重ねるんじゃなくて、繋げる感じで厚めの生地を詰めて模様を出して。ウエストは横に細かい線を入れて徐々に広がる感じで……。そうそう。ベールは胸元辺りまで……。布多めで薄いレースを使って。下の布と同じものでコサージュを作っ頭」

「なるほどっ！王妃様はセンスが良くていらっしゃいますねっ。これならばベールとの相性がよるしい。装飾品はいかがいたしましよっ？」

「胸元が空く分、大ぶりの赤い宝石がついたネックレスをひとつだけ。形は王家の紋章に似せたもので」

「承知いたしました……。うふふっ、完成がたのしみです！きっと誰もが王妃様に釘付けでしょう！」

レクサスさんの喜びように苦笑を洩らした。あんなに複雑なデザイン、一週間で縫い終わるんだらうか？





## 第六話 灰色の騎士

人を斬るのが当たり前になったのはいつからだろう。

灰色の長髪を後ろでひとつに括った男は、最後のひと振りを最後に座り込んだ。血の滴る剣をそばにある布で拭くと元の輝きを取り戻す。これできつと一か月は食べるものに困らないだろう。リスクは高いが入るものが大きいため、この仕事はなかなか辞められないのだ。

シュツ

風を切る音が聞こえて振り返ろうとしたがもう遅い。さきほど切った敵が最後の力を振り絞って投げたのだろう、ナイフが背中に突き刺さっていた。

「かはつ……」

このまま死んでいくのか。誰にも必要とされず、誰にも知られず、誰にも愛されず。

彼は“殺し屋”だから背中の中のナイフが致命傷だということをよくわかってる。灰色の男は血を吐き目を虚ろにして横に倒れた。

このまま死ねば顔も覚えていない両親に会うことができるだろう。しかし、両親に会う喜びよりも生への未練のほうがもっと大きい。だからだろうか、窓の棧さんに座ってこちらを見ている美しい女性が女神に見えたのは。

「だ・・れ、だ」

月明かりに照らされた黒く長い髪がひどく艶やかで、白くスラッとした手足を惜しげもなく露出したワンピースを着ている。容姿は美しいとしか形容しようがないほど美しかった。

彼女は灰色の男を無表情でじっと見つめていた。血色の良い唇がゆつくりと開く。

「生きたいか？」

男のような口調なのに、女独特の色気が混じった覇気のある声だった。

「それとも逝きたいか？」

「オレは・・・生き、た・・・い・・・」

「では交換条件をやるう」

女は窓から降りて部屋に入ると、腕を組んで灰色の男を見下ろす。僅かに上がった口角が不敵な笑みを造っていた。

「お前の命を助けてやる。その変わりあたしの剣と盾になれ。その命をあたしに捧げるのならば、あたしはお前を死なせたりはしない」  
血を流し過ぎて、もう口を開く力は残っていなかった。代わりに小さく頷く。

そして契約は成立した。

あたしに騎士ができた。名をシルヴィオ・ヘイゼと言う。灰色の髪に灰色の瞳、中性的な顔立ちが可愛らしい。ずっと一緒にいる人なら、シルヴィオみたいなのが可愛い人がいいと思っていたんだ。

「ダメだ」

「なんでだよ！」

けどレオナードに反対された。むかつく。

「どこの馬の骨ともわからない奴を騎士にさせるわけにはいかない。自分の身の安全を少しは考える。もし他国の間者だったらどうする？異教徒だったら？」

「言いたいことわかんないこともねえけど譲れねえよ。気に入ったんだから」

「なんで下町から連れてくるんだ。まさか城外に出たんじゃないだろうな」

「シルヴィオの良さがわからないなんてレオナードも大したことねえな。こんなに可愛いのに」

「陛下、魔女さんも落ち着けて」

「ヴィラ様冷静になってください」

お互い言葉に棘が出てきたところで、アルフレットとシルヴィオが仲裁に入る。レオナードはシルヴィオに青い瞳を向けると、いくつか質問を始めた。あたしには尋問に見えた。

「お前、名は？」

「シルヴィオ・ヘイゼと申します」

「職業はなにをしていた」

「主に商人の護衛をして各国を回っておりました」

「両親は」

「おりません」

「友人は？」

「いろいろな地を回っておりましたので、そのようなものは」

レオナードはシルヴィオから目を離して今度はあたしを睨んだ。

「なんだよ」

「何故こいつなんだ」

「だって可愛いじゃないか」

レオナードとアルフレットはちょっと呆れたような顔をした。可愛さって結構大切なポイントなんだけどな。

「まあ、剣を扱うヤツにしては線が細いし女みたいな顔してますけど、魔女さん好みの顔だし」

「ふざけるな。騎士は置き物じゃない、護衛だ」

「わかってるよそんなこと」

騎士にしたいって思ったからこそここまで反対されるのを覚悟で連れて来たんだ。

「こいつは嘘をついてる。それでもか？」

その瞬間鳥肌が立った。何故わかるんだ、この男は。バケモノみたいに強いし怖いしなんでも知ってるし、もしかしたらレオナードは魔女かもしれない。いや、魔女より性質悪いかも。

「……それでもあたしはこいつを騎士にする。もう決めたんだ」

「……勝手にしろ」

やっとのレオナードの了承に、あたしはシルヴィオに目くばせして部屋を出た。ちゃんとアルフレットに手を振り返しながら。

「恐ろしい方でございますね」

「だろ？」

クスクスと笑い合った。これからきつと忙しくなる。きつと。

オレを助けてくれたのは驚くことに魔女で王妃だった。

使い慣れないのか肉を切るのに苦戦しているようで、ナイフを折れんばかりの力で握りしめている。

「なんでそんなに食べ方が汚いんだ」

「うるせえ、食文化が違うんだ仕方ねえだろ？だいたい男なのにグチグチと女々しいんだよ」

「男より男らしい女から言われたくない」

「んだとこらあー！」

・・・そして陛下と仲が悪かった。アルフレットさんによるとヴィラ様は無理やり嫁がされたらしく（お可哀そうに）、未だにそれを根に持っているとか。陛下も陛下でつかかっていくヴィラ様を適当に受け流しているようで、関心があまりないようだ。

ヴィラ様がそつとニンジンとを陛下の皿に移す。こつこつとこころは仲

が良いのか悪いのかよくわからなくなる。  
もちろん陛下はヴィラ様を叱った。

「子どものようなマネをするな」

ヴィラ様は陛下を無視して、さらにマリネを皿ごと陛下の方へ押しやった。陛下の額に青筋が浮かぶ。正直元殺し屋のオレでも怖い。

「おい」

「なんだよ黙って食べねえのか？」

ヴィラ様はきつと怖いもの知らずだ。陛下はエビのマリネをフォークに刺すとヴィラ様の口の中に無理やり押し込んだ。

「  
§\* ;:;!!!」

ヴィラ様は声にならない悲鳴を上げて抵抗なさったが、陛下が口を押さえて吐き出せずなんとか飲み込んだようだ。

ドンッ

と拳でテーブルを叩くと、負のオーラを漂わせたヴィラ様は陛下を睨んだ。目が据わっている。

「てめえ・・・」

「黙って食べられないのか？」

「んのヤロー！」

掴みかかりそうになって、オレは慌ててヴィラ様を羽交い絞めにし



た。魔女なのに魔術じゃなくて手が先に出るのはなぜだろう、という疑問は心の中で留めておく。

「ヴィラ様、落ち着いてください」

「止めないでシルヴィオ」

「殴るなら食事が終わってからにしてください。料理がもつたいないです」

これは本心だ。いくら恵まれていて豊かなドロージャ王国だからといって、貧困に苦しむ者がいないわけではない。しかも目の前に並んでいる料理は庶民ではとてもありつけない最高級品ばかりで作られたフルコース。これがひっくり返るなんてもつたいなすぎる。オレの言葉に冷静になったらしいヴィラ様は、頂垂れると大人しく元の場所に座った。

「エビアレルギーなのに」

目を見開いたのはオレだけじゃない、陛下もだった。アレルギーは死人が出ることもあるからバカにはできない。

早く吐かせようとオレが手を伸ばし、陛下は立ち上がろうとしたが。

「ウソだけど」

……オレはまだ死にたくない。ヴィラ様も死なせはしないと約束してくださったではないか。でも今、オレは死にそうだ。陛下のオーラに中てられて凍え死にそうなのだ。

「怒んなよ、可愛い冗談じゃん。ねえ？」

ねえ？って言われても、オレは頷けませんよヴィラ様。

返答がなくても気にしないらしいヴィラ様は、フォークを持って食事を再開し始めた。一方陛下は、それはそれは大きなため息を吐いて頭を抱えていた。

この世とも思えない美しい女が男に寄り添って微笑んだ。黒髪がサラリと動きに合わせて靡き、紫色のドレスが妖しく光る。

「・・・オールドリッチ卿」

オールドリッチと呼ばれた男はワインを片手に足を組み、女を見つめ返した。薄暗い部屋の中、2人はまるで仲の良い恋人のように見える。

「お前のお陰で計画が上手く行きそうだよ、キリエラ」

「あらオールドリッチ卿、わたくしなんかをそばに置いてよろしいのですか？ゾロア教で魔女は消すべき対象では？」

キリエラと呼ばれた紫衣の美しい女は、満足そうに笑む男にゆったりとした口調で問うた。

「お前は特別なのだキリエラ。魔女は確かに消えるべき存在であるが、お前は神に背いた我々の同朋・・・」

クスリ、と女の小さな笑いが静かな部屋でやけに響く。男は女の顎を手に取って微笑みかけた。

「我々の手で、必ずや王妃を亡き者に」

## 第七話 祝福の杯

黒のドレスを纏ったヴィラに、シルヴィオとアルフレットは拍手をした。

「魔女さんすげえっすよ！」

「お綺麗です」

「ドレスがね。顔見えねえし」

確かにヴィラの言うとおり、顔はベールに隠されて全く見えない。しかし2人が褒めたのはドレスではなく、彼女の纏う雰囲気そのものが美しかったからだ。

今日は結婚式当日。ヴィラの心配を他所に、ドレスは2日前に搬送され余裕で間に合った。

「準備はできたようだな」

派手な刺繍や装飾の施された服を着たレオナードが、部屋に来てヴィラに視線を遣る。

「そついえば式ってどれくらいで終わるんだ？」

「1時間ほどだ」

ヴィラは頷くとレオナードの差し出した手を取って会場へ向かった。シルヴィオとアルフレットも護衛として式に同行するため、2人の後ろを数メートル離れてついてきた。

会場は城の中で一番手前にある塔の一階。通常謁見室と呼ばれるそこは、収容人数5千人というとてもなく広い会場である。

「行くぞ」

レオナードの一言にヴィラは大きく息を吐くと、コクリと頷いた。

会場がものすごく広くて驚いた。ホール天井には見たこともないほど煌びやかなシャンデリアがいくつも並んでいて、ちよつとした階段の上に2人分のソファのようなものが置かれていた。もしかしなくてもこれがあたし達の席だ。レオナードに促されて座ると、何千人もの人たちを軽く見降ろす形になり、自分がこの中で一番偉くなつたような気になる。

「これより、レオナード陛下、エルヴィーラ王妃様の結婚式を行います」

階段のすぐ下で司会のようなことをやっていたのは見たこともない

人。結婚式と言っても何をするのかよくわからないので、他人事気分で見ることにした。

「我がドローシャ王国国王の結婚式にご参列いただきました皆様に御礼申し上げます。初めに皆様の中から、遠方よりいらっしやいました各国の王家の方々がご挨拶をさせていただきます」

んん？挨拶って普通あたしたちがやるもんなんじゃねえの？しかも他国の王家の人だなんて、めっちゃ偉い人じゃない？

首を捻って考えていると、さっそく1人目の名を呼ばれて男の人が前に出てきた。

「なんで向こうから来るの？普通あたし達が挨拶しなきゃいけないんじゃない？」

小声でシルヴィオに尋ねると、真後ろに控えていた彼があたしにか聞こえないほど小さな声で返答する。

「ドローシャの国王の方が遥かに地位が高いですから」

「なんで？」

「ここは中心の国でございます。この国の王になるといふことは、実質世界征服をしたと言っても過言ではないのです」

「もしかしてレオナードってとんでもなく偉い？」

「当たり前です」

あー世界征服ってことは、レオナードは向こうの世界で言う魔王ポ

ジションなわけね。シルヴィオの言った通りレオナードの方が偉いらしく、前へやってきた人は膝を折って頭を下げた。王家の人間が他国の王に跪くなんて、属国でもなければ絶対にやらないはず。

「ロビア王国より、ルーカス国王様」

しかもどっかの王様来ちゃってるし。ロビアってどこだろう、世界地図が欲しくなってきた。

こちらの人は寿命を迎える何十年か前までは老けないから、みーんな若々しくって変な感じだ。見た目じゃ歳もわからないし。

「ベルガラ王国、王弟クラウス様」

しかも顔立ちが整ってる人ばかりだ。レオナードは別格だけど、アルフレットもルードリーフも整ってるし。遺伝子分けてくれと言いたい。

そして面白いのは、髪と瞳の色にいろんな種類があること。今跪いて挨拶を述べているベルガラ王国の人は、アルフレットよりもさらに赤味を増した真っ赤つかだし瞳は月のような琥珀色。

「オーティス王国、国王ヒューバート様」

この人はかなりの印象に残った。なぜなら大人として成熟する一歩手前の、まだ若い青年だったから。大人ばかりのこの中では少し若いだけなのにかなり目立つ。あたしと同年くらいの、銀の髪に紫色の瞳をしたカッコいい男の人だ。ちなみにあたしは18にしては老けているらしく、もう10代には見えないらしい。・・・複雑。

その後は挨拶を聞くのに飽きて、女性たちが来ているドレスを眺めることにした。映画を見るだけではわからなかったけれど、こんな

にたくさん人々のドレス姿は遠目から見ても圧巻だ。居るだけで雰囲気のにまれそう。

あたしが特に気に入ったのは、赤にピンク色のシヨールを羽織った金髪の女性。侍女として城に召し上げられないかな。レオナード嫌がりそうだけど。

「では、これより神官より祝福の杯を受けていただきます」

ぼーっとしている間に挨拶は終わっただけ。司会の人の合図で、白に銀の模様のあるゆったりとした服装の男女がゾロゾロと目の前にやって来た。神官たちは普段から神殿に籠っているらしく、会うのは今日が初めて。

彼らは膝を折って礼をとると、銀色の杯に透明な液を注いで（たぶん水）あたしとレオナードにそれぞれ手渡す。真ん中にいる一番背の高い男性が、分厚く古い本を片手に口を開いた。

「世界の中心に住まう神はこの度のご結婚を祝福してくださいませ。その証にその水を飲み干してくださいませ。この水は神の泉より持ち寄った特別な水でございます。神が祝福してくださいませ。ならば何事も起こりません」

どうせただの水だろうと思って、ベールを軽く捲ると言われるがまさに口をつける。しかし口に含んだ瞬間吐きそうになった。

“デベルジの天使”だ。

聞こえはいいがデベルジの天使は死に際に痛みがないことから名付けられたただの猛毒。師匠に薬草の知識は全て叩き込まれたからこの味は知ってる。

いやいやいやいや、あたしに死ねと!?



隣のレオナードはすべて飲み干して涼しい顔をしていた。毒が入っているような様子はない。つまりあたしの杯にだけ入ってるということ。あいにく、あたしは神の祝福とかそういったものは信じない性質だ。残したって構わない。

けどね。

何千人に見守見られるこの雰囲気の中で、「これ毒入ってますけど」「なんて言えねえ！」

濃さからいって毒の量は致死量の2倍はある。けど、あたしは魔女だ。きつと死なない。死なないって根拠もなく自分の生命力を信じしてみる。大丈夫、大丈夫だ。・・・たぶん。

意を決して一気に飲み干した。まずはないけど毒と知っていて飲むのは根性のいる作業だった。毒が回らないように血圧と体温をできるだけ下げ、体の機能が鈍るようにする。ベールをしいて本当によかった。じゃないと今頃真っ青な顔が皆の前に晒されただろうから。

杯を返すと、一番背の高い男の神官が優しく微笑んだ。

「これで神の祝福は証明されました」

されてねえよ！むしろ毒入ってましたけど！

身体中が麻痺してるようでピリピリとした痛みが走る。式はあとどれくらいで終わるんだろ。終わってすぐに解毒剤を飲んだら助かるかもしれない。それまではなんとか魔術で身体の損傷を回復することにしよう。

はつきり言っただけから式が終わるまでの記憶はほとんどなく、ひたすら毒と戦うことに集中していた。だんだん痺れが酷くなってき

て、体の感覚がわからなくなってきたときのこと。

ぐいっと腕を引っ張られて気づけば会場の外にいた。

「何があつた!？」

レオナードの声だ。目の前が朦朧としていて姿は確認できないけどあたしの異変に気づいたようだ。レオナードが大きな声出すなんて珍しい。

「毒、入ってみたい、でさ」

返答は帰ってこなかったけど、代わりに医者と呼べという言葉と慌ただしい足音が聞こえた。そしてシルヴィオらしい灰色の髪の人に身体を支えられる。

「ヴィラ様、なぜすぐに言わなかったんですか!」

「んな・・・こと言われても・・・」

シルヴィオは血気迫る勢いで大声を出した。心配してくれるのはありがたいけど、体をあまり揺らさないでほしい。

「陛下!？どこに行かれるんです!？」

「これから個別に挨拶に行かなければならない。後は頼むぞ」

「そんな!ヴィラ様がこんな状態なのにつ!どんだけ薄情なんですか貴方はっ!」

「俺にはやるべきことがある。お前も騎士ならばやるべきことをやれ」

「だからこんなときにつ！！」

「あー、別にいいよ。レオナードが居ても、役に、立たないし・・・」

「

むしろそばに居られたら邪魔だつて言ったら、2人からは無言で返答がない。それからの記憶は、本当にきれいさっぱり無くなつてしまった。

上限の白い月に照らされて眠るヴィラは死んでいるようにも見えた。そっと触れた頬は信じられないほど冷たく生気が感じられない。レオナードはあまりの身体の冷たさに心配になつて、ベッドの上に座り彼女を身体ごと引き寄せ腰に腕を回すと、その細さと冷たさに眉間の皺を寄せた。シーツを手繰り寄せてできるだけ暖かくするが、身体が温まる様子はない。

「・・・レオナード？」

いつもの覇気が感じられない眠たそうな声が静かに響いた。その後ヴィラはゆるゆると重い瞼を開き、漆黒の瞳が後ろから抱き締める

レオナードの姿を視界の端で捉える。

「ああ」

耳元で囁くような声にヴィラの口元が僅かに緩む。

2人の間に会話はなかった。お互いの体温と、ヴィラが生きていることと、レオナードが仕事を終えてヴィラの部屋に来たこと、ただそれだけで十分だった。そこには普段2人が言い合いをしているようなピリピリとした空気はなく、自然に身を任せるような柔らかな雰囲気にも包まれている。

その体勢のまま、どれくらい時間が経っただろうか。

ヴィラの身体が温まってきた頃、レオナードの大きな手がヴィラの髪をすいたことを境に、ヴィラがゆっくりと口を開いた。

「あたし・・・式の途中、変なことしなかった？あんまり覚えてなくてさ・・・」

レオナードは無表情ながらも心の中で苦笑していた。あれほど結婚が嫌だと暴れ逃げ出そうとしたヴィラが、式の心配をするなんて可笑しい話だ。きっとヴィラはどんなに不本意であろうと、期待されたことはこなすタイプなのだろう。

「大丈夫だ。何もなかった」

レオナードはヴィラを横抱きにして顔を見えるような体勢にした。黒と青の瞳がぶつかって、ヴィラは少しだけ気まずそうに視線をそらす。しかしレオナードはそれを許さず、ヴィラの顎を持って額に唇を押し当てた。

「この間は逃げられたからな」

「うっ……」

以前雀姿で助けられたときの一件を思い出し、ヴィラは恥ずかしく、うに頬を少し染めて身体を強張らせる。そんな様子が可笑しくて、レオナードはクツクツと小さく笑った。

## 第八話 ニーナ・カトレア

「ヴィラ様ー！ー！」

翌朝、化粧台に座って髪をすいていると、シルヴィオがノックもせず部屋に駆け込んできた。

「ああ、おはよう」

「よかったですご無事で！」

ホント、魔女じゃなかったらあたし死んでたよなあ。そもそも魔女じゃなけりゃ毒盛られたりもしなかったんだらうけど。

「心配してくれてありがとう」

シルヴィオは安堵した様子で胸を撫で下ろすと、肩膝について礼を取る。

「申し訳ありませんでした、ヴィラ様の騎士である私が先に気づくべきでした」

「いや、飲む前に気づいても式の途中じゃどうしようもなかっただる。気にしないで」

それに毒っていつでも入れるチャンスを作れるから、犯人の特定が難しい上に傷と違って確実に死んじゃうから厄介だ。あたしも傷な

ら魔術で治せるけど、毒は解毒剤を作らないとどうしようもない。

「それにしても、陛下にはほとんど落胆しました。まさかあの状態のヴィーラ様を放って政務に戻られるとは……」

ご立腹らしいシルヴィオに苦笑を返した。そればかりは仕方ないし、あたしも別に一緒に居てほしいわけじゃなかったし。いくら夫婦だからといっても所詮政略結婚だからさ、普通のごく一般的な夫をレオナードに求めても仕方ないと思うんだ。王様だもんな。

コンコンコン

とノックが3回。どうぞ、と返事をするルードリーフとアルフレツトが姿を現した。

「おはようございます、エルヴィーラ様」

「よっす。元気そうでなにより」

「おはよ」

賑やかなんだけど男ばかりでムサイ。やっぱり可愛い女の子たちがいないとテンション上がらないな。

「エルヴィーラ様、本日陛下は政務で忙しくお食事はご一緒なさらないそうです。それから祝福の杯の件ですが、混乱を防ぐため毒が混入されていたことは伏せることといたします」

「あー、知られたら神様の反感を買ったとしか思われないだろうしねえ。あたし神様とか信じない性質だから、どうせあたしを気に食わない誰かが入れたんだと思うんだけど」

「それは陛下もわたくしも同じ考えでございます。現在総力を挙げて犯人を探しておりますので、見つかるのも時間の問題でしょう」

あたしは頷くと紫色のシヨールを羽織って立ち上がった。

「あんまりウロウロしないほうがいいですよ、魔女さん。どこかどいつが命狙ってるかわからないんですから」

「大丈夫、シルヴィオもいるし問題ねえよ」

本当は昨日やる予定だったお茶会を今からすることになってる。東の庭園は素晴らしいと聞くから楽しみ。

「じゃーねー」

あたしは手を振ると物言いたげな2人を残して東の庭園へ急いだ。

風で運ばれてくる花の匂いはどぎつくなくて、緑の鮮やかな洋風の東庭園。見るだけでも広くて大変なのに、手入れするのはどれくらいお金かかっているんだろう。

レンガで敷き詰められた地面とお茶会専用を設置したビーチパラソ



ルに似た形状をしている場所で、特にお気に入りの可愛い侍女たちを集めてお茶を楽しむ。これが最近の密かな楽しみだ。邪魔する男共もないし、シルヴィオは黙って控えてるし、この時間だけは幸せ。

「ヴィラ様、昨日のお式素晴らしかったですわ」

「ええ、遠くから拝見しておりましたけど、ヴィラ様がホールの誰より美しかったですのよ」

「黒のドレスが本当にお似合いましたわ」

「ええ、誰もが目を離しませんでしたもの」

「ありがとうございます。ああ、君たちは貴族の出身だったな」

例え下働きでも城に入るには一定の身分がなければいけないらしい。だからか、みんな礼儀作法が完璧だし話し方もおっとりとしていて上品。貴族ならば当然昨日の結婚式にも参加していたはずだ。

薔薇の花弁の浮いた紅茶に口をつけると、一人端の方でチラチラとこちらの様子を窺っている子が目に入った。確かこの子の名前は・

「どつしたんだ？ニーナ」

彼女の小さい身体がピクリと震える。彼女は他の子のように容姿が特に秀でているわけじゃないけど、向こうの世界の友達にとってもよく似てて気に入っていた。茶色っぽい黒のふわふわした肩までの髪形もそっくりだ。あまり仕事に馴染めないようだから気にかけてただけ。

「な、なんでもありません」

「なんでもないって顔ではなくてよ、ニーナ」

「そうよ。ヴィラ様の前で失礼だわ、もっとシャキツとなさいな」

他の侍女に叱られたニーナは身体を小さくする。あたしの前だからって楽しそうに振る舞う必要はないんだけど、元気がないと心配にはなる。

「何か心配事でもあるんだろ。無理しなくていいから、楽にしなよ」

「は、はい……」

茶色のビスケットを摘まんで口に放り込むとレモンの香りが口の中に広がった。さっぱりとした甘味と柔らかい口当たりが新感覚でおいしい。前に食べたプリンのようなお菓子もおいしかったけど、この城の料理人たちは焼き菓子が得意らしく、工夫を凝らしたクッキーやビスケットは絶品だ。

「ヴィラ様、ニーナはまだ新人ですの。気を使わないほうがいいですわ」

そう言うのは桃色の珍しい髪色をした子だった。たしか名前はジュリアだったような気がする。侍女の中でも古株のリーダー格で、物事をハキハキと言う物怖じしない態度が気に入ってよく連れている。

「なんで？」

「ご年配のお姉さま方のご機嫌を損ねますもの。それにニーナは貴族出身ではありませんから」

うんうん、と他の侍女たちも頷いた。

「ニーナは政庁に勤めるカトレア財務長官の娘ですの。そのついで侍女になったんですよ」

「へえ、貴族以外にも城勤めできるんだ」

「ええ。100年に一度国内で試験が行われるんです。もちろんかなりの難易度ですけど、優秀な成績を収めた者は一般人でも政庁に勤めることができるんですわ。普通ならばたとえ政庁勤めの知り合いがいても陛下の近くでお仕えることはできないんですが、カトレア財務長官は保守派の中でもトップクラスですからニーナは特別なんです」

「偉いんだねえ。保守派って？」

「政庁は大きく2つの派閥に分かれてるんです。保守派と革新派があつて、保守派はニーナのお父上である財務長官や左右將軍やブライ工書簡長が有名ですわ。革新派はオルドリッチ宰相が有名ですわね」

なんかルードリーフが抗議でそれらしいことを言っていた気がするけど真面目に聞いてないからあまり覚えてない。仲が悪くてレオナードが困ってるって言ってたような。

「ありがとう。ジュリアは賢いな」

少し褒めただけで赤くなるジュリアが可笑しくて、可愛らしいクスクスという笑い声が庭園に広がった。

レオナードは難しい顔をしてアルフレットの報告を聞いていた。国王の執務室には人払いをしており、2人以外は誰もいない。

「 どう考えても部外者だとは考えられない。毒を混入する機会がある者は3人。泉の水を汲んだ神官長のドロージオと杯を運んだ神官のアルバート、あとは杯を用意した侍女」

「神官長は考えにくいな」

「だな」

いつもと違って砕けた言い方をするアルフレットは腰に手を当てて溜息を吐いた。

神官長は先王が国王になる前から居た人物で、なにより国の規律に厳しく神に最も忠実な人物として有名だ。神の託宣を聞きレオナードが王に選ばれたことを告げたのも神官長であり、魔女を娶るよう進言した1人でもある。前王妃のベルデラと仲が良かったのも彼が白である証拠のひとつだ。

「考えられるのは神官と侍女か。侍女はどこの者だ？」

「ニーナ・カトレア」

「カトレア財務長官の娘か。キナ臭いな」

「革新派は最近動きが派手だからなあ。財務長官も優秀だけどあまりいい噂は聞かないし」

レオナードは俯き気味だった顔を上げてアルフレットを見上げる。

「その侍女は今何をしている」

「たしか魔女さん付きで食事全般を担当してた気が……」

「すぐに呼べ」

アルフレットは力強く頷き、レオナードは肩肘をついて山積みになされた書類に視線を遣った。祝福の杯の件がすべてではない、今この城内にヴィラの敵が多すぎる。しかもかなりの高い位置にいるはず。

放っておけばいいのだ。所詮敵はヴィラの敵でレオナードの敵ではないしなり得ない。しかもヴィラは魔女。魔女が王の嫁に望まれるのはこういう事態を想定し、自分の身を守る力を持っているからだ。しかしレオナードが放っておけば、危機感のないヴィラのことだ、すぐにやられてしまうだろう。

そうしてなんだかんだ言っつて、レオナードはヴィラの敵になりえるだろう脅威の排除に着手している。放っておけばいいと思うのに、自分の考えとは真逆の行動を取るレオナードは自嘲の笑みを漏らした。

「え……毒盛った犯人もう捕まったわけ？」

食事が終わった後、話を切り出したルードリーフにヴィラは瞠目した。まさか昨日の今日で犯人が捕まるとはヴィラでなくとも誰も思わなかっただろう。

「はい。自供いたしました」

「自供って……自首？」

「いえ、問い詰めたところ白状しました」

「……そう、自分から言っちゃったんだあの子」

何もかも知っているような口ぶりにルードリーフは訝しげな視線を送る。まだ彼は犯人の名を言っていないのに。

「犯人をご存じで？」

「ニーナでしょ？あの子あたしの友達にそっくりで、顔になんでも思っていることが出ちゃうんだけど、ニーナもそうだったから」

ルードリーフはため息を吐いた。神経尖らせて犯人を探していた自分たちがバカらしく思えてくる。

「犯人のニーナ・カトレアはエルヴィーラ様が非常にお気に召していたとお聞きしています」

「うん、そうだけど」

「・・・陛下やわたくしはこの度の事件にエルヴィーラ様が心を痛めないか心配しているんです」

ヴィラからすれば、お気に入りの子に裏切られたのだから。

しかしそんなルードリーフの心配を余所に、ヴィラは至って平気そうな様子だ。

「・・・極刑、でございますよ？」

ニーナは処刑される。しかも拷問を受けた後、この国で一番惨い処刑方法で。

恐る恐る口にしたルードリーフだったが、返って来たのはヴィラの冷たい視線だった。凍りつくような殺気に似たその視線に、ルードリーフは背筋を凍らせた。この視線はレオナードが剣を持ったときに発するものと同じだ。

「あたし、自分を殺そうとした人物に同情するほどお優しくないから」

「は、はい・・・」

ルードリーフは頭を下げると部屋を後にした。

ヴィラは今の自分の状況を理解しているのだろうか。どこに刺客がいるかわからないこの狭い城の中で、彼女が頼れるのはレオナードだけだということに。そして助けてくれるはずのレオナードを邪険にすることが、自分の首を絞める行為であることに。



## 第九話 憂鬱

祝福の杯に毒が入っていたことは公にしていなかったもので、ニーナはゾロア教を信仰した罪で処刑することとなった。

城下町の広場に人だかりができ、これから行われる処刑を固唾を飲んで見守る。人々の視線の先には大きな木に括りつけられたニーナの姿があった。身体中に切り傷や殴られた跡があり、顔を真っ青にして今にも失神してしまいそうな様子だ。そんな彼女の周りには銀の鎧を着た兵士が取り囲むようにして集まり、一般人が必要以上に近づかないよう注意したり敵の襲撃がないか見張っている。

そんな物々しい様子は城からも見えていた。レオナードとアルフレット、そしてルードリーフが並んで眺めの良いバルコニーから処刑が無事に行われるかどうか監視している。

「奇妙だな」

口火を切ったのはレオナード。ええ、とルードリーフが頷いた。

「ニーナ・カトレアは異教徒ではないようだ。しかし魔女の命を狙った・・・ということは、カトレア財務長官の指示と考えられなくもないが、カトレア家は貴族ではない。どうせ魔女を殺したところで自分の娘を後宮に召しあげられるとは思っていなかっただろう」

だとしたら、何の為の犯行か。結局、ニーナは誰に命令されて毒を盛ったのか明かすことはなかった。

「まあなんにしても、カトレア財務官庁の肩身が狭くなるだろうな。娘亡した上に降格、醜聞もすぐに広まるだろうし。誰もが財務官庁が指示したことだと思っただろうさ」

アルフレットがため息交じりに言うと、今度はルードリーフが続ける。

「しかし考えてもみてください。暗殺に自分の娘を使う親がいますか？」

「いないな。すぐに足がつく」

「そうです。たとえ暗殺自体が成功しようと失敗しようと娘を危険にさらすうえ、捕まればまっ先に自分が疑われるんですから。それにニーナ・カトレアがあっさり自供したのも引っかけります。真実が明るみになれば父親に迷惑がかかるとわかっていて隠そうともしなかったのですから」

「カトレア財務官庁の権力を削ぐための罠かもしれないな。もしくは、黒幕がゾロア教なんだろう」

レオナードが静かに言うと、ルードリーフとアルフレットは横目で彼の姿を見た。今から若い娘の処刑が行われるというのに、彼は無表情で同情の欠片も見当たらない。

それから誰も口を開かなかつた。兵士が松明に火をつけ、広場が騒がしくなったからだ。ニーナの足もとに油のようなものをバラ撒くと、松明を近づけただけで簡単に引火する。あっという間にニーナの姿は見えなくなり、赤い炎が広場の中心で煌々と燃えた。

10分ほど経つと火の勢いがなくなり徐々に消えていく。しかし。

「おい、どうなってるんだ！」

アルフレットが悲鳴にも似た怒号の声を上げた。木に括りつけていたはずのニーナの遺体は、黒焦げになって現れることなく忽然と姿を消したのだ。ルードリーフは驚きのあまり瞠目して口をあんぐり開けている。

「遺体が、ない？これは……一体どういことでしょう……」

「……ふん、やってくれる」

鼻で笑ったレオナードの顔には厳しい表情が浮かんでいた。

「陛下？」

「この観衆の中誰かが手引きして助けだしたとは考えられない。答えは簡単なことだ。敵に魔女がいる」

戦慄が走った。そのレオナードの言葉は、まるで死刑宣告を受けたかのような恐怖と衝撃を覚えるのに十分なものだった。

「いるに決まっています！」

「いらねえって！必要ないじゃん」

「いります！だからエルヴィーラ様はダメなんですよ！」

なんだとー！？

「お前がルードリーフと議論を交わすなど・・・何事だ」

講義中なのにレオナードがやってきた。まあ、珍しいことじゃないけど。彼はものすごく不思議なものを見る目であたしを見る。一方ルードリーフは突然の来訪に焦ってキョロキョロと辺りを見回していた。

「んーとね、性交のときにキスがいるかいらなかった話してたんだけどー、ルードリーフはいるって言って聞かねえんだよ。レオナードもいらないうって思うだろ？」

「エルヴィーラ様！」

「だから、しなくても差し支えくない？」

「そうではなく！陛下の前でなんてことを！」

ルードリーフはまるで純情少年が初恋の相手に告白するときのように顔を真っ赤に染め上げている。

「なんだよ今更。さっきまでベットの所で男を悦ばせる方法とか延々と語ってたくせに」

「ヴィーラ様！恥じらいをお持ちくださいませ！へ、へへへ陛下の前でござりますよー!?」

ルードリーフはかなり取り乱した様子であたしを窘めるように叱る。レオナードはというと、ものすごくバカにしたような目であたしを見ていた。なんだよてめえ、喧嘩売ってんのか？

「なにがそんなに恥ずかしいんだよ童貞じゃあるまいし」

あ、泡吹いて倒れた。

女のあたしに語るのには恥ずかしくないのに、レオナードの前じゃ恥ずかしいってことは……ルードリーフはレオナードに恋してるってことか？いや、それはないか。

「少しは落ち込んでいるかと思って来てみれば……」

「ん？落ち込むって？」

「お前のお気に入りの侍女が処刑されただろう」

あー、ニーナのことね。

「別にたいしたことじゃ……。ねー、シルヴィオ」

扉の前で控えていたシルヴィオは引きつった顔でコクコクと頷いた。彼は元殺し屋だからか、気配を消すことに長けていてとても静か。たまに居るのを忘れそうになる。

「お腹すいたから何か持ってきて」

「御意」

シルヴィオが部屋から出ていったところでため息を吐くと、先ほどの続きを話し始めた。

「このところ襲撃が多くなってる」

「特に報告は受けていないが？」

「襲撃受ける前にシルヴィオに始末させてるから。祝福の杯の件はただの一部にすぎない。毒を盛られそうになったことはこれまでも何度かあったし、ずっと何かに見張られてる気がしてたから」

レオナードは目を細めると考え込むような仕草をする。

「異教徒だと思っつか？」

「貴族が娘を後宮に送るためにやってるわけじゃないだろ」

「なぜ？」

「あたしを殺しても運よく娘を王の寵妃にできるとは限らないし、バレたら自分が失脚するんだから。リスクが高すぎる。それにあたし魔女だぞ？敵に回したら後が怖いからな」

「・・・そうか。いずれにせよ、自分の身を守るために少しは考えて行動するんだな」

「うーん・・・」

注意しろ気をつけるってよく言われるけど、どこから襲ってくるかわからない敵を相手にどう注意すればいいのかわからない。まあだ

から気をつけろってことなんだろうけど。  
レオナードと話しているうちに倒れていたルードリーフが生き返った。顔が真っ青だけど大丈夫かな。

「エルヴィーラ様あー!!」

むくつと起き上がった瞬間彼は大きな声を出した。そんなお化けが出たーみたいない方をしないでほしい。

「なんだよ」

「ど、どんな教育を受けたんですか!あんなことを陛下の前で・・・破廉恥な!親の顔が見てみたいですよ!」

顔面を殴られたような衝撃を覚えた。慌てて平静を繕う。

「・・・あたし今から魔術の練習するから、部屋から出てって」

「え・・・」

「師匠から学んだのって3年だけなんだよ。まだできないことのほうが多くて・・・練習しないと」

レオナードとルードリーフの腕を掴むと、無理やり扉の前まで引張って来て部屋の外に押しやった。扉を閉めるとため息を吐いて頭を抱える。

「明らさますぎたかな・・・」

誰もいなくなつた部屋は妙に静かで、疲れた体をベットに横たえる

と意識が沈めるのに時間はかからなかった。

あれからルードリーフはすっかり落ち込んでしまった。肩を落とす  
て頂垂れる彼を励ますのはやはりアルフレット。

「落ち込まないでくださいよー、魔女さんも特にルードリーフさん  
を避けてるわけじゃないんですから」

ヴィラはあれから態度を豹変させた。地図を見て唸っていることが  
多くなり、ピリピリとした雰囲気を纏うようになった。死んだよう  
に眠る回数も時間も増え、ワケのわからないことをぶつぶつと呟く  
ようになった。あれほど楽しそうにしていたお茶会も、最近はして  
いないようだ。

いつもハツラツとして活発だった彼女に元気がなくなると、こっち  
の調子が大きく狂ってしまふ。それはレオナードも例外ではないよ  
うで、遠目にヴィラの様子を気にかけているようだった。

「いえ、わたしの所為です……。わたしがエルヴィーラ様の地雷  
を踏むようなこと言ったから……」

“親の顔が見たい”と言った時、明らかにヴィラは顔を引きつらせ  
ていた。ヴィラが奇行に走るようになったのもあの時からだ。



「あんな表情なさっているの、初めて見ました」

傷ついたようなショックを受けたような、そんな表情だった。一瞬しか見せなかつたけれど、あの顔は今でもルードリーフの頭の中に焼きついて離れない。

アルフレットは眉を八の字にしてルードリーフの顔を覗き込む。すっかり気落ちした様子の彼にかける言葉が見つからず、アルフレットは一生懸命慰めの言葉を探した。

「まあ、陛下ももう少し様子を見るように言ってますから、今は見守りましょ。オレたちにできることはないし、魔女さんは強い人ですから」

そのうち元の元気なヴィラに戻ることを祈って。ルードリーフは額くと、教科書を片手に講義のためヴィラの部屋へ向かった。

レオナードとの食事中、ヴィラの手は止まっていた。眠そうにコクコクと船を漕ぎながら目を閉じている。

「寝るな、きちんと食べる」

「うーん・・・眠い・・・」

フォークを掴んで口に運んだものの、再び手は止まってしまった。レオナードの眉間に皺が寄る。

「そうか、そんなに食べさせてほしいのか」

「は？いや、ちょっと待て、誰もそんなこと言ってねえよ！」

「じゃあ自分で食べる」

ヴィラは不満そうにむーっと唇と尖らせると、しぶしぶといった様子で食事を始めた。最近はろくに食べていなかったようなので、レオナードも控えているシルヴィオも心配そうに見ている。

「おいしいけどちょっと固いや」

「何か食べやすいものを用意させようか」

「いいよ。やめて、レオナードが優しいと気持ち悪い」

ピキッ

と額に青筋が浮かんだ。しかし怒鳴ることはせず、息を大きく吐いて怒りを誤魔化す。

「お前に元気がないと、調子が狂うヤツが多いらしい」

「ん？」

「ルードリーフがすっかり痩せた。アルフレットは最近あまり冗談を言わなくなった。シルヴィオはいつも心配そうにお前の様子を窺

ってる。侍女たちは泣きそうな顔をしてお前に元気がないのは何故か聞いてくる」

ヴィラは目をぱちくりさせて青い瞳を見つめ返した。自分のことで必死すぎて周りの変化に気付かなかつたらしい。

「何をしているかは聞かないが、あまり周りに心配をかけるな」

「……うん」

「それに元気がないお前は気持ち悪い」

「ひゅっ」

「さっきの仕返しだ」

レオナードがクツクツと笑うと、少しだけヴィラの表情が和らいだ。

## 第十話 囚われの身

このままじゃダメだって自分でもわかっている。でも向こうの世界を思い出した時、どうしようもなく怖くなったんだ。いつの間にかここでの生活が当たり前になって、このままじゃずっとここに居座りそう。

それじゃダメなのに。

世界地図を見ながら頭を抱えた。注意深く見つめながら、感覚を研ぎ澄ませて魔力を注ぎ込む。しかし何度やっても成功しない。そう、あたしは極端に“占い”が苦手な魔女なんだ。地図を眺めても何もわからない。

「シルヴィオ」

傍に控えているシルヴィオが静かに返事をした。

「少し出かけてくるから適当に誤魔化しとして」

「しかし・・・もう夕方ですが・・・」

「体調が悪くて寝込んでるとも言っといってくれればいいから」

「畏まりました」

白いチョークを持って地面に魔法陣を描く。ちょうど手を広げたくらいの大きさのそれは、細かい模様と複雑な字で構成されており、

描くだけでも一苦勞だった。

描き終わると魔法陣の中央に立ち、線の細部まで魔力を注ぎ込む。シルヴィオがこちらを心配そうに窺っていた。

「……ヴィラ様、何を……」

「大丈夫、すぐ帰ってくる」

バチツと静電気が起こったような音を立てて全身が痺れる。目を開けるとそこは既に城の中ではなく、あたしが生まれ育った町並みがあった。

異世界とこちらの世界を行き来したのはもう3回目になる。前回来た時から1年以上経つが、あんまり景色は変わっていないようだ。普通の町、普通の家、普通の人。できるだけこちらの衣服に近いワンピースとパンプスを選んで来たけど、日本の季節は冬、もう少し厚着してくるべきだった。

目的の地に辿りつくるとインターホンを鳴らす。ピンポンと長閑な音が響いて、ガチャリと受話器を上げるような音がスピーカーから聞こえた。

『はい』

「百ももさんはいらっしゃいますか……?」

『っそんな子、うちにはいません』

ガチャンと乱暴に切る音がして通話が切れる。このやりとりも既に3回目。いい加減に諦めるべきだと思つのに、もしかしたらという期待が足をここに向かわせる。

木森百きもりももという友達がいた。引つ込み思案で優柔不断で引きこもり気味だったけど、あたしたちはお互いに問題のある家庭を持った所為か、ものすごく仲が良かった。異世界に飛ばされる前、あたしはいつものように親とケンカになって家を飛び出し、軽い家出気分で百と一緒に田舎の方へ向かっていた。木陰で少しうたた寝している間に異世界へ飛んだらしく、師匠から魔術を学んで世界を行き来できるようになった時。この世界に戻ってきて、初めて百も行方不明になったのだと知った。

・・・百がどこに飛ばされたのかは知らない。もしかしたらこの日本のどこかで家出してるのかもしれないし、あたしのように向こうの世界へ飛ばされたのかもしれない。

百が行方不明になったことを知ってから、あたしは自立して百を探せるように師匠から徹底的に魔術を学んだ。あの子は生活力が無くはつきりと自分のことを言えないから、見知らぬ世界で迷っていたらきつと困っているだろうから。だから、ある程度の知識を身につけたら師匠の家を出て探しに行くつもりだった。なのに。

一番欲しくなかった“家族”ができてしまった。

「恵理・・・？」

聞き慣れた声に振りかえると、そこには3年前より少し老けた母親の姿。ああ、会いたくなかったのにどうしてここにいるんだ。

「なんで・・・帰って来たの！？どうして!？」

金切り声が耳に響いてうるさかった。母親はあたしを見てはヒステ

リックに泣きだす。それは3年前とちつとも変わらない。

「なんで来たのよ！もう帰って来ないと思ってたのに！もう帰って来ないかと・・・っ！」

大きめのバツクを振り回して殴りかかってきたから避けようと思っただけど、少しは彼女の気が済むようにと思って大人しく棒立ちになっっていた。身体を襲うのはぶつかる衝撃だけであまり痛くない。

「来ないで！どっか行きなさいよ！」

言われなくても、行くよ。そしてあたしは、もうきつとこの世界に帰ってこないだろうから。

「バイバイ、お母さん」

戻ると目の前にレオナードが居てびっくりした。標準が少しずれてしまったらしく、レオナードの部屋に戻ってきたらしい。もちろん突然現れたあたしにレオナードもびっくりしているようだ。やばい、怒られるかも。

「あ、あの・・・えつと・・・」

母親に会ったばかりで興奮が冷めないままレオナードの前に来てしまいい、なんと言っていていいかわからず言葉がうまく出てこない。困っていると先にレオナードが口を開いた。

「また勝手に何かしていたんだな・・・」

「うっ・・・」

さすがに鋭い。レオナードは眉尻を下げて困ったように微笑んだ。

「おかえり」

あ・・・“おかえり”って、生まれて初めて言われたかも。初めて言われたその言葉は、ムズ痒いような生暖かいような不思議な感覚だった。

泣きそうだったけど泣き顔を見られたくなくて、レオナードの腕の中に飛び込む。拒否されることなく回された腕が暖かくて、ますますあたしは泣くのに我慢しなきゃいけなくなかった。

ごめんね、百。あたしこっちの世界で家族が出来たよ。ずっとずっと欲しかった自由は手に入らなかったし、思い描いたような暮らしはできないし、あんまりいいことはないみたい。

「嫌だったんだ、家族ができるのが」

レオナードは黙って聞いていた。あたしは独り言のように呟く。

「あたしはずっと家族が嫌いで、どうしようもなく嫌で、でも毎日帰らなきゃいけないあの場所がどうしようもなく苦痛だった。苦しくて何度家出しても、結局あの家に帰らなきゃいけなかった。そう



しなきゃ生きていけないあの場所が、死ぬほど嫌いだったんだ」

もっともっと自由に生きたかった。苦痛を感じたら逃げられるその自由は、あたしたちが望んでやまないものだったのに。

「結婚なんてしたくなかったよ、レオナード」

逃げようとする度に捕えられる。それはあたしが“恐れていた家族”そのものの姿で。なんとなく居心地がよく忘れかけていたけれど、あたしはもう二度と同じことを繰り返したくないんだ。

「諦める」

「え……？」

あたしは顔を上げてレオナードを見た。

「諦める」

自由を、諦める。レオナードの言いたいことがわかって、あたしは唇を噛む。あつたものをなかつたものにはできない。もうできたものを無くすなんて、あたしにはできない。

あたしは           レオナードのそばを離れられないんだ。

ヴィラが目の前に忽然と現れた時、彼女は泣きそうな表情をしていた。胸の中に飛び込んで来た小さな体を抱きしめたのは2度目。前よりも少し細くなっている、栄養のある食事を料理人に作らせようと思案していた。

「嫌だったんだ、家族ができるのが」

ぽつりと、落とすように呟く。

「あたしはずっと家族が嫌いで、どうしようもなく嫌で、でも毎日帰らなきゃいけないあの場所がどうしようもなく苦痛だった。苦しくて何度家出しても、結局あの家に帰らなきゃいけないかった。そうしなきゃ生きていけないあの場所が、死ぬほど嫌いだったんだ」

たどたどしい言葉だったが、なんとなく理解できた。彼女は“囚われる”のが怖かったのだと。それが家族という形で縛られるのが目に見えていて、それから逃げ出そうと必死だったのだと。

「結婚なんてしたくなかったよ、レオナード」

なかったことにするのか？ 出会いも、過ごした時間も、全て。彼女を手放せば、きっと簡単に飛び立ってしまうだろう。しかし、それは俺が許さない。できない。

「諦める」

「え……？」

ヴィラが顔を上げると、漆黒の瞳に吸い寄せられるような錯覚を覚える。

「諦める」

ポタリと一滴の涙を落して、ヴィラは再び胸の中へ顔を埋めた。

腕の中で俺に縋るように抱き返すヴィラ。嘲笑うかのようにヒラヒラと飛び回る蝶を、やっと手の中に収めたような支配感と征服感に包まれた。もう二度と放してやらない。箱の中に閉じ込めて、羽を折って、飛べなくしてしまえばいい。

ヴィラはもう、俺のそばを離れられないんだ。

慰めるように何度も頭を撫でる。髪の毛を手にとって口づける。ポロリともう一滴の涙を最後にヴィラは泣き止んで顔を上げた。指の腹で涙の跡を拭くと、くすぐったそうに目を閉じる。

そのまま後頭部に手を回して唇に噛みついた。ヴィラはギュツと身体を強張らせて、背に回した手に力を入れる。慰めのための行為のはずが、頭の中がかつと熱くなってもつと先に行けと促す。熱くなる口内と抑えの効かない自分を噛い、そのままベットに押し倒した。

## 第十一話 セクハラ王子

まどろみながら目を開けると、青い瞳があたしを覗き込んでたから慌ててシーツの中にもぐった。触れ合う肌から感じる熱で全身が痺れるような感覚を覚える。頭を撫でてくれる手が優しく、それは安らぎを与えてくれた。痺れと安らぎ、2つの相反するものを抱えても決して不快ではない。むしろ幸せ・・・なのかもしれない。恐れていたことは実現してしまった。レオナードのそばにいたことが心地よすぎて、いつか離れられなくなってしまうんじゃないかって、ずっと怖かったから。

「・・・最悪」

小さな独り言にレオナードはクスリと笑い、頬に唇を押し当ててきた。茶色の柔らかい髪が顔をくすぐる。いつもの怖いオーラなんて全くないレオナードは、色気の塊みたいなもので、まあ要するにかなり危険。こんなレオナードを城の皆が見ちゃったら、きっと政治の場として機能しなくなるんじゃないだろうか。彼の魅力にファンクラブどころか崇拜者まで出そうだから怖い。

「敵、また増えちゃうかな」

あたしがレオナードと仲良くなれば、貴族たちはうかつかしていられないだろう。あたしたちの不仲は有名だったみたいだから安心していただろうに。

「心配しなくていい。俺がなんとかする」

甘い、優しい、そして意外と甘えただ。お願いだからそんな顔してそんなセリフ吐かないでくれ。赤面しそう。

「そういつわけにはいかねえよ」

ここで生きていくならば、覚悟を決めなければならない。魔女として、王妃として、やるべき課題は山積みどころか際限なく天から降ってくる。異教徒の排除、貴族社会の統率、国内外の政治。あと、もしレオナードが許してくれるのなら百を探してみようと思う。ここが世界の権力の中枢だから、ここからでも見つかるかもしれない。

「あたしだってバカじゃないよ」

やるべきことはやる。

そう言ったらレオナードに「どうだか」と言われて、ムカツイたからデコピンしてやった。痛そうな音が響いたけどレオナードは怒ることなく、心配そうな目で懇願するように言う。

「それより、頼むからちゃんと食事を取ってくれ。痩せ過ぎだ」

「……うん」

そういえば最近やること多すぎてロクに食べてなかったかも。二一ナの事件以来お茶会もやってないや。……レオナードは心配してくれたのかな？

とつても不思議だ。あの何にも興味なさそうなレオナードがあたしを気遣ってくれて、あんなに嫌がってたあたしが当たり前のように

レオナードのそばにいて。歯車が狂ったのは、いつからだろう。レオナードが分からない。魔女だからあたしを受け入れてくれた？あたしに利用価値はある？じゃあ優しくする価値は？

「どうして・・・優しくするんだ」

レオナードは意外そうに片眉を上げる。そんな表情も様になっていて、ちよつと悔しかったのは内緒だ。

「人が人を必要とするのに理由などない」

「何その哲学的な答え。わかりやすく言えよ」

「人は無意識に、求めているものを与えようとするものだ」

「余計わかり辛いんだけど」

「自分で考えるんだな」

意地悪な答えにムツとして顔を反らすと、後ろから抱き締められて余計に身体が密着した。レオナードの身体はいつも温かい。

「予感当たっちゃったな」

「予感？」

これから忙しくなるよ。うんとね。

朝食のときのこと。大人しく食べていたヴィラだったが急に口を開いた。

「本が読みたいっ」

どうしたんだ突然、と同席していたシルヴィオとレオナードとアルフレットは首を捻る。

「珍しいっすね、魔女さんが本なんて……」

「言っとくけど勉強のためじゃねえよ？」

「やはりな」

「なんだと!?!」

レオナードの嫌味な言葉にヴィラが突っかかる。いつもの夫婦喧嘩にシルヴィオもアルフレットも安堵した。食事もちゃんととっているし、ヴィラはだいぶ元気になってくれたようだ。レオナードとの仲は相変わらず良くなさそうだったが、それが逆にいつもの風景なので2人の騎士は安心する。

「蔵書数は国立図書館が一番だが、城から少し離れてる。行くなら資料室だな」

「専門書ばかりで楽しくなさそう・・・」

「何か文句でも？」

「そりゃある・・・いえ、ないです。はい」

慌てて訂正したヴィラは食器を片づけさせるようにヒラヒラと手を振った。シルヴィオが侍女を呼び、食器が次々と下げられていく。

「今から行く。誰か案内してくれ」

「じゃあ陛下が案内してあげてくださいよ」

アルフレットの提案にヴィラは苦虫を噛み潰したような顔をした。

「なーんで、プライベートの時間までレオナードと顔を合わせなきゃいけないんだよ」

「まあまあ、たまには夫婦でゆっくりするのもいいんじゃないっすか？陛下の政務も今日は少ない方ですし」

ねえ、陛下。と同意を求めたアルフレットだったが、レオナードに睨まれて口を噤んだ。眉間にしわを寄せた後、ため息を吐いてフォークを置く。

「まあ、いいだろう」

「別にアルフレット貸してくれればいいのに」



「アルフレットには別の仕事をさせている。手が空かないだろう」  
ヴィラは頷くと立ち上がる。侍女にシヨールを渡され羽織ると、道を知らないにも関わらず我先にと歩き出した。

資料室とは言っても、国内で2番目の蔵書数を誇るそれは巨大な図書館だった。限られた人しか出入りできないらしく、他に人がいなくて安心しながらヴィラは手に本を取る。

「で、何を調べるんだ？」

「師匠が書いた魔術本がねー、どっかにあると思うんだけど」

それを聞いたレオナードとシルヴィオが魔術書を探し出す。あ、とヴィラは思い出したように付け加えた。

「師匠が言ってたけど、呪いがかかってたりする本もあるらしいから気をつけるよ」

一瞬2人の手が止まった。魔女であるヴィラなら呪いも大したことないかもしれないが、シルヴィオとレオナードにとっては未知の領域。

「あつた」

その一言にホツとしたのは当然だろう。

ヴィラの手元には表紙が赤いベロア布でできた比較的薄い本があった。中は手書きで魔女ベルデラの癖字が並んでいる。ヴィラは満足

そうに頷いた。

「あつたあつた。確かこれにワープの魔術式が載ってるハズ」

レオナードはワープという言葉で明らかに不機嫌になり、本を取り上げようか本気で悩んだ。ただでさえウロウロと予測不可能な行動をするヴィラに、これ以上足を与えたくない。

悩んでいる暇もなく、ひよっこりと現れた人物に皆の思考を持つて行かれた。長い藍色の髪を後ろで括った美丈夫。にこにこことご機嫌な様子でヴィラの前に進み出る。

「おや、もしかしてエルヴィーラ王妃？」

「そうだけど・・・」

誰だコイツ、と訝しげに見るヴィラに、彼はにっこりと満面の笑みを浮かべた。

「私は右将軍のクロード・フォーゲル。いやあ、会えてうれしいなあ」

馴れ馴れしい態度に不快を示したのはシルヴィオだった。2人の間に素早く身を滑り込ませようとしたが、クロードのほうが一枚上手だったようで、ヴィラの腰に手を回すと自分の方へと引き寄せた。あまりの密着ぶりに殴りかかりそうになったのはシルヴィオもレオナードも同じだ。

「殿下、ふざけるのは大概にしてもらいたい」

「ん？殿下って？」

「私は前国王の息子なのだよ。だから正確には元殿下になるんだ、王妃」

へえと好奇心旺盛なヴィラの表情が軽くなった。クロードはぱつと花が咲いたように笑い、ヴィラに身を乗り出して手を取る。

「やはり美しいね王妃！貴女は難しい顔をしていても凛々しく華やかだが、きつと微笑めばこの世で君の虜にならない男はいないよ」

「そりゃー、どうも」

普通の女性なら気圧されたり赤面するところだが、図太いヴィラは適当に受け流す。そんなところも気に入ったらしいクロードはますます笑みを深めた。

「いい加減離れろ」

レオナードの厳しい、むしろ怒っているような声にクロードはフフと妖しい笑みに変える。

「陛下がご機嫌を損ねてしまったようだ。残念だが美しい王妃、今日はこれにて我慢することにしましよう」

気づけばクロードはヴィラにぶつちゅーと熱烈なキスをしてきた。唇で唇に、だ。ヴィラは目をパチクリとさせ、唇を離れたクロードを見る。レオナードがスラリと剣を抜きとったその時、

「へたくソ」

ぽつりと呟いたヴィラの一言がクロードに雷を落とした。今まさに殴りかかるうとしていたシルヴィオはブツと噴き出し、剣を振りかざそうとしていたレオナードの手が止まる。アルフレットが居たら間違いなく彼は身体をくの字に曲げて爆笑していただろう。レオナードは王妃に手を出した不敬罪でクロードを処罰しようかとも思ったが、その気持ちは大きく削げてしまった。男のプライドを一瞬で粉々に粉碎する一言をヴィラは言っただけのだから。

「ま、満足していただけなかったようだね、王妃。次からは精進するよ。ではこれにて失礼」

クロードは引きつった顔をして逃げた。

シルヴィオがハンカチでヴィラの口をごしごしと擦る。

「まったく素晴らしいお言葉でございました、ヴィラ様」

まさかいきなり見知らぬ人にキスされ、怒ることも泣くこともせず感想を言うとは。そんなことができる女は世界中を探してもヴィラしかないだろう。

「あのセクハラ野郎めベロチューしやがって・・・あたしのファーストキスを・・・」

「嘘をつくな。お前ほど男慣れした女を初めて見た」

レオナードはもちろんクロードの行った行為に腹を立てていたが、ヴィラのあまりの逞しさに咎めるタイミングを逃してため息を吐く。

「だってあたしの生まれ育った世界は性生活乱れまくってたもん。恋人じゃなくても性行為をする人はするぞ。だから結婚するまで貞

操守るやつはほとんどいねえ。キスが挨拶の国もあるくらいだし」

シルヴィオは驚きに瞠目した。こちらの世界では女性の結婚前交渉はあり得ない。身分の高い者であれば遊び歩いている男性もいるが。

「元王子様ねえ・・・」

「あまり関わるな」

「いや、関わりたくねえよ。あんなセクハラ野郎」

ヴィラは嫌そうな顔をして本を脇に抱え、部屋に戻るために踵を返した。

## 第十二話 扉

みんなの前では何故かお互いいつも通りに遠慮なくズバズバと嫌味を言ってしまう。そのほうが楽だし接しやすいし、あたしはそれでいいと思うんだ。

けどね。

2人きりになつた途端態度がコロツと変わるのは困る。心臓持たないから。

「んっ、午後の政務まだ終わってないんだろ？」

「ああ」

ただのフレンチキスで身体が熱くなる自分はバカだ。剣ダコの出来た大きな手で背中を撫でられる。ただでさえ忙しいのにいつ剣を握ってるんだろっ。

「……っ……シルヴィオ戻ってきちゃっよ」

「まだ来ない」

仲が悪いはずのあたしたちなのに、昨日の夜からはすっかり様変わりしてしまった。お互いの気持ちを通じたとかそっういう可愛らしい

理由じゃなくて、たぶん吹っ切れたからなんだと思う。レオナードがどう思っているかは知らないけれど、少なくともあたしは“諦め”に近い感情だった。

ただ、不意に感じる幸せに似た暖かさと、見たことのない物に触れるような緊張はどこから来るんだろう。今でもこっぴどやっつて、レオナードの指一本の動きだけで翻弄される自分が不可解だ。

「また夜に来る」

そう言い残してレオナードは自分の部屋に戻っていった。夜？つてことは昨日みたいなことするってこと？

ちようどいいタイミングでシルヴィオが戻ってきた。たぶん足音に気づいたからレオナードが帰ったんだらうけど。

「ヴィラ様、お連れしました」

「うん」

扉を開けると銀色の髪にちょび髭を生やした懐かしい人物が満面の笑みで立っている。仕立て屋のレクサスさんだ。

「これはこれは王妃様、お久しゅうございます。相変わらず美しい」

「お久しぶり」

今日仕立て屋さんを呼んだのはもちろん服を作ってもらったためだけど2つ理由がある。

ひとつは今まで普段着にしていた服はもともと師匠が王妃として城

に居る時使っていたものらしく、まだ成長期のあたしの胸が窮屈になつてきたから。これを期に衣装棚を一掃しようということになり、普段着を大量に発注するために呼んだ。

もうひとつの理由はもうすぐ剣技大会があり、そのドレスを作るため。一度公の場で着たドレスで出席するのは失礼にあたるそうなので、面倒だけど新しいものを用意することになった。

服を脱ごうとしてはた、と思います。

「シルヴィオ、恥ずかしいなら部屋の外で待ってて」

意味を察し赤くなつた彼はそそくさと廊下の方へ出ていった。別にシルヴィオに下着姿を見られるのが恥ずかしかったわけじゃねえ。

レオナードがね、キスマークくつきり付けちゃったからね！

あんの野郎、今日のこと知っててつけたんならぶつ飛ばす。レクサスさんに見られるのは仕方ないと諦めてさっさと服を脱いだ。

案の定、レクサスさんはあたしの身体をまじまじと見ておやおやと咳く。

「見苦しくて悪いね」

「いいえ、仲睦まじきは国民にとつてとても喜ばしいことじゃないですか。悪い噂があるだけに、ね」

貴族通り越して国中にあたしたちの不仲は伝わっていたらしい。ちよつと恥ずかしいぞ。

「さて、採寸させていただきますっ」



レクサスさんは相変わらずのテンションであっという間に寸法を測っていった。嬉しそうに目をキラキラさせて、変態っぷりも健在だ。

「やはりバストが少し大きくなってますね！ウエストは逆に細くなったようで、ううむ、もう少し肉がついてもいいと思いますよっ」

「じゃあウエストは緩めにしといてくれ」

「畏まりましたっ！さて、今回のデザインはいかがいたしましたしょう」  
剣技大会だから結婚式のドレスのようにゴテゴテしたものはあまり相応しくないだろう。できればスタイリッシュな感じで、スラッとしたものもいい。

「そうだな、今回はレース無しでいいや」

「かなりシンプルになると思いますが？」

「それでいい。代わりに身体の線を出して、丈は足首よりちょっと長め。腰のあたりからスリットをザックリ入れて。色は赤で素材は任せる。装飾は二の腕に太いブレスレット、首にブレスレットと似た形のチョーカー、それから顔上半分隠すためのマスク」

「ほお・・・これはまたミステリアスな！せっかくのお顔をまた隠されてよろしいのですか？」

「あまり出したくないんだ、今はね。普段着の方はレクサスさんに任せるから」

レクサスさんは満足してくれたみたいで、さっそく作りたいたいからと帰って行ってしまった。剣技大会・・・ああ、めんどくさい。

仕立て屋が帰った後はあつという間に陽が落ちてしまった。最近肌寒くなってきた。日が落ちる時間が早くなってきたようだ。

レオナードが忙しいらしいので一人で夕食を食べてシャワーを浴びた。いつもお風呂は侍女たちに任せているけど、キスマークがあるので今日は勘弁してもらおう。

それからはすることがなくてベッドの上で師匠の魔術書を読んでみた。けれどレオナードが「また夜に来る」って言ったことが気になって、あたしの頭の中に本の内容は入ってこない。

夜っていつのことだろう。暗くなつてすぐか、真夜中なのか、明け方なのか。

あたしの部屋には扉がある。レオナードの部屋へ繋がる扉が。最初は嫌で仕方なくて塞いでいたけど、やっぱり便利だから最近をよく使っていた。

あたしは意味もなくジツとその扉を見つめる。あの扉が開くとき、レオナードがやってくるんだろう。そう思ったら、ただの一枚の木の板が特別な気がした。

じーっとな扉を見つめて、どれくらい時間が経っただろうか。だんだん自分のやっтерることがバカらしくなつてきて、そもそも来るかどうかかわからないレオナードを待つのはやめることにした。あたしは寝る、もう寝る。

きゅつと目を瞑つて眠気を待つ。けれどやっぱり眠れそうもなくて上半身を起こした。

そつだ、そもそも色気たつぷりにあんなこと言われて眠れるはずがねえ。安眠妨害だ。近所迷惑だ。あたし悪くねえよ。レオナードが悪い。

夜来るつてなんだよ、新手の嫌がらせか？つまりあたしに待てと？ていつか待つてどうするんだあたし。・・・なんだこれ、振り回されてるのか？

あーもう！わけわかんねえ！

眠れないのもあつてだんだんイライラしてきて、おもむろに立ち上がると扉の前まで足を運んだ。拳に力を入れて思いつきり殴る。

「眠れるかバカヤロー！！！」

バキッ！ドオンッ！

と大きな音を立てて高価な木の板一枚は見事に壊れる。

けど。

壊した扉の向こうにレオナードが居て驚いた。てつきりまだ仕事してるかと思つてたのに。

「うわっ、いたのかよ」

予想以上に恥ずかしい。レオナードはプククと笑いを堪え切れない様子で、そりゃもう遠慮なく笑ってくれた。

ムカツク！

「もう寝る！こっちの部屋来るなよ！」

「そう言っな。せっかく来たんだ、おいで」

嫌だつて言っただけどレオナードはお構いなしにソファをポンポンと叩いた。部屋まで来られても困るので、仕方なくあたしは指定された場所にドツカリと足を組んで座る。生地の良いソファが意外と心地よくて座りやすい。

「待たせて悪かったな、政務が長引いた」

「・・・あっそ」

良く見たらレオナードの茶髪は湿っていてお風呂上りだってわかった。

昼間の出来事を思い出したあたしは、隣にいるレオナードの首を両手で掴んで軽く締める。

「どうした？」

「てめえ、今日仕立て屋来ることわかってて痕つけやがったな！」

キスマーク見られて恥ずかしかったんだからな。

ああ、と思い出したらしいレオナードは、あたしの手首を掴むと自

分の首から剥がした。

「忘れてた」

「忘れんな、手配したのお前だろうが」

レオナードにまったく反省する様子はなく、あたしが睨むと身体ごと引き寄せられた。青い瞳に昼とは違った熱が灯る。重なった唇が温かい。

「・・・俺のものだ」

酷い。そう言われたら反論の余地がないじゃないか。

抗議するのは諦めて、あたしはただレオナードの熱に翻弄された。

「え、レオナードも剣技大会出るの？」

王様まで参加するなんて意外だ。

レオナードは大きな手をスルスルとあたしの肩に滑らせる。シートが下がったので慌てて手繰り寄せた。

「普通は参加しないが、前の年の大会で勝ってしまったからな。前

回の優勝者がトーナメントで勝ち上がった者と最後に対戦する方式なんだ」

「うわぁ、バケモノだ。だってレオナードまだ27歳。この若さで9千年も剣を振り回してる相手に勝ったんだからやっぱり化け物並みに強い。剣技大会なんて面倒なだけだと思ってたけど、レオナードの試合が見られるのは楽しみだ。」

「レオナードの目が急に真剣になったので、思考を止めて青い瞳を見つめ返した。」

「人の出入りが激しいと警備が手薄になる。気をつけるよ」

「ああ、うん。また何か仕掛けてくるみたいだしな」

「どこでそんな情報を手に入れてくるんだ、お前は」

「心配しなくていいよ。あたし魔女だから」

「致死量の毒飲んでも死ななかつたくらいだ。100人に襲いかかられても生き残る自信はある。」

「敵に魔女がいても？」

「魔女？」

「そうだ。敵に魔女が居たらどうする？」

「そつだなぁ、相手が呪術系得意だったら危ないかも。あたし呪術と占いは苦手だから。攻撃系の魔法は師匠も呆れるくらい得意だったけど。」

「真正面から来たら負けないよ。でも遠くから狙われたらマズイかもな」

レオナードがあたしの背中を撫でながら考え込んだ。あたしのために一生懸命になってくれるのは嬉しいけど、あまり彼の仕事を増やしたくない。あたしのこととは自分で守れるからいいんだ。心配なのは……

「レオナードこそ、気を付けなよ」

「俺が負けるとでも」

「いや、それはないと思う」

頬にキスしてあげたらチュッと水音が響いて、レオナードが嬉しそうに抱きしめてくれたからあたしも笑った。

### 第十三話 剣技大会

人々は興奮し顔を輝かせて笑っていた。どういう仕組みなのか上から赤い花びらが降ってきて、まるで赤い雪が降り積もるように石造りの床を彩る。

「まるでお祭り騒ぎだな」

今日は剣技大会だ。

会場は以前結婚式で使った謁見室ではなく、あの会場よりも一回り小さい闘技場。２メートルほど上から試合を見下ろせる観覧席があり、あたしとレオナードは一番いいポジションに用意されたイスに座っている。

「祭りですからね」

無言のレオナードの代わりにシルヴィオが答えてくれた。この剣技大会は結婚式みたいに格式張っていないので気が楽だ。ただし、参加する剣士たちはガチガチに緊張している者もいるようだったけれど。

「シルヴィオやアルフレットは参加しねえの？」

「オレたち騎士は参加できないんっすよ。剣技大会は国で一番強い者を決める大会ではなく、貴族のお遊びみたいなものですから。まあ一応ディッチ左將軍やフォーゲル右將軍とか將軍職のやつも出る



んで上位争いはかなり厳しいですけどね」

「へえ」

じゃあ参加するのは貴族ってことか。

おっと、セクハラ王子を参加者の群れの中で発見。あいつも出るんかい。

「始める、下がれ」

レオナードの無愛想な声にシルヴィオとアルフレットがサッと後ろに下がった。立ち上がって軽く手を上げるだけで、会場がしんと静まり返る。なんだか魔法みたい。

「これより剣技大会を開催いたします」

声を上げたのは結婚式で司会をやっていた人と同じ人のようだ。黒っぽい茶色の髪の毛、どこか荘厳な雰囲気を持った男。顔立ちは整っているけれど、どこか敵つくって人好きされるタイプではない。

あたしは扇で口元を隠すと、レオナードにしか聞こえないほどの小さな声で訊ねた。

「ねえ、あれ誰？」

「ジギルド・カトレア財務長官だ」

「ああ、ニーナのお父さんか」

言われてみれば顔は似てないけど髪色がそっくりだ。

「彼は保守派の幹部だな。頭が切れて仕事はできるがあまりいい噂はない。ニーナ・カトレアの父親だけあって、祝福の杯の事件で一番怪しいのはあの男だ。近づくなよ。」

逆にあの金髪の男がフェルディナンド・オルドリッチ宰相。政庁のトップで革新派の筆頭。保守派との折り合いは悪くないが、なぜかカトレア財務長官とは犬猿の仲だ。

他には、あの深緑の髪の男・・・あれがドラッグ・ディッチ左将軍。ちなみに左将軍は軍のトップのことだ。クロード・フォーゲル王子は右将軍だがそれは軍のナンバー2になる」

レオナードはわかりやすく丁寧に説明してくれた。名前がたくさん出てきて覚えられそうになかったけど。

「っていうかさ、この国“ド”がつく人多くねえ？レオナード、ルードリーフ、クロード・・・ほらね。」

「なんで名前にドが多いんだ？」

「この国で貴族生まれの男には“ドロージャ”の国名にあやかっつて“ド”の音、またはそれに似た音を名前につけることが多い。女には“ラルルレロ”の音をつける。決まりではなく文化だ」

ほお、面白い。つまりは、日本で言うところとかく子の貴族ババージョんみたいなものなんだな。

「ん？ってことは名前にドがつくレオナードも貴族出身？」

レオナードも国王に選ばれる前は普通の人間だったわけで（だと願いたい）、普通の生活をしていたはずだ。農民出身とかだったら似合わないすぎて笑えるけど。

「……一応は。それより試合を見なくていいのか？」

あ、話逸らした。

「試合見ながら話してるから問題ない」

っていつかつまんない。あたしも参加したかったな。鉄パイプさえあればなんとかイケそう。

レオナードの試合は本当に最後の最後らしく、暇だったのでレオナードと小声で話ばかりしていた。一応政治の話だったけどわかりやすかったので暇つぶしになるし、観覧席のほとんどが歓声と拍手を送っていたので全く声は響かないし。

一方クロードと言うセクハラ王子は順調に勝ち進んでいるようだった。まあ、軍のナンバー2なら勝たなきゃおかしいんだろうけど嫌だ。

そんなこんなで、結局最後のトーナメント決勝戦は左将軍対右将軍の将軍対決になる。10分間の戦いの末、ふらついた一瞬を逃さなかった左将軍が勝った。さすが決勝戦だけあって一番見ごたえがあったしい勝負だった。

大歓声の中、カトレア財務長官が今までで一番大きな声を出す。

「勝者、ドラッグ・ディッチ。次の試合は前回の優勝者であるレオナード……様と対決していただきます」

うん、一応王様に呼び捨ては無理だね。

次が試合なのに当の本人は悠長に座っていたから何してるんだと思えば、彼は名前を呼ばれた途端立ち上がって下に飛び降りた。いやいや、猫じゃあるまいし危ねえから普通に行けや！

国王の登場に会場が沸いた。彼の剣の腕前は例年の剣技大会を見た者なら誰でも知っている。レオナードのことを“剣豪”と讃えの始めたのは僅か24の時に彼が剣技大会で優勝してからであった。それ以来一度も優勝者の座を他に与えたことはなく、王座に就いた今でも大会に出場している。

人々は持ち場についた国王の凜々しさにため息を吐き、次に観覧席に座っている王妃を見て頬を染めた。聞く先々で2人の不仲の噂を耳にするが、見目が良いのでお似合いだと思っっている人は意外と多い。最も、今日も王妃の顔は仮面によつて隠されていたためほとんどの者は素顔を知らないが、この世のものにあらずと讃えられる美しさを疑う者はいなかった。

「試合、始め」

誰もが口を閉ざし、試合に魅入つたためシンと静かになる。金属のぶつかる音と人々の息を飲む気配で包まれた会場は、今までの熱気を感じさせないほど空気が張り詰められていた。国王の相手のディッチ左将軍も実力は確かだが、剣に詳しくない素人でも両者の力の違いは明らかだ。

ひと際甲高い金属音が鳴り、左将軍の手から剣が無くなったところ

で勝負は終わった。

「勝者、レオナード陛下」

割れんばかりの歓声と悲鳴に似た黄色い声が沸いた。

勝ったというのにレオナードは嬉しそうな表情はせず、厳しい顔のまま愛用の剣を鞘に戻し踵を返したそのとき。

バシユツ！

と重たい音が響いてヴィラの細い身体を何かが貫いた。

先ほどの歓声よりもずっと大きな悲鳴が会場に響き渡り、シルヴィオとレオナードは驚きと恐怖のあまり足が動かない。

“矢”を射られたヴィラに、誰もが死を予想した。

が、予想に反してヴィラは顔色一つ変えることなく自らの胸を貫いた矢を見るように俯き、戸惑うことなくそれを引き抜いた。手の中に収まった血だらけの矢は、ボツと火がついて白く細い手の中で燃え尽きる。矢が刺さっていたはずの胸からは全く血が流れていない。そして紅の引かれた口は美しい弧を描いた。

「どうやら面白い余興が出来たようだ」

会場には音一つなく、ヴィラの艶のある声だけが響く。アルフレツトが捕えたヴィラに矢を放った犯人は、後ろで手を掴まれたまま中央に引きずり出された。銀色の鎧を着た普通の兵士の格好。しかし手には黒地に金の刺繍が施されたブレスレットを身につけている。

「さて、どうやって殺そうか。・・・そうだ、優勝祝いにレオナ

ードに決めさせよう。切り刻むか、穴を開けるか、焼くか、煮るか、埋めるか」

レオナードは無表情で観覧席に居るヴィラを見上げ、抑揚のない低い声で言った。

「切る」

一瞬だった。レオナードの剣が弧を描き、取り押さえていた犯人の身体が2つに分裂する。まともに返り血を浴びたアルフレットは肩を竦めて顔についた血を手で拭う。

闘技場を去るヴィラとレオナード。王妃の魔術と残虐さを目の当たりにした観衆は真つ青な顔で見送った。この国で国王と王妃の言葉は絶対であり、彼らの一言で自分も床に血を流して横たわる死体と同じ運命を辿る可能性があるのだ。

お祭り騒ぎの剣技大会は、恐怖と一人の異教徒の死をもって閉会した。

あーびっくりした。

レオナードの試合が終わったと思ったら、どこからか矢が飛んでき

て避ける間もなく心臓のご真ん中にズドン。すぐに傷塞いだけど皆の視線が痛かったので、犯人を始末するとレオナードと2人でささと部屋に戻ってきた。けれど、戻ってきてからレオナードは背を向けて頭を抱えたままこちらを見てくれない。

「レオナード？」

「・・・心臓が止まるかと思った」

絞り出すような小さな声。仮面を外して広い背中に抱きつけば、大きな身体が少しだけ震えているのがわかった。

心配してくれたの？

あれくらいで動揺するなよと思ったけど、誰かが自分の生を望んでくれることが嬉しいとも思った。あたしは生きてていいんだって、そう言ってくれてる気がした。

「もう助からないかと・・・死んだかと思った。矢が刺さって、血が・・・」

あたしはレオナードを無理やりひっくり返してこちらを向かせた。青い瞳があたしを見て大きく揺れる。子どもに言い聞かせるように、宥めるように言った。

「あたしは魔女だ」

レオナードが視線を逸らそうとしたから、あたしは顔を掴んで近づけた。

「あたし死なないから・・・」

だから悲しまないでよ、あたしは生きてるじゃんか。そんなに辛そうな顔してたら、あたしまで胸が痛くなるじゃんか。

「ここにいてっつて約束するから」

もう逃げないから。絶対に死なないから。レオナードは、いつもみたいに偉そうな顔をしてくれればそれでいい。それ以上辛そうにしないで。あたしはずっとずっとここにいてるから。

「・・・当たり前だ」

今度逃げたら殺してやるって、物騒なことをレオナードは呟いた。なんて自分勝手なやつだと思ったけど、ちょっと微笑んでくれたのでよしとしよう。

顔中に降ってくるキスが温かくてくすぐったい。あたしを見つめる瞳が熱っぽくて恥ずかしい。だけど・・・嬉しい。

レオナードは矢に射られたため空いたドレスの穴を掴み、そのまま真つ二つに引き裂いた。上半身が露わになったので、肘でレオナードの頭を小突くと片手で胸を隠した。しかしその手はレオナードの手によって除けられて、先ほど矢が刺さった場所を何度も愛撫される。

部屋は明るいし上半身は裸だし、恥ずかしいけどレオナードの好きにさせてあげた。執拗に繰り返されるキスで胸の中心に散る赤い華。あたしはレオナードの頭を抱えるように抱きしめ、彼の柔らかくて綺麗な茶色の髪を撫でる。

その行為に満足したのか、レオナードは胸から唇を離すと顔を上げた。視線と息がぶつかる。顔が近づく。けど。



コンコンコン

ノックの音にレオナードは舌打ちをしてあたしから離れ、上半身裸状態のあたしは慌てて隣の自室に駆け込んだ。隣室から聞こえる声の主はルードリーフのようだ。アルフレットだったらノックなしに入ってくるからまじでセーフ！

男は唇を噛んでワイングラスをテーブルに置いた。月明かりに照らされてキラキラと髪が輝く。

「さすがは魔女。矢を射られても死ぬとは、もはや人間ではないな」

「卿……」

隣に居る黒衣の美しい女は憂いを帯びた声で男に寄り添った。男は女の美しい黒髪を撫でると、さきほどよりも声を高くして機嫌よく言う。

「王妃さえ殺せば、キリエラ、お前を王妃の座につけられるんだ。そうしたらきつと陛下もお前に夢中になるだろう。美しいキリエラ、お前は王妃になって王を傀儡かいらいにするのだ」

「王妃を殺すのは・・・教義ではなく陛下を傀儡にするためなので  
すね」

女は黒目を小さくして驚く仕草をし、厳しい顔つきになった。しかし男は満足げに笑う。

「王を言いなりにすること、すなわち世界を我が物にすること。陳腐な世界征服も実現すればどれだけ素晴らしいことだろうか。しかも王妃は陛下とたいそう仲が悪いと聞く。亡き者にしてさしあげれば陛下もきつとお喜びになるだろう。そして・・・」

男はそつと腕を伸ばし、女の顎に手をかけた。

「お前は魔女。キリエラ、お前が次の王妃になるのだから」

女は瞳を大きく揺らした後、この上なく妖艶な笑みを見せる。血色のよい唇が薄暗い部屋の中でやけに鮮やかだった。

## 第十四話 溝（1）

彼女はかなり変わった女だと思う。

繰り返す愛情表現も、ヴィラはきつと理由を分かっている。普通の女なら自分をどう思っているか問うだろう。しかしヴィラに対する俺の気持ちも抱えている想いも何も知らないはずなのに、それを彼女は考えようもしないのだから。きつと疑問には思っているのだろうが、それを悩まない彼女は本当にタフでマイペースな女だ。

揺るがない芯の強さを持ったヴィラ。最初は面倒だと思ったがいつ見ても飽きない彼女を単純に“欲しい”と思った。      だが

ら無理やり手に入れたつもりだったが、予想外なことにヴィラは簡単に諦め俺を許した。しかし彼女が許したのは王という立場ではなく、あくまでもレオナード個人であって王ではない。

人前と2人きりの時の態度が違うのはそれ故だ。人前では王と王妃として接する彼女は、やはりどんな形であれ王妃という枠から抜け切れないのだろう。たとえそれが不本意であつたとしても。

思い知ればいいんだ。俺がどんな想いなのか、何を考えているのか、何故欲しているのか。これから生きる途方もなく長い年月を重ねてきつとヴィラに教え込んでやろう。そして身体だけでなく心も自分のものにしようと思つたのは、彼女が矢に射られた剣技大会のとき。

ヴィラはなぜ俺が心臓を貫かれるほどの痛みを襲われたか、全く分かっているようだった。ただいつもと違う俺を不安そうに見上げ

て、ここに居ることを約束して。

今はそれで十分かもしれない。けれどヴィラ、お前は籠の中で思い知るべきなんだ。俺がどんな想いでお前を見ているのか。

仕立て屋に頼んで出来上がった私服を侍女たちと一緒に見て楽しむ。なんだか友達同士で買い物に来たような気分だ。

「まあ、こちらのお色素敵ですわね」

「結婚祝いにオーティス王国からいただいたブローチとこの服はきつと合うと思いますよ」

昨日の剣技大会で怖がってもう近づかなくなるかな、と思ったけどそれは正反対だったらしい。侍女たちはいつも以上に顔を輝かせて、あたしを見る目に熱が籠っていた。やっぱりこの国、ちょっとおかしくないか？

「まあ、綺麗な青。陛下の瞳の色と同じですわね」

「こちらも散りばめられた宝石がとてもオシャレだわ」

レクサスさんの作ってくれた服はどれもすごくいい。街の女性が着るような簡単な服ではなかったけど、ドレスなのにどれも着やすく動きやすそうでも軽い。人前に出るのが恥ずかしくなく、かつ普段から着られるデザインはなんだかレクサスさんらしくて少し笑えた。

「さっそく今日の服はこの中から選ぼうか」

「じゃあわたくしはこれがいいと思います」

「いや、これの方がいいわよ」

侍女たちは我先にと気に入った服をあたしに差し出す。結局どれを着たらいいかわからなくなったところに、誰かが部屋をノックして入って来た。レオナードだ。さっき朝食を終えたばかりなのに、戻ってくるなんて珍しい。

「話がある、来い」

どこまでも偉そうなレオナードはいつものレオナードだ。あたしは渡された服を置いてシルヴィオに留守番を言いつけると、簡単なワンピース姿のままレオナードについて行った。広い廊下は2人きりなのに終始無言。向かっている方向からいつて執務室かな？と思っていたら、レオナードがこちらを見て腰に腕を回した。急に身体が密着してびっくりする。

「なんだよ。こんなところで気安く触んじゃねえ」

誰かに見られたらどうすんだよ！とレオナードを睨めば、彼は不敵

に笑ってあたしの耳に囁いた。

「見られて何が困る？夫婦だというのに」

そして軽く触れるだけのキスをされた。廊下で、誰かに見られるかもしれないのに。こんの野郎！

拳を突き出して殴ろうとしたけれど、その手は突然現れたアルフレットに掴まれた。

「殴らせるー！」

「魔女さん、どうどう。キスくらい許してやってくださいよー。こいつ禁欲生活送ってるんですから」

禁欲！？反対だが！毎日毎日毎日！！

ギギギギと力比べしてる押し合い状態のあたしとアルフレット。全力を出してもアルフレットはなかなか動かない。悔しい。

「アルフレットと力が同等など・・・笑えないほどバカ力だな」

「うるせえよレオナード！」

取っ組み合い状態をやめたあたしにレオナードが嫌みを飛ばす。アルフレットは嵐のように去って行った。もう殴ろうとはしなかったけど、プリプリと怒りながらやっぱり執務室に到着。中には誰もいない。

「で、話ってなんだよ」

あたしは勧められたイスに座ってレオナードを睨む。一方、レオナ

「ドもあたしと反対側のイスに座って真面目な表情であたしを見据えた。」

「政治の話だ。難しいと思うなら無理に結論を出さなくていい」

「うん」

「この国には当然だが軍隊がある。一番大きな軍は近衛軍で規模は時期によって違うが約50万程度、これは世界的に類を見ない大規模な軍で国王の意のままに動かすことができるこの国の要となる軍だ。次に州・領ごとに軍が置かれている。州は国に属する警備軍隊だが、その下に位置するのは貴族が納める領ごとに置かれた軍・・・これは貴族の私軍になる。州軍は州の規模にもよるが大体3万から10万まで、私軍は規則で4万までと決められている。ここまではわかるな？」

「たぶんわかった（かもしれない）ので頷く。」

「何故こんな話をお前にするかというと、王妃にも軍があるからだ。王妃軍といって規模は約5万、近衛軍と比べるとかなりの少数軍隊だが第一王妃の独断で動かすことができる。また国王の一存で動かすことのできない、この国唯一の軍隊だ。お前が王妃になってから一か月近く経つが王妃軍に対する令が敷かれていないため、今は無駄な時間を持て余している。よって、もしヴィラが納得するならば王妃軍を有効活用するために、王妃軍に対する指揮権を他に委託する」

「つまり、あたしにしか動かせない軍隊がもつたいないからお好きにどうぞって言えばいいわけね」

「そうだ」

5万の軍隊か。何かと戦おうと思ったたら少ないけど、何かをするには意外と便利かもしれない。そうだ、百を探し出せるかも。あたしはテーブルに身を乗り出す。

「あのさ、あたし探してる子がいるんだけど、その子を探すためにその軍を動かすことはできねえ？」

「もちろんできるが・・・探してる子？」

レオナードは眉間にしわを寄せて聞き返す。そう言えばレオナードにはまだ百のこと言ってなかったけ。探すつもりならいつかは話さなきゃいけないし、いい機会だから全部話してしまおう。

「あたしがこつちの世界に流されたとき、もう一人一緒に居た友達がいたんだ。百って言って、すぐドジな子んだけどまだ探せてなくって」

「お前に友達・・・？」

「なんだよ、何か変かよ」

「いや、ヴィラは誰かに干渉されるのを嫌うから親しい人はいないと思っていた」

う、まあまあ当たってる。確かに向こうの世界でも友達は何しかいなかったし、欲しいとも思わなかったけどさ。

「・・・まあ、レオナードの言うとおり親しいって言うか、大切な



人は百以外いなかったよ。家族と仲悪かったし、学校にもほとんど行ってなかったし。性格は正反对だったけど、とても大切な子なんだ。

あたし結局ここから出ることはできないけどさ、軍を使ったら百を探すことも可能だろう？」

レオナードは厳しい顔をしてあたしの話を聞いていた。そしてゆっくりと頷く。

「お前さえ望めば王妃軍を動かすことができる。俺は王妃軍には一切干渉できないからな。だが、その女を見つけ次第、俺はその女を殺す」

は？

あまりにもさらっと言われて、あたしは一瞬冗談かと思った。けれどレオナードの厳しい表情は、冗談を言っているようにはとても見えない。

「なんで・・・」

声が掠れて上手く言えなかった。何故あの子を殺す必要がある？レオナードになんの危害がある？

「お前の心の中を巣食う存在はすべて消す。もしお前がその女を忘れられるならば手出しはしない・・・が、できないだろう？」

できない。できないさ。あたしはあの子の無事をなにより願っている。この世界の人々全ての命よりも、百の命の方が何倍も大切なものだから。

「そんな存在は許さない。お前は俺のものだ」

怖い。

今までのピリピリとしたオーラを纏ったレオナードの怖さじゃない。へびに睨まれたカエルとでも言おうか、圧倒的絶対的に強い相手に対する畏怖で身体の身動きができない状態の怖さ。今のレオナードの怖さはまさにそれだった。レオナードが言うのだから、きっと彼は実行するだろう。百を殺すだろう。彼の本気から百を守る術をあたしは持たない。世界の覇者、50万以上の軍を持つ彼を誰が止められるだろうか。

「・・・あんまりだ」

あたしは足早に部屋を出た。今はこれ以上、レオナードの顔を見たくはなかった。

夜中、人の気配がして目を覚ました。誰かは見なくても分かる。レオナードだ。こんなときくらいそっとしておいて欲しいけど、そんなことレオナードに言っても聞いてくれないだろう。覆いかぶさる人影を睨む。

「起きたか」

「レオナードの所為でね」

「それは悪かったな」

心にもないことを。毎晩、どんなに遅くてもあたしが寝ていても起こすくせに。

昼間にあんなことがあったから夕食時はピリピリしていた。にも関わらず、2人きりのときの彼はものすごく優しく甘いままだ。息をする間もなく降ってくるキスに、あたしはぎゅっときつく目を閉じた。

あたしはどうすれば百を守るんだろうか。きっとレオナードに泣いて懇願しても、考えを改めてはくれないと思う。レオナードの性格はなんとなくわかってきたけど、あたしには理解できないところがまだあるから。

あたしの所為で百を危険にさらしてはダメだ。もしあの子もこの世界に居るのならば、レオナードよりも先に接触して安全な元の世界に返そう。百は嫌がるかもしれないけど、それしか方法はない。ここに居るって約束するから、逃げないって誓うから、あたしから百まで奪わないで。

「レオナードっ」

「ヴィラ・・・」

ふやけてしまいそうなほど甘い声に騙されてしまいそうになる。だからあたしは自分を叱咤して、溺れそうになる自分を引きとめた。しかし、そんなあたしの心をレオナードは見透かしたらしい。

「構えるな。全て忘れる」

そんなことができたならどんなに楽か。レオナードの優しさに、身も心も全て捧げられたなら王妃として必ず幸せになれるだろう。

けど、あたしには忘れられない、あの辛さと悔しさともどかしさを。あたし達が受けたあの苦しみを。

## 第十五話 溝(2)

幸せだった家庭が目に見えておかしくなったのはあたしが5歳のときからだ。原因はあたしが両親に“似てない”から。お父さんはお母さんが浮気していたんじゃないかっていつも怒ってて、お母さんは全く似なかったあたしを責めた。あたしは子供心にものすごく悩んで、子供なりにお父さんの口調をマネしてみたりお母さんの髪形を試してみたり、まあ今思えばバカらしいけど結構がんばっていた。

しかしそれでも両親のあたしに対する態度は変わらなかった。それどころかどんどん酷くなってきて、あたしの存在を拒否されるようになったのは小学校に上がったから。居場所を完全に失ったあたしは夜の街に出るしかなかった。繰り返す犯罪、喧嘩、世の中の裏はすべてやり倒した気がする。毎日が荒んでいて、それでも家にいるよりはずっとずっとマシだった。だけど、補導されるたびに家に送り返されて、家出しても子供じゃ生きていくことすらできなくて。結局あたしは、あの家に縛られざるを得なかった。

ものすごく悔しかった。まともに一人じゃ生きることできない自分が。外では家族の顔をして、中ではあたしを拒絶したあの人たちが憎かった。

学校にも行かず、フラフラと外で暴れては家に連れ戻される。そんな日々が続いていた時、あたしはあの子と出会った。きっかけは中学が一緒だったこと。たまたま困っているあの子を助けたら、何故

かものがく懐かれてひよこのようにあたしの後ろを付いてくるようになった。

『あのね、恵理ちゃんはものすごくかっこいいの』

キラキラした笑顔が正直苦手だった。ドジでふわふわしててもものすごく引つ込み思案な子だけれど、誰よりも純粹であたしが全く持っていない清い心の持ち主だったから。不良をカッコいいだなんて浅はかな人の考えだ。偶に居る、悪いことがカッコいいことだと思ってる勘違い野郎が。あたしたちはかっこよさを求めて不良になったわけじゃない。不良の世界は居場所がなくて世の中の理不尽さに心を折って彷徨ってる奴らの吹き溜まりなんだ。

あたしのことをかっこいいと言う百。その意味を履き違えていることに気づいたのは、身体に傷を作っていることを知ったとき。百の小さな身体に残っている傷は、あたしの抱えている傷と全く同じだった。あたしは当然怒った。なんで今まで黙ってたんだ・・・って。

『どうして何も言わねえんだよ！ずっと我慢して、バカだろ！？』

『恵理ちゃん、あたしね、“嫌だ”って言えないんだ』

それがお父さんたちは気に食わないみたい、ってあの子は悲しそうに笑った。百が嫌だって言えないのは、百が優しくすぎるからだ。学校にあまり行かないのはあたしだけじゃなくて百も同じ。百は極端に人に気を使い過ぎるため、人付き合いがものすごく苦手らしい。その消極的な性格の所為か家に引きこもりがちだったようだ。

性格が正反対のあたしたち。でもあたしは百の中に、家族に拒絶され戸惑う幼いころのあたしを見た。無意識にあの子とあたしを重ね

て、似たような境遇のあたしたちが仲良くなるのは必然だ。人と接することが苦手なあの子のために、学校に行く日は必ずあたしも付いて行った。変な組み合わせのあたし達を周りはものすごく不思議な目で見てたけど、存外気が合う性質だったらしく、百が拳動不審になる度に代わりにあたしが話し、百が嫌がらせを受ける度にいじめっ子たちをあたしが追いかけてまわした。

半分あたしが百の世話をしているような感じだったけど、それに救われていたのは百ではなくあたしだ。生まれて初めて誰かに必要とされて、あたしはこの上なくあの子を大切にした。

依存、に近い感情だったかもしれない。それくらいあたしには百の存在が必要で、あの子もあたしを受け入れてくれたからなんとか自分を保つことができた。

『あのね、あたし高校を卒業したら、思いきって独り暮らししようと思うんだ』

『あたしもあの家早く出たいや』

そしてあたしたちは、何よりも“自由”を渴望していた。家の苦しみから抜け出せるその自由を。そして自分の力で生きていける強さを。百は夢見がちなようにトリマーだったりお花屋さんだったり、将来の夢を話すたび内容がコロコロ変わっててそれもまた面白かった。

『恵理ちゃんみたいに、自分をしっかり主張できる強い女の人になりたいな』

『あははっ。あたしはお前みたいに可愛い女の子になりたい』

パツと花が咲くように笑うあの子。あの笑顔を見ることができなくなったのは、両親とのケンカの衝動で家出したあの日。百も一緒に連れ出して、気分転換にでもなればと自然の多い場所を目指していた。

だけどいつの前にかまったく違う場所に居て、異世界に流されたあたしは百とはぐれてしまう。

今どこにいるかわからない、行方不明になってしまった百。心の支えを失ってしまったあたしはどうすればいいんだろうか。

月は雲に隠されてしまったらしく、目を開けても周りがよく見えなかった。風ひとつない静かな夜。小さなヴィラのうめき声に隣を見れば、苦しそうに顔を歪めている彼女の姿があった。長い睫毛に縁取られたその瞳は閉ざされたままで、まだ眠っているのだとわかる。

「ヴィラ、ヴィラ」

名を呼んで軽く揺すれば、ヴィラはゆっくりと目を開いた。そして同時に虚ろな瞳から一滴の涙がこぼれた。焦点の定まらない視線が俺の姿を捉える。

「……レオナード？」



「すまない。うなされていたようだから起こしたが・・・」

そつと頬に指を滑らせたがもともと低体温のヴィラの身体は酷く冷たい。涙の痕を慰めるように舌を這わせて拭き取ると、ヴィラはくすぐったそうに目を閉じて身体を振った。

彼女はまだ脳が覚醒しきれていないのか、眠たそうに声を出す。

「・・・嫌だよレオナード。あたしはここにいるから、奪わないで」

何を、とは訊かなかった。無言で見つめていると彼女は再び口を開いた。

「あの子がいなくなると、あたしどう生きていけばいいのかわからなくなる」

それはこちらのセリフだ。

ヴィラの心を蝕む友人の存在。その女がいる限り、ヴィラは過去に囚われて抜け出せないだろう。いつまで経っても俺を見てはくれなйдらう。おかしい話だが、囚われることをなによりも恐れるはずの彼女は、自らその友人に囚われることを望んでいる。どのような育てられ方をしたのか、そうしなければ保てない酷く不安定な精神。

「なぜ俺ではダメなんだ」

何故俺が彼女の心の支えにはなれないのか。

ヴィラを引き寄せると胸の中にきつく閉じ込める。抵抗することもなく彼女は擦り寄って目を細めた。

「あの子は、あたしだから」

その友人がいる限り、ヴィラの心は手に入らない。

食卓を囲んだ2人の空気はいつも以上にピリピリとしていた。ヴィラは食欲がないのか全く口をつけようとしない。以前彼女の態度が豹変したときと同じ状態だ。死んだように眠り、食事をせず、覇気がない。

「なぜ食べないんだ」

レオナードの方は不機嫌さを隠そうともせず、眉間にしわを寄せてヴィラを睨んだ。棘を含んだ物言いに、一瞬ヴィラは身体を竦ませる。返事を返さない彼女にシルヴィオとアルフレットは心配そうな視線を送った。せっかく元の状態に戻ったというのにこれではまた同じことの繰り返し。せっかく戻った体系も、またすぐに痩せてしまふのだろう。

「食べる」

「いらない」

「食べるんだ」

「いらないうたら」

否定の言葉にレオナードの苛々が募る。空気がさらに悪くなってきて、居た堪れなくなったシルヴィオが口を開いた。

「ヴィラ様、陛下の言うとおりでです。少しでもいいので召し上げられてください」

「無理、身体が受け付けられないんだ」

首を何度も横に振って嫌がるヴィラに、シルヴィオは助けを求めてアルフレットを見た。しかしアルフレットとてどうすればいいのかわからない。

「魔女さん、飲み物だけでも・・・」

「朝飲んだ」

「でも今は夕食です」

昼間だって一滴の水も飲んでいない。このままでは餓死してしまうのではないか。3人の焦りは高まる。

「食べる」

「嫌だ」

「何故だ」

「食べたくない」

「死にたいのか？」

皮肉を交えて言ったレオナードの言葉に、ヴィラは顔を上げて彼を睨む。レオナードは頭にカツと血が上らせてテーブルを乱暴に叩いた。

ガシャン！！！！

と耳をつんざぐ様な大きな音が響いて、ヴィラはビクリと身体を震わせる。

「勝手にしろ！」

怒らせた。

そう気づいた時にはもうレオナードの姿はなく、ただ茫然と彼が去っていった方を見つめるシルヴィオとアルフレットだけが残る。

「あいつが怒ってんの初めて見た・・・」

ぼつりと呟いたのはアルフレット。首を傾げるヴィラに「ああ」と付け加える。

「俺と陛下は同じ田舎貴族の出身で幼馴染みでさ、俺のが年上だからあいつのおしめを俺が変えたこともあるんすよ。常に眉間にしわを寄せてるか無表情かで、まあ、昔っから子供げのないヤツで・・・。なんでも要領よくこなす所為もあるんでしょうが、ああやって怒ったりするような人ではなかったんですけどね」

それだけ魔女さんが心配なんすよ、とアルフレットは力強く頷いた。

一方ビビっているらしいシルヴィオは顔を真っ青にして棒立ちのまま。  
ヴィラはアルフレットの言葉に耳を傾けながら窓の外をずっと眺めていた。

苛立ちを抑えきれぬまま政務を片づけていると、ルードリーフが執務室に入った。さっそく報告を促す。

「証拠は不十分ですが、祝福の杯の首謀者はほぼカトレア財務長官で間違いないでしょう。ニーナ・カトレアと事件前に接触していたことがわかりました。それから、“デベルジの天使”をベルガラ王国の商人から買っていたことも判明しました。動機はいまひとつわかりませんが、考えられるのはやはりゾロア教かと」

「バカな男だ」

こそこそ行動しようといずれ解ることなのに。失脚することが目に見えていて、それでも王に逆らうなど愚かな。

「現在オルドリツチ宰相殿が必証拠集めに躍起になっています。なにがなんでも彼を起訴したいようですね」

「その必要はない。すぐに処罰しろ」

は？とルードリーフは口を開けたまま固まった。俺の言うこと聞かえなかったわけではないだろう。

「すぐに処罰しろ。勅令を出す」

「ま、待つてください。あまりにも愚行です。証拠も疎かに一政治家のために勅令を出すなど……。法の秩序を乱せばいたずらに国民を不安にさらすだけです」

「勅令に文句を言うな。それこそ法の秩序を乱す行為ではないのか？」

ルードリーフは真つ赤になると、頭を下げて執務室を出て行った。ヴィラへの脅威はすべて排除する。それは友人も異教徒も同じこと。しかし、本当にそれが正しいのかわからなくなってきた。

感情も、なにかもがぐちゃぐちゃだ。

ヴィラを捕えて自分の手元に置いた。逃げないことを約束させてそれで十分だと思ったのに、心まで欲した俺はどこまでも貪欲で醜い。彼女の心の中に住み着く友人さえ許容できないほど、俺は心の狭い人間だっただろうか。

嫉妬だなんて可愛いものではない。許せない、彼女の中にあるもの全てが。例え黒い感情であろうと憎しみであろうと、ヴィラの心が全て俺であればそれでいいと思っていたのに。例えそれでヴィラが壊れようと、自分のものになるならばそれでいいと思っていた。

全て欲しい。だからヴィラの友人を殺そうと思った。けれどそれはまるで気に入った玩具を無理やり奪い取る子ども。力任せに欲望

を満たそうとしても、結局手に入るのはボロボロになったヴィラなのに。

それでは駄目なんだ。

怒ったり叫んだり暴れたり、感情が忙しく活発な彼女を見るのが楽しかった。抱き締めたとき、照れたように笑う彼女が可愛いと思っ  
た。眠るとき、擦り寄ってくる彼女がこの上なく愛しかった。  
そのままの彼女が欲しい。今までのヴィラでいてほしい。

ヴィラを怯えさせた俺はバカだ。

彼女との間にできてしまった深い深い溝。自分で作った溝なのに、  
今はそれがとても腹立たしくて苦しかった。

## 第十六話 決意

あたしは森の奥深く、木の板でできたヘンテコな家の前に居た。

「また来たのかえ」

黒ずくめの師匠が籠いっぱいの薬草を抱えて帰って来た。ものすごく呆れたような顔であたしを見る。

「師匠・・・百の居場所、占って」

「何度やっても同じじゃ。わらわには分からぬ」

とりあえず中に入りなさいと、師匠に勧めて家の中に足を踏み入れた。変な形の時計、動物の剥製、緑色の煙を噴き出すロウソク、相変わらずごちゃごちゃした部屋に懐かしさを覚えて、あたしはお気に入りだった木の椅子に座った。

レオナードには話していないことがたくさんある。これもそのひとつだった。

魂を飛ばす魔術。どこでも好きな場所に移動できるが、それは精神体のみで本物の身体は眠りこけている。城のみんなはあたしが寝ているようにしか見えないだろう。ルードリーフの講義の時間は、こっぴどく魂を飛ばして百を探しまわっていた。師匠の家に来た回数ももう数えきれないほどだ。まああのレオナードのことだから、薄々勘づいてるかもしれないけど。



師匠はあずき色の変な顔が書いてあるマグカップをあたしに差し出し、肘をついて隣の椅子に座る。中身はお手製のハーブティーで、一口飲むだけで身体が温まる不思議なお茶。寒い季節はこれを好んで飲んでいたのを師匠も覚えていてくれたんだろう。目の前の師匠は、美しい赤い瞳であたしを覗き込んだ。

「で、今度は何があったのかえ？」

鋭い師匠はもう何もかもお見通し。隠す気は全くないのですぐに話し始めた。

「・・・レオナード、怒らせちゃった」

「あの男を怒らせるなぞ・・・何をしたんじゃ」

「あたしの所為じゃねえよ。だってレオナードが、百を殺すって言うから」

師匠はわからない、というような顔をする。

「殺さなくてはならない原因がその女にはあるのかえ？」

「ない・・・と思う。あたしもなんでそんなこと言いだしたのか、さっぱりわかんねえ」

レオナードが全然わかんない。わかんなくてもいいんだけど、百を危険にさらすことだけは絶対に避けたい。だからあたしは彼よりも先に百を見つけた。

あたしが考え込んでいる間に、師匠は長い爪でテーブルに文字を書

き始めた。

「お前は特殊な性格だから。内には優しく、外には関心がない」

「どづいいう意味？」

「モモとかいうヴィラの友人はお前の内側の人間じゃな。例えるならば母性のような絶対的な愛、身を粉にして守ろうとする存在。しかし外側にはまるで無関心、どうなるかと他人事、殺すことも厭わぬ残虐性はそこから来ておるのじゃろ」

「言われてみればわかんないこともないけど、それとどう関係あるだよ」

師匠は一息つくと、呆れたような困ったような微妙な表情で続けた。

「あの男・・・新しい王も昔から変わった性格で。全く他人に心を砕くことをしない。そんな奴が怒ったということは・・・そういうことじゃ」

そういうことってどういうことだよ！

曖昧に濁す師匠は相変わらず不思議な人だ。いつもそうなんだけど、彼女ははっきりと教えてくれない嫌いがある。

「ふむ、あの男はのう、お前にとって自分がどの位置にいるのかわからなくて焦っておるのよのう」

「どの位置って？」

「内側か、外側か、あるいはその間か。内側にいる友人に妬いたの

じやろつ。ほほほ、可愛いではないか」

「妬くつてあのレオナードが？ないないないない、あり得ない」

「そうかえ？あの男も所詮はただの人間。今までその才故に手に入らぬものなどなかっただろつ。だからこそ手に入らぬものをどうしてよいかわからないのじゃ」

ますます分からない。レオナードはあたしを手に入れたじゃないか。約束もしたし、あたしだつてもう逃げるつもりはない。

師匠はやさしい目であたしを見た。赤い瞳は燦ぶるように燃える炎に似た暖かさがある。

「せいぜい悩めばよい。ヴィラはもうそろそろ、人が持つ当たり前の感情を覚えるべきじゃ」

「・・・そんなのわかんないよ」

あたしには百がいる。それで十分だろ？

城に来て初めて失敗したかもしれない。魂を飛ばした状態のまま迷子になってしまった。魂が迷子になったんじゃないかと本体の方が迷子だ。

ルードリーフの講義が終わる時間に戻って来たんだけど、なんと身体がどこにもない。本体の安全が確保できるからこそ魂を飛ばせるので、もちろん術を使うタイミングや時間は計算して行っている。ルードリーフの講義には必ず時間が決められていたし、そばにシルヴィオも控えているので安心して飛ばせていた。

のに。

どこだよ身体あ~~~~!!

部屋にはルードリーフもいないし、隣のレオナードの部屋にもない。特に不審な人物が出入りした形跡もないので、どこかにあるんだろうと城中をウロウロして探しまわってみる。

そしていつの間にか6時間以上経ち、どっぴり日が暮れてしまったころ。あたしはついに本体を発見した。……レオナードの執務室のソファに。

ヤダヤダヤダヤダ、戻りたくない！ただでさえ昨日怒らせちゃったレオナード。さすがに愛想を尽かされてしまったのか、昨日の晩は会いに来てくれなかった。朝食も一緒に取らなかった。

つまり、あれから会うのは初めてで……ものごつつ嫌なんだけど！でもなんで身体がここにあるんだろう。レオナードは黙々と政務に励んでるし。

でもそろそろ戻らないと怪しまれる。いや、もう十分怪しまれているんだらうけど、いつまで経っても戻れないのはちょっと困る。あたしは腹に力を込めて気合いを入れると、元の身体に魂を戻した。

ソファで横になつてゐる感覚が戻つてきて、あたしはゆっくりと目だけ開けてみた。できればこのまま、レオナードに見つからずに部屋に戻りたい。

そろりそろりと起き上ろうとしたが、ガタンとイスから立ち上がる音がして慌てて横になった。レオナードの近づいてくる気配にダラダラと冷や汗が流れる。

「ヴェイラ、やっと戻つたか」

「う………」

バレてるし……。

恐る恐る目を開けると、青い瞳があたしを見下ろしていた。もう怒つてゐる様子はない……のかな？

「おかえり」

あ、いつもの優しいレオナードだ。もう二度と言つてくれないと思つていた言葉をくれて、レオナードはあたしの身体を起こすと彼の膝の上に乗せた。

たった一日会つていないだけなのに、ものすごく久しぶりな気がする。触れた唇がものすごく優しくて柔らかい。

「お腹は空いてないか？」

「う……うん、ちよつとだけ」

レオナードは手を伸ばすとすぐそこにある水差しからコップに液体を注いだ。水ではないらしい黄緑色の液体をあたしに手渡す。

「侍女たちがお前のために用意した特別な煎じ茶だ。栄養があるから飲みなさい」

ちよつと口をつけるとほのかな苦みと甘さが口の中に広がった。味は日本の緑茶に似てるけど、いろんな薬草を煮詰めて作ったらしい青汁に近い感覚だ。

「種湯しゅゆと言って子宝に恵まれるらしく、よく子どもを望む夫婦が飲むお茶だ」

ブフオツ

と盛大にレオナードの顔に嘔き出してしまい、あたしは慌ててフキーンで彼の顔を拭った。

「うゝうゝうゝうゝうゝうゝめんー!」

「……」

レオナードの無言が逆に怖い。せつかく怒りを鎮めてくれたのかなと思ったのに、また怒らせてしまったかもしれない。拭いても拭いてもレオナードはじいっとなあしを見つめたまま。あたしはどうすればいいかわからずにあわあわしながら謝り倒す。

「ごめん、ほんとごめん嘔き出しちゃって……そうだ、服……服を……」

濡れた代わりの服を探そうと立ち上がりかけたが、腰にしつかりと回された腕は力を緩めてくれない。

「気にしないでいい。大して濡れていない」

「そうか？」

よかった、怒ってないっばい。

あたしはレオナードに残っているお茶を飲むように促されて、仕方なく一気に飲み干した。久々に胃の中に物を入れたけれど、飲み物だったので大丈夫なようだ。

邪な意味ではないんだけど、レオナードは無駄に顔がいいから傍に  
いるだけでドキドキする。触れられるだけで心臓がざわざわと騒ぎ  
出す。精悍な顔つき、少しだけ日焼けしたような色合いのきめ細か  
い肌、ほどよく筋肉のついた身体は女のあたしから一言で言わせる  
とエロい。うん。

レオナードならどんな女でも喜んで嫁に来るだろうに。王様だし、  
優しいし、普段は無愛想だけど欠点なんてほとんど無いんじゃない？果  
たして本当にあたしが嫁いじやってよかったんだろうか。まあ、王  
様だから他にも嫁が来るんだろうし、そういう情報はもう耳に入っ  
ているからもうすぐなんだろうけど。

だけど、胸が騒ぐ。

「どうした？」

「なんでも、ない」

だけど、どうしようもなく心が痛い。

新しい妃を迎えることになった。相手をするどころか考えるだけで面倒だったが、貴族会の全会一致で勧められたため受け入れることにした。彼らが言うには、ヴィラとの不仲が他国の耳にも入り醜聞になっていく、とのこと。もちろん全ての人がいい顔をしたわけではない。あれほど教育係りを嫌がっていたルードリーフは眉間にしわを寄せていたし、アルフレットは仕方ないとも言うようにため息を吐いた。

肝心のヴィラは、「ああ、知ってる」の一言で済まされた。嫌がってくれぬんじゃないかという期待は見事に打ち砕かれたが、彼女が心を痛めなくてよかったとも思っている。

最近ヴィラはバレたのいいことに、堂々と俺に身体を預けてどこかへ行く。どこへ行っているのかは聞かされていないが、必ず帰ってくるので特に不満があるわけじゃない。それに彼女が帰って来た時、「おかえり」というと嬉しそうに微笑む表情があまりにも綺麗で、俺にとってもひとつの楽しみになっていた。

「んふえ、くろおろがるうしてもやりふあいつれいうはら」

「口に物を入れたまま喋るな」

そしてよく食べるようになった。これにはシルヴィオもアルフレットもかなり安堵したようだ。



「ん・・・クロードがね、どうしてもやりたいていうから」

「何をだ。もう少しわかりやすく話せ」

「だーかーらー、あのセクハラ王子が王妃軍の軍師になりたいっていつからーやらせてあげようと思って」

「人となりは保障できないが、身分と実力は確かだ。反対はしない」

「ふーん」

相変わらず人前で心を許そうとしないのはお互い様。仲が悪いという噂も特に否定はしなかった。ヴィラは単に興味がないからで、俺はその噂が便利だからだ。彼女が権力を持っていないと思わせることで、ヴィラにあまり注視しなくなるだろうから。今回の件も、もしヴィラの隠れ蓑になるならば十分に利用させてもらう。

「ヴィラ」

彼女は果物を頬張ったまま返事を返す。

「んー？」

「明日、来る」

何かとは言わなかったけれど、ヴィラには十分伝わるだろう。

「ん、ちゃんと挨拶する」

あ、と思い出したように彼女は付け加えた。

「でも仲良くはしないからな」

「ああ」

例えヴィラの心が手に入らなくても、結局俺は彼女を手放せないだろう。ならば俺は彼女を守り続ける。全てのものから、彼女の全てを。

## 第十七話 第二王妃

ボリユームのある巻き毛の金髪が華やかな印象を与える美人さんだった。

第二王妃として後宮に召し上げられるのは、ローゼリア・エイジー。前国王と側室の娘で、ちなみに歳はレオナードも知らないらしい。

「初めまして、陛下、王妃様。この度第二王妃として後宮にお仕えすることになりました、ローゼリアと申します」

第一印象はとても礼儀正しい子。あのクロード王子と腹違いの兄妹なんてとても思えない。ただっ広い謁見室で、ぽつんと立っているローゼリア。顔を上げてあたしと視線がぶつつかると、何故か彼女は目を丸くしてあたしを見ていた。なんなんだ。

「エルヴィーラだ、好きに呼びな」

そして自己紹介すると今度は顔を引きつらせた。・・・なんなんだ。

「身分をわきまえ、健やかに過ごすように」

「はい」

レオナードに声をかけられ、ローゼリアはそれはもう嬉しそうに顔を綻ばせる。恋する乙女ってこんな表情をするんだらうか。だとし

たら、あたしには一生恋なんて無理だな。  
侍女に引き連れられて退室すると、レオナードは大げさなほど大きなため息を吐く。

「表向きには何もできないだろうが、裏から何か仕掛けてくるかもしれない。気をつけるよ」

「でも元お姫様なんだから？」

「関係ない。第二王妃ともなれば、目の前にすぐ第一王妃の座がある。嫉妬に駆られやすい立場だ」

「ふーん」

昨日、講義で寝る前にしつこくルードリーフから聞かされたんだけど、子供を先に産んだ人が第一王妃の座に位を上げることがあるそうだ。ドローシャの王は世襲制じゃないから絶対じゃないらしいんだけど、他国では必ず先に産んだ人が偉い立場になるらしい。ちなみに師匠は王妃だけど子どもがいらないらしく、それでも第一王妃だったんだとか。結局は子供がいようとしまいと最終的に王の判断で決まるらしい。だけどぶっちゃんけどうでもいい。

で。

「なんで来るわけ？」

夜、何故かレオナードはいつも通りにあたしの部屋に来た。訊ねるとムツとレオナードは嫌な顔をする。

「俺の自由だ」

「いやいや、今日ローゼリアとの初夜だろ？普通は通うもんじゃねえの？そりゃあたしの時は違ったけどさ」

待ってるのに放っておかれるのって可哀そうじゃん。そう言ったらレオナードはますます不機嫌になる。・・・怖いっ！

ドサッ

と乱暴にベットに投げられて、あたしは変な体制のまま寝転がった。続きは自主規制！

次の日。朝食を始めようとしたら、ローゼリアが部屋に駆け込んできた。髪を少々乱して息を切らしている。

「わたくしも、ご一緒させていただいていいかしらっ」

ほらみる怒らせたくないか、とレオナードを睨んだけど無視された。ローゼリアは返事を待たず用意されてもない席に座る。侍女たちは慌てて彼女の分の食事も準備し始めたが、ものすごく嫌そうな顔をしていた。侍女は第二王妃にあまり好意的ではないのかな。最も、シルヴィオみたいに超睨んでいるわけではないので注意はしな

いけど。

「ヴィラ様、お飲み物はいかが致しましょう」

「適当でいいよ」

「では種湯をお飲みくださいませ」

「いや、それはちょっと・・・」

ほらほらほらほら、睨まれてるじゃん！ローゼリアの前で種湯なんて勧めないでよ！

レオナードは困っているあたしを見て、こっそり笑っていた。

こんの野郎！！

「種湯はいらない。ローゼリアが欲しいみたいだからあげたら？」

「では、ノースロップ産の紅茶にいたしましょう」

ローゼリアのくだりはスルーされた。食事に手をつけ始めると、ローゼリアはニコニコしてレオナードに話しかける。きつと昨夜のことと怒っているんだろうに、あたしには無理な芸当だ。

「陛下がお好きな色はなんですか？」

「・・・特にない」

「ではお好きな食べ物は何？」

「・・・特にない」

うわあ、レオナードものすごく嫌そう。ここまで人前で感情を露わにするのは珍しいかもしれない。

「ちゃんと答えるよ。まさか女の質問に答えられないほど甲斐性がないわけじゃないだろ？」

じとーつと恨めしそうに睨まれるけどフォローしてやんないよ。女を大切にしないレオナードが悪い。

「男らしい女に言われたくない」

「なんだよ、こっちこそ女々しい王様に言われたくねえ」

いつもの言い合いが始まり、ローゼリアは顔を真っ青にしてどうしようか悩んでいるようだ。確かにこの空気の悪さに慣れていないと困るかもね。

「わ、わたくし今日は城の中を見回りたいですわ。陛下、案内してくださいませんか？」

「侍女に頼めばいいだろう」

さすががしいほどの一刀両断。仲良くするつもりはなかったけど、ちよつと可哀そうだったので代わりにあたしが案内してあげることにしよつ。

初めて会ったとき、ローゼリアはヴィラの美しさに目を見開いた。彼女の前ではどんな美しい女性でも霞んでしまうほどの美貌、完璧に形造られた身体、男性の庇護欲を刺激する細く白い肢体。彼女の血色の良い唇がニツと三日月の形に変わったとき、背筋に悪寒が走るほどだった。

その夜陛下が来なかったことに苛立ちを覚えながら、翌朝噂通りの仲の悪さに驚きながら。そして何故かヴィラに城を案内してもらっているこの状況は、ものすごく不可解で誰かに説明を求めたい気持ちでいっぱいだった。

「東の庭園がね、ものすごく綺麗なんだ」

そんなのウソだ、とローゼリアは唇を噛みしめる。どんなに美しい華も緑も、彼女の前ではただの植物。美しさに視線を捕えて離さないのはヴィラだ。荒い口調も彼女が使えばそれすら上品に聞こえる。ローゼリアが後宮入りしたのはレオナードの後継ぎを生むため。世襲制ではなく世継ぎに困ることはないが、王の子たちは神の加護を受けて優秀な者が生まれることが多い。そしていつもこの国を守り裏切ることのない存在はとて重宝されるのだ。しかし、今の状態では王妃に子が望めないだろうということでローゼリアに白羽の矢が立ったのである。

「エルヴィーラ王妃様は陛下のことをどう思っているの？」



すか？」

突然のローゼリアの問いに、ヴィラはカップを傾ける手を休めて顔を上げた。

「さあ、どうだろうね」

「・・・お嫌い、ではないのですか？」

首を傾げながら笑うヴィラ。ローゼリアは無意識に拳を握る。

「どうでもいいよ」

「え？」

「だって人の感情はものすごく複雑だからな。一言で表すなんてそれこそ無理だ」

少し離れたところでこちらを見ているシルヴィオの視線が痛かったが、では・・・とローゼリアは質問を続けた。

「もし、わたくしが陛下の最も大切な人になりたい・・・と言ったら・・・？」

そのためにこの後宮へ来たのだ。だから、とローゼリアは俯いて様子を窺う。ヴィラは笑うのをやめ、そこに表情は一切無かった。

「なにそれ、宣戦布告ってやつ？」

「い・・・いえっ」

冷たく響いた声にローゼリアは慌てて否定の言葉を述べた。“宣戦布告”確かにこの言葉で合っているのかもしれない。ヴィラがレオナードのことをどう思っているかと、ローゼリアはそれだけの覚悟で来たのだと知ってほしかった。美しさでも力でもきつとヴィラには敵わない。それでも少しの可能性があるなら諦めたくはない、と

「まあ、がんばれば？」

「は、はい、ありがとうございます……？」

語尾に疑問符をつけつつお礼を言う。魔女の第一王妃。彼女のことがよくわからないと思いつつながら。

レオナードのことをどう思っているか。

そんなのあたしが一番聞きたいさ。別に側室が来ても大丈夫……だと思っただけで全然大丈夫じゃなかった。昨日ローゼリアが来ることを告げられた後、嫌で嫌で仕方なくて泣き喚いているところをシルヴィオに見つけた。彼は何も言わず慰めてくれたけど、相変わらず心は晴れない。

それは子どもの玩具を取り上げられたような感覚だ。たぶん恋とか、

そんな可愛らしいものではないと思う。だってあたしは、百とレオナードを選べと言われたら迷わず百を選ぶから。

いつものように魂を飛ばして本体に戻ると、何故かレオナードの腕の中に居た。

「おかえり」

「あ……ただ……いま？」

レオナードは戸惑うあたしを不思議そうに覗きこむ。いつかレオナードはローゼリアにもその言葉を使うのだろうか。

い……いや、だ……。ものすごく嫌だ。なんだろうこれ、病気かな。

「どうした、どこか痛むのか？」

「……うつん」

だめだ、すっかりしなくちゃ。あたしにはやるべきことがある。そう思うのに心がどこか弱っているのか、レオナードの顔を見て挫けそうになる自分がいる。

不安をかき消そうとレオナードを抱きしめると、腰に回った手に力が籠って嬉しかった。

「あの女に何か言われたのか？」

「違うよ、久しぶりに城を歩き回ったから疲れた」

もう年かかって言うと、レオナードはクツクツと笑う。よかった、

レオナードは何も変わらない。あたしも変わらなければきっと大丈夫だ。

いつもと変わらない証しが欲しくて、無意識に顔を上げればレオナードはすぐに意味を察してくれた。重なる唇から伝わる熱、背中を撫でてくれる大きな手。全てが今まで当たり前になって、でも全然当たり前じゃなくて。

そんな顔でローゼリアに微笑むんだろうか。  
こんな風に優しくキスするんだろうか。

無理だ、そんなの。

ドンツ

と厚い胸板を突き飛ばせば、レオナードはものすごく驚いた表情をしていた。あたしだって驚いたさ。まさかローゼリアに嫉妬するなんて。

「ヴィラ・・・？」

「・・・ごめん」

苦しい。まるで身が切れるようにグサグサと突き刺さってくる何か。頭に血が上るような感覚。百のために無意識に退けていた感情が、溢れるように沸きあがる音がした。

でも。心の中で誰かの声が聞こえる。

囚われては、だめ。不幸になるから。

「ごめん、なんでもない」

レオナードは何も言わず、静かにあたしを見る。怒ってもいないし、笑ってもいない。恐る恐る手を伸ばしてみたら、レオナードは静かに手を重ねてくれた。それがまた嬉しくて、一喜一憂する自分がバカみたいだ。

自分の不可解な行動で戸惑うあたしに、レオナードはものすごく優しく微笑んでくれた。もう一度その胸の中に飛び込んで、今度は隙間もないほどきつく抱き締めよう。

## 第十八話 遠乗り

あれから数日経ったけど、ローゼリアが来ててもレオナードの態度も一緒に過ごす時間も全く変わらなかつた。そのことにあたしはものすごくホツとしている。ローゼリアには申し訳ないけど、やっぱりどんな形であれあたしにとってレオナードは大切だから、彼女に奪われたくないと思っっていることは認める。

だけどこの気持ちを人に知られてはダメ。レオナードは王様だから、国のものであつて決してあたしのものにはならない。それにあたしは百がいる。あの子をレオナードから守らなきゃいけないから。

だから、心に蓋をしよう。見て見ぬふりをしよう。大丈夫、あたしは大丈夫。

第二王妃が来てからヴィラの元気が少し無くなつたような気がするのは俺の願望だろうか。相変わらず食事の時間はあの女に邪魔され続けているが、それ以外の妨害はなくヴィラの生活に変化はない。ただ時折不安そうにこちらを見上げてくる彼女が可愛らしく、遠慮

がちに話しかける様子が初々しい。

「ヴィラ」

「どした？」

講義が終わった時間を見計らってヴィラの部屋に來ると、案の定彼女は寝起きだったらしく眠そうに眼を擦っている。さきほどルードリーフがげっそりした顔をして出て行くのを見たから、そうなのだろうとは思っていたが。

「明日から3日間休みが出來た」

「えー！珍しい」

昼間はほとんどないお互いの休みが合わず、2人でゆっくりできる機会がなかった。3日間あればヴィラも十分楽しめるだろう。

ただし、この連休には別の意味もあった。ジキルド・カトレアの処分が決まり決行する日は城が荒れる可能性があり、ヴィラをできるだけ安全な場所に移したかったのだ。もしもヴィラを人質に取られれば、俺はきつと手を出せないだろうから。

「ヴィラの予定も開けておいた。どこか少し遠くへ出かけようか」

「えー！いいの！？城の外に出ても！？」

ああと頷けば彼女は久しぶりに晴れやかに笑った。城の外に出るのは彼女が嫁いできてから初めてになるで嬉しいのだろう。

「で、どこに行きたい？」

「どございよう・・・三日かあ」

「いろいろな場所を見て回ってもいいが、疲れてるだろう？馬を飛ばせば少し行ったところに大きな湖がある。そこに別荘があるから、ゆっくりしてもいいだろう」

「湖って・・・もしかして人魚とかいるかなあ」

「ああ、昔一度だけ見たことある」

ヴィラは楽しみでたまらないといった表情で、嬉しそうに抱きついてきた。彼女の放つ甘い香りが鼻をくすぐり、髪を撫でればさらさらと音を立てる。顎に手をかけて口付けしようとしたが、廊下から足音が聞こえてきたためヴィラは慌てて離れていった。

3日間の旅行はなんと2人きりで、シルヴィオとアルフレットとロゼリアは留守番を言いつけられてかなり不満そうだった。あたしは悪いなあと思いつつ久々の外は嬉しくて仕方ない。警備は現地にいる別荘専属の兵士たちに任せるそうだ。必要な3日分の着替えを用意して外に出ると、目を見張るほど綺麗な毛並みの黒い馬が居た。



「あ、そういえばあたし馬乗ったことない」

浮かれ過ぎてすっかり忘れてた。

「俺の馬に乗ればいいだろう？」

「いや、めっちゃ恥ずかしいじゃんよ」

見送りに来たかなりの数の人たちに見られてるのに。レオナードは意外そうに片眉をはね上げて、あたしの腰に手を回すと無理やり馬の上に引き上げた。

うわっ・・・結構高い・・・。

横座りなのでバランスを取るのに必死になっていると、レオナードが軽々と後ろに座ってあたしの身体を支える。恥ずかしくて死ぬ！死ぬ！

「陛下、エルヴィーラ様、道中どうかお気をつけて」

ルードリーフが頭を下げると、城のみんなも彼に倣って一斉に頭を下げる。そんな中、一人だけ恨めしそうな顔をして突っ立っているローゼリアはかなり目立った。

「心配には及ばん、我々には神の子がついている。みなは留守の間城を守るように」

はっ、と皆は短く礼を取った。動きが揃ってる様は軍隊みたいですよーい。

レオナードがパンツと軽く手綱を動かすと馬が前に歩き出す。ゆっくり歩いていても身体に震動が伝わって大きく上下に揺れた。

「追手に付いてこられないようかなり飛ばすが……大丈夫か？」  
正直ちょっと怖かったけど頷く。のろのろ進んでたんじゃいつまでも着かないし、異教徒に囲まれてもしたら面倒だ。

レオナードはあたしの後頭部にキスをすると、それが合図になったかのように馬が駆けだした。風を切る感じはバイクに似てるけど、激しく揺れる馬はまるで何かのアトラクションみたいだ。通り過ぎて行く景色がそれこそ走馬灯のように駆け巡り、途中で一瞬天国が見えたような気がしなくもない。唯一の救いはあたしが落ちないようにレオナードの左腕が支えてくれていたこと。これがなければ、確実にあたしは落馬していたと思う。

「……空飛ぶ箒作ろう」

途中でぽつりと呟いた言葉はレオナードにも聞こえたらしい。彼は耳元で盛大に笑っていた。

大きな城下町を抜けるとあとはほぼ森の中を走る。道なき道とでもいうか、本当に馬一頭通るのがやっとなくらいの細い道。差し込む光に朝露が光る、そんな幻想的でロマンチックな自然だ。師匠の家がある森はいつも薄暗くてお化けでも出てきそうな感じだったし、幹がぐるぐると渦巻状になっていて変な木がたくさんあった。それが普通だと思ってたんだけど、ちゃんとした森があつてよかったです。心底安堵する。

そして、2時間くらい経った頃湖が見えてきた。湖じゃなくてむしろ海だ。それくらい大きくて果てのない綺麗な青色の湖。太陽を映しキラキラと光る湖面は日本じゃなかなか見られない絶景だろう。それになにより水が淀みひとつなく澄んでいて、本当に人魚が居そうな感じがする。師匠からこちらの世界には人魚がいると聞いて一

度見てみたいと思つてたんだ。

「着いたぞ」

後ろから聞こえたレオナードの声に顔を上げると、ちらりと立派な建物が見えてきた。

「・・・別荘？」

「別荘だ」

いや、別荘じゃない。城だろ。

外観はあたしが普段いる城の塔とあまりかわらない。それくらい大きくて立派な建物だった。自然の中に堂々とそびえ立つ姿は荘厳な雰囲気醸し出す。

着いたら10人くらいの使用人たちのお迎えがあった。先に降りたレオナードの手を借りて馬から降りようとしたけど、地面に足をつけた途端フラフラする。

「少し休もう」

レオナードの提案はものすごく有難かった。案内されるままに建物の中に入り、あたしたちのために用意されたのは最上階の部屋。広くもなく狭くもなく、庶民育ちのあたしには嬉しい部屋だ。

着いてすぐあたしはベットに横になる。レオナードは苦笑して近くに座ると、いつものようにあたしの頭を撫でた。

「ここ、いいとこだな」

自然がキラキラしてる。空気が優しく、身体が軽くなる気もする。あたしはいつものように青い瞳に見守られて、だんだん重くなる瞼を閉じた。

陽が高くなってきた頃、目を覚ますと隣にレオナードが居てじっとこちらを見つめていた。

「あたしどれくらい寝てた？」

「半刻ほどだ」

思ったよりも時間が経ってない。ずっと馬に揺られてきたから、昼時なのにお腹は空いてないみたいだ。

降ってくるようなレオナードの口付け。くれるものは同じなのに、こつも静かな場所だとなんだか恥ずかしい。唇を離すと熱い吐息が交わって、レオナードは安心したように微笑んだ。

「少しは元気が出たようだな」

どつという意味だろうかと考えていると、レオナードは両手であたしの頭を包み込んで額を合わせる。

「第二王妃が来てから、少し元気がなかったらどう？」

うわ、バレてら。さすが何でもお見通し、王様で顔がよくて政治ができて剣もできるレオナード。気にかけてくれることが嬉しいのと同時に、気付かれてたのが分かってものすごく恥ずかしかった。顔を背けて反対向きの体制に変えたけど、それでもレオナードは後

るから抱きしめてくる。

「そんなこと・・・ない」

「そうか」

残念そうな声に胸が締め付けられるような感覚を覚えた。感情をうまく言葉にできない。だってあたしは何も知らない。

「わかんないよ」

わからないよレオナード。あたしは一体どうすればいいんだろう。家族のこととか、百のこととか、ローゼリアのこととか、いろいろな感情が交じってごちゃごちゃになる。

「何も考えなくていい。ヴィラはそのままでもいい」

「うん・・・」

あたしは、あたしそのままです。

結局あれから、ベットからは出してもらえずそのまま一日が終わってしまった。じとーっつとレオナードを見れば、彼は焦ったように視線を反らす。

「せつかく人魚に会えると思ったのに・・・」

「・・・悪かった」

「楽しみにしてたのに・・・」

「・・・ああ」

「ばかばかばか。と言いつつ断れなかったあたしもあたしなんだけどさ。レオナードは悪いとは思っているようだけど、反省しているようには見えない。それがまたムカついて、レオナードの腕の中から逃れるとベットの端までころころ転がった。彼の眉間には不満そうにしわが寄る。

「明日は、絶対行くからな」

「わかってる」

「約束する？」

「約束しよう」

頷かせたところで、もう夜中だけどこ飯を食べようと服を着終わったとき。

ゴンゴンゴン

と乱暴なノックが聞こえて、レオナードが扉を開けた。飛び込むよ

うに現れたのはこの別荘の人らしく、恐怖におびえたような表情で早口に喋った。

「大変です！襲撃を受けてます！」

「慌てるな、きちんと説明しろ」

至極落ち着いた様子のレストランに、使用人も深呼吸して今度はゆつくりと話した。

「今この家は敵に取り囲まれています。数は約5万ほどかと」

「え」

軍が動いた？

何つー数だよ、こんな森の中に。

「もうすぐこの家に侵入してくるでしょう。その前になんとかお逃げくださいませ」

「取り囲まれてるなら無理だろう」

レオナードは厳しい表情で、しかしやはり冷静に言葉を紡ぐ。あたしは報告されただけじゃ現実味がなくて、なんとなく他人事のように聞いていた。明日人魚を見るのは無理そうだな・・・と思いながら。

## 第十九話 魔女の名は

ヴィラは襲撃されたことを聞いても特に動揺せず、考え込んでいるレオナードを横目にバルコニーに出た。

「うわっ、すごい綺麗」

松明の光だろうか、地上に灯る天の川のような無数の光。レオナードはヴィラの言葉を聞いて呆れたような表情をする。

「悠長なことを。今どういう状況かわかっているのか？」

「これ見りゃわかるぞそんなこと」

光の数、すなわち敵の数だ。きつともっと多いのだろう。一面に広がる光と闘志を高まらせるような笛と足の音。まだ少し遠いが半刻もせずにここまでたどり着く距離だ。

「まさか裏目に出るとはな」

レオナードはひとりごちてため息を吐いた。

もともと、ジキルド・カトレアを捕える際の危険を考慮してここに避難しに来たのである。しかし何故か場所が突き止められ、こうやって襲撃を受けている。

「軍隊を城から呼び寄せても間に合わないだろう。ヴィラ、お前は



鳥に化けて空から逃げるんだ」

「レオナードは？」

「応戦する」

ヴィラは不安そうにレオナードを見つめた。レオナードも視線をそらさず見つめ返す。

「無理だよ、あたしが王妃になったのは王を危険に晒すためじゃない、守るためだ」

そう言つてバルコニーから見える景色を目を細めて見渡した。レオナードは今までになく厳しい声を出す。

「こんな時にお前らしくないことを言うな。あいつらの目的がお前なら俺には危害を加えないはずだ」

ヴィラは静かに微笑んで横に首を振った。

「それは違う。たしかにあいつらの目的はあたしだったんだろうけど、レオナードを殺さない限りジキルド・カトレアは罪を免れることができないだろう。むしろこの襲撃の責を問われてますますまずい立場に立たされることになる。あいつらの目的はあたしを殺すことだけじゃない、証拠の隠蔽だ」

勅令を出した王さえいなくなれば彼の罪はうやむやになる。むしろ城に残つて彼を捕えようとしているアルフレットやシルヴィオたちの立場が悪くなるだけだろう。

「夜、しかも森の中じゃ敵の正体をつかみにくい。あたしたちさえ皆殺しにすれば、あとはすべて他人に責任をなすりつければいいのだから」

眉をひそめるレオナードに、ヴィラは近寄って手を握った。

「……ドローシャの王に逆らう者など歴史上いない」

「史事には書いてないよ。なぜならこの国の王は神に選ばれた絶対的存在だからな」

「だけど、王に逆らう者がいないなどあり得ない。人は結局、どんなに強大な力の前であろうと自分の身が危険になれば手段を選ばないものだ。史事にそれが書いていないのは、ドローシャ王をどこか神聖化したい傾向があるからだ」とヴィラは言う。

「人は貪欲だ。手に入れても手に入れても、次を求めようとする」  
レオナードの手に力が籠った。

「だけどあたしはそれが悪いこととは思わない。好きにすればいいさ、仁徳に背いても自分がよければそれでいいじゃないか。だからね……」

ヴィラは薄く笑って、レオナードの手にそっと口付ける。

「あたしだって好きにさせてもらおうよ」

強い意志の籠った瞳で近づいてくる敵を見つめた。その目に迷いは一切ない。

「勝てるか？」

「地の利はあたしにある」

ヴィラはレオナードの腰に刺さった見事な剣を引き抜くと、それを掲げて手すりに手をついた。

「魔術つてのはね・・・師匠は念の力って言うんだけど、あたしは自然を操る力だと思ってるんだ」

剣に炎の渦が巻きついた。それを振りかざすと、敵に向かって炎が流れるようにあふれだす。それは一気に燃え広がり、人の焦げた嫌な匂いとうめき声、そして湖に飛び込む音が聞こえた。地獄を再現したようなその光景にレオナードは息をのむ。

「あーあ、湖に入っちゃダメじゃんか」

人魚は人を食うのに。

ヴィラはのんびりと人が焼け死にゆく姿を見守っている。人としてどこか空っぽなヴィラを、そつとレオナードが抱き締めた。

「・・・お前にこんなことをさせたくなかった」

「今更それを言うか？」

もう何もかもが手遅れだ。こうなることは既に決まっていたのかも知れない。逆らう術を知らないならば、流れに身を任せよう。

「レオナード、レオナードも共犯だぞ」

「わかつている」

2人で。

焼け焦げた匂いが充満する大地に、レオナードとヴィラが立っていた。茶色っぽい黒の髪色をした男は、恐怖のあまり腰を抜かして2人を見上げた。

「久しいな、ジキルド」

「へ、陛下……」

ジキルドは口をわなわなと震わせる。地獄海図のようなこの場で美しい2人は圧倒的な何かを感じさせる。もう彼を守る兵士たちはいない。おそらく王妃の魔術によって、全て焼け死んでしまったから。炎が広がって人が燃え尽きるまでの時間はあっという間だった。ジキルドだけにその炎が牙を向かなかったのは、自分を生かし尋問するためだろう。

「この度の襲撃、何ゆえかお聞かせ願おうか？」

レオナードの問いにジキルドは身を震わせる。

「しゅ、襲撃などと・・・！違います！これは陛下の御身をお守りするために出陣したわたくしの私兵でして・・・」

「何かから守る、と？」

「もちろん異教徒でございます！噂で慰安のため別荘に向かった陛下を襲うのだと聞きました。ですからわたくしはそれを守るために・・・」

彼の苦しい言い訳を聞いている間、ある意味ヴィラは感心していた。5万の兵を秘密裏に動かすなど、なかなかできる芸当ではない。一方レオナードは往生際の悪いジキルドに苛立ちを隠さず問い詰める。

「それにしてはずいぶん不自然のようだな、ジキルド。お前の娘に毒を盛らせたり、刺客を放ったのもお前だろう」

「そんな、違います！わたくしははめられたのです！」

このままでは埒が明かないと、ヴィラはレオナードの袖をくいくいと引っ張った。レオナードは重々しく頷くと、ジキルドを鋭く睨んで見下ろす。

「もういい。後は審問会でゆっくり聞くとしよう」

「へ、陛下・・・」

情けない顔をしてジキルドはその場に崩れた。ヴィラは片眉を上げて彼に問う。

「月並みの言い訳しかできないお前にひとつチャンスをやるう」

「ヴィラ」

「いいじゃん」

ジキルドは一筋の希望を見出して顔を上げた。ヴィラがにっこりと笑うと、薄暗い中で血色の良い唇が鮮やかに浮かび上がる。

「お前にここを襲うよう命令した人物は誰だ？」

ジキルドの顔が凍りついた。

「で、ですから、これはわたくしが単独で陛下をお守りするために……」

「あくまでも言う気がないなら、残念だが拷問にかけても同じだろう。この場で殺してしまおうか。城まで連れて行くの面倒だし」

ジキルドはヴィラのその一言にガタガタと震えだし、助けを求めて辺りを見回した。5万の兵を戸惑いもなく殺す王妃ならば、この言葉に偽りはないだろう。

「ま……じよ様……！」

彼は立ち上がり暗闇に向かって助けを求めるかのように手を伸ばす。

「魔女様！！キリエラ様！！お助けください……！わたくしを、どうかお助けを！卿……！！」

それは悲痛な叫び。キリエラ様、卿、と何度も口にする。しかし何も起こることはなく、絶望の表情で彼は空を見上げる。

「キリエラ、とは誰の名前だ？」

静かに問うたレオナードの声にビクリと身体を震わせた。

「魔女だと言っていたな。では、卿とは……？」

ジキルドが跪いて頭を下げると、歯ぎしりをしたままその場に硬直する。ヴィラがもういいだろう、とレオナードの肩を叩いた。

「これ以上追い詰めても同じだ。一旦城に戻ろう」

「……そうだな」

レオナードが頷いて彼を捕えようと近づいたとき、ジキルドはぺらぺらと早口で話し始めた。恐怖におののいた表情で、まるで狂ったかのように。

「魔女がいるのです！ニーナを……娘を人質に取られて私は仕方なく！」

レオナードは興味深そうに訊き返す。

「魔女、とはどんな女だ？」

「わかりません、会ったことはございませんが・・・とても美しく誰をも魅了する魔性だと聞いております。卿は王妃の座にキリエラ様を就ける気なのです！ですから・・・」

バシユツ

と風を切る音がして、ジキルドの胸に矢が刺さった。ヴィラは矢が飛んできた方へ向かおうとしたが、レオナードに腕を掴まれて立ち止まる。

「やめておけ」

「でも・・・」

「ヴィラに何かあれば困る」

ヴィラがしぶしぶ頷くと、レオナードは安心したようにため息を吐いた。

「それにしても・・・ずいぶん派手にやったな」

彼の目線の先には焼け焦げた死体が山のようにある。ヴィラはああ、と思いだしたように口を開いた。

「死んでないぞ、全部」

「なに？」

「ただの幻術だ。そのうち起きるだろ。ま、湖に飛び込んだ奴らは助からないだろうけど」



あつげらかんと言い放つと、ヴィラは別荘に戻るように手招きする。どこまでもわからない女だと、レオナードは一人苦笑してヴィラの後を追った。

5万の兵の正体はジキルドの私兵ではなく、ホラージュ州という州軍だったらしい。彼らは王に仇をなす輩を捕まえると聞かされ、よくわからずに出陣を上から命令されたのだとか。まあ、それよりも……。

「せつかくの3日の休みが……」

まだ人魚見てない！遊んでない！

しかもあの後城に帰ったらバタバタしてレオナードに会えてない。夜もずっと一人きりで、寂しいけど仕方ないって自分に言い聞かせた。

もしかしたら、ローゼリアのところに行ってるのかもしれないけど。それは考えたくないの、枕に顔を埋めて耳を塞いだ。

レオナードのいない夜は落ち着かない。それは彼が隣に居ることが当たり前だった。夢見が悪く、寝つきが悪い。……あたしって完全に振り回されてる。

「勘弁して・・・」

呟いた言葉は闇の中に静かに溶けていった。

離れられないのはあたしの方だ。ここにいて約束したけど、離れないって約束してほしいのはこっちなのに。完全にこの生活に浸かってしまっているあたしは、きつと元通りには戻れないだろう。もしレオナードがローゼリアの隣を望むのなら、思う存分皆の前で泣いてやる。

そう決心して、あたしは手元にあった本をドアに向かって投げた。  
が。

ドアが開いてドスツといい音が響く。ずるずると落ちる本からはレオナードの顔が現れた。

「げっ」

「・・・また出なおす」

「わーーーーちょっと待った待った!」

あたしは慌ててベットから出るとレオナードを引きとめた。彼は不安そうにあたしの顔をうかがう。

「ごめんごめん!今のは本当に偶然だから!」

「・・・本当に?」

「まさかこんなにタイミングよく現れるとは思わなくて・・・」

レオナードは呆れたような大きなため息を吐いたけど、少しだけ笑ってくれたので安心した。

「悪かったな、ずっとこれなくて。後処理で忙しかった」

「うっん」

それよりちゃんと休んでって言ったら、レオナードはものすごく嬉しそうに抱きしめてくれた。

たったこれだけのことなのに、やっぱり安心する。レオナード、あたしどうしちゃったんだろう。

## 第二十話 離別

この感情の名前がわからない。

“好き”ってものすごく難しいとあたしは思うんだ。アルフレットは楽しいし明るいから好き。ルードリーフはなんだかんだ言いながらものすごく面倒見がよくて好き。シルヴィオは言葉にしなくてもあたしのことわかってくれるから好き。侍女たちは可愛くて賢くていつもあたしを和ませてくれるから好き。百は笑顔がキラキラ輝いてて、あたしのことを慕ってくれる優しさと綺麗な心が好き。

じゃあ、レオナードに対する好きってなんだろう。みんなとどう違う？

「ヴィラ、そんなに見つめられたら穴が開きそうだ」

「・・・試してみる？」

やめてくれ、ってレオナードはクツクツと笑った。この笑い方は好きかもしれない。それからあたしを見つめる優しくて穏やかな青い瞳も、ふやけそうなほど柔らかな笑みも。この笑い方はあたしの前でしかしてくれない、あたしの特権だ。だからとても好き。

そう言えば、レオナードはあたしが怒らせてからずいぶん丸くなっただ気がする。色気も優しさも甘さも、以前とは比べ物にならないほど増した。彼の中で、何かが変化した？

「穴は開きそうか？」

「どつだろつな」

深夜のベットの中。唯一誰にも邪魔されない2人の時間。

食事の時は騎士もローゼリアもいるし、執務室だっていつ誰が来るかわからない。けれど夜はよっぽどの急用がないかぎり誰も近づかない。

2人の時間は好き。だってこのときのレオナードはこの通りとってもし優しい。近寄るだけでドキドキする、触れるだけで心臓が騒ぎ出す、抱きしめられると安心する。

百には感じなかったまた別の好き。でもわからないんだ。レオナードは考えなくていいって言ってくれたけど、何か喉の奥に突っかかっているようで腑に落ちない。

「ねえ、レオナードの好きな人って誰だ？」

このとき固まったレオナードの顔は……うん、いつまでも忘れられないだろう。

いつも通りに政務を片づけていると、廊下がやけに騒がしくなっ

来た。執務室に出入りできるのは限られた人間のみ。騒がしいということはつまり・・・

「陛下！」

なるほど、こういうことか。

息を切らし肩を上下させて部屋に入って来たのは第二王妃だった。怒っているのか顔を真っ赤に染めている。一応止めたらしいアルフレットも諦めたような顔をしてドアに背もたれ、彼女の様子を窺っているらしい。

「お話がございます」

「こちらにはない。部屋に戻れ」

「嫌でございます！」

この女はこれほど融通の利かない女だっただろうか。先代の王と側室の娘、ローゼリア・エイジー。温厚で思慮深く比較的大人しい人物だから迎えたのだが。

「ならば、簡潔に話せ」

時間ももつたいない。言外にそう伝えたと、彼女はまくしたてるようにペラペラと話し始めた。

「わたくし陛下に不満がございます。なぜお会いすることができないのです？」

「食事の時会っているではないか」

「夜のことです」

俺は自然とため息を漏らした。

嫁げば通うとでも思ったのだろうか。そして赤子を身ごもり、国中に祝福されとでも夢見ていたのだろうか。

傲慢な。

必要なのはこの女ではなく彼女の身分だ。ヴィラへの注目を少しでも避けるために、そしてヴィラへの負担を軽減するために。そして利用するために、一番身分の高い者を第二王妃に迎えただけなのだから。

「面倒だ」

「なっ」

「お前は所詮政治の駒。大人しく部屋に籠ってればいい」

「陛下はわたくしを愚弄なさるおつもりですか!？」

「お前は国王に逆らう気か。たとえ前国王の娘であろうと、俺の一言でお前の首が飛ぶ」

仕事を辞めさせられるという意味ではなく、本当に首が刎ねられるのだ。それは我が国特有の、国王に与えられた絶対的な権力。神に選ばれた者だからこそ持てる力。

この女はそれを思い出したのか、顔を真っ青にして小刻みに震えだした。

「だからと言って・・・自分の妻をながいしろにするなどあんまりですわ・・・」

「言いたいことはそれだけなら出て行け、邪魔だ」

彼女は悔しそうに涙を流しながら部屋を後にした。一部始終を見ていたアルフレットが大きなため息を吐いて口を開く。

「なんだかんだ言いながらレオナード、やっぱりお前の奥さんになつても大丈夫なのは魔女さんくらいしかいないんじゃないか？」

ヴィラしかいないのではない。ヴィラでなくてはダメなんだ。彼女を守るためならば、俺は何を利用して心は痛まない。相変わらずヴィラは俺の想いを理解してくれないけれど、それでも守ると決めた以上彼女のためなら世界を滅ぼしても後悔はしない。

「アルフレット、お前は引き続きジキルド・カトレアの周辺を洗え」

「んー、でも向こうも証拠消すのに躍起になつてるでしょうからね、こっちが証拠掴みそうになるたび消される・・・イタチごっこですよ」

「どんな手を使つても掴んでこい」

アルフレットは軽く頭を下げると執務室を出て行った。

先日の事件の、卿とキリエラの正体は必ず付きとめる。それらを処分しない限り、ヴィラにとって安全な世界にはできないのだから。



部屋にセクハラの代名詞であるクロードがやってきて、今何故か散歩に連れ出されている。東の庭園はとても綺麗で好きだけど、横に居る相手をぜひチェンジしたい。

「やはり美しいね、王妃のほうが」

「それはどうも」

そして齒の浮くような気持ち悪い台詞は止めてほしい。ときめくから？ううん、うざったいから。剣もできるし人懐っこいし悪いやつではないんだと思うんだけど、どこか人とかけ離れたテンションについていけない。嫌いではないんだけどな。

「陛下がとっても羨ましいよ、貴女のような女性を手に入れるなんて」

「・・・あっそ」

レオナードの話は持ち出ささないでくれ。返答に困るっつーの。

「いや、貴女こそ世界中の女性の妬みの対象なのかな？中心の国の王、茶髪と青い瞳の美丈夫、文と武の才に恵まれた彼の隣に立つのだから」

「そうかもね」

あたしじゃなかったら、手放しに喜んで王妃になったんだろっな。あたしはものすごく嫌で嫌で仕方なかったけど。諦めるまでどれだけ苦い思いをしたことか。

クロードはクルリと身体の向きを変え、あたしに向かってニコリと笑う。

「それから、私の妹がお世話になってるみたいだけど、どう？やっぱりローゼリアのこと嫌い？」

「ああ、そう言えばお前ら兄妹なんだっけ……。別にどうもないよ、あんまり会わないし」

そっか、とクロードは笑った。つと、噂をしていたら本人登場。木陰のところまで一人蹲っている。

「じゃあ私はこれで失礼するよ。またね、美しい王妃」

ええええええええ、ローゼリアに挨拶くらいしてけよ！……………  
つてもう遅かった。毎度のことながら嵐のように去って行ったクロード。取り残されたあたしとローゼリアはパチリと目が合う。

……ローゼリアの目が赤い。

「どうしたんだ？」

まさか侍女たちの嫌がらせを受けた？もしかしてシルヴィオに何か言われたんだろっか。

ローゼリアはあたしを見つめたまま視線を外さず、赤い目を隠そうともせずその場を動かない。あたしはなんだか心配で手を伸ばした

けど、その手は見事に叩かれてしまった。

「触らないで、わたくしに触っていいのは陛下だけです！」

「……あっそう。で、こんなところで何してるんだ？ローゼリア」

ローゼリアはうつと目に涙をためて、ハンカチで顔を隠す。

「……誰にも言わないでくださいますか？」

「うん。別に言う人もいねえし」

「実は」

夜。

ヴィラの元に訪れたレオナードは抱きしめようとした手を払われて困惑していた。

「どづしたんだ？」

「……やっぱりダメだ」

ヴィラの言っている意味がわからない。レオナードは問い詰めようとしたが、目に溜まった涙を見て心臓が止まるような錯覚を起こす。彼女を怯えさせるものの正体を考えたが、今日一日何か起こったと報告は受けていない。

「・・・ヴィラ？」

さすがのような気持ちでヴィラの名を呼んだ。レオナードは彼女の拒絶を受けたことが未だに一度もなかった。しかし彼女は今、全身でレオナードを嫌がっている。涙を浮かべて、悲痛に耐える表情をしている。

「レオナードは何も悪くない。でも・・・ごめん」

「何を謝っているんだ。俺は・・・何かしたのか？」

違つと、ヴィラは何度も首を横に振つた。ポトリと、一滴の雫が床に落ちる。

「して、ない。違つ・・・違つんだ。悪いのはあたしだから」

「ヴィラは何もしていない」

「うん、わかつてる・・・」

レオナードはどうすればいいのかわからず途方に暮れて、ヴィラが落ち着くことを祈るしかできなかった。彼女を抱きしめようとして、今度拒絶されたらもう立ち直れないかもしれない。

ヴィラは俯いて小さく息を吐くと、ゆっくりと口を開いた。

「ねえ、レオナード」

「なんだ？」

「前、どこにも行かないって約束したよな。あれ、なかったことにして」

ヴィラはもう目も合わせようとしない。レオナードは驚きを通り越して表情を作る余裕すらなかった。

「あたしを、自由にして。選べる自由をちょうだい」

レオナードに今わかることはただひとつ。ヴィラが苦しんでいること。そしてその原因がレオナードにあること。

自由にすれば、彼女はもう二度と戻ってこないかもしれない。もう二度と会うことすらできないかもしれない。レオナードはヴィラを手放せない。

けれど。

「わかった」

拒絶された、痛み。この痛みを味わい続けるくらいならば、ヴィラを失う痛みに耐えられるかもしれない。それにもしかしたら、また戻ってきてくれるかもしれない。例え戻ってこなかったとしても、レオナードはドローシャの国王、無理やり連れ戻すこともできるだろう。

彼女を守ると決めた。ヴィラを傷つける者は誰であろうと許さない。

そう、例えそれが自分であろうと。

「……ありがとう……っ」

ヴィラは漆黒の鷲に化けると、以前のように落下することなく軽々と空に飛び立つ。

レオナードはヴィラが見えなくなっても、月の浮かぶ夜空をずっと眺め続けた。

## 第二十一話 それぞれの心情

死ぬほど心が痛かった。

ローゼリアから話を聞いたとき、あたしは今まで感じたこともないほど強い痛みに襲われた。心臓が止まりそうな感じとでも言おうか、嫌だ嫌だと頭の中で誰かが泣き叫んでいる感覚。

ただのわがままで。

レオナードは悪くない。この国は一夫一婦制だけど、王様は何人側室を持っても構わない。極端に言えばいくら浮気しようとする罪ではなく、むしろ子どもができるから奨励される。だから　ローゼリアの部屋に通うのも当然なんだ。

だけど嫌だった。ローゼリアが来る前からあたしはおかしくなっちゃったのかもしれない。

こんな痛みを感じるくらいなら、いつそあの場所から逃げてしまおう。レオナードの元を去ったのは、そんな単純明快な理由。唯一心に引っかかったのは以前の約束だったけれど、彼は意外にもあっさりと撤回を許してくれた。

朝日が昇るドロシーシャの国は夢のように美しい。風を切る空気も、空から一望できる景色も、沸き上がるように広がる自然も、澄み渡った青空も。

これが、神の住まう世界の中心。なんとなく理解できる気がする。だって全てが完璧すぎるここは神話の世界のようだ。美しいけれど、美しすぎて影が見えない。物事には必ず光と影が存在するけれど、この国は光そのものなんだ。

さて、どこへ行こう。百を探すのはもちろんだけど、あたしはこれから一人で生きて行かなきゃならない。そう、一人で。

なんでだろう、自由になれて嬉しかったのに、胸を締め付ける痛みが増した気がする。本当はレオナードから離れるなんて嫌だった。ローゼリアが嫁いだときよりも何倍も嫌だった。離れたくない、そばにいたい。でもそれ以上に、あたしは痛みから逃げる自由を選んだんだ。それでいいじゃないか。

ぐちぐち考える女々しい自分は嫌い。でも頭から離れない、レオナードの全てが。

そう、認めてしまおう。あたしはレオナードが大切なんだ。愛とか恋とか、あたしはそういう感情を知らないけれど、失ったら心の中が空っぽになる程度は特別だった。だからこそ、今弱っている自分の心を休める時間が欲しい。ぐちゃぐちゃになった想いを整理する自由を、それからレオナードへ気持ちを考え直す機会を。そして何よりもローゼリアと顔を合わせたくない。そんなわがままを、今少し許してほしい。



ヴィラの居なくなったことで城中に衝撃が走った。仲が悪いと噂はされていたものの、このところ目立った喧嘩はなく脱走もしなくなったので安堵していたところにこの事件。一番目に見えて弱っていたのはシルヴィオだった。主を守ることができなかった自分の不甲斐なさに吐き気を覚えながら、また彼女が逃げた原因であろうレオナードをひどく恨んだ。

もちろん参っているのはシルヴィオだけではない、レオナードも同じだ。一日中凍りつくような空気を絶やさず、フォローしてくれるヴィラのいない食卓は、ローゼリアもさすがに嫌がって共に取ることはしなくなった。

もちろん、彼の変化にいち早く口を挟んだのは幼馴染のアルフレックト。そしてヴィラの教育係りを任されていたルードリーフ。

「陛下……」

「なんだ、報告があるならさっさとしろ」

「こんな時に、そういう言い方はないんじゃないですか？」

レオナードはバカバカしいと鼻で嗤い、再びペンを動かし始める。ルードリーフは先ほどよりも大きな声を出した。

「陛下、我々は陛下とエルヴィーラ様の間に何があったかは問いません。しかし、そうやって不機嫌を隠そうともせず露わになされば、国中を不安にさせることがわかりただけですでしょうか」

「不機嫌？どこがだ。俺は普通だが？」

「よく言いますねえ。俺たち以外誰も近づけないじゃないですか」

侍女も護衛の兵士も、皆レオナードに近づくことすらできない。もともと持っていたレオナードの気質もあるのだが、彼の持っているオーラは圧倒的に他者を抑圧する力がある。そこに彼の不機嫌さが加わることで、普段から話慣れていない者たちは怖がってレオナードの傍に寄れないのだった。こんなレオナードとまともに会話できるのは長年の付き合いがあるアルフレットとルードリーフ、そして気が強く物怖じしないヴィラ、空気を読まないお気楽主義のクロードくらいだろう。

「まあ、魔女さんに逃げられてショックなのはわかりますけど、いつまでもそうやって嫌そうな顔してたところで帰ってきません。陛下にはやるべきことがあるんですから、他所見する暇があったらきちんと仕事してください」

「アルフレットの言うとおりです。彼女ほど強い女性ならば一人でも生きていけるでしょう。今は居なくなったエルヴィーラ様に御心を砕くよりも、政庁の人事を・・・」

ルードリーフが言いかけたところで、レオナードは傍にあった花瓶を乱暴に投げつけた。

ガシャン！

と大きな音を立てて、ルードリーフの傍にあった壁に叩きつけられた花瓶は粉々になる。

「おい！レオナード、やりすぎだ！」

「うるさい、出て行け」

「陛下……」

「出て行け！」

あまりの気迫に身の危険を感じた2人は慌てて部屋を出た。レオナードは小さく息を吐いて頭を抱える。

こうなることはわかっていたはずなのに、うまく感情をコントロールすることすらできない。約束をなかつたことにしたいとヴィラが言った時、それを許したことを後悔していた。

「戻ってきてくれ、はやく……」

でないと、どうにかなりどうだ。

レオナードは苛立ちに政務を続ける気を失い、ふと窓の方を見ると棧に一輪の花が置いてあった。ここは4階、風で花が運ばれてくるなどあり得ない。

手に取ってみれば見た目よりもずいぶん軽い、鮮やかな青色の花弁が多い花。それはレオナードも見たことがない、非常に珍しい花だ。ここに運んできたということは、鳥だろつか。思いがけない拾い物に、レオナードはそれをテーブルの上に置いた。

ヴィラは時が来れば必ず連れ戻す。その前に、彼女の脅威を始末してしまおう。

レオナードは再びペンを握って政務に戻った。

「キリエラ」

男は上機嫌な猫撫で声で女の名を呼ぶ。扇で口元を隠した黒衣の美しい女は男の呼び声に振り返った。

「キリエラ、聞きなさい。とうとうあの魔女が居なくなった・・・  
これでお前を正妃にできるぞ！」

嬉しそうな表情をする男だが、逆に女の顔には影が落ちた。

「しかし・・・彼はすでに私の情報を掴んでいる様子。下手に名乗りを上げれば罪に問われるかもしれません」

「エルヴィーラを殺そうとしたくらいで陛下はお咎めなさらないだろうさ。なにより陛下とあの女は大層仲が悪い。むしろ喜んでおられたはず」

「しかし彼はジキルド・カトレアを処罰なさろうとした」

「それはあの男がバカなのだ。陛下の御身まで脅かそうとするから・・・。そんなことよりもキリエラ、お前は王妃の座につき、陛下を虜にすればいいのだ。惚れ薬の作り方でも復習しておきなさい」

女は控えめに「はい」と返事を返した。男は満足そうに笑い、ワイングラスを手取る。

「キリエラ、お前はこの世の誰よりも美しい。咲き誇る華もお前には敵わない。美しいと噂されるエルヴィーラもお前の前ではただの凡人に成り下がるだろう」

「恐れ入ります」

「神が王を決めるなど、おこがましいことよ。人の頂点は人が決めるのだ。神などおらずとも、魔女さえ居れば力は手に入る」

女は目を細めて男を見た。男はそんな女の様子に気づくことなく、ぺらぺらと話を続ける。

「ドローシヤ王国、中心の国、魔女の国、神の住まう世界の中心。よいかキリエラ、我々の手でこの国を変えるのだ。必ずや王座を手に入れて、世界を統一する」

それこそが正義だと、男は笑ってグラスを傾けた。

空を飛ぶ便利さを覚えたら止められない。百を探すのもすべて空から行った。まだ見つかっていないけれど、あの子を探すことはあたしの願いだから続けている。

雪がちらちらと舞い初めて、この国にもやっと冬が来たのだと知った。確かに最近寒いとは思っていたけれど、この国の気候は穏やかだから厳しい寒さはなく分かりづらい。

雪の冷たさから逃れるために、あたしは木の太い幹に座って止むのを待った。

「レオナード……」

何故だろう、会えなくなってから日に日に痛みは増していく。普通はだんだん記憶が薄れていくはずなのに、余計に会いたくなるのはどうしてだろうか。

さんざん暴れて、さんざん迷惑をかけて、それでも優しく笑ってあたしを迎えてくれたレオナード。いつも呆れたような顔をしながらも許してくれた。ゴツゴツした大きな手も、あたしを支える逞しい腕も、耳元で囁く甘い声も、綺麗に澄んだ青い瞳も。

何もかもを、愛しいと思う。

愛ってこんなに自然なものだったんだって、あたしはやっと今頃気づいた。彼のためなら何をするのも厭わない。王妃としてではなく、あたしとして。王としてではなくレオナードとして。そう考えれば、王と王妃の地位も全く嫌ではなかった。あたしを縛るであろう家族の存在だって、レオナードになら束縛されても苦しくない。むしろ、そばにいられることが幸せだと思う。

ローゼリアのことは……仕方ない。だってレオナードは王様だから、そんな彼も含めて大切にするならあたしも覚悟を決めなきゃいけない。愛って同時に苦しさも孕んでいるだと思いついた。

百。

あたしはもう一度、彼に受け入れてもらえるだろうか。勝手に出て行ったりして愛想を尽かしただろうか。お前みたいに、何度突き放しても何度酷い言葉を吐いても、見捨てないでいてくれるだろうか。それが怖い。怖くてたまらない。

「百……」

でも迷わない。あたしにはもう迷う余地も残されていないみたいだから。

## 第二十二話 紹介状

4日後の昼下がり。

「手紙？」

執務をこなしていたレオナードは手を休めて眉間にしわを寄せる。ルードリーフはロウソクの朱印で封を押された封筒を差し出した。レオナードはそれを乱暴に開け、アルフレットは中を覗き込む。その手紙の差出人はフェルディナンド・オルドリッチだった。

「なんて書いてあるんだ？」

「エルヴィーラよりも容姿が美しく、非常に賢い魔女が知り合っている。新しい王妃に迎えては・・・と」

内容は新しい王妃を迎えないかという紹介の手紙。

3人の考えていることは同じだった。ジキルド・カトレアが死に際に『卿はキリエラ様を王妃の座につけようとしている』と言ったこと。もしもこの魔女がキリエラならば・・・

「卿とはオルドリッチ宰相殿のことなのでしょうが」

「そうかもしれないな」



まさかこんな形で敵から飛び込んでくるとは。

手紙の文面には、いかに知り合いの魔女が美しく素晴らしい女性か、いかにヴィラがレオナードに相応しくなく手を煩わせていたかを延々と綴られていた。

「どうやら噂が功を制したようだ」

「どうということですか？」

「オルドリッチは俺とヴィラの仲が悪いという噂を真に受けたりしない。おそらく、ヴィラに対して仕掛けた罠を俺が喜んでいるとも思っているのだろう」

ヴィラを貶す文章でそれを確信する。そして彼よりも上の立場など王しかこの国にはいない。つまり事の首謀者は彼で間違いないだろう。

これが終われば、ヴィラを迎えに行ける。レオナードは薄く笑った。

そんなレオナードを不思議そうに見やりながらもルードリーフが言う。

「しかし彼はオルドリッチ家の当主。しかも政府のトップでございますよ？彼がゾロア教徒など・・・あり得ないのでは？」

「どうだろうなあ、政治家って変人が多いからさ」

オルドリッチ家といえは国内でも一・二を争う有力貴族。宰相のフレディナンドは3千年ほど前から国を統括してきた革新派の優秀な官吏だ。もし彼が異教徒であればドロージャは大変な衝撃を受け

るだろう。

「でもさ、カトレア財務長官と宰相ってかなり仲悪くなかったっすか？」

「わざと仲が悪いふりをしていたか、ジキルド・カトレアを脅しでもしたのでしょう」

一通りの問答が終わると、レオナードは頷いてアルフレットを見た。

「フェルディナンド・オールドリッチを審問会にかける。アルフレット、すぐに捕える。例の魔女も一緒にだ。もし抵抗するようならば収集をかけ、国中から魔女を集めて助力を頼め」

「魔女・・・まさか攻撃して来ないっすよね」

「それはおかしな話よのう」

真っ青になるアルフレットだったが、突然女の声が聞こえた。煙にまかれた卓上から真紅の瞳の女が現れる。黒いローブを着た、なかなか美人な女だった。目を見張って口を開くルードリーフ。

「ベルデラ王妃！なぜここに！」

「少し気になることがあってのう。お主らの話によると、その魔女とやらはゾロア教徒に加担しておるそうじゃの」

レオナードは頷いた。

「異教徒かはわからない・・・が、ヴィラに危害を加えようとした

のは間違いないだろう」

「それはあり得ぬ」

3人は同時に眉をひそめた。

ジキルド・カトレアが死に際に魔女の存在を白状した。よって敵に魔女がいることは間違いないのだ。

「お主らは不思議に思ったことはないかえ？ 魔女はこの国にしか生まれぬ、が、生まれた後どこの国に行こうが魔女の自由じゃ。魔女とはもう、個人差はあるが人間が持っていない不思議な力を操る、その力は大きな利益も不利益も生むことができるのじゃ。しかし魔女は決して他国に行くことはない。他国はこぞって魔女を望んだが、歴史上一度も領いた魔女はおらぬ」

「どういう意味だ」

「魔女には生まれつき本能が備わっており。それは“ドロージャの王”を裏切れぬ本能じゃ。理由はわからぬが、必ずそうなのじゃ。王には決して逆らうことはしないぞえ。だから敵に回る魔女などあり得ぬのじゃ」

「では、キリエラという魔女は魔女ではないと？」

「さあ、そこまではわからねにもわからぬよ」

その本能が本当に存在するならば、ますますキリエラの存在が怪しくなってくる。もしかしたら架空の人物かもしれないし、あるいは魔女のフリをしているだけか。考え込んでいる3人のうち、口火を切ったのはルードリーフだった。

「しかしエルヴィーラ様は陛下にずいぶんと逆らっていたようですが……」

確かに、と2人は頷く。ヴィラは最初から結婚を嫌がったり逃げ出したりと王に従順な様子は欠片も見当たらなかった。ほぼほとベルデラは高らかに笑う。

「あの娘はのう、異世界で育った所為かまるで魔女の本能が備わっておらなんだ。つまりヴィラがこの国を裏切る可能性がある唯一の魔女。よってこの国の脅威とならぬよう王妃にしたのじゃ」

「なるほどな……」

ところで、とベルデラは話を変える。

「肝心のヴィラはどうしたのかえ？」

一気に部屋の空気が凍りついた。しかし返事をしないわけにもいかず、レオナードの様子を見ながらルードリーフが答える。

「エルヴィーラ様は……10日ほど前……城を去りました」

「はっ」

ベルデラは腹の底から声を出す。片眉をあげてレオナードに顔を近づけた。

「とうとう逃げられおったかバカ者め」

レオナードはベルデラの目力に負けじと睨み返す。

「ヴィラが今どこにいるかわかるか、ベルデラ」

「3日前普通にわらわの家に来たのう。特に変わった様子は無かったのじゃが……。お主、ヴィラに何かしたのかえ？」

「何も……。むしろこっちが理由を聞きたいくらいだ」

ふむ、とベルデラは考え込む。薄い唇を噛みしめて、どこか遠くを見つめながら話し始めた。

「ヴィラは縛られるのを嫌がるであろう？」

「ああ、家族が欲しくなかった、だそうだ」

「あの娘は虐待を受けて育った所為もあるが、非常に自分の身を守ることに長けておる」

え？と3人は同時に聞き返した。ベルデラはうむ、と重々しく頷く。

「囚われれば逃げられぬ、信じれば裏切られる、弱味を見せては付け込まれる。ああ見えて酷く臆病な子じゃ。しかし同時に優しさも持っていてのう、危害を加えぬ限り全て受け入れる度量も持っている。そして活発で破天荒でどこか抜けているように見えるがの、恐ろしく頭の良い賢い娘じゃった」

「……エルヴィーラ様は一度も講義を聞いてはくださりませんでしたか？」

ルードリーフの文句も仕方ないことだろう。アルフレットもレオナードもヴィラが講義の度に寝ていることはよく知っていた。

「ほほほ、政治・経済・法律・魔術そして心理学、ヴィラは好んでこの5つの専門書を読み漁っておったのう。言ったじやろう、ヴィラは臆病じゃと。自分を守る術を身につけるためには手段を選ばぬ。すぐ手が出るような乱暴者じゃが、知識がいかに武器になるかをよく知っておった」

ベルデラはまるで娘を見るような暖かい目でヴィラを思い出す。子を身籠れなかつた彼女にとって、弟子であるヴィラは自分の娘同然に思っていた。

「あの子は占術や呪術はまるでダメじゃが、それ以外ならば他に髄を見ぬ魔力の持ち主。底がない・・・とでも言うかの。特に戦争ではお主の助けになると思っておったのじゃが」

「だが、ヴィラは俺を捨てた」

レオナードが吐き捨てるように言い、2人は俯いた。しかし小首を傾げるベルデラ。

「それはちと違うと思うぞえ。この花はどうしたんじゃ？」

ベルデラが手に取ったのは、レオナードの卓上に置いてあった青い花。花瓶に活けられることもなく無造作に置いてあるが、今も色鮮やかに咲いている。

「4日ほど前か、窓の棧にあつたので拾ったが・・・放置してもまったく枯れないんだ」

ほほほとベルデラは独特の高笑いで嬉しそうに笑った。紅の瞳を少女のように輝かせて。

「これは作られた花じゃ。この魔力はヴィラじゃな」

「魔女さんが？」

「よかつたのう、愛想を尽かされたわけではないそうじゃ。この花がある限りレオナード、お主は半永久的に死なぬよ。身代わりの花と言ってな、お主の受けた傷はすべてこの花が請け負う。ほほほ、ヴィラはこの手の魔術 他に魔力を注ぎ込む魔術が得意じゃからのう。大切にされている証拠ではないかえ？」

「・・・戻って、来るだろうか」

レオナードが呟くように言った言葉に、ベルデラは自信満々で言いきった。

「あの子は立ち直りが早いからの、すぐに戻ってくるだろうのう」

審問会への訴状を渡されたオルドリッチは怒りに狂っていた。顔を真っ赤にし、訴状を持っている手がガクガクと震えている。

「どういうことだ！なぜ！」

「卿……ですから申し上げましたのに」

女はため息を吐いてやや呆れたように言った。オルドリッチは齒ぎしりすると訴状を睨む。

あの男ならば自分の多少の罪は見逃すと思っていた。それだけのことを自分は今まで行い、そして成果と功績を長年積み重ねて来たのだ。しかし……レオナードはオルドリッチが思っていたような人間ではなかったらしい。

「認めよう、私は少し陛下を見くびっていたようだ。いきなり魔女を差し出すなど早計であった。しかもう我々は後戻りできぬ」

「はい……」

「こうなればもう他に方法はない。キリエラ、陛下を葬ることはできるであろう？」

女は突然の頼み事に困った顔をする。

「殺すとなると……それ相応の魔力が必要です。わたくし程度の魔力では、直接陛下とお会いしないことにはどうにも……」

「では審問会が最初で最後のチャンスだ」

オルドリッチは目を光らせて歪んだ笑いをした。



「運が良いな、キリエラ、審問会にはお前も来るように書いてあるぞ」

「……わたくしもでございますか」

「これで直接陛下に会うことができる。会ってすぐ、お前は魔術を使い陛下を殺すのだ。そしてその混乱に乗じて王座を奪う。幸いなことに王は代替わりしたばかり、側近も盤石ではないであろう。あちらには魔女がいない……が、こちらには魔女がいる。圧倒的にこちらが有利だ」

女は不安そうな憂いを帯びた目でオルドリッチを見つめた。オルドリッチは優しく彼女の白い手を取ると軽く口づける。

「よいな？我々に残された道はそれしかないのだから」

「……わかりました、全力を尽くしましょう」

弱気だった女の瞳に、強い意志が籠った。

## 第二十三話 キリエラの正体

始まりの鐘が鳴る。

審問会は神に誓い真実を話すという由来から、神殿で行われるのが慣行となっていた。8千人を収容できる神聖な広い空間、一番奥には片手に杖を持った神の銅像、その少し手前には王のイスがある。もちろんそのイスに座っているのはレオナード、そして騎士であるアルフレットがその横に控えていた。それぞれの貴族の当主と政庁の要人しか出席できないこの会は、剣技大会のような熱気はなくピリピリした空気が漂う。

「では、これより審問会を行う」

審問会で口を開いてよいのは王または王妃、そして審問にかけられる罪人のみ。よって取り仕切るのも質問をするのも決定を下すのも、全てレオナードが行うことになる。

「連れて来い」

扉の前で控えていた兵士たちが、オールドリッチと黒のローブを着た女を中に入れた。女は黒いフードを被っており、表情どころか肌さえ見えない。2人は中央に敷かれた白いカーペットの上を歩き、決められた位置まで来ると跪いた。

「お前はキリエラ、という名で間違いはないな」

「はい」

高く澄んだ、迷いのない声だった。オルドリッチは横目で彼女を見やる。

「では、フェルディナンド・オルドリッチ、キリエラの審問会を始める。まず初めにオルドリッチ、お前とジキルド・カトレアとの関係を聞かせてもらおうか。ここにいる皆も知っていると思うが、彼は先日ホラージユの州軍を動かして王と王妃の命を狙った罪人である。その彼が死に際に魔女の名を幾度も口にしていた。つまり」

周りの厳しい視線がオルドリッチに集まった。

「お前の所有するその魔女、キリエラのこと間違いはないだろう」

「お待ちください陛下。キリエラは魔女ではありません」

オルドリッチの否定にレオナードの眉がピクリと動き、それを見逃さなかったオルドリッチは口早に続ける。

「本当でございます。私が新しい王妃に紹介しようとしていた女はこの者ではございません。それに魔女ならば他におりましよう？なぜ彼女がカトレア財務長官の言っていた『キリエラ』と同じ人物だと言えるのです？名前などいくらでも偽れます」

「その女が魔女ではない証拠は？」

「ではその剣でこの女を貫いてごらんなさいませ」

ざわざわと辺りが騒がしくなり、女はオールドリッチの方を向いた。

「剣技大会の時、陛下はご覧になったでしょう。エルヴィーラ王妃が矢に貫かれても全く傷を負わなかったのを。魔女ではないキラエラは確実に死ぬでしょう」

「この女を殺しても構わぬというのか？オールドリッチ」

「身の潔白を証明するためでございます。大変気に入っていた女ではありませんが、陛下に信用していただくため……涙を飲んで耐えましようぞ」

オールドリッチは今がチャンスだとばかりに女に目配せをし、女は頷いて歩を進め階段を1段づつ上って王座の目の前まで来ると、ゆっくり片膝をついて頭を下げた。  
レオナードは皮肉そうに笑う。

「そんな趣味はないのだがな」

「陛下……そんなことをおっしゃらず。キラエラ、今だ」

女は頷くと、ロープの下から長剣を取り出してそれをレオナードに向けた。辺りが騒然とし兵士が慌てて駆け寄るがそれをレオナードは制止する。

「罪を認めるか、オールドリッチ」

「残念でございましたなあ、彼女が魔女だと気づいていたならもっと警戒するべきでございますよ陛下」

アルフレットが剣を抜く暇もなく、女は高く振りかぶって勢いよく切った。レオナードは腰の剣を抜いてそれを受け止めたが、魔術を使ったのかレオナードの剣をすり抜けてしまう。ぐさり

と重たい音をさせてレオナードの身体を剣が引き裂いた。真つ青になり怒号の声を上げる観衆、まさか王が切られるとは思っていなかった兵士は混乱状態に陥る。

オールドリッチは満足そうに高笑いをした。

「よくやったキリエラ！私は王座を篡奪した！王はこの私だ！同志よ、今こそ立ち上がる時！」

観衆の一部　貴族と政庁の要人の一部　はオールドリッチと共に歓声を上げた。困惑しますます動けなくなった兵士へ追い打ちをかけるように、兵士の一部からさえも歓声を上げる者が現れる。

「同志よ、新時代だ！神などいらぬ、これからは人の国を作るのだ！」

オールドリッチは恍惚とした表情で天を仰いだ。アルフレットが彼に切りかかるうとしたが、どこからか現れた黒い布に金の刺繍がある服を着た連中が、素早く取り囲んでアルフレットの動きを封じた。

「今ここに宣言しよう！私、フェルディナンド・オールドリッチはこれよりドロシヤの国王に就任する！反対する者は国外追放、しかし私について来る気がある者は歓迎しよう！」

金切り声が上がった。世界の理を信仰するこの国ではとても受け入

れられない考えだった。神が王を決め、選ばれた王が治めることのない国などドロシーヤではないのだ。オールドリッチは天敵の魔女を引き連れてはいるが、やはりゾロア教徒だと知らしめるには十分な言葉。

「そしてフェルディナンド王は、今までの功績を讃え王妃にキリエラを迎えよう！」

「嫌です」

女がさらっと言った言葉に、しーんと辺りが静まり返った。オールドリッチの表情が一瞬だけ固まる。

「キリエラ、何を言う・・・お前を王妃にしてやると言ったであるう」

「ええそうでございますね。しかし貴女の妻になるのは死んでも嫌です」

「キリエラ!？」

女はローブの下で薄く嗤うと、素っ頓狂な声を上げるオールドリッチを見下して続けた。

「わたくしの夫は生涯レオナード陛下のみでございますゆえ」

「ずいぶん大がかりな芝居を打ったものだな」

低く唸るような声を上げたのは、先ほど切られたはずのレオナード。しかし彼は肩肘をつけて王座に座ったままオールドリッチを見下ろし

ている。実はずっと静かに様子を窺っていたのだが、驚愕と興奮に忙しかった皆は気づかなかつたらしい。

「な………ぜ？」

オールドリッチは目を見開いたまま表情を凍らせている。助けを求めて女を見たが、彼女はオールドリッチと目を合わせようともしない。

「キリエラ、どういうことだ。きちんと息の根を止めよ！」

「そろそろ察してほしいね、これだから馬鹿は困る」

フードの下から聞こえて来たのは、先ほどのような細かい声ではなく色香に満ちた妖艶なソプラノアルトだった。黒いマントを脱ぎ棄てて現れたのは漆黒の髪と瞳を持つ美女。げっ、とアルフレットの声が響いた。

「嬉しいよ、オールドリッチ。あたしが作った泥人形をずいぶん気に入ってくれたようだな」

「………なんだと？」

「お前がキリエラと呼んだ魔女はもういらぬから壊したよ。悪いな、あたしの本名はキリエラではなくエルヴィーラだ」

エルヴィーラ、第一王妃の名。

オールドリッチは口をぽかんと開けたままヴィラを見上げ、レオナードは呆れたようなため息を盛大に吐いた。

「こそこそ何をやっているかと思えばお前は………」

「敵の中枢にいると情報ががっぱりそのまま入ってくるから止められなかったんだ。あ、前異教徒が一人脱走しただろうか？あれ、逃がしたのあたし」

泳がせてみるとあっさりとジキルド・カトレアの元へ帰って行った。それから芋づる式にどんどん繋がっている人物が分かり、オールドリッチに取り入るのは思いの他簡単だったとヴィラは言う。

「幻術でこんなに簡単に騙されるとはね……。ま、これで人事は一掃できるだろう？オールドリッチに加担していた奴らは自ら名乗りを上げてくれたようだしな」

先ほどまでオールドリッチの宣言を狂喜乱舞して喜んでいた連中は、顔を真っ青にして気絶する者まで現れた。王が無事であることを知り落着きを取り戻した兵士たちは、機敏な行動でそれらの者たちを素早く捕えて回る。

レオナードは目の前に立つヴィラを見て苦笑を洩らした。

「まあいい、帰ってきてくれるな？夫は生涯俺一人なのだろう？」

「……戻ってもいいのか？」

心配そうにレオナードの顔色を窺うヴィラに、レオナードはいつもの優しい微笑みを浮かべた。



レオナードはヴィラの手を引つ張り神殿を去ると、部屋に戻って彼女をベットのの上に落とした。覆いかぶさるレオナードの影がヴィラの顔にかかる。

「レオナード……」

噛みつくようにキスをすると、何度も何度も唇をむさぼる。身を振ってピクリと反応するヴィラに、レオナードはその大きな支配欲を満たした。押し返していたヴィラの腕も、諦めたのかレオナードの首に回る。

「……もう帰って来ないと思った」

唇を離れたレオナードは青い瞳を揺らし、切なげに眉をしかめる。目の前に居るのはヴィラ。会いたくて愛しくて堪らなかった、まぎれもない彼女。

「レオナード」

ヴィラは今までにない優しい声で彼の名を呼び、白く細い指でレオナードの輪郭をなぞった。口角を上げて誰もが頬を赤く染めるほど綺麗な笑みを浮かべる。

「よかった、あんな風に出て行っただから、嫌われたかと思った」

「それはこっちの台詞だ」

2人は見つめ合い、再び会えた喜びと安堵にクスクスと笑い合う。  
レオナードの口付けが雨のように降ってきて、ヴィラはくすぐったさに身を振った。

レオナードは額を合わせて顔を近づけ、触れるか触れないかのところで口を開く。

「ヴィラが城を去る前、約束をなかったことにしてほしいと言って俺が頷いただろっ?」

「うん」

「あれは撤回しない」

逃げてもいい、離れてもいい。

でも。

「だから新しい約束をしてくれ。帰ってくるのは必ず俺の下だと。逃げて離れても、俺はヴィラを待ち続ける」

ヴィラはレオナードの真剣な声に息を飲むと、目尻に涙を溜めて頷いた。

## 第二十四話 それから

審問会の後、城内は人事整理に奔走していた。ここで意外にも活躍したのはヴィラ。ずっとオールドリッチの元に居たので全てを知っているのと同時に、ベルデラの言うとおりの存外頭が良いらしく政務処理が鬼のように早かった。

「なんだこのミミズの這ったような字は！！書き直せヘタクソ！！」  
そして厳しかった。

あまりの辛辣さにルードリーフはレオナード2号などと言い出す始末。レオナードが注意するときは静かにかつ一言でバツサリ切り捨てるのだが、ヴィラの場合は怒鳴り散らしチンピラのごとく恫喝する。よって以前は執務室から顔を青くして出て行く者が多かったが、今は涙目になって出て行く者が多い。

そんなヴィラではあるがやはり役に立ち、レオナードの仕事量がぐんと減ったため人事整理さえ終わればよく暇を取れるようになった。

「・・・確かに助かるが泥人形を使うのはやめてくれ」

そう言っただけ願うのはレオナード。  
ヴィラの作る泥人形はどれも本人そっくり。しかし人手は増えるものの本物のヴィラが分からなくなる上、本物と泥人形を同時に見た者は驚いてひっくり返ることもある。

「いいじゃん、ただ身体が泥でできてるだけで中はあたしなんだし」

「……どっちが本物かわからなくなる」

ヴィラはお菓子を口の中でもごもごさせながら「そう?」と呟いた。それからヴィラは泥人形でシルヴィオやアルフレットを作るようになり、本人たちに全力で頭を下げられたのもう作るのは止めたのだそう。

帰って来てよかったって、今では心から言える。

あんなことがあったけど、レオナードは以前のように優しくしてくれてあたしは幸せだった。やっぱり人前では恥ずかしいので手を繋いだりはしないけど、レオナードは目が合ったとき優しく微笑んでくれるようになった。それを目撃した侍女が何人が倒れたらしいけど……。まあ、レオナードのあの表情は色気の塊のようなものだからな。

レオナードが書類を見て不思議そうな顔をしているので、覗いてみると彼の手にあったのはオールドリッチの納税記録だった。

「どうしたんだよ、特に変わったところはなさそうだけど」

「いや、今年に入って慈善事業にかなりの額が投じてあるが……。オルドリッチはそのような男ではなかったんだが……」

「ああ、それ使ったのあたし」

やっぱりお金はあるところから使わねえと！

と思つて、あいつのお金を使って勝手に病院作ったり孤児院作ったりしてみた。オルドリッチはキリエラという架空の人物を……まあ一応あたしなんだけど、かなり信用してたらしくて全然バレなかった。

ちなみにキリエラという名前は紀藤恵理・エルヴィーラの最初と最後の文字を取つてくつつけただけ。師匠かレオナードくらいに分かると思つてたんだけど、誰も気づいてくれなかったのがちよつと残念。

レオナードは呆れたように盛大な息を吐く。

「驚いた？」

「お前の突拍子もない行動はもう慣れた」

あ、ひでえ。

でもそんなレオナードが好きだ。……けど、まだ言えてない。

「どづしたんだ？」

「いや、なんでもない」

どうしよう。こんなに気持ち伝えるのが大変だなんて思わなかった。しかもとんでもなく恥ずかしい。人前でキスする方が100倍マシ。。。

大体伝えたところでそれが受け入れてもらえる確証なんてない。レオナードにはローゼリアもいるから、あたしの気持ちを知ったところで気を使うだけかもしれないし。

いろいろ考えて唸っていると、そう言えばとレオナードは思い出したように問う。

「そもそもヴィラは何故城を出て行ったんだ？」

「えーーーーーっど……………」

言えねえ！ローゼリアに嫉妬してそれが辛かったなんて口が裂けても言えない！

っていうか順序が逆じゃないか。嫉妬してたなんて知られたら気持ちバレてしまっじゃん。

返答に困っていると、ガチャリと扉が開いてアルフレットが入って来た。

「陛下ー、資料持ってきたっすよー」

天の助けだとばかりにアルフレットを拝んでみた。

「え？え？俺銅像じゃないっすよ？」

意味不明な返しをされた。

ヴィラの行動が少しおかしい。

彼女が帰って来た後、触れ合うのは初めてではないのにかなり恥ずかしそうにしていた。もちろんそんなヴィラもかなり可愛かったのだが。拒絶されることはないものの、笑いかければ頬を染めて視線を逸らし、どことなくよそよそしい。普通の女性ならあり得るが、いつも堂々としていた彼女からは考えられない変化だ。

もしかしてまた原因は俺にあるのか？ヴィラをまた傷つけてはいないだろうか、苦しめてはいないだろうか。また彼女がこの城を去ってしまったら、またあの苦しい日々の繰り返しだ。もう二度と離れたくない、そのためにはできるかぎり努力したい。俺はヴィラをこの上なく大切にしているつもりだったが、それが彼女は嫌だったのだろうか。そもそも彼女を苦しめた原因は？

「そもそもヴィラは何故城を出て行ったんだ？」

「えーーーーーと……」

ヴィラは視線を泳がせて言葉を濁す。

青くなったり赤くなったり目の百面相をするヴィラは、何かを言いか

けては口を閉じ、言いかけては口を閉じを繰り返した。

そこにアルフレットが来て邪魔をされ話を聞くことはできずに終わる。しかし、また同じことをその日の夜に聞いてみた。

「あの・・・えっと・・・」

再び百面相。表情がコロコロ変わる様子は可愛らしいが、いい加減に理由が気になってくる。そんなに言いにくいことだろうか、と。

俺はヴィラが隣で笑って居てくれればそれでいい。帰ってきてからはシルヴィオが四六時中いつも付き添っていて正直うざ　邪魔ではあったが、特に不満は無いし幸せだと思う。

では彼女が望むものは？やはり彼女の友人なのか？

「ヴィラ、答えてくれ」

答えてくれ、俺がお前の傍にあり続けるために。

ヴィラはものすごく困った顔をして、キョロキョロを助けを求めるように辺りを見回している。しかし夜のこの時間、王妃の私室に人が訪れることはない。頬にそつと触れると、彼女はビクリと身体を震わせて涙目になった。

まさか・・・

「触れられるが、嫌・・・なのか？」

あまりにも彼女が淡泊だから考えていなかったが、初めから俺が無理やり彼女の意味も聞かずに　。手に入れた喜びからあまり彼女を休ませることもせず毎日通ったが・・・それがいけなかった



のだろうか。

「えっ……」

ヴィラは再び赤くなったり青くなったり百面相を始めた。しかし少し待っても彼女の口から否定の言葉は出ない。

「ヴィラ……」

そつと頬に添えていた手を離すと、彼女は目を丸くしてその漆黒の瞳で俺を見上げる。

「レオナード？」

「ヴィラ……今日はもう部屋に戻る。お前も明日のために早く寝るんだ」

直接繋がっている扉から部屋に戻った。彼女が隣にいない夜は、以前彼女がいなかった頃と何も変わらないわけじゃない。共に在る幸せを知った以上、身を切るように辛い。ヴィラの甘さも美しさも知った上で触れられないなど拷問だ。

しかし自分の心の底をなかなか明かさなない彼女。今まで嫌がっていなかったなど、何故俺は思っていたのだろうか。

あれからヴィラはますます困った表情をするようになった。彼女が近くに居るといっのに禁欲生活を強いられている俺は　自分で言うのもなんだが機嫌が良くない。もちろん2人きりの時は極力優しく……しかしできるだけ触れずに過ごしているつもりだが、あ

まりこの状態を長く続けたくないのは俺の我儘だろうか。

2人きりの夜。ベットに入るまでの自由な時間は、せめて彼女の傍にいたい。そう思って俺から彼女の部屋を訪れていたが今晚は違った。

シャワーを浴びて髪を乾かしていたところに、パタンと扉を閉めてもたれ掛かるヴィラが現れる。

「珍しいな、ヴィラからこの部屋に来るのは」

ずいぶん前の話だが、以前ヴィラが盛大に扉を殴り壊したとき以来だ。あれは呆れるどころかかなり可笑しかった。

「う、うん・・・あの・・・」

遠慮がちに話しかける彼女は可愛いのだが、らしくないのでこちらの調子が狂ってしまう。

「おいで」

手招きしてソファに座るよう促すと、彼女はなんのためらいもなく近づいて来てストンと座った。すぐ傍に居るヴィラの艶めかしい肌が見えて、手を伸ばしかけたが理性でなんとか押し留める。

ヴィラは俯いたまま膝に乗せた手をキュツときつく握って口を開く。

「あの・・・さ」

「ああ」

「あたしは・・・嫌じゃないんだ」

触れられることが。

たったその一言で身体の底から歓喜が沸き上がる自分は、我ながら単純だと思う。ヴィラは言いづらそうに言葉を選びながら、ポツポツと話し始めた。

「えっと・・・言い難いんだけど、あたしにとってちゃんとレオナードは大切だから　百とどっちが大切かって言われたら困るんだけど、今では結婚したことも後悔はしてないし、魔女として王妃になったことも嫌だとは思ってない・・・ぞ?」

ちらりと上目遣いで顔を覗き込んできたヴィラに、俺は欲望に抗える気がしなくてそのまま腕の中に閉じ込める。背に回った細い手に、抱き締めた小さな身体に、どうしようもない幸せを感じて熱いため息を吐いた。

嫌われていなかった。

だから、彼女は俺をいつも受け入れてくれていたんだ。拒んだことなどすらなかったんだ。たとえ彼女が城を去った時でさえ、身を案じてか身代わりの花を俺に贈ってくれた彼女。

「では何故出て行ったんだ?」

彼女がオールドリッチの下で動いていたとは言え、それはただの泥人形、ヴィラ自身が動く必要はなかったはずだ。俺が出て行った原因ではないのなら、ますます理由がわからない。

「あー・・・えー・・・自分の気持ちに整理をつける・・・ため?なのか?」

「・・・俺に訊かれても」



その日、鬼の形相で城を駆け抜けたヴィラは、50m走の最短記録を更新したのだそう。

## 閑話 騎士たちは見た

オレは知っている。ヴィラ様は少なからず陛下を想っていることを気づいたのは第二王妃が城に来る前日、ヴィラ様が泣き崩れているのを目撃してからだ。彼女自身何故自分が泣いているのか理解できていないようだったけれど、傍でずっと見守っていたオレには解る。

確かに陛下とヴィラ様は仲が良いとは言えないが、それでもどこか通じているような気がしている。言葉に出さなくても分かる何か・・・テレパシーとでも言おうか、突っかかるような言動も嫌味も、陛下とヴィラ様はできるだけ自然であるようお互いに気を遣っているだけじゃないだろうか、と。

最もアルフレットさんは初めから陛下とヴィラ様を見ていたので、仲が悪いと信じて疑っていないようだったが、彼よりも行動を共にすることが多いオレにはなんとなく解るんだ。

一方陛下はヴィラ様に関心がない、・・・ことは全くの間違いだっただ。執着を見せなかったのは、彼が政局を気にしての行動だと気づいたのは最近の話。あまり陛下がヴィラ様に気を遣う素振りを見せれば、政治上それをよく思わない連中を刺激することになる。城中の異教徒分子を始末した今ではあまり関係がないが、なにしろ陛下が王になったのはつい一年前のことだという。慎重になって当たり前なのだ。

それを理解できると、必然と陛下がヴィラ様を大切にしていることに気づく。一番顕著なのは第二王妃に対する陛下の態度だろう。ま

ず、相手にしない。そして会おうともしない。しかしヴィラ様には陛下が空いた時間に様子を見に来ることを考えれば、どう考えても陛下はあれだ・・・ヴィラ様に惚れているんだろうとしか考えられない。

どこか複雑で、でも単純なもどかしい陛下とヴィラ様。騎士という身分であり出張ったことはできないが、静かに応援しようと思う。

けど応援は全く必要なかったようだ。

ヴィラ様がキリエラに扮していたことが判明した翌日、オレはヴィラ様に頼まれていた資料を執務室に届けると、ソファに横たわった陛下の胸の上で覆いかぶさるように寝ているヴィラ様を見てしまった。その様子はまさに仲睦まじい夫婦そのもので・・・。普段と違った空気に心臓がドキドキとうるさい。

ああ、なんかものすごく見てはいけない物を見てしまった気がする。案の定、陛下は鋭い目で俺を睨むと、顎をクイツと動かして出て行くように無言で命令した。もちろん俺は資料を傍にあるテーブルに置くと、できるだけ音を立てないよう静かにその場を退出した。

あの様子だと誰にも邪魔はされたくないだろうと思い、少し離れたところで見張りをしていたらアルフレットさんがやって来た。彼は気さくで単純明快な性格をしているが、陛下の騎士であると同時に隠密部隊隊長の仕事もこなしているかなりのやり手。まともに殺り合えば、元殺し屋のオレも敵わないだろう。

「よしす」

「お疲れ様です。執務室なら入らないほうが身のためですよ」

「なんだ、またレオナードの機嫌悪くなったのかあ？」

「いえいえ、と首を横に振ると、こてんと首を傾げてわからないという仕草をするアルフレットさん。」

「理由はまあ・・・そのうちわかりますよ。ただ陛下は誰にも部屋に入れたくないようでしたので」

「そっか、まあいいや。急ぎの用じゃないしな」

言葉を濁した説明にも納得してくれたのか、アルフレットさんは踵を返すと大きく伸びをしながら去って行った。

オレが願うのはただひとつ、ヴィラ様の幸せ。2人が上手くいったのなら、それが一番いいと思う。

そのためにも2人の時間を邪魔させるまいと、オレはそれから3時間ほど廊下に立って人払いをすることになった。

レオナードは淡泊な性格をしている。そのレオナードの機嫌に僅かな波が現れたのは、魔女さんが城に来てからだ。表立って機嫌を悪くすることはなかったが、突然機嫌がよくなったかと思えば突然悪くなる。そんなレオナードは27年間、傍でずっと見ていた俺



にも不思議でならなかった。

なーんで、こんなに揺さ振られているんだろうかと思えば、ある日今までにないほど不機嫌・・・というか苛立った様子を露わにした。そう、魔女さんが城を去った日だ。仲が悪い悪いと思っていたが、レオナードはまんざらでもなかったのか、やはり魔女さんがレオナードの感情の鍵になっていているらしい。その証拠に魔女さんが城に戻って来た日からすぐぶる機嫌がいいのだ。しかしそれから数日後のこと、また機嫌が悪くなったから魔女さんと何かあったんだろうな。仲直りしてくれたのか、今日やっと機嫌がよくなってホッとした。レオナードと魔女さんは皆の前で態度を変えないから気づいてない人が多いけど、俺はレオナードの幼馴染だからあいつの機嫌でないとなくわかってしまう。何があったかまではわからないけど。

まあ夫婦なんだから、もう少し仲良くなってくれば申し分ない。こっそりレオナードを応援しようと思ってたんだが・・・。

「・・・だろっ?」

ボソボソと這うような声が聞こえてきて、俺は慌てて足を止めた。はつきりと何を言っているかは聞き取れないけれど、声の主は間違いないレオナード。

「・・・も」

そして魔女さんだ。廊下のご真ん中で何してるんだろっという好奇心に負けた俺を許してくれ。できるだけ気配を殺さず、自然を装って陰に隠れた。

「なぜ？」

「だって……ここ廊下なのに……」

「いいじゃないか」

「でも……」

「大丈夫だから」

なんだコレ。なんの会話だよ。どう考えてもいつも言い合いをしている2人の会話とは全く別物だ。声は本物なんだが……。  
うーん、やっぱりこのシチュエーションはあれしかない、男が迫って女が困る……いわゆる公衆の面前でイチャついてる場面。

「でも誰かに見られたら……」

見られなかったらいいのか！？

「誰もいない」

「もし居たら殴るぞ」

「ああ」

ああああああああ、これ以上はもう聞きたくないぞ！  
慌ててその場から離れれば、途中でシルヴィオと出くわした。

「お疲れ様です」

「・・・よつす、これ以上先には行かない方がいいぞ」

まさかのラブシーンに遭遇する上に、たぶんレオナードから制裁を食らうだろうから。たったその一言でシルヴィオは理解できたらしく、ああと首を縦に振って納得したようだった。

「またあの2人ですか」

「知ってるのか？」

「オレも目撃しましたから」

・・・なるほど。気づいていたのは俺だけじゃなかったらしい。

「あの美貌が並べば目の保養どころか凶器ですよ。特に陛下は、男のオレでも赤面しました」

顔は見えていないが声を聞いたのでわかる。あんなに色気のある甘つたるい声を聞いたのは初めてだ。迫られているのは俺じゃないのに、何故かドキドキした。侍女たちが目撃でもすれば・・・ひっくり返るかもしれない。

「・・・とにかく、あの2人はなるべく」

「見て見ぬフリをしましょう」

心が通じた俺たちは大きく頷き合った。



## 閑話 アルコール

ある肌寒い日の食事中のお話。

ローゼリアの居なくなつた食卓は心なしか静かで落ち着いている。パクパクと一人前を平らげたヴィラの前に食後の紅茶が出てきた。

「あー、暖かい」

「寒いなら着こめばいいだろう。なぜそんなに薄着なんだ、風邪をひきたいのか？」

「ヤダね。雪だるまになるくらいなら風邪ひいた方がマシだつつの」

「・・・バカは風邪ひかないんだつたな」

「んだと!?!」

以前の言い合いにアルフレットとシルヴィオは心から安堵した。この会話に安心する要素はないが、ヴィラが城を去つたときよりずっと落ち着く。それほどレオナード一人の食卓には、目の前にあるからっぽの彼女の席が痛々しくて見ていられなかった。

「んじゃーレオナードが着こめばいいだろ!そしてモコモコになれ!」

「モコモコ？冗談じゃない。誰がなるか」

「モコモコ！」

「生憎鍛え方が違うんだ、そう簡単には風邪をひかない。ヴィラのよ用にバカではないがな」

会話の内容が幼稚だがそこは気にしないことにする。

目の据わったヴィラがカップを傾けたところで、その手を止めて首を捻り紅茶を覗き込んだ。

「なんか身体がポカポカする・・・っ!？」

ガタン!!

と大きな音を立ててヴィラはイスから落ち、その場に両膝をついて屈んだ。

「ヴィラ!？」

「ヴィラ様!？」

「おい、どうした!」

血相を変えて駆け寄る3人。ヴィラは両手で口元を覆い、苦しそうに眉をしかめている。

「まさか毒か!？」

「医者を呼んでくる!」

アルフレットが扉の向かおうとしたそのとき。ぬっとヴィラの手が伸びてレオナードの腕を掴んだ。

「だ……いじょう……ぶ……」

途切れ途切れの声は明らかに大丈夫ではない様子。焦ったレオナードはヴィラを横抱きにしてベットに横たえようとしたが。抱きかかえたところでヴィラに強く抱き返され、顔を覗くと頬が赤く染まっていた。

「ヴィラ？」

「アルコール……入ってた……みた、い」

カクツと力を失った身体に、レオナードらの緊張した表情が一気に解けた。先ほどの紅茶にブランデーが入っていたようだ。今日は冷えるため、気を利かせた侍女が入れたのだろう。有事ではなかったことにホッとしながらも、あの程度のアルコールでダウンするヴィラはよほど弱いらしく心配になった。

「とりあえず寝なさい。そのうち酔いも醒めるだろう」

レオナードはベットに向かおうとしたが、イヤイヤとヴィラは首を横に振る。午後の政務を控えているレオナードはシルヴィオたちに任せようと思ったが、その考えは一瞬で葬り去った。たとえ騎士であろうと、この状態のヴィラを他の男に任せるわけにはいかない。

「陛下……後はオレたちが……」

「却下」

即答だった。アルフレットとシルヴィオは呆れた顔でレオナードを見る。

「だけど政務はどうするんすか？」

「どうにでもなる」

それよりも今はヴィラだ。楽な体制にさせようとソファの上に降ろしたが、距離を取ろうとするレオナードにヴィラはキュツと抱きついて離れない。

あまりの可愛らしさにレオナードの表情がだらしなく緩んだ……  
・が慌てて引き締める。一部始終を目撃したアルフレットたちの顔は見事に引きつっていた。

「……寒い」

「ではシーツを……」

「いらない」

このままでいいと赤い顔で抱きついてくるヴィラにノックアウト寸前のレオナード。あまりの居た堪れなさに騎士の2人は目を両手で隠して見てないフリをする。

レオナードはクラクラする頭を手で押さえ、ヴィラを抱きかかえなおすと寝やすい体制にさせた。ヴィラはあっさりと目を閉じて、すやすやと心地よさそうに静かな寝息を立て始める。

一斉に男3人のため息が重なった。



酔ったヴィラが暴れ上戸じゃなくてよかった。しかし・・・

「起きたときが怖いっすね・・・」

アルフレットが言うとおり、起きた時にどんな反応をするだろうか  
と想像して、男3人は再び大きなため息を吐いたのだった。

目をパチリと開けると目の前にレオナードの青い瞳があった。朝・

・・・?

「大丈夫か？」

え？なにが？ってかあたしソファで、しかもレオナードの上で寝て  
たの？良く状況が掴めず首を捻っていると、扉の前にアルフレット  
とシルヴィオの姿があつて、あたしは慌ててレオナードから飛び退  
いた。

「何事!？」

「覚えてないのか・・・」

レオナードは遠い目をしている。一方騎士たちは何故か後ろを向い

て人形のように直立不動になっていた。  
えっと……確か食事中……。だったよな。それからいつも通り会話をして……。それから

「あ—————!!」

思い出したあたしは絶叫して座り込んだ。うわうわうわ!!信じらんない!!人前で抱きついたり……。うわああああ!!シルヴィオたちが後ろ向いてる理由がわかった気がする。見てられなかったんだな……。

「誰だよ!酒入れたヤツ!」

「まさか侍女もこんなに弱いとは思っていなかったんだろ。あまり侍女を責めるな」

「そういう問題じゃねえ!弱いとか強いの前に、あたしはまだ未成年だああ!」

「……えっ!」

男どもの声が重なった。アルフレットとシルヴィオは振り返って、レオナードは目を見開いて、それぞれ面白いくらいに顔を引きつらせてあたしをまじまじと見た。

この国で成人年齢は21歳。お酒も21からだ。あたしはまだ18だからあと2年ちょっと飲んではいけないことになる。身体の成長(変化)が止まるのは25歳らしいけどな。

「……未成年?」

「嘘だろ……」

「そんなはずは……」

なんかぶつぶつ言いだしたレオナードたち。わかってるよ、老けることくらい！

「悪いかよ、これでもまだ18だ！」

「「「18!?!」」」

なんだ、今日はやけに八モるなお前ら。

「魔女さん、ある意味詐欺ですよ」

「てつきりオレより年上なのか……」

ずいぶん好き勝手ほざいてくれるな。さすがに苛立って額に青筋を浮かべれば、慌ててシルヴィオが両手を横に振った。

「い……いえ！大人っぽすぎるって意味です！いい意味です!!」

「わかったわかった。どうでもいいけどレオナード、人の身体まじまじと眺めるのやめろ」

それをセクハラっつーんだよ。注意されたレオナードは最後にあたしの胸を見て口を開く。

「……どうりで成長が止まっていけないわけだ」

ゴスツ！

と勢いよく腹を殴れば、レオナードは身体をくの字に曲げて屈んだ。痛そう、ってアルフレットが呟く。

「とにかく！あたしはアルコールダメなんだから、厨房にも侍女たちにも徹底させるよな！！」

もう二度と飲むか！！

しかし後日、2人きりになる度レオナードがヴィラにお酒の飲めと迫るようになってたそう。

## 第二十五話 出発

執務室の隣にある会議室、そこにレオナード、ヴィラ、新しく宰相に任じられたルードリーフ、そして軍のトップであるドラーク・デイツチ左将軍が集まっていた。厳かな空気に包まれたそこは、国の頂点に立つ者たちによる会議の場に相応しい。

「先日の事件で政府に巣食う異分子は排除した。異教徒もある程度始末し終え、正面から堂々と襲ってくるような輩はいない」

レオナードの言葉に左将軍とルードリーフの背筋が伸びた。ヴィラは足を組んだままチラリと視線を遣るのみ。

「よつてある程度国の体裁は整った。これからは新しい段階に入る」  
新しい段階、すなわち外交。ドロージャが世界の中心としての役割を果たすために、他国への牽制は欠かすことができない。魔女を後宮に入れた時点で歯向かうようなバカは滅多にいないだろうが、王が代替わりしたばかりの王国はなめられ易いのも事実だ。

「ドイツチ左将軍、近衛軍の現状は」

名指しされた左将軍は、「はっ」と短く返事を返す。

「先日問題を起こしたホラーシユ州を中心に全国各地に配備してお

ります。陛下のご命令があればすぐに王都に集めることも可能です」

「総数は」

「48万7千です」

わかったと短くレオナードが返し、今度はヴィラに問うた。

「2年前まで、ベルガラとオーティスが戦争したのを知っているな？」

別名ノルディ戦争と呼ばれたそれは、ドローシャの南東側に位置するオーティス王国と、東にあるヤルマ王国のもう一つ向こう側にあるベルガラ王国が、ノルディという土地の覇権を巡って半年ほど争った戦争である。決着のつくことがないまま休戦協定を結んだのが2年前。今は軍事的な衝突はないものの、いつ再び戦火が上がるかわからない一触即発の状態だった。

「ああ、知ってる」

ヴィラが頷くと、レオナードは頷き話を先へ進める。

「ならば話は早い。ドローシャの先王はこの戦争に介入しなかったようだが、オーティスに難民が出始めるとドローシャに流れ込んでくる。ベルガラの難民もオーティスかヤルマを通してこちらにやって来るかもしれない」

「ええ、厄介ですね。ドローシャの規則でも他国民の国内侵入は許されていませんが・・・いたずらに彼らを殺すわけにはいきません」

ルードリーフが取り出したのは一枚の世界地図。中央にある大きな大陸は逆三角形のような形をしており、その中心にある巨大な国がドローシャ王国で大陸の7分の1程度の国土を占めている。ルードリーフがペンで示したのはドローシャとその南東にあるオーティスとの国境線。

「今のところ目立った流民はいませんが、やはり山賊が多くなっているようです。もともとオーティスは小さな国ですから、また戦争が始まれば負けるでしょうね」

ベルガラ王国はそれをわかっているからまた戦争を仕掛けようと準備をしている。オーティスもオーティスで黙って待っているわけではなく、同盟国を当たって軍を貸してもらえるように外交を展開しているらしい。

「そこでだ、ドローシャはどちらにも与しないがこれ以上戦争が泥沼化させないように交渉を始める」

「ノルデイの扱いはどうすんだ？」

「それは我々に委託させよう」

要するに、全てドローシャに任せて大人しくしろ、と脅しをかけるわけだ。ヴィラは片眉を上げて足を組みなおした。

「ドイツ左將軍」

「はい」

「近衛軍をオーティスとヤルマの国境沿いを重点的に配置しろ」

ドローシャは歴史上他国を侵略しないが、軍を目の前に出すだけで十分脅しになるだろう。他国がこちらに逆らえないと分かっている以上、下手に相手の機嫌を伺うよりずっと手間が省ける。

「承知致しました」

「ヴィラ」

「ん？」

地図を眺めていたヴィラにレオナードは視線を向けると、青と黒の瞳がお互いの顔を映した。

「俺が直に交渉をかける。城を留守の間はすべての権限をヴィラに委託する」

「えー、あたしも行きたいのに」

「それはできない。国内で何か起こった時に困るだろう」

ヴィラは恨みがましい目でレオナードを睨むが、こればかりはどつしてやることもできないと言われてしぶしぶ頷いた。



幸せすぎるって怖い。

レオナードの顔を思い浮かべるが、どこからどう見ても文句のつけようがないってあんまりだと思う。切れ長の目はスツと涼やかで、鼻筋だって通ってるのに高すぎず低すぎず、青い瞳は宝石のように綺麗で見つめられたら赤面してしまうほど。レオナードの美人っぷりは女のあたしに対する当てつけかと思うほど憎らしい。

「もしかして、あたしって」

世界で一番いい男捕まえたんじゃない？ 正確には捕まえたんじゃないかって捕まったんだけどな。

そりゃ王様の元に嫁いだわけだから、贅沢し放題だし政治だってある程度好きなように動かせる。それはそれで魅力的な要素だとは思うけど、そういうのを抜きに考えてもレオナードは美人すぎるから問題だ。今は王様だから恐れ多くて近づけないという人の方が多いけど、レオナードは普通の貴族のままだったらものすごくモテていたんだろう。

王様だからローゼリアとかある程度の障害はあるけど、レオナードはこの上なくあたしを大切にしてくれる。シルヴィオたちもいるし、百さえこの場に居ればもう言うことないんだけどな。

「ヴィラ」

考えに耽っているとレオナードが部屋に入って来た。お風呂上りらしく髪を乾かしながら。

「レオナード……もう仕事終わったのか？」

「ああ」

まだ夕方なのに。

人事整理が終われば政務はホントに暇になったらしい。今まで忙しかったのは代替わりしたばかりで引き継ぎや法整備と人事の確認が煩雑だったから。それさえ終わればもともと仕事の早いレオナード、かなり暇を貰えるようになった。

「レオナードも紅茶飲む？」

「飲む」

指をパチンと鳴らすと、座ったレオナードの目の前にカップと湯気を立てているポットが現れた。むっとレオナードはそれに見入る。

「便利だな」

「だろ？」

一瞬で物を移動したり消したり現わしたりできる、テレポートを応用した移動魔術。ただし、肝心のレポートはまだ習得できていなかったりする……。

レオナードがカップを傾ける様子を観察する。なんでだろう、同じ生き物なのにこんなに動作が違う。指の動きひとつひとつに洗練された美しさがあるというか、一言で言えば上品だ。さすが貴族出身。あたしはただのヤンキーなのに。

「……なんだ、この差は」

「？」

不思議そうにキョトンとこちらを見るレオナードすら可愛く見える。  
「……………。おいおい、あたしの思考がおかしいぞ。一度医者に見てもらおうかな……………」

「…………暇、だな」

ぼつりと呟くと、レオナードはクスリと笑ってカップを置いた。

「侍女たちのお茶会は？」

「昨日した」

「城内の探索は？」

「もう全て見終わった」

頼まれた政務だってもう片付けたし、本当にすることがない。このまま後1万年も生きるんだと考えたら、途方もなく長いことのように思えた。

「じゃあ俺の出番だな」

何が？って聞き返そうとすれば、レオナードがすつと隣にやってきてあたしの身体を膝の上に乗せる。厚い胸板も筋肉のついた腕も、あたしとは違う異性なんだって再確認させられて恥ずかしい。

「嫌か？」

ふるふると首を横に振れば、レオナードは満足そうにあたしの頭を胸の中へ閉じ込めた。

結局あれから気持ちを伝えることはできていないけど、未だに言う勇気が湧いて来ないので彼の優しさに甘えさせてもらっている。だからできるだけ行動で示そうと彼の要望には応えているつもりなんだけど、それすらも勇気がいるから毎日大変だ。

「明日からは離ればなれだからな」

あ、忘れてた。レオナードは明日から交渉にベルガラへ向かうんだっけ。

「……ヤダな」

ホントに嫌だ。ため息交じりにぼつりと呟くと、レオナードは顔下半分を手で覆って横を向いた。……なんだ？

「……すぐに戻ってくる」

「すぐってどれくらいかかるんだ？」

「……1か月」

すぐ、ねえ。まだレオナードの下に嫁いでからまだ2か月、だけとんでもなく長かった気がするし色々なことがあった。これから1か月も離れなくちゃいけないなんて考えたくもない。しかも明日からだなんて……まだ気持ちに整理つけてないのに。

「寄り道するんじゃないぞ？」

「わかってる」

「帰ってくるよな？」

「当たり前だ」

帰ってくるまでに、できるだけレオナードの仕事がないようにしておこう。そしていつもレオナードがおかえりって言ってくれるみたいに、今度はあたしがレオナードを迎えるんだ。

「……浮気しないでね」

……おっとこれは失言だった。慌てて訂正しようとしたけど、何故かレオナードは喜んでて苦しいくらいにきつく抱き締められた。イタイイタイイタイ。

「ヴェイラ以外の女はいらない」

「……ん」

これだけの言葉が心に染みるように中へ入ってきて満たされる。そう、これが幸せって感覚。

重なった唇が信じられないくらい熱を孕んで、触れるレオナードの肌に泣きそうになった。1か月　とても長い時間、レオナードを忘れないように何度も何度も続いた。

朝。

天気は快晴、朝露の滴る中レオナードの出発式が簡単に行われた。同行するのはブライエ書簡長と50人の先鋭兵士のみ。ちよつと人数が少ないけれど、レオナードだから問題ないだろうということになったらしい。アルフレットも別の仕事があるので留守番だそうだ。隊列を組んだ兵士たちはドロージャ王国の大きな旗を抱えている。深緑に金色で文様が描かれていて、かっこいいけど持つてる人は重たいだろうに。

見送りに出て来たのはあたしと、珍しいことにローゼリアも表に出てきた。あたしが城に戻ってきてから、あたしに嘘をついたことを反省したのかあまり顔を合わせる事がなかったんだけど。

「行ってくる」

「うん、行ってらっしゃい」

レオナードは黒い馬に乗ると、あたしに背中を向けて出発した。大きな背中がだんだん小さく消えていく。どうか無事に帰って来ますように。

さて、留守番組のあたしはレオナードの普段の仕事もやらなくちゃいけない。仕事に忙殺されて、あつという間に1か月過ぎちゃえばいいのにな。

そんな淡い期待を持って、レオナード達の姿が消えたのを確認する

と城の中へ戻って行った。

## 第二十六話 行方不明

城を出てから約10日。この日は初めて天気が崩れた。

降り注ぐ冷たい雨が長い時間馬を走らせている兵士たちの体力を奪う。人気のない山沿いを走っているため、ここで休息を取るのも難しい。金髪のブライエ書簡長はレオナードと並走して訊ねる。

「陛下・・・、これ以上激しい雨になりますと隊列も乱れ統率も取り辛くなります」

レオナードは厳しい顔で頷いた。先を急くあまり、ここまで飛ばし過ぎたかもしれない。さすがふだんから鍛え上げられた肉体をもつ兵士だからこそ着いてこれたが、一般人だと最初の2・3日でダウンしていたことだろう。

「もうすぐ集落が見えてくるはずだ。そこで休息を取る」

ブライエは頭を下げ後の方に下がった。

雨雲に覆い隠された空と雨のベールで色を濁した森に、レオナードはどこか違和感を覚える。国から離れた所為かもしれない。ドロージャでは雨の日も自然はこのような姿を見せず、雨の雫に葉がキラキラと光るような幻想的な美しさがあった。しかしここにはそれがまったくくない。逆に自然はその猛威を奮い、人間に対して牙をむいている。



「風が出てきたな」

呟いた言葉は雨の音にかき消された。集落を目指して馬を速めようとしたところに、後の方から馬の悲鳴が響いてくる。

「何事だ！」

「わかりません！次々と倒れて・・・！」

叫んだのは兵士の一人だった。レオナードが剣を抜いて後方へ向かえば、そこには死んだように横たわる兵士たちの姿。血を流してはいないようだ。

「敵襲か？」

「いえ、不審な人物は見当たりませんでした！」

何事かと辺りを見回しているうちに周りの者たちもバタバタと倒れ始め、兵士たちは見えない敵に襲われているのだと悟った。恐怖と戦慄がその場に走る。

「隊列を乱すな！剣を取れ！」

レオナードの叫びに、兵士たちは剣を手に取って感覚を研ぎ澄ませる。こんな状況でも冷静でいられるのは、一重に彼らが戦闘に慣れたエリートだからである。そして王を守らなくてはならないという使命が、皆の心を奮い立たせていた。

しかし。また一人、また一人と倒れて行く。

「陛下、お逃げください」

「ここはもう無理です」

とりあえず場所を離れようということになり、移動を始めた一同だが、兵士が倒れる速度は増すばかり。ついにレオナードも激しい頭痛に襲われて、そのまま意識は闇の中に沈んだ。

「はあ！？連絡が取れなくなっただ！？」

どういうことだコリアと詰め寄れば、ルードリーフは青い顔で口をパクパクと動かした。

「ですから音信不通で……行方不明に……」

あたしは頭を抱えて座り込んだ。レオナードがベルガラに出発してから12日目。国内政治もレオナードの指示を仰がなくなっちゃいけない時があるから、連絡は調教したカラスを使って逐一報告を受ける手筈になっていた。

「……とりあえず、安否の確認」

「はいっ」

レオナードに贈った青い身代わりの花は、今も机の上で綺麗に咲いている。ということ、レオナード自身に傷がついたり衰弱しているわけではなさそうだ。

「近衛軍を動かして

は無理だな」

「はい……」

50万を一気に動かせば簡単に見つかるだろうけど、ドロシーヤの規則で近衛軍は王にしか動かせないことになっている。この“規則”ってのがものすごく厄介で、王にすら覆せないこれは向こうの世界の憲法のようなもの。法律だったらあたしも無視できるんだけど、規則だけは破ったらヤバイらしい。

「何故動かせないのですか？」

シルヴィオの問いに頭を働かせて別のことを考えながら答えた。

「規則4条、近衛軍は王の許可なしに動かすことはできない。9条の魔女の収集にも王の許可があるから……レオナードいないと何もできねえじゃん」

盲点だ。さっさとこんな規則無くしてしまえばいいのに、規則は建国の際神様から賜ったものだと言われていて、これだけは本当にどうしようもないらしいのだ。

「……なるほど」

「エルヴィーラ様、緊急事態です。州知事に呼びかけて全国の州軍を動かしましょう」

「いや、待った。最後に連絡が来たのは3日前だから、たぶんもう国外に出てるはずだ。州軍じゃ国外には出て行けないだろ。それに州軍を動かせば地方の警備が手薄になる」

「しかし・・・ヤルマに出るまでに10日以上かかります。まだ国内にいる可能性も・・・」

「カラスの往復時間を考えると連絡が取れなくなったのは7日目から10日目の間。あいつの体力ならその頃にはかなり進んでいたはず。国内で何か起こるとも考えにくいし、国軍ならともかく州軍を動かせば王が行方不明だと他国に知らせることになる。どんなに禁令を敷いても数を動かせば必ず情報は漏れるしな」

そんなことが国民に知れたらパニックになる。神に選ばれたドロシーの王とはいつも完璧でなくてはいけないのだから。行方不明だなんて論外。

「どういたします？」

心なしかルードリーフの声が震えていた。あたしは考え込むと彼の視線を捕えて頷く。

「王妃軍だけを動かそうか。5万程度なら秘密裏に動かせるし、少ない方が逆に統率を取りやすい。国軍だから外にも出せるしな」

「今はエルヴィーラ様のご友人を探しているとお聞きしていますがよろしいのですか？」

「中止させる。軍はクロード・フォーゲルに統帥を任せてある。あいつを呼べ」

ルードリーフは頭を下げると執務室から出て行った。くたあとテールブルにうつ伏せたらシルヴィオが心配そうにこちらを窺う気配を感じた。

「ヴィラ様・・・」

「大丈夫」

あたしがしつかりしなきゃ。レオナードは間違いなく生きてるんだから、後はなんとでもなる。身代わりの花・・・あと10個くらい作っておけばよかった。

それから10日間が経過してもレオナードの消息はわからなかった。もちろん連絡もなし。よほどあたしは怖い顔をしていたのか、アルフレットの身体がビクリと震える。

身代わりの花は相変わらず綺麗に咲いていて、絶対レオナードは無事なんだ。なのになぜ連絡が取れない？

「これは……捕縛されてる可能性が高いな」

連絡は取れない、けれど身体は無事。つまりは誰かに捕えられているって考えるのが自然だ。

ルードリーフやシルヴィオの顔が青くなつた。

「悲観するな、生きてるんだから。敵の目的がどうであれ、そのうち動きを見せるだろう。問題は相手が誰かということだ。あのレオナードを捕えたんだから、相当強いんだと思うんだけど」

強いなんてものじゃない。レオナードの剣術は桁違いで人海戦術なんて通用しない。賢いから騙されるようなバカでもない。

「もし襲撃を受けたとしたら恐らくオーティスかヤルマの領土内だろうから、国家絡みかもしれないな」

「まさか……」

ルードリーフはすぐに異論を唱えようとしたが、その先は言葉が続かなかつたらしい。オーティスとベルガラは休戦中とは言え戦争状態にあるのだ。レオナードを人質にするはずがない、などと言い切ることはできない。あたしだってまさかとは思っけど……。

「とにかく、いつ大事があってもおかしくない状況だ。ただ報告待ってるだけじゃ不安だし、あたしも直接探しに行くから」

「お待ちください！政務はどうなさるつもりですか！」

「ルードリーフに任せる」

「わたくしが!？」

あなた宰相になったんだろ、しっかりやれ。そう激励するとしぶしぶ彼は頷いた。そこへシルヴィオが前に進み出る。

「ヴィラ様……」

「シルヴィオはアルフレットと一緒に諜報活動しといて」

「畏まりました」

そうと決まったならぐずぐずしていられない。さっさと探しにいつてさっさと見つけてこよう。

空から探そうと窓枠に足をかけたら、あたしが鳥になれることを知らないみんなはぎょっとした。

「じゃ、後は頼んだ!」

そのまま飛び出すと鳥に化けて羽を広げると、すいっと風が身体を押し空を滑るように飛ぶ。後ろから3人に見守られて、とりあえずあたしはオーティスとヤルマとドロージャの国境が交わる場所を目指した。

## 第二十七話 偶然の再会

国境沿いはすべて見回ったんだけど、手掛りらしいものは見当たらず、結局オーティス国内の上空をウロウロしていた。さすがに三日間も空飛びまわってたら体力も尽きてフラフラだ。さぞかしおかしな飛び方をしてるんだろうあたしは、子供に指をさされて笑われることもあった。チクシヨウガキめ！

つーかもう無理、無理。レオナードが居なくなつた感傷に浸る暇もなく飛び回って、精神的にも体力的にも限界だった。ふらふらふらあっと墜落して落ちた場所は何故か人の頭。慌てて人に戻るとそのまま崩れ込んだ。

「いたあつ！」

「おっと、悪いな」

銀の長髪に紫の瞳の青年・・・あれ、どこかで見たことある・・・？上からあたしが降ってきて潰された青年は、当たり前だけにすぐく怒っていた。どっころしよと退けば剣を喉に突きつけられる。

「貴様！どこから入った！」

おっと、思い出したぞ。この人もしかしてオーティスの王様じゃなかったかな。顔はカッコいいんだけどレオナードに見慣れたあたし



は物足りなさを感じる。

「どこからって・・・上から？」

「真面目に答える！」

「そう言われてもなあ」

魔女です王妃です、なんて名乗ったら後が面倒だ。この期にオーテイス王城内を調べさせてもらおう。

「どうやってここに来たのか覚えてないんだ（半分本当だけど）。まさか道に迷った女を見捨てるほど甲斐性のない男じゃないだろう？」

にっと笑えば、銀髪の彼は顔を赤くして唇を噛んだ。

「ふ、不法侵入は不法侵入だ！捕えて拷問にかけろ！」

面倒だけどここで信用してもらえば後が楽だ。怒鳴りたい気持ちを抑えつけて冷静な対応をしようと思つて自分に言い聞かせる。ってあれ？

「・・・ん？不法侵入？ここどこ？」

ぱつと後ろを振り向けばバカでかいお城がすぐ傍にあった。あたしつてば、何も気づかずにここまで入って来たらしい。

「まあ、固いことを言わずに」

「バカかお前は！」

キャンキャンうるさいなあこの王様。ポメラニアンみたい。どう説明しようかと悩んでいると、ソロゾロと団体で人が駆け寄って来た。

「陛下ー！」

「陛下！ご無事ですか!？」

「ああ大丈夫だ。この女を捕えよ」

ええええ、あたし捕まるの？駆け寄って来たのは兵士たちらしく、黒の服にとろどろ銀色の金物がついた服を着ていた。彼らはあたしを見て何故か動揺した表情をする。

「え……この女性を……ですか？」

「当たり前だ」

「……本当によろしいのですか？」

さっさとしろと怒られて、彼らはしぶしぶといった様子であたしの手を掴んだ。遠慮しているのか簡単に振り払えるほどの力で。アホかこいつら。

「てめえら捕まえる気あんのか！さっさと手え縛れ！」

はいいと泣きそうになりながら兵士たちはあたしの手をロープを巻きつける。ついつい通りに叫んじまったあたしは、オーティスの王様に呆れたような顔をされたけど気にするもんか。

「陛下、その女は？」

またまた人がやって来たけど、今度は兵士じゃなくて普通の格好をした廃退的な感じの金髪の男。ものすごく不快そうな目で見られてイラツとしたから睨み返した。

「不法侵入者だ」

「不法？どこかの令嬢にしか見えませんが・・・」

「貴族の令嬢はこんな野蛮な言葉づかいしないし、上から降ってきたりしない」

「どうもすみませんねえ、庶民育ちで」

かなり腹立つ。けど嫁いですぐの頃、レオナードに散々言われたあたりはこれくらいでヘコたれねえ。これって成長したのかしてないのかよくわからないが、まあいい。牢獄に入れられても魂飛ばして探しまわれればいいし、拷問受けたところで痛くもかゆくもない。

「訊きたいことあるんだけど、ここってオーティスの王城だよな？」

「当たり前だ」

「あんだ名前は？」

「・・・ヒューバート・オーティス」

嫌そうな顔をしながらもわざわざ答えるなんて、変に親切だなこい

つ。不良になりきれしていない中途半端な田舎のヤンキーの匂いがする。

「ってことはやっぱり王様だよねえ」

「当たり前だ！」

レオナードと比べるのは可哀そうだけど威厳がない。可愛い弟って感じ。

「お前そんなことも知らずに入って来たのか？」

「いやー、疲れすぎて前後不覚状態でフラフラしてたからどうやって入って来たか覚えてないんだ」

「……大丈夫かお前」

「それがもう無理」

ホントに疲れてその場に座り込んだら、同情の視線と呆れたようなため息を貰った。すると金髪の男が王様に向かって口を開いた。

「陛下、騙されてはなりません。この女は貴族育ちではないにも関わらず肌も髪も磨かれています。それなりの裕福な男に囲われているか娼婦としか考えられません。よって飢えているわけがない。それに簡単に侵入できるような場所でもありません。つまりこの女は陛下を誑かすために来た他国の間者かどこかの回し者の可能性が高いかと」

「そうだな、捕えよ」

うわあ、流されやすいんだなこいつ。

結局あたしはおとなしく連行されることになって歩きだすと、突然何かがイノシシのように突進してきた。小さな何かがあたしに抱きつく。

「恵里ちゃん！」

「えっえっ百!?」

なんでここに!? 少し成長したようだけど、ふわふわな黒茶の髪も童顔も変わってない。あたしは勝手に手の縄を解いてその小さな身体を抱きしめ返した。

「よかった無事で！」

「百こそ！」

再会は本当にうれしい。百は小綺麗な服を着ていて、生活に困った様子はまったくなかった。森の中とか娼館とか最悪の場合も想定していたから、心底安堵して胸を撫で下ろす。

喜びに抱きしめ合っていると、さっきの王様がやって来てあたしから百をぺりつと引き剥がした。

「女、モモの知り合いなのか？」

「知り合いつていうか・・・生き別れた友達だけど」

「友達？」

復唱して王さまは嫌そうに顔をしかめる。百はキラキラとした笑顔で彼の袖をくいくいと引っ張った。

「ヒュー、あのね！あたしの探してた友達ってこの人なの！言ったとおりすごい美人でしょ！？」

異世界人！？と周りがガヤガヤと騒ぎ出す。なるほど、この人たちは百が異世界から来たことも知っているらしい。百ってば有名人なのか？

「とにかく話したいことたくさんあるし、中に入ろう？」

ね？とキラキラした笑顔に押し切られて、あたしと王様は苦笑しながら頷いた。

城の中に入って案内されたのは少し狭いけど立派な部屋だった。この程度で狭いって・・・だんだんあたしの感覚が狂ってきてる気がする。

「ほんと無事でよかったあ。恵理ちゃんなら野獣でも魔物でも負けないとは思ってたけど、やっぱり心配だったから」

「あたしは百の方が心配だったよ、ずっとね」

百はくすくすと笑って花のような明るい笑みを見せる。それはいいんだけど、なぜ王様が百の隣に当たり前のような顔して座ってるんだろ。紅茶を飲んで邪魔する様子もないし、百も嫌がってないようだからまあいいんだけど。

百はあたしをまじまじと眺めて、大きな息を吐きながら話した。

「すいぶん大人っぽくなったね・・・っていうかもものすごく綺麗になった。遠くから見ても気づかなかったもん」

「百はあんまり変わってねえな」

「う・・・」

項垂れる百もやっぱり可愛い。顔立ちがいいわけではないんだけど、この子は人の心をぽかぽかさせるような素養を持っている。それが気に食わず百にちよっかいを出す連中もいたけれど、そいつらはあたしが責任を持って徹底的に痛めつけてやった。

「百はずっとここに居たのか？」

「ううん・・・最初は森の中に落とされて、それから町のパン屋さんでお世話になってたんだ。あたし働いてたんだよ。でも2年前の戦争で無くなっちゃって・・・それから路頭に迷っているところをヒューに助けてもらったんだ」

ベルガラとオーティスのノルディ戦争。2年経ってもやっぱり傷痕はくつきりと残っている。それは人の心だったり自然だったり様々

だけど、そう簡単に癒えるものじゃない。当然ながらドロージャのように裕福ではないから、国力を立ち直らせるのもかなり時間がかかるだろう。

「そっか。王様と恋人？」

百は違う違うと笑い、王様は落ち込んだ。なるほど、そういうことね。

「今はこのお城で侍女として働かせてもらってるんだ。デイズニールランドみたいで素敵でしょ！？いろんなところにミッキー描いてみたんだ！恵理ちゃんもたくさん見つけてね！」

うわー、相変わらずだこの子。クスクスと笑ったら、百も安心したように柔らかく笑んだ。

「あたしたち不思議な世界に来ちゃったね。知ってる？寿命は一万年もあるんだって！あとなんだっけ・・・そうそう、世界の理っていうのがあって、中心の国？には神様が住んでるって！それから魔女とか人魚とか魔物とか・・・もうこの世界に来てびっくりしてばかりだよ」

「ああ、知ってるよ」

「そう言えば恵理ちゃんはどこに落ちたの？」

「あたしはドロージャの北の森。それからずっとドロージャで生活してた。今はヴィラって名乗ってる」

「ドロージャ!?!」



ここで何故か目を見開いた王様 確か名前はヒューバート が口を挟んできた。

「どうやって生活していたんだ。あの国は国民しか入るのも許されないはずだ」

「あーうん、拾ってもらった人がそういう面倒全部見てくれたから問題はなかった」

ふーんと納得いかないのか不満そうな表情をして彼は口を閉じる。百はニコニコ顔のまま王様に笑いかける。

「よかったよかった、あたしたち運がよかったね。ヒューにも会えだし、こうやって再会できたし」

「そうだな」

生き生きとした百は向こうの世界でもこの世界でも変わらない。羨ましい、その輝きが。

「恵里ちゃん？」

「・・・なんでもない。百はここが好き？」

「うん！みんないい人だし、この国が好き。すごく大切なの」

「そっか」

ごめんね、百。  
もしオーティスがレオナードに仇をなす敵なら、あたしは迷わずこの国を

消すよ。

レオナードを取り戻すためなら手段を選ばない。百を泣かせてもあたしはそうしなきゃいけない。それはあたしがドロージャの王妃として背負った責任。その責任から逃れられない以上、あたしにも選ぶ自由はないんだ。

でもね、百。あたしは後悔も躊躇もしない。あたしもあたしの大切な物を、本当に愛してるから。

## 第二十八話 オーティスでの生活

住む場所を貸してほしいと頼めばあっさりと受理された。たぶんあたしが百の友達だからなんだろう。

侍女の仕事がある百と別れて、ヒューバート（だっけ？）に案内されたのは敷地内にある小さな木造の小屋だった。他の塔からはずいぶん離れているしかなり質素。

中に入ると埃の匂いがぶわつと広がった。かなり汚れている。埃は積もり放題だしクモの巣はかかっているしかなり薄暗いし。一体何年掃除してないんだ。

「こんな部屋でいいなら使うんだな」

鼻で嗤うヒューバート。なんだよ、嫌がらせのつもりか？百が居なくなつた途端態度変えやがって！

「別に平気」

後で魔術でどうとでもなるし、人が寄り付かない場所のほうが動きやすい。ヒューバートはあたしの返答が意外だったのか少し悔しそうな表情をしてあたしを睨む。

「言っておくがモモの友達だからと言って特別扱いはしない。モモはいずれ王妃の位につく女性だ。だがお前はただの一般市民。それを忘れるな」

「……百を王妃に？聞き捨てならねえな。本人の許可なく決めるなんてずいぶん傲慢じゃねえか」

「そうせざるを得ないんだ。魔女の国　　ドローシャがモモらしき人物を探してる。もしもの話だが、レオナード王が王妃にモモを望めば余の力ではどうにでもならない。殺すと言われても……逆らうことすらできないんだ。オーティスの国力では3日もあればやられてしまう、それほど国の力が違い過ぎる。だから奴らの手が及ぶ前に王妃として迎えてしまえば、さすがに簡単に手出しはできないだろう？異世界から来たお前には理解できないだろうがな」

なるほどね。まさか公に探していたのが裏目に出るとは。彼らなりに百を守っていたんだろうから、匿っていたことは不問にしてあげよう。まあ、もちろん本人の意思なしに結婚なんて絶対許さないけど。

「とにかく百を助けてくれたのは感謝するけど、もし嫌がるようなことを強要するんだったら許さないからな」

「……わかってる」

ヒューバートは赤くなってボソリと呟いた。からかったら背中を思いつき叩かれた。

ヒューバートが寝所のある塔に戻ると、笑顔の全開の百が駆け寄って来た。ヒューバートは嬉しそうに目尻を下げる。

「ヒューー！恵里ちゃんはどう？」

「疲れてたらしくすぐ眠ってしまったよ」

そっか、と百は肩を撫でおろして息を吐く。

「恵里ちゃんはものすごく強くてかつこいいんだよ。きっとヒューーともすぐ仲良くなれると思うの。美人だしそのうち玉の輿結婚しそ  
うだよな」

ヒューバートは心の黒い部分を押し殺して笑顔を向けた。そんなマネはさせない、自分が幸せにするのは百だけだ、と。彼女の権力に縋って寄って来た寄生虫が幸せになるなど、どうしてもヒューバートは許せなかった。

「あの女は本当に友達で間違いないんだな？」

「うん、もちろん間違いないよ」

百は仕事があるから、と手を振って部屋から出て行った。入れ替わりで金髪の男が入ってくる。どこか廃退的な危うさを持った、水色の瞳の美丈夫だった。

「アレフ、あの女に見張りは付けたな」

「はい、滞りなく」

金髪の男           アレフ・ダグラスはしつかりと頷く。

例え百の友達であろうと、ヴィラに心を許すつもりは微塵もなかった。敵国の・・・ベルガラの回し者である可能性もあるのだ。あの並みはずれた美貌も怪しいし、出自も定かでないヴィラは疑われて当然だ。

今は次の戦に備える大切な時期。情報漏れを防ぐためにも、絶対に間者を入れるわけにはいかない。

「不審な動きがあればすぐに報告しろ」

「御意」

もし敵側の人間だったら迷わずに殺す。それはヒューバートの王としての宿命。たとえ百に泣かれても頼まれても、それだけはどうしようもできない。

ヒューバートは大きなため息を吐くと、政務のために部屋を出た。

起きたらもう外は薄暗くなっていた。だいぶ時間をロスしたなあ

思いながら、ベットから出て汚れた部屋を見渡す。狭いし家具は痛  
んでるし・・・まあよくも城内にこんな小屋があるもんだと感心し  
ながら、泥人形に入れ替わると掃除を始めさせた。本体はあたしを  
見張っている人たちに見えないよう、滅術を使ってこそつと小屋の  
外に出る。

さあ、どこから探そうか。

無難に地下？国家ぐるみだったとしてもさすがに上層部の人間しか  
知らないだろうし、どこかに隠されてるんだと思うけど。

城内をウロウロしてみると意外と狭いことに気づいた。もちろん一  
般的な感覚からすればとんでもなく広いんだけど、ドロージャの王  
城のような気の遠くなる広さじゃない。それに造りがとっても単純  
だ。

中央にあるでかくて太い建物　あれが政治の中枢になっている、  
政庁のある塔だ。それから北・東・西にある塔につながっていて、  
北は後宮、東は王の寝所、西は迎賓館。南には大きな門があつて、  
さらに離れた王城の敷地の外に神殿や図書館がある。

一応建物内は隈なく探してみたけど、特にレオナードが閉じ込めら  
れていそうな場所はなかった。こんな時に占いの才能があればなあ  
と思うんだけど、こればかりは授からなかったから仕方ない。

とりあえずある程度見回つて、お腹がすいたので小屋に戻ることに  
した。見張つてるやつらにバレないようにこっそり泥人形と入れ替わ  
り、ずいぶん綺麗になった部屋を見回す。ちよつと奥の方に行けば  
かまどがあつた。

かまど・・・ってどうやって火を起こすんだろう。師匠の家に居た  
ころは魔術でパツと何でもこなしてたし、城に来てからは厨房を  
覗いたことがないのでわからない。っていうかあたし、火の起こし  
方どころかこつちの生活様式全然知らねえかも。

かまどつてことはガスコンロじゃないから手動？で火を起こすんだろうけど。まさか石の摩擦で・・・なんて原始的なやり方じゃないよねえ。ロウソクなら見たことあるんだけど。

何か役に立ちそうな道具はないかと見回せば、紙でできた手のひらサイズくらいの箱があった。スライドして中を見るとマッチが一回り大きくなったような棒がある。かまどの隅の方で擦ると火が出たので中に放り込んだ・・・けどしまった、薪がない。想像通り、火は燃え移るものがなくてプスプスと煙を上げながら消えてしまった。

「まいつか」

よく考えたら火を焚いても食糧がないし。よっぽど疲れてたの何か何も考えてなかったや。もう夜中で誰も起きてないだろうから、明日街に出て何か買おう。・・・ってあれ、オーティスのお金ってドロージャのお金と同じなのか？・・・まあいいや、きつとなんとかなる。洗って干していたシーツを取り込み、ベットに敷くところんと寝転がった。

次はシャワー・・・ってどこにあるんだろう。再び立ち上がり厨房のある部屋のさらに奥に、小さいけど一応お風呂があった。かなり狭いけどちゃんと湯船もついてるし問題はなさそう。

・・・お湯、どうやって沸かすんだろう。

ああもう、なんだこのループは！物は試しだと蛇口つぽいものを捻ってみたら超冷たい水が出てきた。温度調節できるようなそれらしいものはなし。さすがに冬に水風呂は嫌だ。

ちよっと魔術でズルしたいけど、さっきからずっと誰かに見張られてる気がする。オーティスの隠密は気配隠すのヘタだなあ。いちい



ち幻術使うのも面倒だし、かと言って追い払っても怪しまれるだろうし。そもそもお風呂まで覗くなんて……変態？

……うーん……、明日ヒューバートに頼んで止めてもらおう……ってか百に相談した方が早いかもしれない。百の頼みだとヒューバートも惚れた弱みで断れないだろうし。とりあえず今日は水に濡らしたタオルで身体を拭くだけにしよう。もちろん見張り役さんたちには幻術で誤魔化させてもらおう。

この世界に来てもう3年ちょっと経つけど、己の無知さを思い知った一日になった。明日からはもうちょっとマシな生活ができることを祈っとく。

第二十九話 依存と・・・

翌朝、あたしは百に誘われて一緒に朝食を取っていた。久しぶりに会えた上にこうして一緒に食事できる日が来るなんて・・・感慨に浸りながら百の笑顔を堪能する。

食事はほとんどドローシャのものと変わらないので安心した。ちょっと違うのは質。ドローシャだと毎日とんでもない高級品ばかり並んでいたから、やっぱり舌が肥えてしまったらしい。オーティスも料理人の腕がいいからかマズくはないんだけど。

「・・・で、なんでまたあんたが付いてくるわけ？」

ヒューバート、お前は百の保護者か？友達同士で食べてるんだから、少しは気を利かせてくれればいいのに。しかも昨日の金髪の男も黙って傍に控えてるし。騎士かなこいつ。

彼はギロリとあたしを睨むと、右の口角を上げて嫌味な笑いをしながら口を開いた。

「邪魔したのはそつちだろう。食事の時間はもともと余とモモの間だったんだからな」

「今日くらい譲ってくれてもいいだろ、どんだけ心狭いんだよ」

「なんだと！？余に文句をいうつもりか！？」

むかー。王様だと何しても許されるとでも思ってたのかな。まあ許

されるんだけど……。

「まあいいや、そんなことよりさ、あたしに付けた見張りさんたちを退かしてもらえると嬉しいんだけど」

その瞬間ピクリとヒューバートの眉が動いてフォークを持った手が止まった。

「見張りって？」

「隠密のこと。まあ忍者みたいな感じで、昨日からずっと見はられてるんだ。シャワー浴びることもできねえ」

百は眉を寄せて困ったようにヒューバートを見た。

「ヒュー、そんなことしたの？」

「……女、なぜわかった」

彼は試すような目であたしを見抜く。紫の瞳はものすごく綺麗だとは思っけど、やっぱりあたしはレオナードの青い瞳の方が好き。

「だって昨日天井からゴンツって音がしたあと、「イテッ」って声がしたから」

これは実話だ。どれだけ間抜けなんだと思ってたけど、その場で聞こえないフリをしてあげたあたしはものすごく優しいと思う。ヒューバートは額に青筋を浮かべると、静かに「そうか」と漏らした。

「ヒュー、恵理ちゃんは皆を裏切るような人じゃないよ」

涙目になった百を、ヒューバートは慌てて宥め始めた。“裏切るような人”だから百は間違ってるんだけど、警戒したところで一般人があたしをどうこうでできることはない。

あたしは食器をすべて下げてもらうと、方肘についてニツと笑った。

「警戒するなり疑うなりどうぞお好きなように。ただし百に危害を加えたり、一日中覗いたりしないなら・・・の話だけ」

ヒューバートはしぶしぶ頷いた。

「後、お間抜けな隠密さんたち、なんとかしたほうがいいんじゃない？」

「う・・・うるさいっ」

戦争で人手不足なだけなのかもしれないけど、下手な隠密は逆効果だ。本当に敵を警戒するつもりがあるなら、最初から他人を城内に入れなければいい話。百を拾ってくれたことは感謝するけど、そんなこと普通王様はしない。不法侵入されたことにしても、レオナードやあたしだっただけならすぐにその場で殺すから。その点、この若いヒューバートは未熟だし甘いと思う。

「ま、お仕事がんばって」

ひらひらと手を振ると、情報収集のためにその場を後にした。

ヴィラが部屋を去った後、ヒューバートはひと際大きなため息を吐く。あの女は侮れない、それにどこか見下されている気がする。機嫌が戻った百はニコニコしながら紅茶に砂糖を混ぜ、それをヒューバートに手渡した。

「ありがとう」

「どういたしまして」

百がこの城に住み始めてからもう2年近くになる。だからヒューバートは百の性格を熟知していた。

純粹無垢で穢れがなく、心根が真っ直ぐで嘘がつかない、正直で素直で絵に描いたようなお人好し。どうやって今まで生きて来たんだろうかと考えさせられるほど、本当に変わった女の子だった。

だからこそ不安になる。百は本当にヴィラと望んで友達になったのだろうか、と。

「モモ」

「ん？」

「あの女はどんな奴なんだ？」

百は思い出し笑いなのか、ふふふと嬉しそうに破顔する。

「聞きたい？」

「ああ、聞かせてくれ」

ん、わかった。と百は頷いた。

「恵里ちゃんはね、ヤンキーだったの！」

「ヤンキー？」

「えっと、不良でわかるよね？チンピラとかゴロツキみたいな」

彼女の言葉づかいや態度から妙に納得できたヒューバートは空笑いをする。不良は名誉なことだとは言えないのに、なぜか百嬉しそうに話していた。

「今から6年前、同じクラスだったけどあたしも恵理ちゃんもあまり学校に行ってなかったし、怖かったから話しかけることもなくて……。ただある日、あたしが男子にからかわれて困っているところを助けてくれたんだ」

すごく嬉しかったと、頬を染めて百は目を閉じた。ドジで引きこもりがちで友達もおらず、クラスの誰も助けてくれなかった。そんな中、一人で男子全員を相手に堂々とした態度が百が憧れる姿そのものだった。

「それから……。あたしどうしてもお礼を言いたくて……。でも勇気が出なくて困った時に、恵理ちゃんから話しかけてくれたんだ。それから仲良くなりたくて、会話は苦手だけど付いて回ったら呆れられたけど笑ってくれて、そのときの笑顔がものすごく綺麗で……。ここまでは普通の友達……。だったんだけどね」

百の表情に影ができ、ヒューバートは心配そうに顔を覗き込んだ。

「ある日わかっちゃったんだ。恵理ちゃんとあたしの共通点が」

それが、両親との不仲と暴力。

正反対だったけど、2人は同じだった。全く同じ苦しみに遭って、たまたま違う道に逃げただけ。百の家庭の事情を知らなかったヒューバートは顔を真っ青にして口を開きかけたが、それは百が静止して話を続けた。

「でもねっ、あたしの家はそこまで酷くなかったの。両親が完璧主義の人で・・・あたしが出来が悪かったから苛立ってただけ。ちゃんと普段は可愛がってもらったし、愛情がなかったわけじゃなかったから。でも・・・恵理ちゃんは違った。存在を拒否されて、まともにご飯も食べさせてもらえない。いつも身体をボロボロにされて・・・。だから恵理ちゃんは外に出るしかなかった。

・・・でももう、限界だったんだと思う。ものすごく強くてしつかりしてて、頭も良くて運動もできて・・・本当にあたしと正反対だったけど、いつつ心の中で泣いてた。あの日・・・あたしと恵理ちゃんがこの世界に飛ばされた時、なんとなく思ったんだ。“神様が恵理ちゃんを助けてくれた”んじゃないかなって」

自然の多い所へ行きたいと言われた時、百は怖くて仕方なかった。もしかしたら、生きるのを諦めたんじゃないかと。

「あたしたちね、普通じゃないんだ。お互いに依存して、お互いでお互いを支えあわなきゃ生きて行くこともできなかった。あたしは怖がりで人が苦手だったから恵理ちゃんの強さが必要だった、恵理ちゃんは孤独であたしの弱さが必要だった」

「そうか・・・」

ヒューバートはそれ以後押し黙ってしまい、百は柔らかく笑んで彼を見た。

「惠理ちゃんは根はいい人なんだけど、ずいぶん曲がり道な人生歩いてきたから誤解されやすいんだよね。大丈夫、悪い人じゃないから」

「・・・わかった」

ヒューバートは控えていたアレフに目くばせすると、立ち上がって百の額に口づけを落とす。

「政務に行ってくる。今日モモの仕事は一日休みにしたから、あの女と遊んでくればいい」

「ありがとう！」

ヒューバートが部屋を後にすると、百は軽く息を吐いて窓から見える空を眺めた。これから何が起こるか分からないけれど、皆に幸せな結末が訪れますようにと祈りながら。



冷たい水で顔を洗うと、タオルに顔を埋めた。レオナードがいなくなっ  
てからもう何日目かすらわからない。ただ恐怖や不安を感じら  
れないほど一心不乱になっていたから、ここに来てレオナードが居  
なくなっただけを実感した。

百に会えたのは本当にうれしい。けれど、あの子を見るたびにあつ  
ちの世界を思い出す。

苦しい、痛い、辛い、憎い。負の感情を凝り固めたような心は、今  
でもあたしの中の大部分を占めている。その中の僅かな光が、百の  
存在だった。ただ笑って隣に居てくれるだけで自分を保つことがで  
きた。それだけあの子の何にも穢されていない純粹さが必要だった。

異世界に飛ばされて家族と会わなくなり、あたしにはもう百の存在  
がなくても自分の足で歩けるはずだった。けれどあたしは相変わら  
ずに百を必要とした。

弱かったから。

だけどその弱い自分を受け入れてくれた存在、それがレオナード。  
レオナードが居たからあたしはまた自分を保つことができた・・・  
っていうのはちょっと違う。レオナードはあたしの弱い部分を理解  
してくれて、あたしは自分から目を逸らさずに見つめることができ  
た。あたしは自分で自分を認められるようになった。だからあたし  
は弱くてもその弱さに押しつぶされることはなかった。  
感謝している。あたしを傍に置いてくれたこと、受け入れてくれた  
こと。

レオナードがいなくてもあたしは生きていける。だけどあたしはも  
しレオナードが死んだらその後を追うだろうと思う。それだけ愛し  
てる自覚はある。

これは依存じゃない。もっともつと心の奥深いところにある感情。

「恵理ちゃんっ」

部屋に飛び込んできた百。タオルから顔を離すと、あたしは鏡を見た。

「ちょっと待ってくれ」

「うんっ」

鏡に映るのはこの世で一番嫌いだった容姿。人はこの顔を褒めるけど、これさえなければ家族が壊れることもなかった。ひと欠片でも両親に似ていたら。でもこの顔がなければ家を飛び出すこともなかった。この世界に来ることもなかった。レオナードに会うことも……。

「仕事はどうしたんだ？」

「休みをもらったの！一緒に遊んでいいって」

「そうか」

「街に行こうよ、案内するね」

「うん」

今では自分を受け入れることができる。あたしは絶対に挫けない。

レオナードを見つけ出す、そのときまでは。



### 第三十話 陛下と呼ばない理由

戦争があつたというのに街は賑わい活気づいていた。国土は狭いが人口は多いため人口密度がハンパない。百に手を引かれながら商店街を歩く。

「オーティスは鉱山が多くて宝石がよく取れるんだよ。ほら、見て綺麗っ」

露天に並ぶのは食べ物か5割、装飾品が4割くらいだ。質が良いアケセサリーばかりを並べている店もあれば、裸石だけ並べている店もある。城にあるような最高級品ではないけれど、これだけの数が並べば見るだけでも楽しい。

「この世界ってまるで昔のヨーロッパみたいだね。着る服とか、建物とか。ちょっと違うのは魔女かなあ。火あぶりにされるんじゃないかって、神様の子どもって言われてるし」

「そっだな」

「日本みたいに豊かじゃないけど、人が暖かくて好きだなあこの世界」

そう言えば百は向こうに帰りたいと思わないのだろうか。あたしは魔術で行き来できるけど、百は違う。レオナードに殺される前に向

「こうに送るうとは思ってたけれど、百はそれを望んでいるのかな。」

「百は帰りたいたと思わないのか？」

百はきよとんと首をかしげながらあたしを見上げる。

「帰るっていつても方法わからないし・・・」

「もし、帰れるとしたら？」

「うーん・・・最初は帰りたいたってずっと思ってたけど、こっちに来ていろいろ学んでいろいろ知って、今の生活が当たり前になってるから帰るうとは思わないかな」

「そっか、と返事を返した。」

百の言っていることはすぐよくわかる。確かに恋しいと思うことはあるけど、今の生活を手放したいとは思わない。それだけの年月をここで生きて、ここに大切な人がいるから。

「恵理ちゃんは帰りたいの？」

「ううん。あたしもこっち気に入ってるから」

百は満面の笑みであたしの手をきゅっと両手で握った。

「じゃあもつと好きになるようにこの街案内するからね！あっそうだ、神殿に行こうよ！」

百に言われるがまま手を引つ張られてたどり着いたのは、城からも見えていた大きな古い建物の前。少し錆びれた外観が逆に趣がある。

ドロシーの神殿は一般公開されず入れる人もかなり限定的だったが、ここは市民も自由に出入りできるらしくいろいろな人が神殿から出てきた。

「ステンドグラスがものすごく綺麗なの。この世界には神様もいるらしいよ」

すごいよね、と百は嬉しそうに言って中へ足を踏み入れた。天井が高く装飾が細かいのはオーティスも同じ。ちよつと狭くて日本の教会に似ている。

「おやおやモモ様、お久しゅうございます」

「あ！ルファシスさん！」

知り合いがいたらしい。見た目は若いけどやたら貫禄のある男は、百に礼をとって顔をあげた。暗めのアッシュグリーンの髪が特徴的だ。彼はあたしを見ておやおやと目を見開く。

「このお方はどこのお嬢様ですか？」

「ルファシスさん、この人はあたしの友達なの。えっと・・・名前なんて名乗ってるんだっけ」

「ヴェイラです、どうぞよろしく」

ほほほと嬉しそうに彼は笑った。

「見目麗しくどごぞのご令嬢かと思いました。そうですか、モモ様のご友人・・・。おっと失礼、私はルファシス・ブレアージュと申

します。以後お見知り置きを」

「どうも」

えらく礼義の丁寧な人だ。ヒューバートや金髪男のような無礼なやつばかりじゃなくて、オーティスにも普通の人がちやんといるんだと分かって安心した。

では、とまた頭を下げて彼は教会を出て行く。百は手を振って見送った後振り返ってあたしを見た。

「ルフアシスさんはね、ブレアージュ家っていう貴族の当主で、お城では偉い人なんだよ」

「へえ」

最初に会ったのがあの慇懃無礼なヒューバートじゃなくてあの人だったらよかったのに。・・・なんて今更思ったり。

落ち着いたところで、イスに2人並んで座って銅像やステンドグラスを眺める。

「百」

「んー？」

「最近お城の軍とか大人数が動いたりしなかった？」

「戦争ってこと？」

いや、と言葉を濁して先を促す。百は唸りながら腕を組んで上を見

ながら口を開いた。

「城ってけっこう人が出入りするらしいけど、戦争中だからかなり警戒してるみたいなんだよね。でも今休戦してるから、どこかで衝突があったり軍隊が動いたりしてないと思うよ」

「・・・そう」

オーティス王国でないならば、ヤルマかまたはその他か。どちらにしても一度ドロージャに戻って王妃軍の報告を聞かなくちゃいけない。こんなときにレポートが使えたら楽なのに・・・習得しておけばよかった。

でも、オーティスを離れるのもなあ。オーティスはいつ戦争があってもおかしくない状態。王家に関わっている以上、百も必ず巻き込まれるだろう。心配だからここに残りたいけど、泥人形を置くには距離が遠いし魔力の補充もきかない。でもだからと言ってずっとここにいるわけにはいかないし・・・。

そうだ、泥人形の方をドロージャに飛ばそう。片道分の魔力で済むし、情報も入るし指示も出せる。

「恵理ちゃん、お昼ごはんは露店で買って食べよう」

「そうだな」

「行こう行こう」

あたしたちは立ち上がると神殿を出て再び露店の並ぶ通りに出た。お腹が空き始めるといい匂いが鼻について、視線がそちらに行つて



しまつ。

百が食べ物選びに熱中している間、あたしはこっそりと鳥の泥人形を作つて空に飛ばした。曇り空に黒い点がスツーッと横切つて行く。

「恵理ちゃんこれおいしいよ!」

はい、と手渡されたのはパンに煮た肉やキャベツが挟んであるサンドイッチ。一口かじつてみると予想以上に甘辛くておいしかった。味はあちらの角煮鰻に似ている。舌が肥えて庶民料理が口に合わなくなるなんてことは全くなさそうだ。

「そついえばここのお金つてルディ(ドローシャのお金)でいいのか?」

「ううん、違うけどルディも使えるよ。というかルディならどこの国でも使えると思うよ」

なんと、ドローシャのお金は世界の共通通貨らしい。じゃあしばらくは買い物には困らないだろうな。

それからは百が買つてくる食べ物も次々に平らげてお腹が満たされた頃には露店街を出ていた。

「相変わらずよく食べるよねえ」

「・・・それは言わないでくれ」

それから図書館へ行つたり公園へ行つたりしているとあつという間に時間が過ぎ、どつぷりと日が暮れた頃に帰れば仁王立ちになっているヒューバートに迎えられた。

「ついはしゃいじゃった」

クスリと笑ってクタクタになった百を先に座らせる。あたしは晚餐会に招待してもらえらることになり（百がヒューバートに頼んで仕方なく許可が出たそうな）、簡単なドレスを着せられて赤絨毯の綺麗な部屋にきた。長いテーブルに用意されている席は約8席。もちろん上座に座っているのはヒューバート、そしてその隣に百、さらに隣にはあたし。向かい側に居たのは昨日見た金髪の男だった。顔はいいのに危ない雰囲気漂っている。

「あんた誰？」

ストレートに聞けば彼はあたしを睨んだまま口を開く。

「近衛第一騎士のアレフ・ダグラス。お前に名乗るような身分ではないのだがな」

アレフかあ、アルフレットとちょっと被るな。同じ騎士だし。オーティスの騎士制はドロージャのように主人に仕える・・・というものではない。近衛騎士という王の側近を務める文武両道の兵士

があり、それぞれに順位が付けられるらしい。第一騎士ということ  
は騎士のトップ、ひいては軍のトップということだ。ドローシャに  
例えるならドラッグ・ディッチ左將軍のポスト。  
険悪な雰囲気になって百がオロオロしだしたところに他の人たちも  
部屋にやってきた。

「遅れて申し訳ありません」

そう言つて一番に頭を下げたのは昼間に神殿で会つたルフアシス。  
彼はあたしを見るとウインクを投げて席に座る。

次は白い服に銀の刺繍が施された服を着ている・・・神官だと一  
目でわかつた。あたしの前に来ると膝を折つて礼をとる。

「始めまして、神官長のゼオノア・マクレーンと申します。どうぞ  
よしなに」

「ヴィラです」

そしてもう一人、濃い藍色の髪と琥珀色の瞳を持った男。見た目が  
ら女たらしっぽい。そして尻軽そう。

「どうも、モモ様の友達さん。俺はロディー・アーノルド、議長を  
務めている」

「どうも」

ドローシャではファーストネームだけ名乗る時もけっこうあるけど、  
どうやらこの国はファミリーネームもファーストネームも両方名乗  
るらしい。たぶん世襲制の影響が強いからだろう。次代の王は王の  
息子が継ぐ、そうすれば王妃にと送った貴族の血脈が王に流れるこ

とになり、結果“家”が栄えファミリーネームの価値が上がる。けど王が神様に選ばれるドロージャにはそれが無いから、“家”の価値や地位よりも自分の“役職”が大きなステータスになる。

「あいつはどうした」

「もういらっしやると思いますが・・・」

まだ一人揃っていないとヒューバートは顔をしかめる。申し訳なさそうに言うのはルファシスさん。

「もういい、始めよう」

そのヒューバートの一言で一列に並んで控えていた侍女たちが動き出す。ワゴンで運ばれてきたのは前菜らしく3つのスプーンにそれぞれ一口サイズの料理が乗っている。一応戦争中だということにこんな警沢して大丈夫なのかな。

次々と並べられていくそれが物珍しくて見ていると、田舎者とも言うように鼻で嗤うアレフが目についた。・・・むかつく。

「お飲み物はワインでよろしいですか？」

「あ、お酒は控えてるから」

「畏まりました。ではこちらがよろしいでしょう」

今度は飲み物を注いで回る侍女たち。ワインを選び好みしていたロディが一番最後に、それからグラスをヒューバートが持ち上げた。

「では、オーティスのさらなる繁栄を祈って」

かんぱーい。一口飲むとぶどうジュースの味がした。けっこうおいしい。  
少しづつ皿を空にすると新しい料理が出てくる。ちよつとづついる  
いるなものが食べられるのつてもものすごく楽しくて好きだな。  
無言で料理を食べていると場の空気を読んだルファシスがあたしに  
話しかけた。

「ヴィラ様はどちらからお越しですか？」

「あたしはドローシャから」

ピタリとヒューバート・アレフ・百以外の手が止まる。ルファシス  
はほう、と面白そうに顔を綻ばせる。

「ドローシャは素晴らしく豊かな国でございましょう？」

「とても」

「我がオーティスも中心の隣で神の恩恵を受けていますがやはりド  
ローシャの方が圧倒的。王様も神に選ばれ全ての分野において才能  
豊かな人物なのだとか」

キラキラと顔を輝かせて話を聞いているのは百。こちらに来てから  
3年経つけど、やっぱり知らないことの方が多いたち。百は  
ずっとオーティスにいたから、ドローシャの話がとても新鮮なんだ  
ろう。

「ドローシャ王の顔って見たことある？」

一瞬ドキツとしたけど、百が訊ねたのはヒューバートだったらしいよかった、あたしに訊かれても返答に困る。見たことあるって言えば確実に怪しまれるけど嘘をつくのもあまりいい気分はしない。

「ああ、あるぞ」

「どんな人？」

「完璧すぎて少し怖かったな」

へえ、と百は口を丸く開ける。ヒューバートの言っていることは本当にあたしも共感できる。容姿も空気も付け入る隙が全くないのでこちらが尻ごみしてしまう。それを恐怖と錯覚するんだ。あの圧倒的な雰囲気はレオナード以外誰も持つことができない。

「ヒューよりかっこいいのかな」

「え……う……うん、たぶん……」

好きな女にレオナードと比べられるのがものすごく複雑な気分だったんだろう。ヒューバートが挙動不審に頷いたので、可笑しくて笑えば睨まれた。けど彼の顔は割と幼いのであまり怖くない。

「前途多難だね、お・う・さ・ま」

「貴様……っ」

ギリツとヒューバートが歯ぎしりしたところに、バタバタと駆け込んできた男が約一名。灰色の瞳と黒い髪のまま顔のいい人だ。

「おまたせ。悪いわね、待たせちゃって」

「……………今変な言葉が聞こえてきた気がする。彼はあたしを見るとまあまあと目を丸くさせた。」

「噂どおりね、今度陛下を誑かしに来た女ってあなたのことでしょ？」

聞き間違えじゃなかった。男なのにおネエ言葉使ってる……………オカマ？顔がいいから別に気持ち悪いとか生理的に受けつけないとか全く思わないんだけど、ものすごく違和感が……………。

「残念だけどねえ、陛下にはもうモモ様っていう大本命がいるんだから諦めなさい！」

「ザック！」

オカマの名前らしきものを叫んだヒューバート。だけど百は今の言葉の意味を全然わかっていないらしく、笑顔で頭の上にハテナマークを浮かべていた。

それにしても誑かすって……………。

「ヒューバートには一欠片も興味ないんだけど」

「おい女、誰が余の名前を呼んでいいなどと許可した」

そんなこと言われても、あたしオーティス市民じゃねえし。あたしの隣に座っていた神官長が見かねたらしくあたしにこそつと耳打ちした。

「陛下、もしくは主上・・・と」

「えー」

なんか敬意を払う気にはなれない。むしろ

「ヒューちゃんって感じ」

ヒューバートは顔を見事に引きつらせた。無言で睨んでくるアレフの眼光が痛い。

「女、この国は余の国だ。この国にいる以上は余のルールに従ってもらおう。いくらお前が百の友達であろうと、他所者は黙って大人しくしている。それができないなら不法侵入とみなし牢に入れる」

「ヒューー!」

百が慌てて宥めるけど、彼はよほど立腹したのか言葉を撤回する気がないようだ。

「・・・まあいいよ。牢に入れるなり拷問にかけるなり好きにすればいいさ、ヒューバート」

そんなに呼び捨てされるのが嫌なんだろうか。非難の視線があたしに集まったけどどうでもいい。あたしはあたし個人としてもドロージャ王妃としてもヒューバートを陛下と呼ぶようなことはしない。だって、あたしにとっての陛下はレオナードただ1人だから。





## 第三十一話 宣戦布告

晩餐会を終えて、あたしは百の部屋に泊めてもらうことにした。同じベットに横になったあたしに、百は申し訳なさそうに言う。

「ごめんね、恵理ちゃん。みんなとってもいい人なんだけど・・・」

笑って首を横に振った。せつかく用意してもらった晩餐会の雰囲気悪くした原因は明らかにあたしだ。百が謝ることじゃない。

「別に気にしてないよ」

「でも・・・えっと・・・ヒューはね、たぶん戸惑ってるだけだと思っただ。戦争でいきなりお父さん亡くして、いきなり王様になって、ものすごく周りも困惑してたし反対する人もたくさんいたんだって。ヒューまだあたし達と年変わらないんだよ。なのにある日突然国を背負うことになって、しかも敗戦寸前の国。混乱してあんな風になっちゃっくんじゃないかな」

「なるほどね」

レオナードのように神様に才を買われたわけでもないし、ただ王様の息子に生まれたっただけで王位が転がり込んできたら誰でも困る。しかも寿命が1万年近くあるこの世界で10代の少年が王座に就くなど、あちらの世界でいう2・3歳の幼児に王位を与えるようなも

の。そりゃ貴族は不安だろうし反発する奴らだって出てくるはずだ。それに王様となれば権力と同時に責任も伴ってくる。その責任つてのが国民の数の命や歴史を背負うことになるからかなり重たい。その責任だけで潰れてしまっただっていているくらいだ。その点、ヒューバートはまだ未熟ながらも責任を全うしようとしているので努力は認めたいと思う。

「ま、ヒューバートは嫌いじゃないよ」

「ほんと!？」

うんと頷けば、百はものすごく嬉しそうに笑った。

「けどあの金髪騎士のアレフって人は苦手だなあ」

とつつきにくそう。言いたいことあれば直接言えばいいのに終始無言で睨んでくるし、どこか他者を寄せ付けない拒絶するような雰囲気もいただけない。そう言えば百は笑ってうんうんと頷く。

「あたしも最初そう思ってたよ。でもアレフさんはさりげなく優しいところがあって、しかもかっこよくて強いから女性にもものすごく人気あるんだ」

ふーん。さりげなくねえ・・・まああの人に優しさなんてものは期待しないけど、ああやって四六時中睨むのはやめてほしいかな。それよりインパクトが強烈だったのは・・・

「あの人名前なんだっけ・・・ほら、おネエ口調の」

「ああ、ザックさん?面白いよねあの人」

「うん・・・まあね」

未知の世界を覗いちゃった気分だけど。こうやって大人になればなるほどいろんな体験をするものなんだとしみじみ思った。

散々な晩餐会だったけど、そうそうたるメンバーに物怖じせず意見できる百はずいぶん成長した。前はあたしがいないとロクに会話もできなかつたのに。まだ人と話すのは苦手なのかたどたどしいところもあるけれど、しっかりと自分の言葉で伝えようとしているのがよくわかる。

「百、強くなったな」

百は照れたように笑う。

「この世界に来てわかつたんだ。知らない人が怖くてうまくしゃべれない自分がどれだけ甘えてたのか。まずこの世界に来てやらなきゃいけないことは“生きる”ことだったから」

「うん・・・」

体力も腕力もあるあたしでさえ苦労した。最後は行き倒れるまでロボロになった。だけど体力が無い上にドジな百はもっともつと苦勞したと思う。ここでまた再会できるなんてある意味奇跡だ。

「恵理ちゃんもなんだか変わったね」

「うそ、変わってないよ」

「うづん、変わったよ。なんだか柔らかくなったし大人っぽくなった。もともとしっかりしてたけど、さらにしっかりしてて落ち着いてる感じがするよ」

確かに師匠と会って、レオナードと会って、いろいろなことがあった。百が変わったように、あたしも変わるだろうか。

「そっだといいな」

百は満面の笑みで頷いて、もぞもぞとシーツの中に潜った。

「じゃあ、あたし明日早いしそろそろ寝ようか」

「うん」

明かりを消すと窓から見える月が柔らかく輝く。

「おやすみなさい」

「おやすみ」

百が3年間暮らしたこの国は決して嫌いじゃないし、できれば百の大切な人たちを守ってあげたい。願わくば、あの人たちがドロシヤに牙を向く黒幕でありませぬように。

次の日早起きしたあたしは小屋の前に立っていた。

情報収集のためにどうしても調べたい場所・・・それはもちろん王様の執務室だ。重要書類ばかり納められているそこは厳重な警備が敷いてある。幻術を使うにも人数が多く、他に魔力を削いでいる今はちよつと辛い。そこで思いついたのが・・・

「おはよう、ヒューバート」

「おい女。こんなところで何をしている」

来た来た。ヒューバートとアレフは王の寝所がある塔から執務室へ向かうとき必ずここを通るらしい。待ちかまえていた甲斐があった。

「別に。だつてここ借りてる小屋だし、あたしが居て当然だろう？」

ヒューバートはむっと顔をしかめると、あたしを無視することにしたらしく歩きはじめる。しかしそこで・・・  
ドッカーン!!!

と爆発音が響き目の前にある塔の屋上が火を吹いた。慌ててアレフがヒューバートの前に進み出た。

「陛下、敵襲かもしれません。お逃げください」

「逃げたら逆に目立って危ないぞ。隠れるよ」

ほら、と言つてあたしは小屋の扉を開くと、ヒューバートはしぶしぶと言つた様子で中に入った。彼は小屋の中を見回すと呆れた顔をして尋ねる。

「あの汚い部屋をどうやってここまで綺麗にしたんだ」

「人間やるうと思つたらできるもんだよ」

ヒューバートは言葉通りにあたしにつけた見張り役を撤退させたらしく、あれから誰かに付けられたり覗かれたりされることはなくなつた。だから小屋でやりたい放題に魔術を盛大に使つて部屋を改装させてもらった。原形を留めてないけどあの汚い部屋よりマシだから許してもらいたい。

あたしを敵視しながらもなんだか言つて律儀なヒューバートは憎めないキャラだ。言うなら小憎たらしい弟みたいな感じ。

「あたしもちよつと様子見てくるから、大人しくしてな」

「.....」

無視。返事をもらうのは諦めて外に出ると見張りをしているアレフと目が合った。睨まれたけど気にせずあたしは進む。もちろん目指すは執務室。そう、王様の身動きが取れなくなるこの瞬間を狙っていたんだ。だから爆発を起こし（すまん）、王様を小屋に入れてあたしは堂々と執務室へ向かう。ヒューバートに化けて。

あっさりと通されて入ったら意外と狭い。正面にドンとテーブルが置いてあつて、その上には何冊もの分厚い本が山積みされていた。

「あらおはよう陛下」

急に人の声がして飛びのけば、部屋の端の方にくねくねしながら本を抱えている昨日のおかま発見。まさか執務室の中に人が居るとは思っただけでなかった。・・・さて、どうしよう。落ち着け、あたしは今ヒューバートの姿をしている。大丈夫、あたしはヒューバートだ。ヒューバート・・・ヒューバートってどんな口調だったっけ。

「・・・・・・・・ああ。悪いが一人にしてくれないか」

「はあ？講義はどうするつもりよ」

「午後からに変更だ」

まったくしょうがないわねえ、とぐちぐち言いながら彼（彼女？）は去って行った。よかった、なんとか誤魔化せて・・・。

完全に人気が無くなったのを確認すると、さつそく引き出しや重ねてある書類を拝見する。公式文書がなくても報告の手紙や指示の手紙があればそれが動かぬ証拠。もし今回の件にオーティスが一枚噛んでいるなら何かしらあるはずだ。

テーブルのすぐ後ろにある大きな棚の一番下の引き出し、そこを開けると手紙らしきものが大量に出てきた。一番上の封筒をひとつ手に取って乱暴に開封すると、こちらの世界の文字でつらつらと書かれている長文の紙が6・7枚。

「君と出会って約1年経つが余はずっと君のことを想い続けて・・・あれ？」



なんだこれ、と思いながら別の手紙を開けてみれば全く同じような内容の文章だった。出会えたことを神様に感謝するだの、この世のどんな女性も百には敵わないだの、結ばれるのは運命だの、好きだの愛してるだのと……これはもしかして……

「ラブレター？」

こっちが恥ずかしくなるほどの言葉で想いを伝える手紙。しかも5・6通なんて数じゃないこの量が引き出しの中にあるってことは……未だに1通も渡せてないらしい。

ヒューバート。お前そんなに……そんなに……!!

百に相手されてないのか……

吹き出したかったのと同時に可哀そうで泣けてきた。本気だろうなあとは思ってたけど、渡せないラブレターを書き続けるなんてどんだけ純情なヤツなんだ。可愛いやつめ。

あたしは手紙を元に戻しそつと引き出しを閉めると、引き出しの上の段を開けて中の紙の束を取り出した。今回は当たりのようで、外交に関する話のやりとりが記されている。30分ほどその場に座り込んで全て読み終わったけど、今回の件に関わりのありそうな記述はなし。

「オーティスは白かなあ」

王様の人柄を見てもわざわざドロシヤに手を出すほどの勇気がある奴には見えないし。特に証拠らしい証拠もないようだ。

本物のヒューバートがここに来る前に執務室を出ようと、あたしは窓に足をかけると鳥に化けて空を飛んだ。

ドローシャの執務室に一匹のカラスがすーっと入ってくると、そのカラスはみるみる内に人の姿へとその形を変えていった。部屋の中にいたルードリーフは驚いてびっくりかえった声を出す。

「ヴィラ様!？」

「よう、どうだ搜索の経過は」

「どうもこうも、大変なんですよ」

「大変？」

「ご丁寧に陛下をさらった犯人が自ら名乗り出てくれました」

やはり、とヴィラは大きなため息を吐く。捕えたレオナードを活用する一番の方法、それは人質にしてドローシャを意のままに操ることだ。

「で、どこなわけ？」

「……ベルガラでした」

「ベルガラあ!？」

レオナードが行方不明になったのは出発して10日前後、その頃はヤルマかオーティス内に居たと想定できるからまさかベルガラが黒幕だとは思わなかった。それにベルガラへ交渉に向かうことに決まったのは本当に前日の話。それを事前に察知してヤルマかオーティス領に侵入し待ちかまえていたとはどうも考えられない。

「……つつーことは、ベルガラの他にもヤルマかオーティスに手引きしてるヤツらがいるんだろっな」

「恐らくは」

ルードリーフは控えめに頷く。

「それで要求の内容は？」

「オーティスへの襲撃を1か月以内に決行せよ、とのことですよ」

「やっぱりそう来たか……。ベルガラはオーティスと戦争中、どうしても勝ちたいってワケね」

「どうなさいます?」

「んー……。手引きしてるやつらがいる以上、堂々と宣戦布告してきたことから考えてもベルガラ国内にレオナードがいる可能性は低いが……。一応調べてみるか」

わかりました、とルードリーフが返答したとき、バーンと大きな音

を立てて扉が開きゾロゾロと人が入って来た。クロード、アルフレツト、それからシルヴィオだ。

「お！王妃様、お久しぶりっ」

「魔女さん帰って来てたのか」

「おう、身体は泥で出来てるけどな」

にっと笑うヴィラに、シルヴィオは首を傾けて問うた。

「では本体はどちらに？」

「今ワケあつてオーティスの王城にお世話になつてる」

また貴女は・・・と訝しげな視線が集まったが、ヴィラは無視してテーブルの上に腰を下ろす。

「とにかく、ベルガラが動いた以上こちらも黙っていいなりになるわけにはいかない」

「じゃあ王妃軍にベルガラ侵攻でもさせる？」

「バカ言つなクロード、レオナードの身に何かあつたらどうする。まずは情報収集、そしてレオナードの救出が先だ。与えられた猶予は1か月後、それまでにレオナードを探し出す。アルフレット、隠密部隊の総数は？」

「今は6720人つすよ」

「それをすべてベルガラに入れて秘密裏に繋がっている人物とレオナードの居場所を洗い出せ」

「了解つす」

ヴィラはテーブルの上で凜と咲いている青い花を手を取った。傷ひとつつくことなく、今でも鮮やかにその姿を保っている。これが何よりレオナードが無事な証。

「ベルガラの思う通りにはならないよ」

レオナードはそんなに扱いやすいヤツではないからな、とヴィラは花を見たまま柔らかく笑んだ。

## 第三十二話 新しい恋人たち

あたしは貸してもらった小屋の中で座り込んでいた。手に持っているのはあちらの世界のチョコクのようなもの。床に大きな円を描くと手を止めて考え込む。

そう、あたしは今レポートの魔法陣を作っている。魔法を使う際に魔法陣を使うことは滅多にない、むしろ必要がない。けれども世界を行き来したり移動魔術を使う場合は魔法陣がなければ成功しない。なぜなら魔法陣は暗闇の中でぽつんと灯っているロウソクの火のような役割を果たすからだ。辺りが暗いと目標までの距離感覚を失うが、火の光ひとつあれば移動したい場所までの距離が掴みやすい。たったそれだけの小さな火が、魔術の成功と失敗を左右する。

さて、円を描いたら移動魔術のイメージを頭の中に描く。たまに間違った認識をしている人がいるけど魔法陣の中に描いてるぐにゃぐにゃした模様・・・あれ、適当だから。フィーリングだフィーリング。ようするにただのイメージ、目印みたいなものだ。だから魔法陣に模様は決まってるので、師匠のように絵の才能がない人はまるで子供のお絵かきのような魔法陣が出来上がる。

「よっし。これで後は」

魔法陣から離れて隣の厨房へ行き、魔法陣目掛けて魔力を放つ。いい感じに身体がふわっと消えて

ドターーーン！……！

「……！……！……！……！……！」

魔法陣までテレポートできたのはいいけど、足が地面から一メートルくらい浮いていた。もちろんあたしは落下して痛みと涙を目に溜めながら打った腰をさする。成功したのは喜ばしいぞ！？でもこれカッコ悪いし実用的では……ない気がする。まあいいや、とりあえずドロシーヤにいる泥人形に魔法陣を描いてもらおう。練習すればそのうちコツ掴むだろうし。

もう一度やってみようと距離を取り、魔法陣に向けて魔力を放つ……けど。次の瞬間目に映ったのは全く違う部屋。またもや足が地面から離れていたのであたしは銀色の髪の毛の頭目掛けて落下し、そのまま下のヤツともつれ合うように崩れた。

「うわっ……！」

「あちゃー、すまんすまん」

巻き込んだのはヒューバートだったらしい。彼が下敷きになってくれたおかげであたしは無傷どころか痛みひとつない。今回のテレポートは失敗らしく、執務室まで来てしまったようだ。身体が移動したこと自体は失敗ではないのだけれど。

「貴様……！さっさと余の上から退け……！」

そう言うヒューバートの頬は赤く染まっている。あたしは覆いかぶさったまま手でヒューバートの顎を捕えた。

「なに？恥ずかしがってるのか？」

ニヤリと笑えばますますヒューバートの顔が赤くなり、怒りと戸惑いからかプルプルと震えだす。まったくこれほど苛め甲斐のあるヤツ初めて会ったよ。初うぶだねえ。

「・・・そもそもどうやってここまで入ったんだ！！しかも余の上に・・・上に・・・！！！」

「あー・・・」

どうやって説明しよう。ベルガラが宣戦布告してきたらしいから、戦争を仕掛けられているオーティスの少なくとも王様は白だろう。あたしがドロシーアの王妃で魔女だと・・・バラすか？いや、でも言っても信じてもらえなさそう。むしろ大爆笑されそう。あたしだって自分で王妃って柄じゃないのはわかってるし。

「えっと・・・時計を持ったウサギを追いかけていたらいつの間にかここにたどり着いたんだ」

ヒューバートは盛大に意味が分からないという顔をしてくれた。けれど否定するにもどう否定すればいいのかわからないらしく、開きかけた口はすぐに閉じられる。

「・・・と・・・とりあえず余の上から退け」

「うーん、どうしよっかなー。この姿を見られたらあらぬ誤解を生んでいるーんな噂が広まるだろうなあ」

うわー面白そう。そうからかうように言えばヒューバートの額に青



筋が浮かんだ。

「いい加減にしろよ、女。普通余にそんな野蛮な口を聞いたところで不敬罪に当たり処刑されることもあるのだからな。ましてやこのような屈辱、許されると思うなよ」

「頭固いなあ。女に迫られたことないの？ん？」

顔を近づけてニヤツと笑えば、ヒューバートはまた赤くなって大声を出し始めた。

「いい加減にしろ！！」

「ごめんごめん、反応が純情少年らしくて面白かったからつい」

ヒューバートの上から退こうとした瞬間、バターンと勢いよく人が駆け込んできた。

「ヒュー……う？恵理ちゃん？」

現れた百は目をパチクリさせてこちらを見る。今のあたしたちの状況はと言うと、あたしが上、ヒューバートが下。俗に言う馬乗りという体勢で、どこからどう見ても邪な想像を掻き立てるワケで……。

百は声をかける暇もないほどの高速で踵を返すと駆け去ってしまった。入れ替わりでもう一人、今度はザックが入って来てあたしたちを見ると口をあんぐり開ける。彼は百のように駆け去ることなくその場に立ちつくしていた。

「誤解されたっばいな」

なんて言っただって馬乗りだしな。しつこいようだけど馬乗りだからな。

「……………」

下からの沈黙に慌てて飛びのけば、ヒューバートの顔はかわいそうなことに真っ青になっていた。誤解されたことがよほどショックだったらしい。

「そんなに落ち込むなよ」

「……………誰のせいで誤解を生んだと思っている」

ヒューバートは静かにキレていた。あたしも他人の恋愛まで邪魔したくないのでフォローしてあげることにする。半分あたしの所為でもあるし。

「よく考えるよ。もし百がヒューバートのことをなんとも思っていないなら満面の笑みで“おめでとう”って言われるに決まってるだろ？つまり、百はあたしとヒューバートが仲良くしてるのを見たくなかったんじゃないの？」

そう言えばヒューバートの青い顔がみるみるうちに赤くなった。

「余にも……………可能性があるのだろうか」

「たぶんね」

なんて扱いやすいやつなんだ。まあがんばれと背中をポンとたたけ

ば、その手は黒髪のおかまザックにグワシツと掴まれた。

「あんたねえ、うちの陛下に手を出さないでもらえるかしら」

丁寧な口調が逆に怖い。彼の後ろに燃え盛る炎のような熱を感じる。

「だから謝っただろ？」

「謝ってすむ問題じゃないのよ！あんたの無駄に整った容姿と色気で迫られたら陛下も落ちちゃうかもしれないでしょ！？」

「「ないない」「」

あたしとヒューバートは声をそろえて否定する。ザックはピキツと青筋を浮かべてあたしとヒューバートをソファに座らせた。

「とにかく、モモ様呼んでくるから誤解を解きなさい！それから毒女！もう二度と陛下の半径一メートル以内に近づかないこと！」

毒女ってのがちょっと気になったけれど、ザックに睨まれてあたしは返事を返した。

ザックと金髪の騎士アレフに連れられて浮かない顔をした百が部屋に入ってきた。ヒューバートはそわそわと落着きがなく、あたしが肘で突くと慌てて背筋を直し今度は固まって動かなくなる。

「さあさあ座って。みんなでお茶しましょう」

ザックはヒューバートの真正面に百を座らせ、ガラガラとカップやポットの積まれたワゴンを押す。次々と用意されるお茶の準備は素早く丁寧で的確。女性のたしなみもあるとはさすがザック。

「う……あ……あの……モモ……」

ガチガチに緊張しているヒューバートは情けない声で話し始める。もじもじとした態度があたしから見れば全くの不合格で、苛立ちについつい声を張り上げる。

「もっと男らしくビシツと言えねえのか!!」

「は、はい!!モモ!!さっきの誤解なんだ!この毒女とは何の関係もない!むしろ苦手だ!!」

だから毒女ってなんだよ!それにしても「はい!」って……やっぱり根が素直なんだろな。面白いヤツ。

百はカップを両手で持ったままぽかんと口を開け、数秒後に恥ずかしそうに視線を彷徨わせ始めた。

「でも……恵理ちゃんはものすごく綺麗で、大人っぽくて、しっかりしてて、背も高くて、胸も大きくて、よく気が利いて……あたしとは正反対で……」

「モモ！この女は人間規格外だ！それにモモの思っているような女ではない！狡賢くて嫌味で大人げないヤツだぞ！」

いろいろ嫌な単語が聞こえてきたけれど大事な場面なので我慢してやる。百はちらりと俯いていた視線を上げ、ヒューバートは益々言葉に熱を込めて話し出した。

「こんな毒女よりモモの方が100倍魅力的だ！」

「告白の時に他の女と比べる表現はタブー」

「百は魅力的だ！」

突っ込みを入れるとヒューバートは慌てて訂正し、女を口説き慣れていないのかたどたどしい言葉でモモをいかに想っているか熱弁した。百もだんだんわかってきたのか、頬を染めて挙動不審になり始める。

「で・・・でも、恵理ちゃん綺麗だからあたし・・・」

「そんなに不安なら毒女をこの国から追い出してもいいんだ！モモ！」

百はヒューバートがあたしに靡くのが不安なのかチラリとこちらを見る。

「心配しなくてもあたし既婚者だし」

「「「えっ！」「」」

百とヒューバートとザックの声を重なった。アレフは相変わらずの無表情だったけれど。

「毒女と結婚するなんて・・・相手が哀れで仕方ないわ・・・」

「おいザック、それはどういう意味だ」

「恵理ちゃん初耳だよ！相手は誰！？」

「ドロシヤの人だよ。おかげで生活には困ってない。そのうち紹介するから」

百は目を輝かせてうんうんと頷いた。ヒューバートとザックはまだ納得できないのかあたしを訝しげな視線で見やる。

「あたしはともかく、ヒューバート、お前百泣かせたらタダじゃおかないからな」

「・・・わかってる。モモは余が幸せにするんだ」

百はとたんに顔を赤く染めて恥ずかしそうに俯いた。・・・あれ？もう纏まつちゃった？

「よかったわねー！これで一件落着だわ！」

「よかったなヒューバート。一年越しの恋が実って」

「う・・・」

これから思う存分からかってやれるぞ。あー楽しみ。

・・・そのためにも、なんとしてもレオナードを取り戻してベルガラをつぶさなきやいけない。残された期間は1か月弱。とりあえず今は、新しい恋人たちの祝福が先かな。

あたしは立ち上がりザックとアレフの腕を掴むと、ヒューバートと百に向かって笑みを向ける。

「では、邪魔者は退散するからお話するなりいちゃつくんだりどうぞご自由に」

そしてあたしは男ども2人の腕を引っ張りながら、真っ赤になったヒューバートたちを置いて部屋を後にした。

### 第三十三話 招待

部屋を出たとたん乱暴に腕を払われた。ザックもアレフも女の扱いがなっていない。

「ま、これでもうオーティスは安泰ね。毒女の付け入る隙なんてないわよ！諦めなさい！」

「あんた人の話聞いてた？」

あたしはヒューバートを誑かす気なんてないし既婚者なんだってば。ザックはぶいっと顔を逸らせる。あくまでも仲良くしたくない、ということだろうか。

「だいたいあんたねえ、国庫からご飯食べておいて偉そうな口利いでんじやないわよ。今オーティスが戦争中なのは知ってるんでしょ？ だったらもう少し遠慮しなさいよ」

「心配しなくてもそんなに食べ物少ないなら出さなくていいから」  
「っていうか出すな。って言うっても結局百の客人扱いされてるみたいだから出るんだろうけど。」

いつの間にかアレフはいなくなってみたくて、廊下にあたしとザックがぼつんと突っ立っている状況。気まずくはないけどあまりうれしくもない。



「それに陛下の執務室に勝手に入るなんてどんな神経してるのよ。いい？ここは国の中心なの。なにかあったら困るのは国民なのよ」

「わかってるわかってる」

「だったら勝手にうろつろしたりしないの！」

「はい」

「それに毒女、あんた帰る家があるならさっさと帰りなさい。そしてもう2度とここに来ないで」

ピシヤリと言いきったザツクに、「冗談を言っている様子は微塵もない。

「あたしがいるとそんなに不都合？」

「そういう問題じゃないのよ。いい？モモ様はいずれ王妃になる。近いうちにね。権力も富も手にした友人を間近で見、あんたは何を思う？嫉妬・憎悪・屈辱。どこまでも欲深い人間はね、他人の幸福が羨ましくて仕方ないのよ。これ以上毒女とモモ様の関係を壊したくなかったら、あんたが嫉妬に狂う前にここを去ることね」

「言いたいことはわかるけど・・・」

ヒューバートの隣に立ちたいとは思わないよ。あたしにはレオナードがいる。王様でなくてもお金持ちでなくてもレオナードさえ居ればそれでいい。

「とにかく、陛下とモモ様に少しでも害があるようならこの国から追い出すわよ」

ザックは鼻息荒く去って行った。

あたしはその場に立ったまま考え込む。百が羨ましいと思う気持ちがないわけじゃない。好きな人と一緒に居られる幸せを、あたしは今失っているから。でもだからといって百の地位を奪っても何も手に入らない。むしろ百の心を失うだけだ。

「早く見つからないかな」

あたしは会いたい。ただ、会いたい。

翌々日。ドローシャから報告書が届いてあたしはそれに目を通していた。返事を書いてカラスの嘴に啜えさせると、窓から軽々と飛び立って空へ昇って行く。

そのまま窓に腰を掛けて景色を眺めていると、コンコンとノックの音がしたので扉を開ける。

「おや、ここはモモ様のお部屋では？」

「ルフアシス……百はヒューバートのところに行ってる。一昨日からずっと百を盗られてるんだ。あたし暇で暇で」

愚痴を言えばルフアシスは豪快に笑ってくれた。

「たしかに、友人が恋人に盗られるというものは寂しいものでございましょうな」

「そうなんだよね。でも恋人が出来たつてのは喜ばしいことだから、下手に文句言えないし」

何度も力強く頷いてくれたので笑みを返す。

「ヴィラ様は寂しいでしょうが……しかし国民は祝福するでしょうね。お世継ぎが産まれれば万万歳ですから」

「でもヒューバートを狙ってた貴族の令嬢とか大丈夫なのか？」

「問題はございませぬよ。陛下は確かに男前で美しくいらっしやいます、まだ王位について間もなく権力が万全ではありませんから。好きな女性と結婚するなら今がチャンスです」

パチリとウインクされてあたしはクスクスと笑った。この人は話がうまい、そして茶目っ気があって楽しい。

「どうです？暇なら今晚は我が家でディナーでも」

「ほんと？」

「ええ、もちろん」

このお誘いはとても嬉しかった。百はどうせ昨日と同じくヒューバートと食べるだろうし、邪魔したらヒューバートに怒られるだろうし。

「誰かの家に招待されたのは初めてだ」

「それは嬉しゅうございます。私がヴィラ様を招待した初めての人物、ということになりますね」

「そうだな」

今までは結婚式とか招待する側だったからね。貴族の家がどんなところなのかものすごく気になる。あたしのテンションはかなり上がって、ルフアシスと笑顔で別れた。

そしてその日の夜。

迎えに来たのはルファシスの家の執事さん。仕事を終えた彼と共に馬車に乗る。

「ヴィラ様、大変お綺麗でございますな」

「そう？ありがとうございます。ルファシスも相変わらず男前だな」

「おやおや、光栄です」

百と街に出た時にこっそり買っておいた。あまり派手ではないけど形の良いライン、藍色でベルベット生地 of 深いスリットが入っているドレス。装飾品は借りものだ。

あたしたちはゴトゴトと揺られながら笑みを深め合った。

「それにしてもルファシスの家はお金持ちなんだな。馬車のお迎えだなんて」

「貴族は皆そういうものですよ。この時期のオーティスは冷えますしな」

「なるほど」

確かにドローシャより南なのに寒さが酷い。単にドローシャの気候が穏やかすぎるから余計にそう感じるだけなんだろうけど。

「それに比べてドローシャは素晴らしいお所でございます」

「行ったことあるんだ？」

「ええ、私は外交長官を拝命しております故、人生の半分は他国で

過こしておりますよ」

「外交官か、そりゃ忙しいがやりがいのある職だろう」

「はい、とても」

ルファシスはそう言つてとても穏やかな笑みを浮かべた。彼もやはりこちらの世界の人間だから見た目は若いけれど、落ち着いた物腰や人を氣遣う仕草と態度からだいぶ歳を取っているんだろうと思う。同じお年寄りのルードリーフも彼を見習つてほしいくらいだ。ただルードリーフは多少頭が固くても知識の量が桁外れなんだよね。

「ヴィラ様はドロージャのどこのご出身で？」

「えっと、北の方かな」

「ふむ……ホラージュ辺りですかね？」

「そうそう」

正確には師匠の森（あたしが勝手にそう呼んでるだけ）なんだけど、それがどこの州に属しているのかは聞いてない。地理的にも非常に微妙な位置にあった。

「どうですか？ 貴女様から見たオーティスの国は」

「あたしは好きだよ」

「それはそれは気に入っていただけでなにより。わが国もなかなか神の恩恵をいただいておりますので、鉱石も豊富で信仰が厚いの

ですよ」

そういえばルファシスと最初に会ったのは神殿だったわけ。この国の神殿にはたくさんの人が出入りしていたのを思い出した。

「やっぱり中心に近づけば近づくほど信仰深いものなのか？」

「深い・・・と申しますか、世界の理はこの世界の誰もか微塵も疑っておりません。ただその恩恵に感謝し神を崇める心は、やはり中心に近い方が強いでしょう」

ふむふむ。神様が本当にいるのかは知らないけど、こういう世界観ってすごく不思議だ。ただ恵まれた土地とそうでない土地があるのは向こうの世界でも同じだったな。

「着いたようです。さあ、どうぞ」

馬車が止まるとルファシスは先に降りてエスコートしてくれた。あたしは彼の手を取ってゆっくり下りると、ドーンとでっかい家が目に入ってそれをまじまじと見上げる。全体的にシックで落ち着いた外観が柔らかい雰囲気を出す趣味のいい、家よりも城と言った方がしっくりくるくらい立派な建物だ。入口までの白い石が敷いてある道があり、そしてその道沿いにはロウソクが灯っていた。

「すごい幻想的」

「ありがとうございます。これは私の趣味で作らせたんです」

案内されるままに中へ入れれば、これまたオシャレな置物が主張しすぎない程度に飾られていて、赤い絨毯の敷かれた廊下は城に負けず

劣らず豪華だ。

「どうぞこちらへ」

入った部屋は広すぎず狭すぎず。漆黒のテーブルがあたり好みの食事部屋のようだ。

「すぐに準備させますので」

「わかった」

あたしはイスに座るとルファシスが出て行くのを横目に天井を見上げた。



### 第三十四話 理不尽

お酒を勧められなかったのは一昨日の晩餐会で飲まなかったのを覚えていてくれたからだろう。あたしはグラスに注がれたジュースを一口だけ飲んで置く。

一番最初に出てきたのは小さいサラダだった。白いドレッシングが甘酸っぱくておいしい。

「うん、おいしい」

「ヴィラ様のその一言で厨房の者が喜びましょう」

穏やかなルファシスに見守られて、あたしは次々と運ばれてくる料理を平らげる。控えている執事や侍女たちも嬉しそうに微笑んでいた。全ての料理を出し終えて彼らが退出すると、ひと際静かになった部屋であたしはひとりごちる。

「我ながらよく入るなこの量」

「よく食べる女性は魅力的でございますよ」

「それはありがと」

パクリとフォークに刺さった蜜柑を加えると、ルファシスは物思いに耽る様子で口を開いた。

「……世界とは、不思議なものでございますなあ。ドロージャは神に愛され全ての恩恵を受けている。方やわが国では戦争状態・もうすぐ滅んでしまいかもしれないのです」

「そうだね。ちょっと幸せが偏ってるかも」

「異世界よりいらしたヴィラ様に解っていただけとは、嬉しい限りでございます。しかし世界のほとんどの者たちがそれを当たり前だと受け止め、“おかしい”とは微塵も思っていない。それは変でございましょう？私が望んでいるのは等しく平和な世界、ただそれだけなのです。誰かの幸福のために誰かが不幸になる、弱肉強食の世界など我々人類には相応しくありません。理性と知性こそが人が豊かにし力をもたらした原動力なのに、私たちはそれを発揮しようとしな  
い……これを怠慢と言わずして何が怠慢なのでしょうね」

等しく平和な世界。その思想は神に対する信仰からは少し逸脱した  
もの。主張しても指をさされて笑われるだけだろう。  
でも確かにルファシスの言う通りなんだ。誰も疑問に思わない、誰  
も正そうとしない。それは世界の理が人々の心の中で絶対であり続  
ける限り変わらないけれど、少し考えたらバカバカしいってことに  
すぐ気づく。

「あたしもその意見には賛成だよ」

ルファシスさんは意外そうに目を見開き、次に安心したように笑み  
を零した。

「安心いたしました。こんな話ができるのはヴィラ様だけでござい  
ます。貴女には力がある、そう、陛下に耳を傾けさせる力が。陛下

はいささか流されやすい。それは側近の騎士だったり、または想い人であったりと。貴女の言葉もまた、陛下に届くでしょう。いずれこの国を担うことになるモモ様も貴女の言葉になら賛同するはず」

「そしたら世界は等しく平和になる？」

「ええ、きっとその力になると思います」

それはとつてもお優しい考え。でもね。

「確かに、ルファシスの言う通り世界は等しく平和であってほしいよ。だけど、その思想ってゾロア教の思想じゃなかったっけ」

ルファシスの身体が僅かに揺れた。しかし彼は変わらない穏やかな眼差しであたしを見る。

「異教徒を毛嫌いなさいですか？」

「ううん、むしろそっちの方が自然な考えだと思ってる。この世界はあまりにも理不尽だ。限られた人間だけが穏やかに過ごせて、それ以外は違うだなんてルファシスの言うとおり変だろ。だからあたしは異教徒だからって理由だけで差別したり罰したりしようとは思わない。　　ただどね、あたしには大切なものがあるんだよ。その存在がある限り、あたしは神を決して裏切らないよ。なんだかんだ言いながら結局逆らえないのさ。」

だからあたしたち魔女は“神の子”だと言われているんだろっね」

ルファシスは大きく息を吐いて苦笑いを浮かべる。それはどこか悔しそうな、初めて見た彼の表情の変化だった。いつときの静寂が訪れた後、彼はゆっくりと息を吐いて口を開く。

「参りましたな、ただの女性ではないと思っておりましたが……まさか魔女だとは……」

「ルファシス、世界はすべて理不尽なんだよ。お優しい世界なんて存在するわけないだろ。親がいる子供、身寄りがいない子供、豊かな生活、貧しい生活、健康な体、病気で散っていく命。世界だけじゃない、生そのものが理不尽なんだ」

どれだけ他人の幸せを羨んでも手に入らない、だったら今ある幸せで生きて行くしかない。それを忘れて他人の幸せばかりを欲しがる人間が本当に不幸なんだ。それはドローシャであろうと端の国であろうと変わらない。

……あたしだって、普通の家庭をどれだけ望んでいたことが。

「ルファシス、あたしは綺麗事は嫌いじゃないけど、あたしの大切なものにまで手を出すなら話は別だ」

「さすが魔女、全てをご存じか」

全てではない、けれど断片的には。

そう言つとルファシスさんは俯いて目に薄く涙を溜めた。

「……私はかなりの高齢でして、もうすぐ老いが始まるほどの年

なのです。外交官として様々な国へ行き、いろんな国の生活を見ってきました。初めてドローシャに行った日を今でも覚えております」

天井を見上げ、思い出すようにどこか遠くを見て目を開く。

「初めて見たドローシャの空はあまりにも青くて澄んでいて……完璧だった。見た瞬間に涙が溢れ出ました、こども美しい空があったのだと。自分の目が信じられなかった。それくらい完璧で影ひとつない空でした。そして私は思ったのです。神はあまりにも残酷だ。神と呼ばれ崇拜されながら、なぜドローシャだけを贖する？なぜ端の国を見捨てるのです？」

「ルファシス、それはあたしもオーティスに来て感じたよ。ドローシャでは朝露ひとつで世界が輝いて見えるほど美しかった。けれどここではそれがない」

はい、とルファシスは小さく返事を返した。あたしは肘をついて顔を近づけると、睨むように彼の瞳を見つめて首を捻る。

「ルファシスの主張はだいたいわかったよ。でも残念だね、まさかあんたみたいな常識的な人があたしの敵だなんて、ね」

レオナードを返しなさい。

そう言葉を紡いだあたしの声は、自分でも驚くほど低く冷たかった。ルファシスは目を見開いてあたしから距離を取る。

「……レオナード王を呼び捨てになさるとは……まさか貴女はエルヴィーラ王妃か」

「そんなことどうでもいい。お前が5か月前にベルガラの王と接触していたのはわかってるんだ。早く返せ」

彼は黙り込んで視線を彷徨わせ、それから腹を括ったようにあたしを見ると伏せて地に頭を付けた。

「私のした行為・・・決して許されることではないでしょう。許していただこうなどと思っていません。ですが私は知ってほしかったのです。中心の国を横目に戦場へ赴く兵士の気持ちを・・・家族の涙を」

「だからといってなぜベルガラと手を結んだ。敵国だろうが」

「私は確かにドロシヤの王に手をかけました。しかし彼のような神の恩恵を一身に受けた完璧な人物が思い通りになると思うほど私は愚かではありません。ベルガラの企み、オーティスへの襲撃と世界の覇権を入手することは必ず失敗すると踏んでおりました」

「・・・呆れた」

「しかし現に、貴女様がこうしていらしたでしょう？」

「・・・レオナードは？」

「国境沿いに離宮がございます。そこにお連れしております」

「わかった」

レオナードが無事だと改めて分かり、安堵のため息を吐くとあたしはルファシスを見下ろして目を細める。

ルファシス。優しくて愚かな、普通の人間。だけどレオナードに手を出した、この世で最も重い罪を背負う罪人。

「本当に理不尽、だな」

あたしはドロージャにルファシスを連れていくことにした。一応罪人だから。

テレポートを使ったのはいいんだけど、人を連れていた所為か見覚えのない場所に到着。夜で辺りは真つ暗だし、しかも森の中だし、どうしようか迷いながら歩いているとなんとか城までたどり着くことができた。

・・・テレポートで人を運ぶのはこれきりにしようと思いつきながらオースティンに戻れたのは既に翌日の昼で・・・。太陽の照る中あたしは鳥に化けてレオナードが居るといふ離宮へ向かった。

国境沿いに離宮を設けるなんて珍しい。そう思いながらあたしはそれらしい城を見つけて中に入る。

・・・ここにレオナードがいるんだ。

あたしらしくもなく緊張しながら最上階の廊下をゆっくり歩く。造

りはほとんどオーティスの城と変わらない。異なるのは天井の高さや廊下の幅がちょっと狭いのと、人氣が全くないことくらいだろうか。レオナードを監禁してるはずなのに何故見張りがいないんだろう。これならすぐに逃げ出せちゃうんじゃないか……。

「誰かいねえのー?」

しーんと静まりかえって返事はない。あたしは階段を降りて一階でやっと人と会うことができた。侍女の格好をした女の人はあたしを見て目を丸くする。

「ここにレオ……ドローシャ王がいるって聞いたんだけど、どこ?」

ぐいっと詰め寄れば彼女はビクリと肩を震わせた。

「あ、そっそれが一週間ほど前に……いなくなりまして……」

「ええええええええええ!!」

いや、確かに大人しくしてるようなヤツではないけどさ!一週間前つて……連絡よこせや!!

「我々もまさかこんな離宮にドローシャの王がいらっしやるとは思わなくて……慌てて解放したんです。それから一度も姿をお見かけしておりません」

「……わかった」



何やってるんだろ、あいつ。  
……とりあえず、一から搜索し直しのようだ。

### 第三十五話 おかえり

あたしは帰ってすぐに百の部屋へ行った。とにかく大きなベットに横たわりたかったんだけど、既に先客がいたらしい。

「あ、恵理ちゃんおかえり」

「うん、ただいま」

邪魔だ、と言わんばかりにヒューバートから睨まれる。けどちょうどいいかと思いき直して、懐にしまっていた手紙をヒューバートに手渡した。

「これルファシスから」

内容はレオナードを監禁した罪を告白し、ドロシヤへの償いのために自首するというもの。あたしが無理やり書かせたんじゃない。彼が自分からお詫びに、と書いてあたしに託したんだ。

ヒューバートはすべて読み終わる頃には真っ青になっていた。そりゃそうだろうな。自分の部下が中心の国に手を出した・・・だなんて。これでドロシヤの怒りを買えばオーティスは潰されてしまう。

「ヒュー?どつしたの?」

「いや、・・・なんでもない」

手紙はヒューバートの内ポケットに仕舞われた。百は不思議そうに顔を覗き込む。

「毒女、この内容は一切他言無用だ。わかったな」

「はいはい」

ヒューバートはごほん咳をひとつすると、百と再び向き合って背筋を伸ばす。一方百のも気まずそうに両手を膝の上に置いて俯いた。そのまま会話はなく、もじもじと相手を窺っているだけ。なんだよこの初々しいカップルは。

「お邪魔みたいだから小屋行くからな」

気持ちが伝わったのはいいけどどうすればいいかわからない小学生カップルのようだ。・・・ま、本人たちが幸せならそれでいいけど。あたしは部屋から出ると溜息を吐いてそのまま背もたれた。レオナードはあの離宮を出た後どこへ行ったんだろうか。なぜ何も連絡を寄こしてくれなかったんだろうか。

レオナード・・・せっかく会えると思ったのに。くそう。

あたしはいつも以上重たい身体に昨夜寝ていないことを思い出して小屋へ急いだ。何度見てもずいぶん簡易なベットに横になり、そのまま何も考える暇もなく意識が落ちて行った。

夕日に街が赤く染まる時刻。  
王城の門に黒衣の背の高い男が立っていた。彼は剣を抜き、門番の首に突き付ける。

「中に入れる」

「何度頼まれても脅されてもそれはできない！我々に剣を向けるのなら逆族とみなすぞ！」

「こんなに丁重にお願いしているのだが、やむを得ないな」

男は門番を足で蹴って吹き飛ばした。その穏やかでない様子に次々と兵士たちが集まる。

「敵襲だ！備えよ！」

「これより先には通さんぞ！」

「大人しくするんだな、死にたくなかったら」

あっという間に30人ほどの兵士に囲まれた男は、大きなため息を吐くと剣を握り直して構えた。冷えたような感情のない声で言う。

「どうしても通してもらえないのならば無理やりにも中へ入れて

もらっ」

剣が振りかざされた。金属がぶつかりあう音が響いたが、男は兵士を斬ることなく適当にあしらうと城の中へと駆ける。

「待て！」

「侵入者だ！捕えろ！」

迫り来る兵士を退けながら、また後ろから追ってくる兵士を巻きながら、黒衣の男はひとつの塔の中へ入って行った。乱暴に部屋の扉を次々と開け、何かを探しまわるかのように駆け廻る。

男を見た侍女たちの悲鳴と兵士たちの怒号が響き渡った。部屋で百とお茶をしていたヒューバートが何事かと立ち上がった時、ドン！！

と乱暴に扉が開いて一人の男が飛びこんで来た。

「え・・・え・・・えっ!？」

「オーティス王、突然無礼な訪問をお許しいただきたい」

「そ、それは構いませんが・・・」

動揺したヒューバートがおろおろしていると、部屋に兵士たちが流れ込んでくる。男を捕えようとしたところで、それはヒューバートが片手で制した。

「剣を納めよ。そのお方は剣を向けて許されるような方ではない」

「しかし、この者は侵入者ですが・・・」

「余が許す。兵士たちは部屋を退出せよ」

「ヒュー・・・」

不安そうにヒューバートを見上げる百に、彼は大丈夫だよと優しく笑った。

ヒューバートは膝を折って礼を取ると黒衣の男に向かって口を開く。

「このようなお迎えになってしまい誠に申し訳ありません、レオナード陛下」

黒衣の男　レオナードは青い瞳をヒューバートに向けて頷いた。疲れているのか多少顔色が悪い。

「こちらこそ暴挙に出たこと、お詫び申し上げます」

レオナードの持つ独特の威圧感にヒューバートの足が震えた。百も怖がってヒューバートの後ろに隠れる。

「・・・ここまで来た経緯を、聞かせてくださいますね」

「ええ、これはオーティスにも大いに関係がある」

レオナードが離宮を抜け出せたのは今から一週間ほど前のこと。それからドロージャへ向かおうとしたのだが、ドロージャでは規則で国民以外国土を跨ぐことを許されていない。王であるレオナードは当たり前だが国民証を持つていなかった。よってドロージャに入ることを拒否され、事情を説明しても信じてもらえず、せめて連絡を取ろうとしたのだが調教した鳥も国外郵便もないためオーティス王に助力を願おうとした。が、今度は門番に信じてもらえずに2・3日の交渉の末、痺れを切らしたレオナードは強行突破に出た、このこと。

話を聞いたヒューバートの表情は固まっていた。向かい合って座っているレオナードは連絡を取るのにここまで手こずるとは、と肩を竦めてため息を吐いた。さっぱり話のわからない百は物珍しそうにレオナードをちらちらと窺っている。

「ドロージャの王が誘拐に門前払い……あの……誠に申し訳ないのですが、実行犯はどうやら我が国の官が行ったことのように……」

「それはよいのです。とにかく今すぐにドロージャへ連絡を取りたいのですが」

「ええ、もちろんすぐに用意させましょう」

レオナードは侍女に出された紅茶を一口飲むとすぐにカップを置いた。ヒューバートは一生懸命に頭を働かせながら失礼のないように話しかける。

「陛下を捕えてどうするつもりだったのでしょうかね。人質にしても……それはあまりにバカげている。ルファシスによるとベルガラが

仕掛けたことだと言っておりましたが、しかしドロシーを敵に回してどうするつもりだったのでしょうか」

「わかりませんが・・・少なくとも人の私利私欲というものは際限を知らない。彼らが自分の欲望がために私を利用しようとしたのかもしれませんね。最も、それにしても離宮の警備が手薄でしたが・・・」

そう言いかけたときに、部屋の隅にちよこんと黒猫が座っていた。てくてことレオナードの隣にやってくると慌ててヒューバートが身を乗り出す。

「うわっ、申し訳ないすぐに追い出します」

「構いませんよ」

レオナードは毛並みの見事な黒猫を、壊れ物を扱うかのように丁寧に抱き上げて膝の上に置いた。猫は身じろぎひとつせずくてんと横になる。

「いずれにせよ事の犯人がベルガラならばオーティスにも被害を及ぼすでしょう。我々を敵に回した以上、必ずベルガラは滅ぼします」

それが“見せしめ”。中心の国を敵に回した末路を、世界に知らしめるいい機会だとレオナードは薄く笑った。ヒューバートはレオナードに対する恐怖心を押し隠しながら頷く。

「申し訳ないのですが少し休ませていただいても？」

「ええもちろんです。お疲れでしょうからすぐに部屋を用意させま



しよつ」

外の騒がしさに目を覚ますともう夕方だった。ガヤガヤとやけにうるさくつて、何かあったのかなと思いつながら小屋を出ると……。

「レオナード!？」

ちよつと待つて、なんでここにいるんだよ。まだ半分覚醒しきれていない頭を振つて彼の後を追つた。もちろん猫に化けて。

茶色の髪、青い瞳、どこからどう見てもレオナードだ。どつと安心しながら、でも剣なんか振り回して何やってるんだろうと思いつながら追いかけてみれば辿りついたのはヒューバートと百の居る部屋で。

「オーティス王、突然無礼な訪問をお許しただきたい」

「そ、それは構いませんが……」

レオナードの話によると連絡手段がなくて、仕方なく無理やりここへ突入してきたのだとか。よく考えてみれば手紙を運ぶカラスが街中に売つてあるはずないし、ドロージャへ入るのも国民証がないと無理なんだつた。

あたしは会えた喜びと無事だったことの安堵にレオナードに近づけば、さすがレオナード、すぐに気づいてくれた。

部屋に入って誰もいなくなると、あたしは猫の姿を解いてレオナードに抱きつく。

「アホ！どれだけ探したと思ってるんだよ」

「・・・悪かった」

レオナードだ。あたしの探してたレオナードだ。温かい手も、あたしを見つめる青い瞳も、優しすぎる微笑みも。

信じられない、あんなに探してたのに突然ひよっこり現れるなんてレオナードらしいけどさ。

「なぜヴィラがここにいるんだ？」

「探してたら・・・なんとなくここに居着いたというか、動きやすかったし」

百が居たから。これは話さないでおこう。

「それよりベルガラからドロージャに手紙が来たよ。1か月以内にオーティスを襲撃しろ、だと」

「やはりベルガラか。交渉へ向かう途中、意識を失う直前に一瞬だけ妙な薬草の匂いがしたんだ。おそらくベルガラがよく使用しているムルグだろう」

「ムルグ・・・強睡眠薬草ね。他の兵士たちは？ブライエ書簡長

は？」

レオナードは厳しい顔に戻って首を横に振る。そっか、と言いかけた言葉はレオナードの胸に押し当てられて消えた。

レオナードがこうしてあっさり離宮から抜け出せたのは たぶんルファシスの所為だろう。彼はオーティスへ襲撃を望んでいるわけではなかった。ただ、世界の理の矛盾を思い知らせたいだけで。

「ヴィラ」

「ん？」

「 会いたかった」

うん、あたしも会いたかったよ。傍にいないだけでどうしようもなく不安で、絶対無事だって思ってたけど、それでもやっぱり不安だった。

重なった唇に心の底が熱くなるのを感じた。心だけじゃない身体もじわじわと熱を持ち始める。涙が一滴だけ、ぽたりと落ちた。レオナードは心配そうにあたしの顔を覗き込む。

「ヴィラ？」

「レオナード……おかえり」

レオナードはあたしの目尻に口づけけると、今まで以上に綺麗な笑みで「ただいま」と言ってくれた。



## 第三十六話 仕事再開

翌朝。レオナードと一緒にヒューバートが居座っている百の部屋へ向かえば、既にいつも見る顔が揃っていた。ヒューバートは金髪の騎士アレフとおかまザックを引きつれて頭を下げる。

「こちら第一騎士のアレフ・ダグラスと宰相のザック・ローノイドです」

え……、ザックって宰相だったんだ。偉そうだとは思ってたけど意外だ。

「はじめまして陛下。我がオーティスを頼りにしていただき光栄でございます」

ザックは挨拶したけれどアレフは無言で頭を下げるだけ。レオナードも軽く会釈を返し、ヒューバートの後ろにいた百に向き直る。

「……そちらの女性は？」

「「げっ」」

声が重なったのはあたしとヒューバート。そうだ、すっかり忘れてたけどレオナードは百を殺すって言ってたんだ。ヒューバートもドロージャが大々的に百を探しまわってた事を知ってるから、あたしたちは焦って百の前に立つ。

「えっと・・・この子はヒューバートの親戚の子でヒューバートの婚約者なんだ！なっ！」

「そうです！そうなんですっ！」

レオナードはあたしをじとーっと見た後軽く嫌味な笑いをした。・・・絶対バレたぞ。

百を本気で向こうの世界に連れていくか悩んでいた時、ザックがあたしの胸蔵を掴んで引き寄せる。

「ちよつと待ちなさいよあんた、なーんでレオナード陛下と一緒に来たわけ？ん？まさか今度はレオナード陛下に色目使う気じゃないでしょうね！」

しまった・・・。そりゃ朝っぱらから2人で部屋に来ちゃ疑われなくても仕方ないよな。

レオナードとの関係をどう説明しようかと視線を彷徨わせると、彼の青い瞳と目が合った。

「（何も説明してないのか）」

「（言ってるない・・・）」

「（隠すようなことか？）」

「（だって最初は潜入捜査のつもりだったから。王妃らしい振る舞いは何ひとつしてないし・・・今更説明するの面倒だろ！）」

レオナードは横を向いて盛大に呆れたようなため息を吐いた。ってか視線だけで会話できるあたしたちすげえ。

ザックがものすごい形相で迫って来たから、あたしは両手で壁を作  
って背を逸らせた。

「言っとくけど、レオナード陛下のご機嫌を損ねるようなマネは絶  
対しちゃダメよ。国際問題になるかもしれないんだから！」

「わかった、わかりましたあ」

気持はわかるけど顔が怖いぞザック。

それから座って話そうとあたしは率先してソファに座ると、ザッ  
クとアレフとヒューバートから鬼の睨みを食らった。

「毒女！レオナード陛下が先でしょ！」

「あーはいはい。どうぞ陛下お座りになってくださいな」

冗談半分に恭しく言えば何がおかしいのかレオナードは軽く嘖き出  
して隣に座る。そんなレオナードがよほど珍しかったんだろう、口  
をぽかんと開けながら鑑賞する一同。

「お話がありますので、皆さんも座ってください」

「は、はあ」

ここからは本当に真面目な話だった。

あたしとレオナードは昨夜話し合ってこのオーティスに一時滞在す  
ることにした。理由は3つ。まず1つ目はレオナードの体力が回復  
しきってないこと。2つ目はベルガラと繋がって今回の事件に関わ  
っている人物を探るため。3つ目はあたしのテレポート術が完成し

ておらずレオナードをドロージャまで連れて行くことができない上、  
迎えを寄こすにもかなりの時間がかかるだろうということ。鳥にな  
ると片道一日半で行けるけど、実際には馬に乗っても10日以上か  
かるのだ。

「　　そこで、こちらの滞在をお許しただきたいのですが」

「もちろん我々は大歓迎します」

「ありがとうございます。ドロージャはベルガラの撲滅に全力を尽  
くしますので、ノルディ戦争のほうもすぐに片がつくでしょう」

「は、はいっ」

ヒューバートはほつとした表情を見せて頷いた。オーティスが今抱  
えている一番重たい問題、それがノルディ戦争。事実上ドロージャ  
を味方につけたオーティスが負けることはないだろう。

それからあたしたちは今回の罪人のリストアップを始めた。方法は  
簡単、あたしの作った偽ルファシス（泥人形）を通してだ。まだ一



部しかルファシスが捕まったことを知らないのです、そこを利用させてもらうことにした。ちなみに溜まっている内政の仕事はあたしがドローシャとオーティスを行き来して運ぶことに。

レオナードのために用意された部屋で、それらしい手紙や資料を没収して調べ上げる。

「あの小さい女、ヴィラの探していた友人だろうか？」

「……そしてやっぱりバレてた。あたしはレオナードに詰め寄って胸蔵を掴む。」

「おおおおお願いだからあの子には手を出さないでっ！」

つていうか百はヒューバートという恋人いるし、百に何かあったら国際問題になりそうだし！一生懸命力説していたけれど、胸蔵を掴んでいた手はやっぱりと放されて口は口で塞がれた。

「んっ」

無理やり突き離せないのは惚れた弱みってやつ。誰かに見られるかもしれないというのに、レオナードの我儘に承えてしまうあたしはとことんレオナードに甘い。

ゆっくりと唇が離れると、彼の青い瞳があたしを覗き込んでいた。

「……ヴィラ」

「ん？」

「あの女に手をかけることはしない」

「ほんと!？」

「ああ、約束しよう。その変わり」

あつという間に身体がひっくり返ってレオナードの後ろに天井が見えた。耳元でそつと囁かれた言葉にくすくす笑いが漏れる。

「残念なことに、百はもうヒューバートに盗られちゃったからそれはない」

「あの女に構い過ぎて俺を放り出したりしないな？」

「しないから」

再びレオナードの顔がゆっくりと近づいてきたので目を閉じようとしたけど、廊下から近づいてくる足音が聞こえたのであたしは全力でレオナードを突き飛ばした。

「夜会？」

夕食時、レオナードはヒューバートに拉致されたので百と食べていると、急にザックが現れて夜会が行われると告げられた。

「明日はオーティスの建国記念日なのよね。あんまり規模の大きな夜会じゃないけど、一応レオナード陛下には内密に参加していただくことにしたから。だから毒女は大人しく部屋に引きこもってなさい」

「ええええええええ」

なんであたしだけ！ってか夜会ならパートナーがいなければいけないはず……。レオナードにどこの女を紹介するか知らないけどヤダヤダヤダヤダ。

「あたしも行く！レオナードと！アイタツ！」

ゴツンとゲンゴツを食らってあたしは頭を抱えた。

「恵理ちゃん大丈夫？」

「痛い……」

「あんなね！誰かれ構わず呼び捨てにするんじゃないわよ！失礼でしょうが！」

「でもお」

レオナードと他の女が並んでるところなんて見たくない。それにレ

オナードだけ参加するなんてずるい。

「大人しくしてるからいいだろー?」

「ダメよ! 毒女は存在自体が有害なのよ!」

そこまで言うか。むーっと不機嫌に口をとがらせていると、見るに見かねた百が口を挟む。

「恵理ちゃんも参加したいならあたしからヒューに言うておこうか?」

「ホント?」

やったーと喜びかけたけれど、すぐにザックに遮られた。

「だめだめ、陛下も許可しないわよ。レオナード陛下がいらっしやる以上粗相は許されないし、百を公式に発表する大切な夜会なんだから」

「だから大人しくするって」

「さつきも言ったでしょ? 毒女は存在自体が有害なの! あんたの顔は目立ち過ぎるのよ! 自分の美醜をもう少し理解しなさい!」

「チッ」

お留守番なんてつまらない。

「でも、恵理ちゃんがせつかくオーティスに来てくれたのに夜会に

出られないなんて」

「百……」

「あたし恵理ちゃんが居てくれたらすごく心強いな」

「百ー！」

がばつと抱きつけばザックにペリッと引き剥がされた。百はこんなに可愛いのに、ザックはなんて可愛げのないやつなんだ。

「でも夜会よ？パーティーなのよ？毒女の相手はどうなさるおつもり？」

「大丈夫だよ、恵理ちゃんならすぐにパートナー見つかるよ」

「大人しくするから。顔がダメなら仮面被るから」

ザックは腕を組んで考え込んだ後、やっと口から出たのは大きなため息だった。

「……その変わりレオナード陛下から半径10メートル以上近づかないこと」

「わかった」

レオナードとパートナーにはなれないけど、少なくとも他の女と浮気してないかチェックできる。……されたところで文句言える立場じゃないけれど。

「とじろでドレスはどうするのよ？」

「明日の昼に買ってくるよ」

っていうかドロシヤから持ってきてくればいくらでもあるし。ドレスよりパートナーの心配しなきゃかな。

### 第三十七話 死の晴れ舞台

次の日。

「恵理ちゃん綺麗!!」

柔らかい月色のドレスを着たあたしに、百はいつものように目を輝かせて微笑む。一方百はヒューバートが用意した豪華なフリルをあしらった純白のドレス。

「百もそうやって着飾れば大人っぽく見えるよ」

「ほんと!?!」

きゃっきゃつとはしゃぐ百に、あたしは小さな小瓶を百に手渡した。

「これあげるから、今日はこれをつけるんだ」

「なあにこれ」

「ちょっとした香水」

「へー、ありがとう。なんて言っの?」

「“死の晴れ舞台”」

「なんか不吉だねえ」と言いながら蓋を開ける百。おそろおそろ匂いを嗅ぐと、意外だったのか目をパチクリさせる。

「全然名前のイメージと違う！優しい感じ……」

「気に入った？」

うんうんと笑顔で頷く百は、あたしの首に顔を近づけてくんくんと匂いを嗅いだ。

「恵理ちゃんのは？」

「あたしのは“月の精霊”。ドレスに合わせたんだ」

「なるほど……あまり甘くないのにインパクトのある匂いだね。この世界にも香水ってあったんだ」

新発見、と不思議そうにあたしのポーチの中を覗く。

「ビューバートからもらったりしないのか？」

「ううん、服とかアクセサリはくれるけど香水はなかったよ」

これは？と百はいろいろ漁り始めた。こういうのを始めたらこの子はなかなか終わらない。買い物もかなり時間がかかるタイプだ。そんなところが可愛いすぎる。

「どれが気に入った？」

「うーん……“死の晴れ舞台”が抵抗なく一番付けやすい香り



かな、匂いも薄いし。あとはこれとこれ」

「じゃあそれやるから持ってる」

えっと目を見開く百。小瓶を手渡したけどすぐに押し返そうとする。

「だめだよ、そんなっ」

「だめだ、持ってる。普段からつけるなんて言わないけど、こういう公式の場では付けた方がいい。それだけでステータスになることもあるから」

「そんなものなの？」

「そんなものだ」

百はしぶしぶ受取り、きゅっと両手でそれを握った。あたしは有無を言わず百を化粧台に座らせると、侍女が施したのであるう化粧の上から化粧を重ねる。使っているのは日本製の化粧品。やはり科学技術が進んでいるあちらの世界の方が発色も持ちも良かったため、あたしは何度か行き来した時に化粧道具一式を持ってきた。

「恵理ちゃんなんでも持ってるねえ」

「まーね。さて、可愛いお姫様の出来上がり」

百は立ちあがるとくるりと一回転して嬉しそうな笑みを浮かべる。やっぱり可愛いすぎる。

「緊張するね」

「大丈夫、ヒューバートがちゃんとエスコートしてくれるだろ」

「うん」

元氣よく頷いた百と一緒に、あたしたちは待ち合わせ場所に向かった。

百はヒューバートと華々しく登場したけれど、あたしはこっそりと忍び込むようにして会場へ入った。あたしがパートナーとして引張って来たのは、前に一度だけ晩餐会で会ったロディだ。この選択は大いに当たり。彼は目立つしモテるけど女性さばきに慣れていて困まることはないし、必要以上にベタベタしてこないし、あたしのワガママもなんなくこなしてくれるから。だけど、

「周りの視線がきつい。まったく、人をジロジロ見るんじゃないよ」

「それは仕方ないさ。ヴィラは目立つからね」

ああもう、鬱陶しいからこっちを見ないでほしい。顔隠しておけば

よかった。

ところでこっそり見たレオナードのパートナーさんは華やかな印象のグラマラス美人。彼女は嬉しそうに話しかけていたけれど、レオナードは無表情であまり相手をしてないようだ。レオナード自身もかなり目立つ容姿をしているけれど、ドローシャの王だと皆知らないので注目されているくらいで済んでいる。さすがに目立ち過ぎて話しかける勇者はいないらしい。話しかけるなよオーラ放ってるしな。怖い怖い。

「ロディ、自由にしていいぞ。せっかくだし女捕まえてきたら？」

「やめてくれよ。今回の夜会で君以上に魅力的な女性はいないだろう？一体誰の心を掴むと言っただい？」

・・・というわけで、四六時中ロディを連れまわすことに。時折ガチガチに緊張して自己紹介をしている百のフォローに回りつつ、今回の仕事をこなすことにした。

夜会に来た目的、それはレオナードが浮気しないように見張ることじゃなく 百の安全を確保すること。何度か公の場に出て思いついたのだけれど、さまざまな人が入り乱れる社交場は危険が多い。一応アレフがしっかり後ろから付いているようだからまだ安心できるけど、今日初めて百を王の恋人として紹介するから何が起るか分からないし。

神経を尖らせて壁際に居ると、突然ロディが参ったような声を出した。

「ヴィラ、君は茶髪の彼に何か恨みでも買ったのかい？」

「ん？どうした？」

「さっきからずっと睨まれてるのだけれど・・・」

そう言うロデイの顔色は優れず冷や汗をかいている。そつと彼の蔭から覗いてみると、こちらを凝視しているレオナードと目が合った・・・気がした。

「無視してていい」

「いや、そのうち殺されそうな勢いで睨まれてるのだけれど・・・」

「無視しろ」

確かにレオナードは怖いけど、今はスルーさせてもらう。ごめんロデイ、ちよつと可哀そうだけど我慢してくれ。

それからいつとき会場を見張っていると、人ごみの中から誰かが近づいてきた。

「こちらの女性はどこのご令嬢ですか？アーノルド卿」

「・・・シクバル卿」

誰だ？とロデイにこつそり聞くと、前オーティス王の従兄だそうな。

「こちらはモモ様のご友人であらせられます」

「ほう。突然話しかける無礼をお許しください、わたくしはハウゼン・シクバルと申します」

「ヴィラです」

丁寧ながらも貫禄のある口調。あまり嫌いなタイプではないけれど、今はできれば放っておいてほしい。

「モモ様と言えば今日は一段とお美しく……彼女はどのようなお方ですか」

「いい子ですよ。明るくて優しくして」

「そうですか」

彼は軽快に笑った。あたしは愛想笑いを返す気もなく話を合わせていると、ロデイがさりげなくあたしをダンスフロアに連れて来てくれた。シクバル卿から解放されてほっと一息吐く。

「……助けてくれたのはいいんだけど」

ダンスフロアのだ真ん中だしこれじゃ踊らなきゃいけないじゃん！ロデイはいたずらっぽい笑みを浮かべ、あたしの腰に手を回す。

「いいじゃないか、一曲くらい。シクバル卿の世間話はどうしても長いよ？」

「じゃあ一曲だけ……」

あんまり自信はないけど、丁度流れて始めた曲で適当に合わせてみる。相変わらず周りの視線がきつい。

なんとか一曲を踊り終え、さっさとフロアから抜けようとしたら、

今度はヒューバートたちとばったり出くわした。ヒューバートはものすごく嫌そうな顔をしてあたしを見るけど、一方で百はガチガチだった表情が少し和らいだ。

「恵理ちゃん！」

「百、大丈夫？」

「あんまり」

えへへと苦笑する百。いつもの明るい笑顔だったけれど僅かに疲労が見えた。可哀そうに。

「なにやってんだよヒューバート。さっさと百休ませてやれ」

「言われなくてもそうする」

つん、とヒューバートは言い放ち、百を連れて会場を出て行くことにした。が。ヒューバートがさっきのシクバル卿に捕まったらしく、百は隙を見てこちらに逃げるようにしてやってくる。そして困ったような苦笑を見せると、肩で大きく息を吐いた。

「ふう、息がつまりそう・・・」

「ヒューバートは女の扱いがなってないな」

「そうだね、モモ様をこんなに疲れさせるとは陛下もまだまだ青くていらっしやる」

あたしたちは3人で頷き合い、ヒューバートがいかにいじめやすく

いじりやすいヤツなのかを語り合っていた。ここがどこか忘れるほど熱く熱弁をふるっていた。

しかし突然誰かに腕を引つ張られて人波の中に引きずり込まれる。犯人は茶髪の背の高い男で……って、え！？レオナード！？

「ちょっとナニコレ！目立つ！超目立つからやめてくれ！」

レオナードはあたしの手を引いてぎゅうっときつくあたしを抱き締める。そりゃ目立つさ！だってレオナードだもん！

見られてる！めっちゃ見られてるからー！ー！！

「ヴィラが叫ぶから目立つんだろっ」

「いや、半分以上レオナードの所為だからな？」

そして引つ張られるままに、百たちからかなり離れた場所まで来てしまった。

「あー、百……」

百までの距離が遠く、姿もここからじゃ確認できない。レオナードは不機嫌そうに眉を寄せてあたしを引き寄せる。

「俺じゃ不満か？」

「ううん、そういう意味じゃなくて」

どうしよう、レオナードがめちゃくちゃ怖い。声のトーンもいつもより低いし、怒ってるのか視線もキツイ。

「お、怒ってる？」

「さあな」

うわあ、怒ってらっしやる……。なぜだ……。

あたしは会場の外にレオナードを連れて来て人の少ない庭を目指した。夜の庭は幻想的で好きだけどちょっと暗くて得意ではない。ただこの暗さが恋人たちの逢引に格好の場になっていたりする。

あたしは暗闇の中で光る青い瞳を見上げて首を傾げた。

「レオナード、あたし怒らせるようなことした？」

「……………」

無言が逆に怖い。せつかく久しぶりに会えたのに喧嘩はしたくなかった。やっと会えたあたしたちだけど、いつも周りに人がいるから手を繋ぐことさえままならないし、会うのもなかなか神経を使う。もつと一緒にいたいのに、もつと傍に寄りたいのに、喧嘩なんてしたら気まずくなること間違いない。

あたしは謝る代わりにレオナードに近づいて彼の胸に頭を預ける。大きな手があたしの髪をそつと撫でてくれた。

「ごめんね、放っておいて」

「わかってるじゃないか」

恨みがましいレオナードの言い草にクスリと笑いが漏れる。レオナードはずつと無視されていたことが気に食わなかったんだろう。



「あまり不用意に男に近づくな」

「近づいてないよ。誰にも指一本触れてないし触れさせない」

額に口付けが下りてきたので顔を上げると、青い瞳が近かった。触れそうで触れない距離のまま口を開く。

「部屋に戻ろう」

「・・・うん」

レオナードへあてがわれた部屋へ歩き出す直前、嫌な予感がして振り返った。なんだろう、胸がざわざわする。

「ヴィラ？」

「・・・レオナードは先に部屋に戻ってて」

あたしは全速力で会場へ戻る。扉をくぐって嫌な予感のするほうへ自然と足が動いた。そして

「百！」

「恵理、・・・ちゃん」

ざわざわと騒がしく人が取り囲むその中心に、百は口から血を流しながら真っ青な顔をして座り込んでいた。隣でヒューバートがパニック状態になっている。

「モモ！！モモ！！」

「退け、お前邪魔！！アレフ！ヒューバート押さえてろ！！」

異常事態だったからか、アレフはあたしの指示通りにヒューバートを羽交い締めにした。あたしは百の口から流れる血を手にとって匂いを嗅ぐ。

「……毒か」

あまり量は多くない。すぐに百の胸に手を当てて心音を聞くフリしながら治癒を始めた。

「おい、医者を呼べ、ロデイお前行け」

「わかった」

人前で気を散らしながら毒の回るスピードに間に合うように魔力を流し込む。レオナードが戻って来たところで、彼が百を抱き抱えた。

「場所を移動しよう」

ここじゃあまりにも目立つ。あたしは頷いてここから一番近い部屋へ向かった。

「おい、モモは助かるのか!?!」

「大丈夫だヒューバート、大したことない」

香水を渡しておいて正解だった。百につけるよう指示した“死の晴れ舞台”は解毒効果のある貴重な香水。その昔は命を狙われた王妃

たちが好み、己の矜持とプライドをかけて社交界へ向かうときに使用されたという。

百をベットのの上に横たえた頃にはかなり顔色がよかった。ヒューバートも落ち着きを取り戻し、医者が来たときは身体を起こせるほど回復できたようだ。

「俺がついていながら・・・」

落ち込むヒューバートに頭を乱暴に撫で回す。髪がぐしゃぐしゃになった彼は少しだけ視線を上げてあたしを見た。

「落ち込む暇があつたらしっかり百についててやりな」

今が百の中で一番葛藤する時期。王の隣に立つという重圧を理解し、その責任の重さを思い知る節目。それは支えてくれる誰かがいないと乗り越えられない試練だ。

あたしとレオナードは百の無事を確認すると、さっさと部屋を出て部屋へ戻った。

### 第三十八話 決着前夜

まどろみながら目を開け上半身を起こすと辺りはまだ暗かった。あ  
たしは反射的に隣を見てレオナードが居る事を確認する。そして彼  
の姿を見て胸を撫で下ろすのだ。

・・・また突然、いなくなってしまうかもしれない、そんな嫌な考  
えがいつも頭をよぎってしまう。考えても仕方のないことなのに、  
食事もお風呂も仕事でも寝る時もずっと一緒にいるはずなのに。

「レオナード・・・」

あたしは無意識に彼の名を口ずさんだ。大した大きさの声ではなか  
ったはずだが彼の唖がゆっくりと開かれる。

「ヴィラ？どうしたんだ？」

「・・・ごめんなさい、なんでもない」

再びシートにもぐり込んでレオナードの腕の上に頭を置いた。もう  
片方の腕が腰に回って身体が密着する。

「眠れないのか？」

「ううん、大丈夫」

レオナードの瞳が閉じられてもあたしは彼の顔を見つめ続けた。以前のように微笑んでくれる、甘い言葉を紡いでくれる、くすぐったくなるほど優しくしてくれる。なのになぜ、あたしは満たされないのだろう。もっともっと構ってほしいと思うのだろう。絶対に失いたくないと不安になるのだろう。

愛しいと思う、彼の全てが。

あたしはどうしたら全てを守れるのだろう。そもそも守りたいと思うこと自体傲慢な考えだろうか。そつと擦り寄って頬を寄せると、不思議そつに青い瞳があたしを見ていた。

「ヴィラ？」

「大丈夫」

そつだ、あたしは今幸せに押しつぶされそつになってるんだ。この世に絶対の安全など存在しないから、大切なものが在り続ける限り失う危険も孕んでいる。幸せを不幸だと履き違えてしまうほどに、それは永遠に終わらない連鎖。

「大丈夫」

あたしは自分に言い聞かせるように呟くとキュツとレオナードを抱き締めた。

ヴィラが、隣にいる。気が狂いそうになるほど会いたかった彼女が、できれば一日中彼女を腕の中に閉じ込めていたいが、王と王妃という責を負った俺達には不可能なのが悔しい。ヴィラは珍しく眉間にしわを寄せながら山積みになされた書類を片付けていく。よく眠れなかったのだろうか、顔色があまり優れない。

「ヴィラ、無理しなくていいから横になつたらどうだ？」

「平気平気」

あつけらかんと言い放つが空元気だということはすぐわかる。

「昨日の今日だ、友人に会ってきてもいいんだ」

「百はヒューバートがついてるから大丈夫だろ」

「しかし・・・」

「レオナード、口動かす暇あつたら手動かせよ」

もっと甘えてくれたらいいのに、と何度も思う。しかし仕事に関しては自分にも他人にも厳しい性質らしく、弱音を吐くこともなければ手抜きもしない。・・・容赦がない、とも言つう。

「ヴィラ、おいで」

「えっ」

抵抗する彼女の腰を無理やり引き寄せ膝の上に置いた。ヴィラは首をひねりながら俺を不思議そうに見ている。

「どうしたんだ？仕事は？」

「いいじゃないか、せっかく会えたのに仕事漬けなんてあんまりだろっ」

そう言えばヴィラは恥ずかしそうに頬を染めてぼてんと身体を俺に預けた。・・・可愛すぎる。

「・・・誰かが来たら離れるからな」

「別に見られても問題ないだろう」

「ヤダ・・・」

むしろ俺は周りに見せつきたいくらいだ。しかしそれは彼女が望まないからと従う俺はとことん彼女に甘い。

「もうすぐ仕事が片付く」

「うん」

「ベルガラと交渉をかけて降参させれば終わりだ」

「うん」

「そしたら今度こそどこか遠くへ行こう」

「……人魚見たい」

……まだ根に持ってたのか。ああ、と頷けば腰に回った手に力が籠る。血色の良い唇に誘われるように口付ければ、僅かに身じろぎしたものの受け入れられた。啞内を好き勝手に貪り絡めとると苦しそうに息を吐いて離れるヴィラ。

「くっ……苦しいから」

「慣れる」

「慣れるかっ！んうっ！」

廊下の方から人の気配がしたにも関わらず、俺はヴィラを解放しなかった。足音が聞こえ始めると彼女は身体を捻って腕の中から抜け出そうと必死でもがく。

コンコンコン

3回のノックにビクリと身体を震わせて、彼女の抵抗はますます強くなった。しかし俺はそんなヴィラを無視して返事を返す。

「どっぞ」

「えええええ！ちよつと！今ダメ！ダメだから！」

必死のヴィラの声も虚しく遠慮がちに扉が開いた。嫌がるヴィラを



無理やり抱き留める俺の姿を見た訪問の主、オーティス王はぽかんと口を開けて呆けている。

「離れろー離れろー！！！」

「大人しくしてくれ」

「だったら放して！」

「それは断る」

オーティス王は引きつった顔をしながらフェードアウトしていくが、ヴィラが信じられないくらい素早く俺から擦りぬけてオーティス王の腕を掴んだ。

「何！？何の用！？」

彼は視線を彷徨わせながら顔を真っ赤にして口をばくばくさせる。

「そ……そそそその！」

「うん、でなに？」

「~~~~なんでもない！」

オーティス王は真っ赤になったまま駆け去って行った。「えー」と物言いたげにその背を見守るヴィラ。

「どうしたんだ、あいつ」

「さあな」

ここはどうも邪魔者が多くて好かない。さっさと仕事を終わらせてドローシャへ帰ろう。そう決意を新たにして再びヴィラを腕の中に閉じ込めた。

あたしたちは暗い部屋で身を寄せながら手紙を読んでいた。レオナードは眉間にしわを寄せてその手紙をそつと仕舞う。

「いよいよだな」

「・・・うん」

季節は既に初春。僅かに暖かみのある風が肌を撫でていくが、まだ寒さを覚える気温だ。きつとドローシャではもう少し暖かくなっていくだろう。月明りで照らされたレオナードはまるで神話に出てくる神様のようで驚くほどに神秘的だった。彼を見るたびに普通の間ではないのだと思い知る。

「明日の朝、出発しよう」

「・・・わかった」

これが終わればドロージャへ帰ることができる。スラリとあたしの肩にレオナードの指が滑った。その焦らすような愛でるような行為に、あたしは左側の首筋に頭を寄せて背に腕を回す。レオナードは髪と頬を撫でて額に口づけを落とす。

「レオナード」

「ん？」

「あたし、がんばるから・・・」

せめてレオナードだけは失わないようにがんばるから、だから置いて行かないで。

「俺がベルガラ相手にやられるとでも？」

「思っていないよ。だってレオナード殺しても死なそうなんだもん」

そう言ったら軽く小突かれた。クスクスと笑ってレオナードの胸に手を置く。

「レオナード」

「ああ」

想いは言葉にならなかった。明日、あたしたちは一つの国を滅ぼす。そこにあるいろんな歴史や文化を粉々にして事実上ドロージャの支

配下に置くことになるだろう。心を痛める国民たち、罰せられるベルガラ王家の人々。あたしたちは憎しみをこの世界に生み出すんだ。

「大丈夫だ、俺がいる」

「……うん」

レオナードはあたしの顎に手をかけて上を向かせると噛みつくようなキスをする。優しいけれど容赦のない動きに身体に力を入れて自分を支えた。腕にしがみ付けばそっと離れて青い瞳があたしを見下ろす。あたしはその瞳を見つめ返して口を開いた。

「神様はなんで魔女を作ったんだろうな。ドローシャを守るため？ドローシャ王に仕えるため？」

「さあな、少なくとも俺はヴィラを魔女として見ていない」

「あたしは魔女だぞ？」

「魔女であってもなくてもヴィラはヴィラだろう」

レオナードが王様であってもなくてもレオナードであるように。

「……そうだな」

きつく抱きつくとき影は一つに重なった。

「え！？ベルガラと交渉に向かう！？今からですか！？」

朝一番にヒューバートの叫び声が響いた。既に支度を終えたあたしたちは目を見開くヒューバートと百たちを横目に借りた馬に乗る。もちろん馬に乗れないあたしはレオナードに乗せてもらうことに。

ヒューバートは視線をあたしに向けて口を開く。

「ってかなんで毒女も一緒なんだ！？」

「そのままドロシヤに帰るからな」

毒女？とレオナードに訊かれたけど無視した。勝手にヒューバートたちがあたしをそう呼んでいるだけで、あたしに訊かれても困る。百は不安そうに瞳を揺らしてあたしを見つめていた。

「百……」

「恵理ちゃん……もう少しこっちに居たらよかったのに、こんなに突然お別れになるなんて」

「そんなに感傷的になんないですよ。大丈夫、またすぐ会えるから」

「本当？」

「うん」

ヒューバートもアレフもザックにもまたすぐ会えるよ。

レオナードはあたしの後ろに乗ってヒューバートを見下ろすと、馬を彼の方に向けて向き合う形になった。

「オーティスの陛下、この度のご助力を感謝いたします」

「いえ、こちらこそ・・・」

「ヴィラもずいぶんお世話になったようで」

「それは、はい、まあかなり」

「んだと？」

少し寂しいけどオーティスとのお別れ。ドロージャへ帰れるのは嬉しいけど、でもやっぱりここで過ごした時間は本物だから。

「ヒューバート、百を頼んだぞ。幸せにしてあげてくれ、人一倍自分の幸せには鈍いやつだから」

「毒女に言われなくてもわかってるよ」

クスリと笑いを漏らすと、今度は無表情で後ろに控えているアレフに向かって言った。

「アレフはもう少し感情を表に出さないと女にモテないぞ」

ぷいっとなつぽを向かれた。相変わらず無愛想なやつ。  
レオナードが手綱を引いたのを合図に馬がゆっくり動きだす。

「元気でな」

さよなら、オーティス。

### 第三十九話 異変

交渉の場所はレオナードが閉じ込められていた離宮。オーティスの王城から歩いて半日ほどでたどり着けるそこは、離宮という名の通り形式上は王城の一部である。造りはまったくと言っていいほど同じで、多少狭いが手入れも行き届いている立派な塔だった。ヴィラとレオナードは馬から降りてその塔を見上げる。

「行こうか」

「そつだな。懐かしい？」

「さあ、あまりいい思い出はないがな」

閉じ込められていた場所なのだからそれもそつだ、とヴィラはクスクス笑いながらレオナードと腕を組んで歩きだす。既に交渉相手は到着していたらしく、真つ赤な髪の方が2人を出迎えた。彼はレオナードという人質を失っているにも関わらず不敵な笑みを浮かべて礼を取った。

「お久しぶりでございますレオナード陛下」

「貴方は王弟のクラウドス殿でしたね」

「その通り……。さあ、中へ入りましょう」



ヴィラは探るような目でクラウスを睨みながらレオナードの歩調に合わせて。用意された場所は最上階の  
閉じ込められていた部屋だった。そう、レオナードが  
テーブルに着くと両肘を乗るクラウス。

「さて、さっそく話を始めましょうか」

「そうですね」

とても話し合いの場とは思えないほど重たい空気が部屋中に満ちた。国のやりとり、それは戦場に匹敵するほどの重さと残酷さを孕んでいる。

レオナードは目を細めると静かに話し始めた。

「もう既に事の全容はご存じかと思いますが、我々はそちらの要件を聞くつもりはありません」

「・・・と申しますと？」

「ベルガラに残された選択肢は2つ。我々に政権を移譲し実質的に王国を解体するか、国土の3分の2を割譲するか、どちらかです」

王室を奪われれば彼らは権力を失うが、国土の大半を盗られればベルガラの国力だと国としての機能を失うだろう。どちらにしてもこれはベルガラの終焉を意味する。

・・・しかし、クラウスは不敵な笑みを浮かべたまま、余裕の表情でヴィラを舐めるように見回した。

「そうですねえ、しかしレオナード陛下はせっかちでいらっしやる

ようだ」

「どつという意味です」

「実行犯はオーティスの官吏、我々はそれに便乗したまで。真に責めるべきはオーティスでしょう」

「百歩譲ってオーティスが事の首謀者であつたとしてもベルガラは同罪」

レオナードの声のトーンがひとつ下がった。苛立っているのかいつもより口調が早い。

「ではオーティスも同様の罪を被ってしかるべき。もしベルガラを滅ぼす・・・というなら、ね」

「それはない。なぜならオーティスが今回の件に関わつたのは官吏個人であつてオーティス王家ではないからだ」

しかし調べたところベルガラは国家ぐるみと言つていいほど大々的に動いていた。ルファシスに指示を出したのも、罪を唆したのも彼らだ。

クラウスは大きく息を吐いて手をヒラヒラと振った。

「私たちはもうベルガラを守ろうなど思っていないのですよ、これぼっちもね。ただベルガラの辿る運命はオーティスも道連れにさせていただく」

ヴィラとレオナードは顔を見合わせた。そして妙に納得する。

初めからおかしかった。実行犯が自ら名乗り出たり、囚われていた

レオナードがあつさり逃げることができたり。彼らは本気でレオナードを人質にしてドロージャをどうこうする気はなかったのだ。

「オーティスを道連れにしてなんになる」

そこで初めてヴィラが問うた。クラウスは眉を上げてヴィラに顔を近づける。

「なぜって、そうでないとベルガラがあまりにも惨めではないですか」

「そんな理由で国を壊すか」

「そんな、じゃないのですよ。立派な理由です。ノルディ戦争でベルガラは予想以上の痛手を負った。まさかこれほどまでにオーティスが強いなどと思っていなくてね。立て直しが利かないほどに国内は既にバラバラだったんですよ。そしてベルガラが滅べば国民は何を思うと思います？「オーティスさえ無ければ」　そう、命をかけて戦ったオーティスの滅亡を国民は望んでいるのですよ」

「家族や友人や恋人をオーティスに殺された民は確かにオーティスを憎むだろう。だが貴方は為政者、国を預かる者だ。他国に手を出す前に自国をどうにかしようとは思わなかったのか？」

レオナードの声は妙に静かに響いた。チュンチュンと雀の鳴き声が窓辺から聞こえる。

それからクラウスは黙り込んだ。何を考えているのか、まったくの無表情で。とうとう観念したかとヴィラもレオナードも思い始めた頃。

一つ筋の風に乗って、部屋に焦げたような匂いが立ち込めた。

ヴィラは乱暴に立ち上がって窓から景色を眺める。

「なに・・・これ」

クラウドは腹を抱えて勝ち誇ったように盛大に笑った。

ヴィラとレオナードが見えなくなった後、百は振り続けていた手を降ろす。

「あーあ、本当に行っちゃった」

「まるで嵐のようだったな・・・」

そう言って遠い目をするヒューバート。ヴィラを嫌うとかそういう感情はもうなかったが、それでも傍に居られるとそれだけで疲れ

る。ヒューバートにとってヴィラはそんな存在だった。百はクスクスと可笑しそうに笑う。

「それにしても恵理ちゃんってばレオナード陛下と仲良かったね」

「止めてくれ！もしあの女がレオナード陛下の側室に入ったら・・・  
・余は・・・余は・・・！毒女に敬語なんて絶対使いたくないぞ！」

それを聞いたアレフも同じ心境だったらしく表情を歪めた。ヒューバートやアレフにとってヴィラを敬うなど恐怖以外の何物でもない。それに彼らはヴィラに対してあまりいい態度を取っていない。万が一嫌われでもしていたら・・・オーティスの存続に関わる。

「モモ、余はあの毒女に嫌われていないだろうか・・・」

「そんなことないよ！だって恵理ちゃんヒューは苛め甲斐があるって言ってたよ！」

拳を握って力説する百に、それはそれで嫌だとヒューバートは俯いた。後はレオナードの女の趣味が悪くないことを祈るしかない。

「陛下たちまだ外に居たんですか？まだ冷えるんだから早く中に入りなさいな」

そこでやって来たザックに背中を押されるようにして塔の中へ入る。今日の予定はあ、とザックの口からすらすらと言葉が出てきた。

「今から朝議があるのよね、もう始まるから急いでくださいな。あ、モモ様もご一緒に出席してくださいね。午後からは執務を片づけて、3時半からノースロップの大使がいらっしやいますから準備を怠ら

ないように」

「ああ……。ザック」

「なあに？陛下」

「毒女はお前の目から魅力的に見えるか？」

「どうしたんです突然」

そうねえと上を見上げながら考え込むザックは、器用に書類を仕分けてヒューバートに手渡しながら口を開く。

「見た目は文句のつけどころがないし、何も考えていないようであり気骨のあるいい女よね。ま、あの性格じゃ並大抵の男じゃ扱えないだろうけど」

「レオナード陛下が気に入るなど……。あり得るのだろうか」

「そりゃあるでしょうねえ。だってあの見た目ですもの」

ずーんと沈み込むヒューバートは足取り重く朝議の間に入った。既に人数は揃っていてヒューバートが上座に座ったところで議長の口デイが口を開きかけたその時。

兵士の一人が乱暴に扉を開けて駆け込んできた。

「陛下！敵襲です！」

ざわっと騒ぎ出す一同をヒューバートは一喝して兵士に問う。

「ベルガラか」

「違います、それが・・・」

「は！？ベルガラじゃない!？」

兵士は奥歯をガタガタと言わせ、冷や汗をかきながら震える声を絞りだした。

「ド、ドローシャです」

その瞬間、議会は混乱して逃げ出す者、叫ぶ者や暴れる者が続出する。ヒューバートたちはまさかと思いつながら外へ駆けだすと、そこで見たものは目の前まで迫った軍兵だった。

金の縁取りに黒い鳥の描かれた紫の旗  
ドローシャの王妃軍  
だ。

「・・・どういうことだ・・・なぜ？」

「陛下、ここはもう危険です、お逃げください!」

アレフは呆然とするヒューバートと百の手を取って連れて行くことしたが、その手はヒューバートによって払われた。

「アレフ、モモだけを連れて逃げる」

「何をおっしゃいます!陛下がいなくなればもうこの国に後継ぎはおりません!・・・国は滅びますっ」

「ドローシャのご不興を買った時点でこの国は終わりだ。余はその責任を取らねばならない」

「しかし・・・」

ヒューバートは百に向き直ると流れる彼女の涙を指ですくいながら耳元で囁く。

「モモ・・・短い間だったが楽しかった」

百は言葉にならないながらも必死で首を横に振った。諦めてほしくない。

・・・こんなはずではなかった。誰もが心の中で思ったこと。

「モモ、君は生き残るんだ」

「い、いやだ・・・そんな・・・」

「まだ間に合うかもしれない、逃げなさい」

ギリツと奥歯を噛みしめたアレフは百の手首だけを掴んで走り出した。

「ヒューー！・・・ヒューー！！イヤだよ！ヒューー！！」

金属のぶつかる音と兵士の怒号が迫ってくる。それを呆然と見ながら、ヒューバートは空を見上げた。

火矢が飛んでくるとあっという間に城は火が燃え広がり始める。城



内にドロシーの兵士侵入し始めて終わりかと思った瞬間、腕を強い力で掴まれた。振り返るとそこには、さっき別れたはずの百。

「な、なんで・・・！」

「ヒューが逃げるならあたしも一緒に逃げる！でもヒューが逃げないならあたしも逃げないから！」

今までに聞いたことがなかった、百の怒った声。ヒューバートは瞠目したあと、百を連れて塔の中へ逃げ込んだ。剣を抜いたアレフも後から追いかけてくる。

彼らが向かった先は祈りの間。唯一火が届かないよう設計された特別な部屋だった。予想通り人でごった返している。

「モモ・・・」

ヒューバートと百はそのままきつく抱き合って座り込んだ。火の燃え盛る音と敵兵の喧騒はすぐ目前。

## 第四十話 神の導き

焦げた嫌な匂いと血の鉄臭い匂いが辺りを充満していた。栄華を誇った王城は目を背けたくなるほどの惨状と化し、呻き声を発しながら身体をピクリピクリと動かしている兵士や死に絶えた兵士の残骸で溢れかえっている。

王妃軍の国旗を持った兵士たちはその地獄海図の中で隊列を崩さずに王城が焼け終えるのを見守っていた。

しかし、突然不自然に鎮火し始め凍りつくような冷たい風が吹き始める。何事かと崩れかけた塔の中へ進むとそこには息絶えたオーテイス王と娘の傍に座り込んでいる女の姿があった。黒く艶やかな長い髪を垂らして俯く彼女の顔は見えない。女の形のよい唇がゆっくりと開かれる。

「……………なんで」

ピリツと空気を切り裂くような痛みを覚えて兵士たちは地に這いつくばった。美しい四肢を惜しげもなくさらした女の　　ヴィラの顔に表情はない。ヴィラの見つめる先に居るのはただ一人。

「……………クロード、なぜ裏切った」

「……………や、やあ王妃、久しぶりだね」

クロードは座り込んだままヴィラを見て苦笑いを浮かべる。

「お前は・・・お前は王の息子ではなかったのか」

王妃軍の指揮を任されていたクロード・フォーゲル、前国王の息子。王妃軍を動かせるのはヴィラ以外に彼しか考えられなかった。

ヴィラが口を開くたびに空気がビリビリと嫌な音を立てて引き裂かれる。中には血を吐いて息絶える兵士も現れた。

「・・・息子だから何さ。私は許せなかったね、ドロシーヤの王？神様に選ばれた？・・・そんなのふざけてる。父上だって神様に選ばれる前はただの凡人だったのに、なんら変哲のない一般人だったのに。そんなの変だろ？変じゃないか！」

クロードは薄く笑って足を伸ばした。両手を後ろにやって身体を支える。

「神が私達に与えているのは恩恵なんかじゃない・・・ただの不幸だ。私の母は父の側室に殺され、私の妻は貴族に殺され　ここの世は不幸だらけじゃないか」

「・・・クロード、言いたいことはわかるけど、それは他人の命を奪っていい理由にはならない」

ヴィラは無表情のままクロードに歩み寄って、髪を鷲掴みして乱暴に引き上げた。クロードは痛みに顔を歪める。

「や・・・やっぱり神、は、ロクな物を私には、与えない・・・。矢が刺さっても死なない魔女など・・・聞いたことがないよ。ただの・・・バケモノじゃないか」

希代の優秀な魔女だと言われたベルデラでさえ軽く火を起こしたり  
天気を読んだりする程度。毒を飲めば死ぬし、切られれば死ぬ。普  
通の魔女から考えたらヴィラはあまりにも逸脱すぎた。そうクロー  
ドが言っているとヴィラは乱暴に足でクロードを踏みつける。

「うつ・・・！」

「あたしは・・・あたしだ。たとえ魔女じゃなくても王妃でなく  
ても」

次の瞬間、グチャツと嫌な音が響いてクロードは血と肉の塊と化し  
た。もはや人の形を留めていない残骸に、恐怖で慄く兵士たちをヴ  
ィラは静かに睨む。

「返して・・・あたしの大切なもの・・・  
しなさいよ！！！」

返

空に闇が覆いかぶさった。まるで世界の終焉が訪れたかのような恐  
怖と共に、世界が暗闇一色に染まっていく。

何もかもが消えて行く。

人も、建物も、森も、海も。

ヒューバートたちが目を覚ますといつも通りの光景がそこにあった。唯一違うのは倒れている官吏や兵士たちが祈りの間一面に広がっていることくらいだろうか。中にはヒューバートのように目を覚まして呆然と辺りを見回している者もいる。ヒューバートははっと我に返って、隣に寝ている百揺すった。

「モモ……！モモ、無事か！？」

「あ……れ？ヒュー？」

確かあの後兵士が流れ込んできて切られたはずなのに……見下ろした自分の体には傷ひとつない。

「……どうなってるの？」

「わからない」

ヒューバートは百を抱き締めて顔を埋めた。しかし、あ、と百が声を上げて立ち上がる。百が向かう先には倒れているヴィラの姿があった。瞼は閉じられたままだ。

「恵理ちゃん！」

「何故毒女がここに……」

というか、全てがおかしい。死んだはずの自分たちが生きているのも、燃えていたはずの建物が焦げ跡一つないのも。

倒れていた人たちもパラパラと起き始め、ヒューバートと同じように状況が掴めず困惑している。アレフとザックたちが駆け寄って来てとりあえず避難しようということになり、アレフがヴィラを抱きかかえようとしたところで突然後ろから声がした。

「ヴィラに触るな」

振り返るとそこにはこちらを見下ろしているレオナードの姿。凜とした様がこの困惑した状況の中で妙に神々しく見える。

「……レオナード陛下まで」

レオナードはスタスタとヴィラに近寄るとアレフからヴィラを奪い取って抱きかかえた。おそるおそるヒューバートが訊ねる。

「あの……一体何が？」

「オーティスの陛下……。わかりません……。が、とにかく無事のようにですね」

王妃軍の兵士たちも、オーティスの兵士も。

「あ、あの、記憶違いでなければ、ドローシャの国軍が攻めてきたような……」

「間違いではないでしょう。おそらく首謀者はそこにいる」

一斉にレオナードの視線の先を見ると、そこには目をパチクリさせて呆然としているクロードの姿があった。粉々に砕け散ったはずの身体は、五体満足で見事に元に戻っている。

「お手数でなければ彼を捕えておいていただけますか。今はヴィラの安全が第一ですので」

「あ、は、はい」

それからレオナードはヴィラを連れて颯爽と去っていった。残されたオーティスの一同はただ首をひねるばかりだった。

薄れていく意識の中で、一瞬だけ人の姿がぼんやりと見えた。とても優しそうな面差しの人。なんとなくあたしに似てるかもしれない。

彼はあたしを見ると、酷く悲しそうに微笑んでいた。そして空から

この世界を見下ろして、一滴の涙を流して消えて行った。

「ヴィラ……」

目を開けて一番最初に見たのはレオナードだった。身体を起こせば、そこは懐かしいドロージャの私室。泣きじゃくっているシルヴィオとアルフレット、ほっとした様子のルードリーフも居る。

「あれ……ここドロージャ？」

声が掠れて上手く言葉が出てこない。差し出された水を一口飲むと、あたしは記憶を失う前のことを必死に思い返していた。

離宮から見た景色は燃えるオーティスの王城。あたしは王城まで飛んで駆けつければ既に誰も生きてなくて……。百もヒューバートも息がなくなつて……。

「……クロード」

そっだ、彼が。

「ああ、知っている。身体は大丈夫か？痛いところはないな？」

あたしは小さく頷いて身体を横向きに変えた。クロードを粉々に砕いてからの記憶がない。臃げに魔術を使ったのは覚えてるんだけど。

「あれから、どうなつた？」



「わからないが、一瞬だけ暗くなって元に戻ってたんだ」

「・・・？元に戻った？・・・ああ、そうか」

あたしはきつと時戻しの術を使ったんだろう。決してやってはいけない禁忌の魔術。時間を戻して蘇生するこの術は、師匠に一番初めに教えられたタブーのひとつだった。

さすがに死を覚悟したけれど、あたしはどうやら無事みたい。

「百は？ヒューバートたちは？」

「無事だ。俺が駆け付けた時には困惑しながら倒れたヴィラを囲んでいた。迎えが来たから、できるだけ神の恩恵を受けられるようにとドロージャへ帰って来たんだが・・・」

「・・・そっか」

上半身を起こしてレオナードが握っていた手を握り返す。

「ごめんな、無茶して」

「まったくだ、心臓が止まるかと。クロードから大方の話は聞いたが・・・事的首謀者はすべてクロードで間違いないようだ。彼は家族を 全て殺されたからな」

「うん」

王侯貴族の社交界なんてちっぽけも華やかな世界じゃない。いつも誰かが憎しみ合って誰かが負けていく、そんなドロドロした愛憎の溜まり場。きつと彼は王子なんて地位よりも、穏やかに暮らせる普

通の生活を望んでいんだ。  
もしあたしがレオナードを失ったらと考えると、クロードの気持ちは痛いほどによくわかる。

時戻しの術なんてよく成功したなあと思いながら、レオナードの額に額を寄せた。

彼はいつもの、泣きたくなるほど優しい微笑みであたしに言う。

「おかえり」

「ただいま」

『『バケモノ』』

お母さんとクロードの声が重なる。

「……レオナード」

「どうした？」

「あたし、魔女じゃないって言われた。普通魔女つてのは矢に刺されたら死ぬものなんだって……あたし平気だったけど」

「……そうか」

「レオナードも思ってた？」

「少しだけ。そんなこと気にしてたのか？今更？」

「今更言うな。これでも真剣に考えてるのに」

それになんだか今までと感覚が違う。魔力の底が見えなくなったし

なにより……

「気持ち悪い！」

「……えっ!?」「」「」

医者を呼べ薬を持ってこいと騒がしい男共。あたしはそんな彼らを横目に、ドロージャへ帰って来た実感を味わいながら窓から見える景色を眺めた。

涙が出るほど完璧な美しい空は、今日も曇りひとつなく青々と晴れ渡っている。

## 第四十一話 最高の贈り物と幸せ

時戻しの術などという俺でも知っている禁忌の術を使ったヴィラは・  
・驚くことにピンピンしていた。確かあれは術者の命と引き換え  
に行く魔術だったと思うのだが、しかしヴィラのことだ、普通の枠  
に収めること自体が間違いというものだろう。

「ヴィラ？ 執務は？」

「サボって来た」

ドローシャへ帰って来てから一週間。魔術が目に見えて進歩したヴ  
イラは毎日突然現れたり消えたりする。行儀が悪いとルードリーフ  
に注意されながらも彼女は一行に彼の注意を聞く気はないらしい。

「なあレオナード、今度オーティスに挨拶行きたいんだけど・・・。  
軍攻めしたりかなり迷惑かけたから」

「もちろん行く」

「ほんと!?!」

「ああ」

頷くとヴィラは嬉しそうに背中に飛びついて俺の首に腕を回した。  
しばらく離れていた反動か、以前よりも甘えたで自分からくっつい

てくるようになったヴィラ。しかし・・・

「エルヴィーラ様……！！！！」

大きな足音を立てて廊下をかけるルードリーフの声を聞きつけると、彼女は慌てて離れて行った。未だに彼女は人前で寄り添うのを嫌うのだ。

「見つけましたよ！また貴女は仕事を抜け出して！」

「えー、終わったじゃん」

「終わってません！！」

怒り狂っているルードリーフの後ろからシルヴィオやアルフレットまでやって来た。がみがみ言われているヴィラが嫌そうに頬を膨らませていたのでルードリーフに注意する。

「ルードリーフ、ヴィラは病みあがりなんだ、休ませてやれ」

「彼女の！どこが！病みあがりだと！？昨日なんて全力疾走で外を駆けまわってましたけど！？」

「それはお前が追いかけて来ますから。少しは妥協しろ」

言外に諦めるといって、しぶしぶルードリーフは怒りを納めてクスリと笑っているヴィラを睨んだ。

「オーティスに行ってから悪知恵を付けてきたように思います」

「……妥協しろ」

もともと王妃は政務をほとんどしなくていいのだ。ただ彼女の仕事  
が早いので任せているだけで。

俺は立ち上がってヴィラの腰に腕を回すと額に口付けた。ヴィラが  
飛びのいて離れようとしたけれどそれは許さない。

「それに夫婦の時間を邪魔するのは野暮というものだろう」

「離れるー！！！」

「まさか陛下がこんなに愛妻家だとは思わなかったすよ」

アルフレットが茶化すように言うと、ヴィラは恥ずかしそうに俺か  
ら離れようともがく。シルヴィオは顔を真っ赤にして視線をそらし  
ていた。

夕方、酷く深刻な顔をしたアルフレットが執務室にやって来た。

「レオナード……」

「どうした、何があった」

「魔女さんが……」

俺は手に持っていたペンを投げるように置いて部屋を飛び出した。アルフレットの表情からあまりいい予感がしない。俺は飛び込むようにしてヴィラの部屋に入ると、そこには離れたところに控えているシルヴィオとベットに座って俯いているヴィラの姿があった。昼間来ていたドレスではなく、簡単なワンピースに身を包んでいる。

「どうした、何事だ」

「……レオナード」

いつもの彼女からは考えられないほどの弱弱しい声。傍によって膝をつき、彼女の手を取って顔を覗く。

「何があったんだ？」

「レオナード、あたし……」

弱弱しいを通り越して泣きそうな声だった。そのただ事ではない様子に冷や汗が頬を伝う。アルフレットから聞きつけたのか、彼と一緒にリードリーフも部屋に飛び込んでくる。

「あ……たし……に……に……」

「……に?」「」

ぼそつと呟いた言葉にヴィラ以外の皆はずっこけた。

妊娠したって。

それはかなり驚くことだが、あんまりにも沈み込んでいたのもつとなにか不吉なことを予想していたのだが。

「ヴィラ……ヴィラ、嬉しくないのか?」

彼女は少しだけ顔を上げて俺を見た。彼女の頬には涙を伝った跡。  
・  
泣いていた?

「レオナードとの子供ができたのは嬉しい……けど、あたし育てる自信ないよ。虐待されて育った子は親になったら虐待するって言っし……あたしがこの子にあんな酷いことするくらいなら」

産みたくない。おそらくそう言いたかったんだろう、ヴィラは口を閉ざすと俺の右肩に頭を乗せた。

そっだ、彼女は家族に恵まれなかった。その辛さを知っているからこそ、同じことを繰り返すかもしれない恐怖に怯えてるんだろう。

「ヴィラ、大丈夫だ」

「……なんでそんなに言いきれるの」

「育てるのはヴィラだけじゃない、俺も城の皆もいるだろう?俺は



何があってもヴィラと子を手放さない、けれど何があっても守る

「でも……」

「ヴィラ」

名を呼んで頬に口づけを何度も繰り返した。宥めるように、安心させるように。

「ヴィラ、ではヴィラはその子を墮ろしたいのか？」

「い、嫌だ」

その一言に俺もアルフレットたちも心底ほっとした。頬に手を当てて顔を上げさせると今度は唇に口づけを落とす。

「大丈夫だ、もしヴィラが間違えたら俺が守る……守るよ」

「……っん」

重なった唇は酷く甘く、まるで麻薬のように俺を捕えて離さない。睫毛の長い大きな瞳から、一滴だけ大粒の涙が流れた。

妊娠したってことがわかった途端城のみんなの扱いが気持ち悪いほど異常に丁寧になった。ルードリーフなんて最たる例だ。

そしてレオナードは、場所と時を選ばず色気モード全開になった。誰が居ようとお構いなし。恥ずかしすぎる……！

「ヴィラ、頼むから仕事はしないでくれ」

「でも暇だし、無理しない程度に……」

「ダメだ」

「あ……」

資料は全部レオナードに取り上げられてしまった上に、あたしは半強制的にレオナードの膝の上行き。

「過保護すぎる」

「諦める」

レオナードの顔が間近に迫ってうっと言葉を詰まらせた。あたしの欲目たるうか、レオナードは日に日に色気を増している気がするの。は。整い過ぎている顔がさらに人並み外れてきている気がする。

あたしは彼のきめ細かい頬に指を滑らせた。……うわ、すべすべ。

「ヴィラ」

ヴィラ、と何度も彼のあたしを呼ぶ声が耳を撥る。

「レオナード……」

好きだつてどうやって伝えればいいんだろ。言葉なんかじゃ表わせないほど大きなこの感情を、どうやってたら知ってもらえるんだろ。……難しくてもどかしい。

何度唇を重ねても、何度肌を重ねても、貪欲なほどにレオナードの傍を求めてる。

「……誰か来るかも」

「今更だろっ」

そう、今更だ。妊娠したことを誰もが知ってる。当然だけど妊娠するようなことをしたのも……もちろんバレてる。あたしとレオナードの不仲説はいつの間にか消えていた。

「じゃあ……」

とあたしはさらにレオナードに寄り添って全体重を彼に預け、自分からキスするとぎゅっと少しきつめに抱き締められる。擦り寄るように身体で甘えると、彼はいつも嬉しそうに微笑む。その笑みは……世界で一番綺麗な笑み。

レオナードだけは、誰にもとられたくない。もう離ればなれになん

てなりたくない。

「・・・もう離れないで」

あんな思いは二度とごめんだと愚痴を言えば、レオナードは眉を寄せてあたしの目を覗いた。レオナードの瞳にあたしが映ってる。

「ヴィラは、俺の傍を望むか？」

「当たり前だろ？」

世界で一番愛してる。

あたしたちはその後、政務をさぼって部屋に消えた。

## エピソード

ヒューバートと百、そして何故かアレフとザックまでドロージャに招待された。先日のお詫びにオーティスまで出向こうとしたのだが、王妃の体調が優れず来てもらうことになったらしい。彼らは通された部屋でそわそわと落着きなく座っていた。

「お、おおお王妃ってどんな人かな？怖いのか？」

「モモ、第一王妃は魔女だそうさ。第二王妃は普通の人間らしいが、  
・・彼女は今離宮で生活しているらしいから来るのは第一王妃の方  
だろう」

「魔女！」

百は飛びあがって身体を強張らせた。苦笑したザックが付け加える。

「心配しなくても取って食われたりしないわよ。．．．．．たぶん」

「怖いの？」

「一度遠くからお会いしたことはあるが話したことはない．．．どうだろうな。噂では歴代の魔女の中でも桁外れの魔力の持ち主だそうさ。あのベルガラの無駄に大きな王城を一瞬で潰したらしいから

な」

百はガチガチに緊張して拳をきゅっときつく握りしめた。魔女・王妃、百には邪悪なイメージしか思い浮かばない。

「大丈夫だ、レオナード陛下もいらっしやるんだから」

あそつか、と百は一気に脱力した。レオナード自身も百からすれば怖い人ではあったが、彼なら面識があるぶんいくらか大丈夫。

廊下から聞こえるヒールの足音にごくりと唾を飲み込んで扉を見つめた。

ギギ・・・とゆっくり扉が開かれ、ひよっこりとヴィラが顔を出す。

「あれ、ロデイは？」

「ロデイは仕事があるためオーティスに留守番・・・てちよつと待ったあ！」

ヒューバートの突っ込みにもお構いなしに、ヴィラは堂々とソファに座って足を組む。かなり豪華なドレスを纏った彼女の姿は、思考が一瞬停止するほどの強烈な美しさがある。

「恵理ちゃん・・・きれーい・・・」

「ありがと。百も可愛いよ」

「待ってくれ、なんでお前がここにいるんだ」

「なんでって・・・、うーんいろいろあったんだけど面倒だから」

番簡単に説明すると」

ヴィラはきょとんと目を丸くすると部屋に入って来たレオナードを指さした。

「あれ、夫」

さすがに驚いたらしいヒューバートらは口を開けたまま顔をひくひくと引きつらせる。レオナードは無言で当たり前のようにヴィラの隣に座ると、申し訳なさそうに口を開いた。

「オーティスの陛下、妻がそちらでお世話になったそうで……申し訳ない」

「い……いえ……。ま……魔女？」

「ま、そういうこと」

ニヤリと笑って扇を開くヴィラに、ヒューバートとアレフとザックは顔を真っ青にしていた。唯一キラキラと目を輝かせているのは百

「恵理ちゃんすごい！王妃様に魔女だなんて！」

「あんまり柄じゃないんだけどね」

ヴィラがふつと肩をすくめたところで、レオナードが話を切り出す。

「わざわざこちらにお越しくださり感謝いたします。そちらにお邪魔しようかと思ったのですが……ヴィラが妊娠しまして」

「妊娠!?」

「あたしは大丈夫って言ったんだけど、レオナードがどうしても聞かなくて」

ヒューバートたちは軽く現実逃避に走って視線を宙に彷徨させた。もしかせずつもとんでもない過ちを犯してしまった、と。そしてそんなヒューバートたちをヴィラはニヤニヤと面白そうに観察している。

レオナードは軽く息を吐くと、さっそくですが、と話を切り出した。

「お約束通りノルデイとベルガラの国土の一部はオーティスにお譲りします」

サインを書いたり今後の方針を話し合ったりと、それから真面目な政治の話だった。しかしヒューバートたちは常に冷や汗ものだったという。



「すごい、綺麗！」

東庭園に来た百はきやつきやとはしゃぐ。赤と黄と白の薔薇が咲き乱れる春の庭は、四季の中で一番華やかな庭。

そろそろと歩いているヒューバートたちはこそそしながらレオナードのかなり後ろを歩いていた。

「毒女がドロシヤの王妃・・・余は未だに目眩が止まらないんだが」

「驚きを通り越して泣きたかったわよあたし」

「・・・・・・・・」

腕を組んで仲睦まじく庭を鑑賞をしているヴィラとレオナード。2人の人並み外れた容姿は、確かによく考えれば一般人にはとても見えなかった。

「しかも不仲だって聞いてたのに仲良さそうだし」

「これってもしかしてオーティスの危機？」

「それはないだろう。モモがいるからな。毒女はモモに弱い」

ヒュー、と叫んでヒューバートに駆け寄る百。百は手折られた一輪の薔薇をヒューバートの胸のポケットに差しこんだ。

「怒られるぞ」

「大丈夫、恵理ちゃんが好きなだけ摘んでいいって！」

誰もを癒す温かい笑みを浮かべて百はヒューバートの手を取った。ちらりと前方を見れば、ヴィラとレオナードは人目も憚らずお互いに額を寄せ合ってキスしたり耳元で囁き合ったりしている。2人の見た目が見た目だけに刺激が強すぎる、とヒューバートは壁になつて百には見えないようにした。

「どうしたの？」

「いや、余たちもいずれあんな風になりたいな、と」

「・・・？」

首を捻る百に、ヒューバートはクスリと笑って囁いた。

「そのうち、ね」

どんなに時を重ねても、どんなことがあっても、あたしはレオナー  
ドの傍に居続ける。与えてくれたこの感情は、何があっても守り続  
ける。

幸せをくれてありがとう。暖かい家族をくれてありがとう。こんな  
あたしを愛してくれてありがとう。

「ね、抱きしめてよ」

「おいで、ヴィーラ」

愛してる、貴方の全てを。

終わり

## あとがき&告知

ヤンキーな魔女、最後までお読みくださりありがとうございます。このお話は本当に行き当たりばったりで、下書きもせずなんとなく書いてみた小説で、本当にストーリー・文章とも見苦しかったかと思えます。すみませんでした。

でもこうしてたくさんの方に支持していただき、応援をいただき、催促をいただき、こうして完結を迎えることができてとてもうれしく思います。本当にありがとうございます。

では皆様、次回作でお会いできることを祈ります。全ての読者様に感謝の気持ちを込めて。 伊川侑子

## 告知

『灰色の鳥』（完結）

同じ世界観での長編です。

本編に少しだけレオナードとヴィラの息子が登場します。

番外編でヤン魔女と灰色の鳥がコラボしました。

『ブラッディ・ドール』（準備中）

一応続編っぽい仕上がりになる予定。

主人公2人は違いますが話は少し繋がっています。  
レオナードとヴィラはがつつり登場する予定です。

番外編・浮気騒動（前編）

「待てコノヤローー！！！！」

ドローシャの王城の廊下を慌ただしく駆けて行くこの国の王妃であり魔女であるエルヴィーラ。黒い髪と瞳の美しい女性だ。

そして彼女の追いかける先にはちよこまかと動く小さな生物。

今年で4歳を迎える王子、ランスである。

茶髪と青い瞳は父親譲りだが、頑固で融通の利かないところは母親似であろう。

「待て、ランス！！勉強の時間だっつってるだろうが！！」

「やだー！シーと遊ぶもん！」

「シルヴィオは仕事だ！諦めろ！！」

「やだー！」

可愛らしい抵抗もその逃げ足は速く、ヴィラにとっては憎たらしいほど。

そして追いかけつこが5分近く続いたところで、突如ランスの足が宙へと浮かんだ。

「脱走癖までお前にそっくりだな、ヴィラ」

「レオナード！助かった！」

ヴィラは素早くレオナードからランスを受け取ると、向い合ったまま頭突きを食らわせる。

「いてっ！！！」

「てめー！！よくも逃げやがったな！！」

今日はおやつ抜き！！」

「ええええええ！！？」

「てめーの所為だろうが！！」

不満の声を上げるランス。

しかし……

「ランス、あまりヴィラの手を焼かせるな」

「はい」

レオナードが言いつけるとコロツと態度を変え、愛嬌のある返事を返した。

完全に舐められていると、ヴィラは震える拳を握る。

「やっと捕まりましたか」

そこへ現れたのは教育係のルードリーフ。

ヴィラは逃げないようにしっかりとランスを引き渡し、しぶしぶル

ードリーフに連れられて部屋へ戻るランスを見送った。

「大変だな」

「まーな。でも子どもは子どもらしいのが一番」

幸せそうにクスリと笑うヴィラに、レオナードも口角を上げて口付けた。

その流れのまま廊下のだ真ん中でイチャついていると、影で見守っていた騎士たちが見かねて2人を引き放す。

「はいはい、そこまでー」。

公共の面前でイチャつかないでくださいねー」

「………放せ」

途端に不機嫌になるレオナードはアルフレッドを引き離し、ヴィラの手を引いてさっさとその場を後にした。

大きなため息を吐くのは残された騎士たち2人。

「政務はどうなるんでしょう……」

「サボリだな……あの様子じゃ……」

ガクリと頂垂れ、もう一度大きなため息を吐いた騎士の後姿はとても情けなかった。



王妃としても政務も子育ても忙しいながらに充実した毎日。

あたしは世界一幸せだって胸を張って言える。そりゃあ、ランスの世話は大変だしレオナードはレオナードで嫉妬深くて大変なんだけどさ。それすらも幸せの一部なんだから、文句あるはずがない。

事件が起きたのは突然だった。

軍の資料を頼まれて執務室へ戻って来たけれど、既に先客が居たよ  
うであたしは無意識に足を止める。

「ねえ、レオナード。  
今度わたくしのために家に来てくれるでしょう?」

艶めかしく色気のある声は明らかに女性のもの。そこで中に入ればよかつたんだけど、あたしの好奇心が疼いて足が動かない。

チラリとドアの隙間から中を覗きこめば、スタイルの良い赤髪の女性がレオナードの腕に巻きついていた。

ドキッと大きな音を立てた心臓を宥め、レオナードの様子を窺う。

驚いたことに、レオナードは全く嫌な素振りを見せていない。表情はよく見えないけれど、振り払う気もなさそうだった。

これはもしかして・・・浮気か!?

あたしの疑いも余所に、彼女はぐいぐいと胸を腕に押しつける。

ここまでしてレオナードが嫌がらないなんてまずあり得ない。幼馴染のアルフレットでもくつつこうとしたら殴られる始末だし、部屋にも侍女を近づけないくらいなのに。

彼女は一体何ものなんだろう。

「ねえねえ、いいでしょう?レオナード」

彼女の声はすごく愛情に満ちて、それだけでもレオナードに対する好意が窺えた。

「ああ」

そして短いレオナードの肯定。

女性はきゅっと嬉しそうにレオナードに抱きついた。

「ハンハナ嬉しいっ！！  
レオナードだーいすきっ！！」

そしてチュツとレオナード類にきききききききききききキスを・・・  
！！！！

決 定 的 ！ ！

それでも引き剥がすことをしないレオナードにも腹が立ち、ドアを  
派手に蹴り飛ばしてその場から消えた。

「師匠――！！！」

あたしが駆け込んだのはもちろん師匠の家。

相変わらずヘンテコな物でゴチャゴチャだけど、それが懐かしくてとてもホッとする。

「なんじゃ、ヴィラか。」

あの男とケンカでもしたのかえ？」

「け、ケンカって言うか……」

見目麗しい師匠は裁縫の手を止めて、呆れた視線であたしを出迎えた。

あたしはもごもごと口ごもってどう説明するか迷う。

そもそもレオナードの浮気はとってもショッキングではあったけれど、別に王様に妃が何人いようと恋人が誰であろうとそれは法律的に問題ないのであって……。

つまり、あたしが一方的に嫉妬して怒ってるだけなんだ。

レオナードの深い愛情があたしだけに注がれてるだなんて、どうして今まで勘違いしていたんだろう。

第2王妃のローゼリアをあんまりながいしろにしてるものだから、すっかり安心しきっていた自分がある。

「師匠、先代の王様って側室何人いたんだ？」

「15くらいかのう」

めっちゃ多いじゃん！

「嫌だつたりしないのか？  
自分だけじゃないだなんて」

「それは仕方なからう。それも王の務めじゃ。  
わらわも陛下も好き合っつて結婚してたわけではないの」

「王の務め、か」

所謂政略結婚てやつね。

結婚なんて一大事を仕方ないからって割り切れる師匠はすごいや。

「まさか浮気でもされたかえ？」

「う……浮気っていうか……」

「なんじゃ、凶星か」

凶星です……。

師匠は呆れた表情のまま深いため息を吐いた。

「あの男に限って浮気はあるまい」

「でも……見たもん」

「お前のことじゃ。どうせ確かめもせず飛び出して来たんだろう」

「うっ……確かにそうだけでも……」

「あやつは女嫌いじゃ。心配せずとも他の女に現を抜かすことはあるまい」

うーん。でも嫌がって無かったしなあ。

「いざとなれば、“私以外の女に触れないで”とヴィラが迫ればイチコロじゃ。

できれば裸で

」

「うわあああああ！…そういうのはいいから！…」

大声を出して師匠の言葉をかき消す。

師匠が言うと妙に生々しいんだよ！…

そうか？と師匠はケロツとして話を続けた。

「まあ、疑惑はあくまで疑惑じゃ。悩むのは全てが分かってからでも遅くはないじゃろっ」

「でも怒りが収まんない。

あたしだけ怒って悲しんで悔しがつて、振り回されてるみたいで

考えれば考えるほどふつつつと沸き上がってくる怒り。

あたしは震える拳を握って天を見上げた。

「こんなの不公平すぎる！

レオナードだって存分に困ってしまえばいいんだ！」

「なにをするつもりかえ？」

「ランス連れて逃げてやる!!！」

こうなったらじっとしてはいられない。

あたしはテレポートでランスの部屋まで飛ぶと、昏寝しているランスの小さな肩を揺すった。

「ランス!!起きろ!!！」

「ん〜？」

ランスは目を腕で擦り、眠気眼であたしを見上げる。

その姿はまるで小さな無垢のレオナードみたいで、一瞬キュンとしたが今はそれどころじゃない。

「……ママ？」

「家出するぞ!!一緒に来るか!？」

「え!?!行く!?!」

良い返事だ。

一気に覚醒して飛び起きたランスの手を握り、今度は2人でテレポート。

行先はもちろん

あの場所。

突然現れた客人にオーティスの一同は顔を引きつらせた。  
客人である当の本人、ヴィラは陽気に「よっ」と手を上げる。

「久しぶりだなあ、お前ら」

「……お前ら、じゃない!!」「」

オーティスの王であるヒューバート、騎士のアレフ、宰相のザックの声が見事に揃う。

中心の国の王妃が王子を引きつれて突然現れるなど、非常識にもほ  
どがある。

ヴィラの存在自体が非常識ではあるが。

「まったく、どうしてこうお前は急に……!!」「」



「おお、懐かしいキャンキャン吠える声」

一時見ないうちにヒューバートはすっかり幼さが抜けて大人の男になっただ。

しかしいじりやすいところは相変わらずで、ヴィラはにやにやと笑う。

「ほら、ランス、挨拶」

「はじめまして、ドロシーの第1王子、ランスです」

ぺこりと頭を下げる幼い子どもに、3人は大きな声を出すのを止めてそれぞれ丁寧に挨拶を返した。

子どもに弱いのはどこの世界でも同じらしい。

「ところで、毒女。」

「一体何しに来たのよ」

そう訊ねるのはザック。

んー、とヴィラは言葉を濁しつつ笑う。

「いろいろあって、遊びに来た」

「へ、へえ・・・」

「恵理ちゃん・・・!!」

「百……!!」

奥の部屋から飛び出て来た百に、ヴィラも駆け寄って抱きしめ会う。

一瞬だけヒューバートは面白くなさそうに顔を歪めた。

しかしそんな彼も蚊帳の外で、2人はきゃっきゃと久しぶりの再会を喜んだ。

「久しぶり!!」

突然でびっくりしたよ!!」

「元気だったか!？」

だいぶお腹大きくなつたな!」

そう、百はただいま妊娠中。

えへへ、と照れくさそうに頭を掻く百は、すでに母親の顔になっていた。

「そうか、お前も母親になるのか……」

あのドジで目を離すとすぐにトラブルを起こす百が……」

「も、もうドジ克服したもん!

ねえ!ヒュー!」

同意を求められたがヒューバートは明後日の方向を向いて遠い目をしていた。

彼も相変わらず苦勞が絶えないらしい。

ヴィラは納得してうんうんと頷く。

「ランス、おいで。この人があたしの友達の百だ。

会うの初めてだろう?」

「はじめまして」

頭を下げるランスに、百も膝をつき目線の高さを同じにして微笑んだ。

「はじめまして、オーティスの第1王妃の百だよ。ホントにドローシャ王にそっくりだねー」

「でも性格はあたしに似たんだよなー」

「……なんと性質の悪い」

あははと笑い合う影でボソリと呟くヒューバート。もちろん頭の上にタンコブを作ることになったが。

ところで、と百は首を傾げる。

「恵理ちゃんはいつまでオーティスにいるの？」

「1か月くらい？」

「……はい!？」

オーティスの災難はまだ続く。



番外編・浮気騒動（後編）

レオナードの浮気疑惑に飛び出してオーティスへ向かったヴィラ。

一方ドローシャの王城では

吹雪が吹き荒れていた。

「ハ、ハンハナこわーい。

そんなに怒らないでよ、レオナード」

茶目つ気たつぷりに言いながら、プニツとレオナードの頬を人差し指で刺す赤毛の女性。

ぴきつとレオナードの額に青筋が浮かび、シルヴィオとアルフレッドの騎士2人言葉にならない悲鳴を心の中で叫んだ。

ちなみに執務室はヴィラが蹴飛ばした扉と衝撃で悲惨な状態になっている。

レオナードを最初に宥めるのは幼馴染のアルフレッド。

「だ、大丈夫ですって。

魔女さんきつと帰ってくるって」

「でもランス王子の姿もないし……これはマズインじゃ……

「凍てつくような冷たい空気を受け、アルフレッドは慌ててシルヴィオの口を塞ぐ。」

「ば、ばか！」

「こんなときに本当のこと言うやつがあるか！」

「でも本当に帰ってこなかったときのことを考えると、そっちの方が危険な気が……」

「確かに!!」

吹雪が止む気配はなく騎士2人がもたついている間に、執務室ヘルードリーフが足を踏み入れて固まる。

「な……何事ですかこれは……」

手をわなわなと震わせ、レオナードと目を合わせたルードリーフは冷や汗をかいた。

「レオナードがあ、奥さんに逃げられちゃったのよー」

「「あなたの所為でしょうが!!」」

「えー、ハンハナ悪くないもーん。」

レオナードがあんまり無愛想で愛情表現に乏しいからでしょー?」

なんて怖いもの知らずだと一同は心の中で叫ぶ。

そしてレオナードは未だに吹雪を止める気配がなく、口を開き低く響く声で命令を下した。

「3日以内にヴィラの居所を割り出せ」

「いくらなんでも無茶っすよ!!」

なにせ相手は世界の端から端までを一瞬で移動できる魔女だ。そんなにすぐに居所がわかるとは思えない。

3日じゃドローシヤの首都を調べるだけで精いっぱいだろう。連絡に時間のかかる国外は論外である。

たとえ奇跡的にすぐ見つけたとしても、無事に連れ帰ることができる可能性は低い。

「見つけれなければ首が飛ぶと思え」

そのときのレオナードの目はマジだった。真っ青な顔でシルヴィオはこくこくと頷き、アルフレッドは返事する。

「わわわかったよ!! わかりましたよ!!」

「探せばいいんだろ!! 3日以内に!!」

「がんばってね」

「あんたも手伝えよ!!!」

「えー」

「ハンハナ様、エルヴィーラ王妃が誤解なさっているなら、陛下からだけではなく貴女からの説明も必要になると思います。陛下から説明されても言い訳としか捉えられないでしょうから。特に頭に血が上っているあのお方には……」

「ルードリーフが言うなら仕方ないわねえ。ねえねえレオナード、魔女ってどんな感じなの？」

「やっぱり美人なのかしらー、会うの楽しみだわー」

吹雪が止まない中のんきに笑う彼女に、一同は一気に脱力した。後はヴィラが無事に見つかり帰って来ることを願うしかなかった。

遊び疲れてぐっすり眠ってしまったランスを抱え、ヴィラは百と向かい合ってお茶を飲んでいた。

ランスの遊び相手をさせられた男性陣の屍が床に転がっている。



「元気だね、ランス王子」

「遊び盛りだからな。  
最近物心ついてきたし」

「レオナード陛下は元気？」

「う．．．ん、たぶん」

レオナードの名前に一瞬ヴィラは動揺を見せ、百は首を傾げる。

「どうしたの？上手くいつてないの？」

「そんなことはないんだけど．．．」

どもるヴィラは怪しさ満載で、さすがに鈍い百でも見当がついた。

「もしかしてケンカしてオーティスに来たとか」

「ケンカじゃないんだ。ちょっとあたしが一方的に怒ってるだけで．．．」

「何かあったの？」

「あったと言うか．．．見たと言うか．．．」

カチャツとカップの音だけが静かに響く。

ヴィラの脳裏にレオナードと赤毛の女性の姿がフラッシュバックし

て、「あああああー!」と叫んで転がっていたヒューバートを踏みつけた。

「その話題はやめろ! 思い出したくねえ!」

「でも恵理ちゃんがここに居ること、レオナード陛下は知ってるの?」

「いや……知らない……. . . . .と、思う」

「なんだと!?!」

急に真つ青な顔をして飛び起きるヒューバートは、立ち上がって大きな声を出す。

「毒女!! 今すぐドロージャに帰れ!!」

「ヤダよ」

「レオナード陛下に見つかったとき、余たちの身が危ないんだよ!」

もしオーティスが匿っていたとでも思われたら。

あまりの出来事に起き上がっていたザックが再びひっくり返った。

「なんだよ、ドロージャの王妃の命令が聞けないわけ?」

「な……なんて性質の悪すぎる脅し……. . . . .」

焦ったヒューバートは百に目くばせする。

意味を誘った百は頷いてヴィラに詰め寄った。

「恵理ちゃん、一度ドロシヤに戻った方がいいよ」

「でも・・・」

「ずっとレオナード陛下のいない生活に耐えられる？」

無理、と頂垂れるヴィラ。

にっこりと百は笑ってヴィラの手を両手で握る。

「きつと恵理ちゃんなら大丈夫。

なにがあっても私は恵理ちゃんの味方だから！」

「百ー！」

抱きしめ合う2人にホッと胸を撫で下ろしたのもつかの間。

ドンー！！

と大きな音がして部屋に入って来たのはなんと

「レオナード！！？」

茶髪に青い瞳、間違いなくドロシヤ王のレオナードだった。

レオナードの鋭い視線にヴィラは硬直。

「早く戻るんだ」

「や、やだ！」

「ヴィラ」

「嫌だつてば嫌なんだ！！」

オーティスの王城の執務室でまさかの夫婦喧嘩勃発。

ヒューバートらは恐ろしさに身を竦めながらも見守るしか手はない。

ヴィラの大声で目を覚ましたランスはぽかんと呆けている。

「何故急に家を出て行つたんだ」

「いいじゃん！そんなのあたしの自由だ！」

「さつさと機嫌を直せ」

うつ、とヴィラは言葉を詰まらせたその時、また執務室へゾロゾロと客人がやって来た。

シルヴィオにアルフレッド、そして浮気疑惑の原因となった赤毛の女性  
ハンハナである。

彼女はヴィラを見るなり目を輝かせて抱きついた。

「やったー！！噂よりずっと美人ー！！」

「うおっ、あなたは・・・！」

「あたしはハンハナって言うのー。よろしくねー」

そしてへラリと笑うその様子は、どう考えても恋のライバルに対する態度ではなくヴィラは混乱した。

そしてなんやかんやでドロージャへ帰宅後。

「母親—————!!!??」

ヴィラの叫び声がいつものごとく王城に響く。

ヴィラはハンハナを指さすと皆は頷き、次にレオナードを指さすともう一度頷かれた。

とんだ勘違いに、ヴィラの肩がガクリと下がる。

ハンハナがレオナードの母親。

そう、すっかり忘れていたがこの世界では25歳で見た目の年齢が

止まるのであった。

ハンハナは元気よく手を挙げる。

「そつです、母親です」

「似てなさ過ぎだろ・・・」

容姿も性格も共通点を見つける方が難しいほど似てない2人。何処から見ても親子には見えない。

「そうなのよー。せっかく綺麗に生んだのに笑ってくれないのよー。こつ口角を上げてニコツと」

ハンハナは指で無理やりレオナードの頬を引き上げた。

他人には出来ない芸当だが、さすがに母親は怖いものなしらしい。

レオナードもレオナードで嫌がってはいるが、ぞんざいな扱い方はしないようだ。

「あ・・・ごめんなさい、はじめまして、エルヴィーラです」

「ホントに美人だわー」。

こんな綺麗な奥さんもらえたなんてレオナードは幸せねー。

細い身体ねー。やだ、胸あたしより大きいんじゃない?」

にこにこしながらヴィラの身体をベタベタ触ってくるハンハナ。あんまり触りまくるものだから、レオナードの顔が引きつる。

「え、あ・・・ども」

「あたしはハンハナよ。お母さんって呼んでね」

「お……お母さん……？」

「きゃー！ーかわいいー！ー！」

照れながら控え目に呼ぶヴィラに、ギユムツときつく抱き締めるハンハナ。

母親に抱き締めてもらった記憶がないヴィラは、照れくさいやら嬉しいやらでうつすらと頬を染めた。

またそんなヴィラの珍しく殺人的に可愛い姿にレオナードは鼻血が

(自主規制)

「やっぱりレオナードは帰ってこなくていいわ！

あたし娘が欲しかったのよお！」

声高らかに言う面喰いのハンハナは大層ヴィラが気に入った様子で、慌ててレオナードがヴィラからハンハナを引き剥がす。

「勝手に触るな」

「ずるーい、レオナードだけずるいー！！

いいじゃない自分の義娘なんだからー！！」

「ダメだ」

「レオナードのケチんぼー！ー！！」

ハンナはその言葉だけ言い残すと、風のようにその場からフェードアウトして行った。

残された一同は一気に疲労を感じて溜息を吐く。

「ヴィラ」

ヴィラの腰に後ろからレオナードの腕が巻きつき、久しぶりの抱擁に安心感と嬉しさを覚えた。

ヴィラは言いにくそうに口を開く。

「・・・勝手に出て行って悪かった」

「ああ」

「別に怒ってたわけじゃないんだけど・・・」

「そうか」

ラブラブモード突入。

騎士2人は当てられまいとさっさと部屋を出て行った。

ヴィラとレオナードは邪魔者のいなくなったところで、正面から抱きしめ合い唇に噛みつく。

きっとこれからも周りの人々はこの2人に振り回されることになるであろう。

そしてまた、オーティスも同じく災難は続いて行く。



終わり

番外編・浮気騒動その2

レオナードと喧嘩することは稀にある。

原因は些細な勘違いだったり嫉妬だったり、大体アタシが悪いんだけど……。

今回ばかりは

アタシ悪くねえから！！

ちっこいランスはもう4歳になる。

赤ん坊の時もレオナード似だなあとは思ってたけど、歳を重ねるにつれてさらにレオナードの面影を増した気がする。

茶色でサラサラの髪、クリクリした可愛い目に青の瞳。子ども

らしいプニプニの頬と小さな手足。

もちろん完璧なそっくりさんじゃないけれど血の繋がりをしっかりと感じる我が子を、アタシはできる限りの愛情を注いで育てていた。

しつげに、勉強にと、この子もドロシヤの王子としてちゃんとなばってかれて。

駈に厳しいレオナードの言うことはよく聞くんだけど、アタシの言うことは素直に聞いてくれない。どちらかというとアタシは遊び相手のように思っているらしい。まあ、アタシ放任主義だからね。まだ4歳なんだから、勉強より遊ばせた方がいいと思ってる。

ランスは外で遊ぶのが大好きで、脱走しては大人を困らせるヤンチヤな子だ。

しかも頭がいらしく、結構痛いところをズバツと突いてくるときもある。そういうところは憎たらしいほどに嫌味なガキである。

それでも可愛いものは可愛い。  
だって最愛のわが子。

だから、アタシは悪くなかったんだってば。

「ママー、投げてー！」

「行くぞー！おりゃ！」

抱えてソファに投げてやればキャツキャツと嬉しそうにはしゃぐら

ンス。

久しぶりに時間が取れて、今はレオナードの部屋で親子3人水入らずの時間だ。

レオナードは紅茶を飲みながら静かにランスを見守っている。

アタシはしばらくランスの遊びに付き合わされ、疲れて来たのでソファに座るとランスが膝の上によじ登って来た。

後ろからぎゅーっと抱きしめれば、さらにキヤツキヤと喜ぶ。

普段あまり甘やかせてやれないから、今日くらい好きだけ一緒に居てやるう。

「ママ、ママ！」

「うん？」

「大好きー！」

ああ、クソ可愛い・・・！！  
親バカと言われてもいい！！  
とにかく可愛い！！

「アタシも好きだぞー！」

後ろからランスの髪をわしわしと乱暴に撫でると、「止めてよー」と言いながらも嬉しそうに身体を捻る。

「ママ」

「なんだ？」

呼ばれて顔を覗きこめば、ランスはキラキラした笑顔で振り返った。

「大きくなったらママと結婚する！」

そしてほっぺたにちゅつと可愛らしいキスをして来て。

アタシは思わず大口を開けて笑った。

「あはは！そうか！ママ嬉しいよ！」

「結婚してくれるよね？ね？」

「大きくなったらね〜」

そんな定番でお決まりの親子の会話。

しかし。

ガッシャーン！！

と大きな音がして、アタシは即座にランスを守るよう抱き抱え音がした方を見れば。

そこにはワナワナと手を震わせているレオナードが居た。

「レオナード？どうしたんだ？」

レオナードの足元には割れたカップと、カーペットにじわじわ広がる紅茶のシミ。

心なしか顔色が悪いように見えて、アタシは心配になってレオナードに近づいた。

「大丈夫か？」

「ヴィラ」

「ん？」

やっと口を開いたかと思えば低い声。  
そして彼は信じられないことを口にした。

「浮気するとは……いい度胸だな」

は………？

浮気？

はああああああああ！？

「浮気って今のが！？ランスとの会話のことを言ってるのか！？」

眉間に盛大な皺を寄せたレオナードは超不機嫌顔で。

「他の男と結婚の約束をしたじゃないか」

「はああああああああ！！？」

久しぶりにアタシの大絶叫が城に響いた。

何かの冗談かと思ったけれど、冗談でもなんでもなくマジらしくかった。

その証拠にレオナードはずっと拗ねたまままで口利いてくれないのだから。

「ってか子どもと結婚の約束して浮気!?

どんだけ心狭いんだよ!!

アホかあ!!

「まあまあ、そう責めないでやってくださいって」

怒りまくるアタシを宥めようとするのはアルフレッド。

夫婦喧嘩が起こるたびに彼にはお世話になっている。

「でも、本当に子供と結婚する親っていることにはいるんですよ。

孫と祖父母とかでも探したら居ますし」

「……マジで？」

親子で夫婦？母親と息子、父親と娘ってか！？  
それって近親なんちゃらってやつか！？

「マジです。

ほら、魔女さんの世界と違って、ここは寿命長いし老いがありませんから」

なるほど……。

確か結婚の法律も厳格じゃなかったから、血の繋がりに対する制約はないんだろう。

遺伝子がどうのこうのって話しても、こっちの人たちが知ってるはずがないし。

「でもなあ、ランス4歳だぞ？」

聞き流せよ、それくらい！

アルフレッドもそれ以上フォローできないのか、あはははと苦笑いで誤魔化していた。

とにかく浮気かどうかは置いてといて、問題はレオナードの機嫌が悪いということだ。

どうやって彼の怒りを解くべきか。  
アタシはうんうん唸りながら悩む。

「ランスに訂正させるわけにはいかねえしなあ」



ランスに悪気はこれっぽっちもなかったのだから。

自分の一言で両親の夫婦喧嘩が始まったなんて、心の傷にならなきやいいけど……。

はあ、と大きなため息を吐くと、「御苦労さまです、魔女さん」とアルフレッドは憐みの視線でアタシを見た。

「レオナードー!!!」

意を決して部屋に飛び込めば、ソファですやすやと眠っているランスを見つけて、慌てて口を噤んだ。

一方、肝心な本人はやはり不機嫌な様子で本を読んでいた。

ランス・・・よくこの状態のレオナードと同じ部屋で眠れるな。侍女たちだったら真っ青になって部屋飛び出すのに。

我が子の凶太さに感心しつつ呆れていると、レオナードと少し視線が交わって、しかしすぐに逸らされてしまった。一瞬で逸らされてしまった。

絶賛お怒り中である。

「レオナード、いい加減機嫌直せよ」

「・・・」

「ランスはレオナードの子じゃなか」

「・・・」

彼の無言に負けじと、アタシも必死で説得を続ける。

「まだ4歳になったばかりだぞ？」

「・・・」

「レオナードにだってあつただる？  
お母さんと結婚するーってやつ」

「ない」

清々しいほどに綺麗さっぱりと否定したレオナード。

アタシは困り果てて、座ったレオナードの前に立ち肩に手を置いた。

「機嫌直してよ、アタシは本当にランスと結婚するつもりなんて微塵もないんだから。」

アタシの夫はレオナードだけ」

頬を撫でてキスすると、やっとレオナードは視線を合わせてくれる。

「レオナードだったら断れるわけ？」

「何がだ」

「もしアタシそっくりの娘が生まれたら」

うっ、とレオナードの眉間に皺ができる。

「もし、その子にパパと結婚するーって言われたら」

レオナードの視線が少し泳ぐ。

「その時、レオナードは断るわけ？」

「無理だ」

即答だった。

アタシはほっとして肩の力を抜き、溜息を吐いて苦笑する。

「ね？」

ランスはまだ4歳、子供だ。まだ自我が出てきたばかりのね。これくらいの歳は父親と母親が大好きで全て。

だからずっと一緒に居たいって言う意味で、簡単に“結婚する”って言うんだ」

わかる？というレオナードは無言でアタシを抱き寄せた。

「ランスが大きくなれば、それはただの思い出話。覚えてもいないかもしれない。

だから今のうちだけ、甘えることくらい許してやってよ」

「……わかった」

その一言に安堵のあまり、ここ最近出なかったほどの大きな大きなため息を吐いた。

「まったく、それくらいで怒るなよな」

「大人げないよね」

「そうそう……ってランス!!」

後ろから高い声で返事が聞こえたかと思えば、ランスはいつの間にか起きてこっちを向いている。

え？もしかして聞かれてた？

しかも「大人げない」って、ええええええええええ!!??

「ランス!?!どこから聞いてたんだ!?!」

「機嫌直せよ、から」

最初からじゃん!!

ランスはコロツと愛想のいい笑顔でレオナードに言い放った。

「パパ、娘ができたらママの気持ち分かるよ。

それに僕、妹欲しいな」

「任せろ」

「はいいいいいい!?!」

レオナードはさつとアタシを担ぎ上げて歩き出した。  
笑顔で手を振るランスに見送られて。

ああ、親としてこれでいいのだろうか。  
なんか涙出てきた。

「ヴィラ、娘を作るぞ」

「ぎゃあああああああああ!!」

そして今日も絶叫が城に響き渡るのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3085i/>

---

ヤンキーな魔女

2011年6月1日19時49分発行